
女子文壇
特別號
明治卅九年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回三十）
明治四十五年三月廿五日印刷納本（五日印刷納本）
女子文壇社發行

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早産流産の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

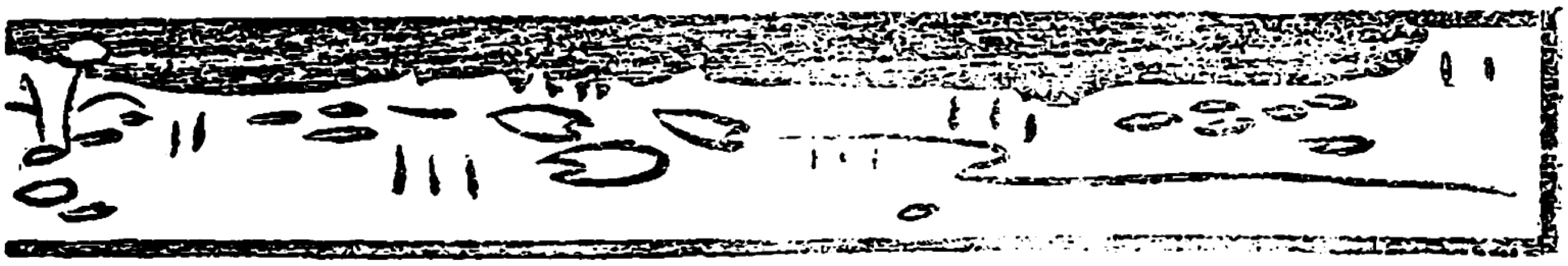
獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮内膜炎にて下腹痛み産前産後又は平素に白帯下赤帯下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其の效最も大なり

定價
八球入金五十錢〇
十八球入金一圓〇
四十球入金二圓〇
特製百十球入金五
圓〇內地遞送無料

東京市本郷區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所　中西蘂光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す



女子文壇 四月特別號（目次）

△大阪東京優劣論

口繪

▲食味の感想

明るい心、暗い心

◉花ふゞき（短文）

◉誌友欄

小說、散文（自然、人事）、詩、和歌、俳句、評論、初作、誌友くらべ等例の如し

ニキビ吹出物を根治し色白く美しくする內服藥



本誌讀者の如き敎育あり新智識に富める若き人々に對し誇大陳腐なる賣藥的口調を以て効能を吹聽するは愚劣の極にして却て讀者の爲に其無智を冷笑せらるゝに至るべし故に吾人は滿腔の赤誠を吐露し事實を事實として報告し以て賢明なる讀者の鑑識に訴へんと欲す元來ニキビ吹き出物又は瘙痒性の皮膚諸病其他皮膚ドス黑く色澤惡き等は概ね體內胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因し之を治療するには必ず內服藥を以て體內より行ふを要す是れ近世皮膚病學上の定論なり吾人は此病理に基き皮膚病內服藥として『ラスター』を慫慂す

抑も本劑の主藥は既に內外大家の實驗證明に富み殊に斯學のオーソリチーに依て推奬せられたるに係らず吾人は容易に之を信用せず社會一般に提供するには社會一般の實驗に訴ふるを至當なりと信じ本年一月二十三日先づ報知新聞に於て社會的試驗の計畫を發表したるに熱烈なる讀者の同情を得て實驗員數忽ち三千六百餘名に達したり此く大々的盛況に興奮したる吾人は更に大阪每日、福岡日々、北海タイムス、新愛知、小樽、九州日々、河北、山陽、信濃每日等有力なる地方新聞に同一計畫を發表し累計一萬餘の患者に實驗し何れも意外の好報告を得て最早本劑が學術的にも亦實際的にも一點疑ふの餘地なき完全無缺の製劑たる事を確信し今般發賣するに至れり

『ラスター』の主治効能はニキビ、吹き出物、赤鼻、瘙痒性皮膚諸病の根治的特効藥にして體內の毒を去り皮膚のドス黑き惡色を去り艶麗ならしむ其他慢性胃腸病の根治藥なり實驗者の報告によれば輕症は一週間普通は十五日乃至一箇月にして必ず全治の効を奏す患者は唯三錢切手十枚封入申込ある時は速に送藥すべし

藥價 四日分金三十錢　七日分金五十錢　半月分金一圓　一月分一圓八十錢

東京市下谷區上根岸町百十一番地
東京帝國大學醫科大學專攻　藥學得業士　**金澤巖**
電話下谷二貳五九。振替東京四六七

海邊の丘



新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する　短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ！

此際至急入會者に限り**入會金を免除す**

見よ!!! 舶來ラフ紙印刷は本講義錄唯一なり

和歌講義錄

十ケ月卒業

科目

△短歌作法
△新派和歌講義
△新派和歌評釋
△歌話
△萬葉集評釋

△歌人評傳
△詩歌の流派
△詩の評釋
△新派和歌史
△新歌語と作例

▲添删實例
▲歌人經歷談
△講師は皆當代新派歌壇の名家！

見本會則附き往復端書にて申込次第**無代**送呈

東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會
振替東京一九五五番

艶 櫻花の如　麗 水晶の如　優 菫花の如　美 寶璧の如

淑女畫報

四月一日創刊　一巻第壹號　正價廿五錢　郵税二錢五厘 ● 前金十二冊郵税共二圓九十錢

畫報

マダム振

ては丹青界新進の大家北野恒富畫伯が織筆に成り姿態迫眞一見人を魅す

額面用 精彩石版

◎北白川姫宮殿下◎伏見宮妃殿下◎山階姫宮殿下◎梨本宮妃殿下◎西本願寺裏方◎京都佛光寺裏方◎島津公姫君◎前田伯二姫君……其他

花意雨情 艶麗無双の三色版

▼愛の私語 ▼少女の一日

●大隈伯爵の家庭 ●神田鐳藏氏夫人 ●岡田氏令息夫人

●辰馬半右衛門氏家庭◎マダム振（二葉） ●横田大審院長令孃◎花に殘る月影 ●音樂家柴田環女史

▼大阪割烹學校春季實習會 ▼模範造花製造所の作業…… ▼小笠原伯爵夫人送別午餐會

◎**淑女鑑**（三葉）

◎西洋音樂界二秀才 ◎新進刀圭家の面影

●**青鞜社同人** 其他

出現す 現代女性

の必讀畫報！ の絶好侶伴！ の最大慰藉！

讀物

◎畫家の見たる**女の服裝** 小山正太郎

◎京女**風俗辨** 川村文芽

小説 **露芝** 閼唯

女學生の交際ぶり みち子

結婚法と外國の實例 林董伯

▽侮辱された日本の花嫁 覆面記者

▽醜婦「サンヂップ」の性格 安藤鐵腸

◎懸賞生花合せ ◎花見覺帳 水哉

◎宰相の戀物語 西施 ◎近世花見衣裳 小督

◎跡見、棚橋、三輪田三女史の功績 ◎最も有効な髮の洗方◎謠の踊歌 浦

小説 **愛妻** 須藤南翠

久しく小説に筆を絶てる南翠の近業。人情の機微を活寫して其筆天來の概あり。一讀巻を措く能はざらしむ

東京本町 博文館


誠に便利以上の便利なり
茲に地方より東京へ注文する最も便利なる方法あり
三越へ、地方から御手紙一本で御注文下さりますれば流行品と日要品とを問はず、早速小包郵便にて御送り申しあげます。
「地方御注文案内書」は御一報次第進呈致します
東京駿河町
三越呉服店
振替貯金口座番号東京三二〇〇番

花おぼろ



子爵岩倉具明氏夫人知子　男爵福原俊丸氏夫人鶴子

暖潮



侯爵尚典氏令嬢君子

男爵尚琳氏と夫人つる子

前うしろ



（後姿）



工學博士中山秀三郎氏令孃米子

常春



東京興農園長渡瀨寅次郎氏令孃花子、春江子

喜谷市郎右衛門氏令孃多代子

西崎濟三郎氏令妹えつ子

THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

四月一日發行　四月　一冊廿五錢　郵稅二錢　三冊八十錢　六冊一圓五十錢　十二冊三圓二十錢

畫報

家鳩（高村眞夫氏作油繪）　一重櫻（岡田三郎助氏作三色版）

◎御庭前に於ける久邇宮若宮姬宮各殿下
▼佛光寺御裏方淨子の方　▼小花博士邸に於る米國觀光團
▼壬生伯夫人と愛兒　▼添田壽一氏家庭　▼途上雜觀
◎勳六等寶冠章を賜りし三輪田眞佐子女史　棚橋絢子女史
▼別莊に於ける加納子爵夫人と令孃　▼與謝野晶子女史の此頃
▼寫眞を撮る人と撮らるゝ人　▼小笠原伯長崎氏夫人送別
◎高倉典侍と千種權典侍　◎◎花の下
▼花の如き諸名家の令孃　▼田舍の女……　▼花さく一日
▼天覽の刺繡と卒業生合作　▼お客樣の準備　▲懷劍仕合
◎若夫人の一日　◎友禪の染方
▼盆石と生花　▼お茶の會　▼お誕生まで　▼新郞新婦…　其他……

讀物

◎調和せる婦人……元良博士
◎婦人の愛國心……上杉博士
▼若き女の心……久保學士
◎女の運命……下田歌子　武富濟　島村抱月　下田次郎　嶋山春子
▼美人の標準……藤懸學士
◎三個條の注文……藤井學士
◎お轉婆矯正……田中博士

▽私の見た美しき人……仁尾夫人
▽私の娘時代……加藤夫人
▽花咲く頃……長谷川時雨
◎其日々々……三宅花圃
▽私の見た女學生……尾島菊子
▽廢物利用……村上弍三郎
▽臺所日記……雪子
◎買物の仕方……志賀夫人　望月夫人
▽肴屋の店先に立ちて……笹木雪子
▽お花見料理……吉村里子
▽やさしき刺繡……春子
▽姿の良くなる法……藤波芙蓉

東京麴町區飯田町四ノ四四　東京社　振替東京一一八一八　（全國書店にて販賣す）

八重櫻



侯爵愛孃富士子

侯爵四條隆愛氏夫人糸子と愛孃

下山藥學博士邸に於ける博士夫人の會合

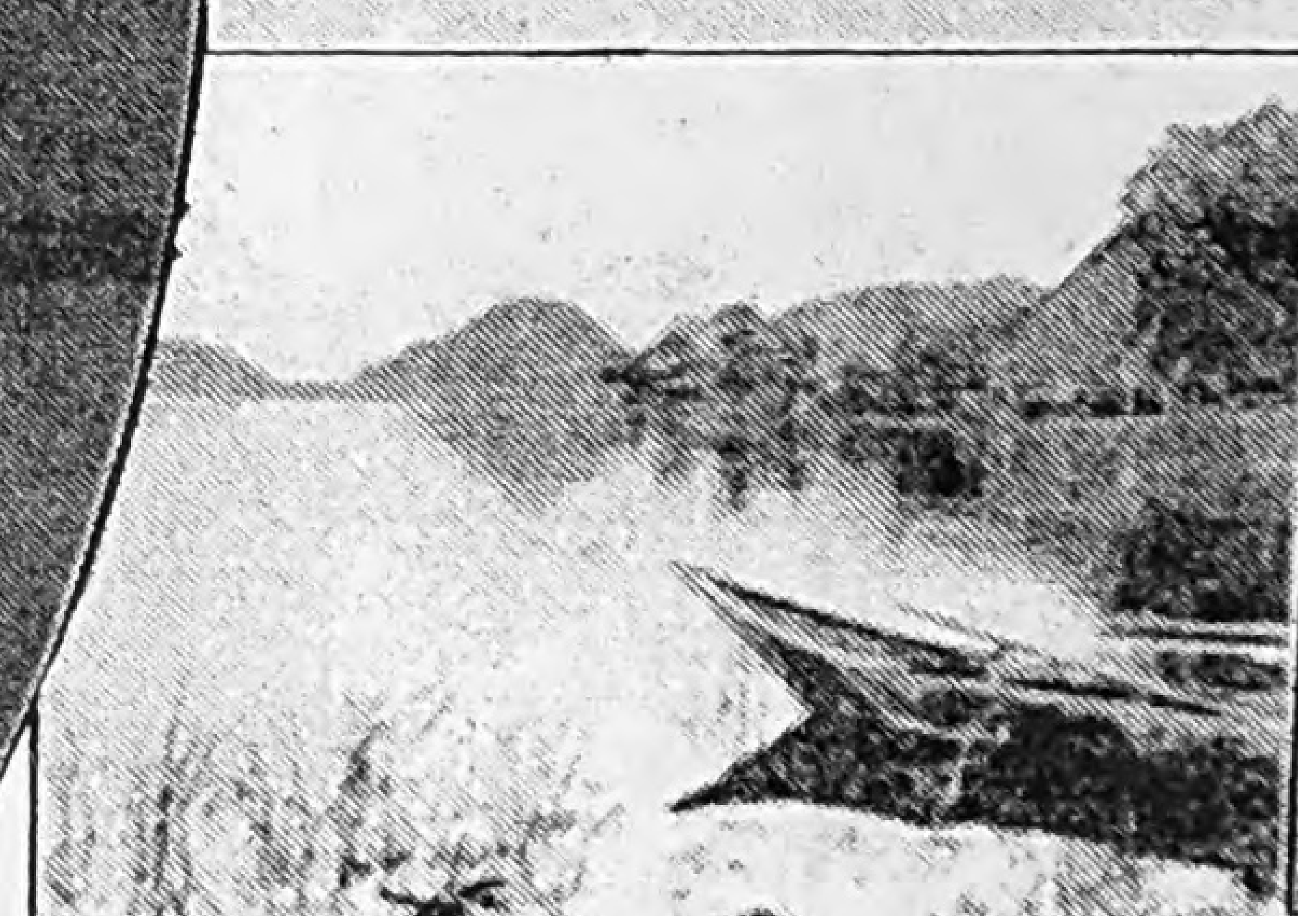



夢二畫集
春の卷
九版出來
春の卷 定價五拾錢 送料八錢
夏の卷 定價五拾錢 送料八錢
秋の卷 定價五拾錢 送料八錢
冬の卷 定價五拾錢 送料八錢
野に山に 定價七拾錢 送料六錢
花の卷 定價四拾錢 送料四錢
旅の卷 定價七拾錢 送料六錢
都會の卷 定價五拾錢 送料八錢
小供の國 定價卅五錢 送料六錢
京人形 定價四拾錢 送料六錢
櫻の國 定價四拾錢 送料四錢
櫻島 定價四拾五錢 送料四錢
都會スケッチ 定價五拾錢 送料六錢
發行所
東京麴町二丁目二番地
振替東京二〇九一四番
洛陽堂


工學士吉川渡氏夫人花子



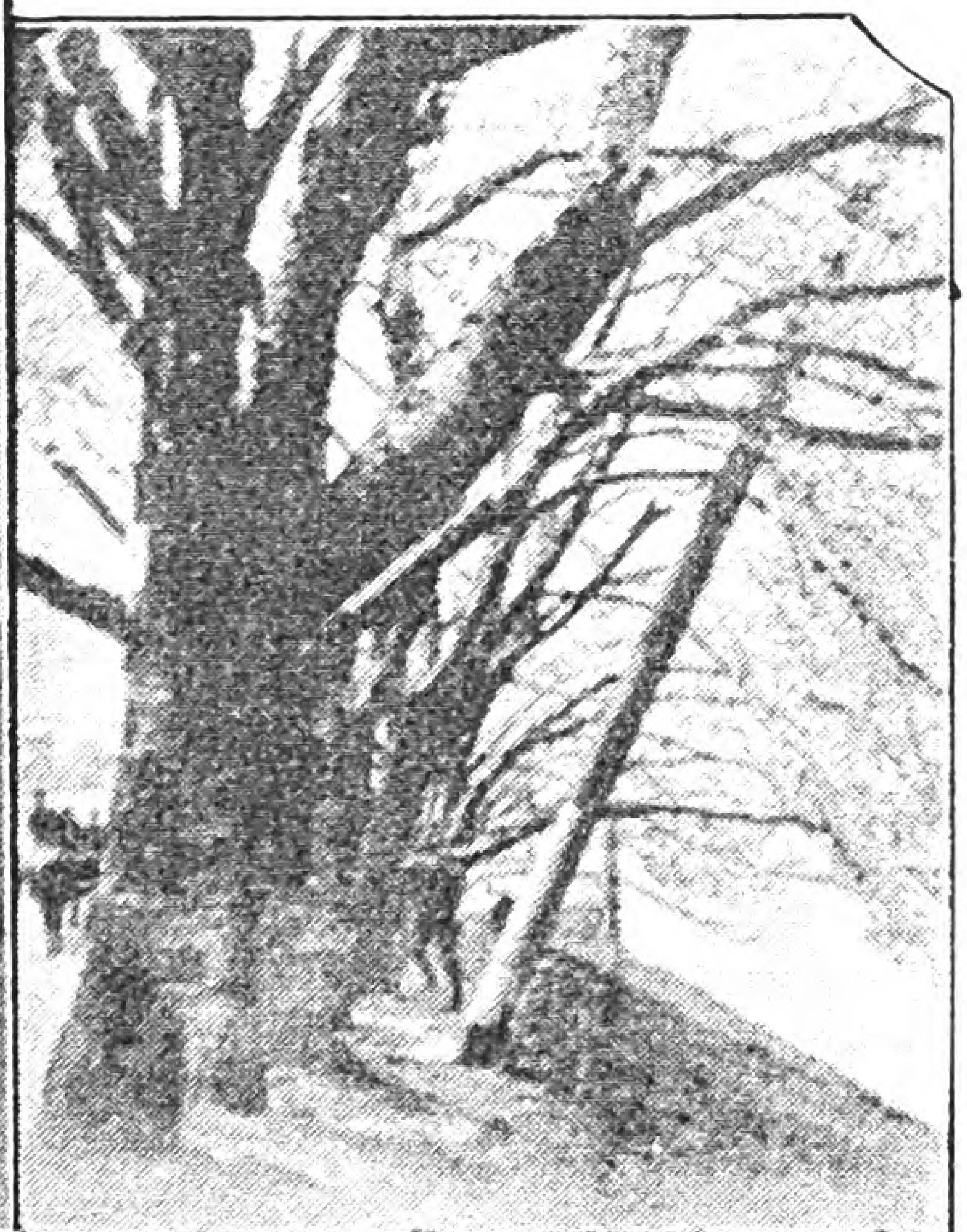

安藤組坂本從氏夫人千代子



春蘭

和風









（右）西ノ宮初子孃
（左）佃たつ子孃

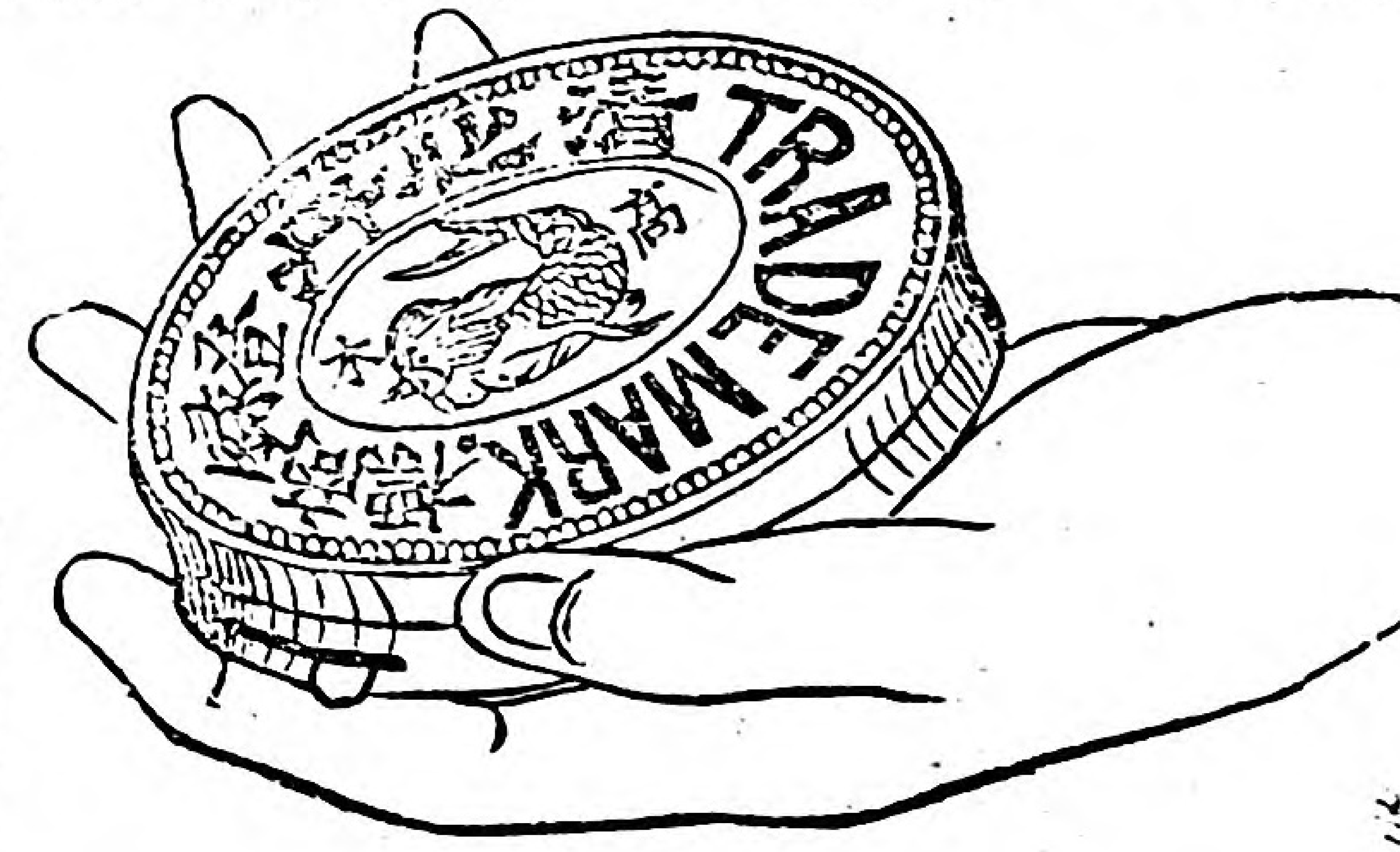
人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す

清心丹の三大特色は

一 効能の確實

二 品質の善良

三 價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過飲過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下り痢、疝痢、舟車不快、喀痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價 壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢鑵入 拾五錢鑵入 拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舖 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

鮫島大浪先生著

新刊



わかれたる女の日記

四六版艶麗無比、定價四十五錢、郵税金四錢

（どこの本屋でもとりつぎます）

ある女の大膽なる告白＝小説以上の小説＝破天荒の快著述

發賣元 東京京橋區西紺屋町 良明堂

文壇諸名家大好評

原稿用紙

用紙舶來上等、ペン、毛筆自由自在、使ひ心地よし

▲定價表▼

（二十四字 二十字 詰二種）

百枚（送共）金三十錢

二百枚（送共）金四十八錢

五百枚（送共）金壹圓

（注意）＝右御注文の節は何字詰と明細に御書添を願ひます

東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂用達部（振替東京一九五五）

本會員帽章

本會員徽章

第二同 新學期 開講

（實物三分の一大）（實物二分の一大）

文學研究の唯一機關出でたり

[illegible]此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる雜誌新文學を無代頒布す◎本會員には文章其他無料添削の特典を與ふ◎本會員には事情に依り無料講習の便あり◎本會員及卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし種々の便宜特典を與ふ

初等文學講義録

見本附き規則書無代進呈

教授科目　文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。日本文學。外國文學。文學概論。雜科。

各科講師は專門の學士文士

五ヶ月卒業　會費 一ヶ月金廿五錢 全學期壹圓廿錢　[illegible]東京神田區西小川町　振替東京五三一九番　大日本文學會

造花術獨習の唯一機關出でたり

[illegible]此際入會者に限り種々の特典を與ふ

造花の修得は家庭の福音

造花術は花簪、花輪、花籠、及教育參考品たる植物の標本室內の裝飾各種の徽章或は冠婚葬祭の贈答に適す可き花卉其他の美術品を製作するものにして婦人令孃が日常の娛樂として修得せらるべきは勿論總べて一般の家庭に內職として最も有利のものなり

新學期 開講

造花の修得は婦人の優技

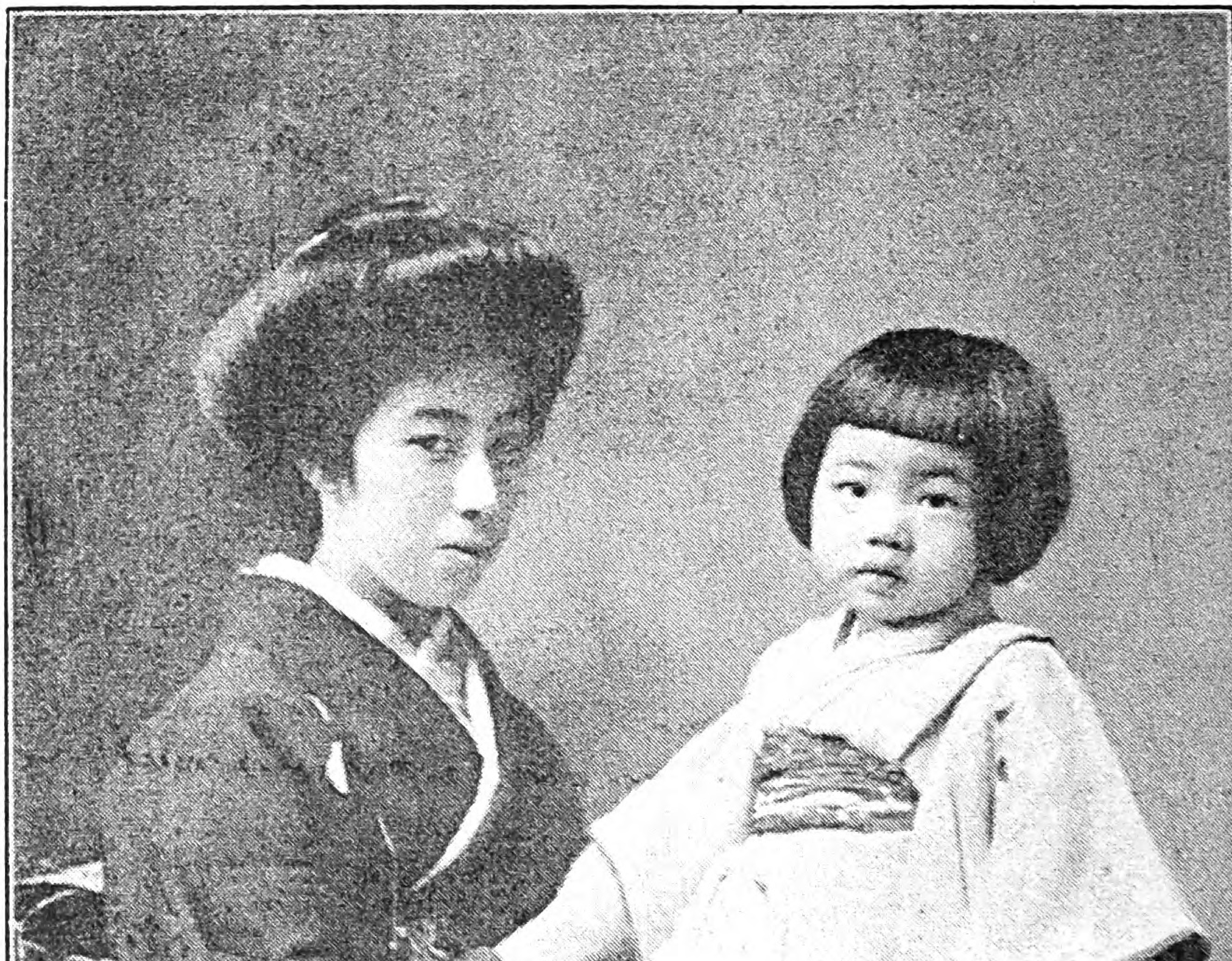
美術造花講義録

本會發行の講義録は本會講師が多年苦心の結果完成せる最新式のものにして講義録の外二十餘種の原料十餘種の器械に製品見本十數種を添へて會員に頒つものにして是れに依つて修得せば僅々二箇月にして男女の別なく老幼を問はず容易に熟達し得るものなり

製品見本並に規則書は郵券拾錢送るべし

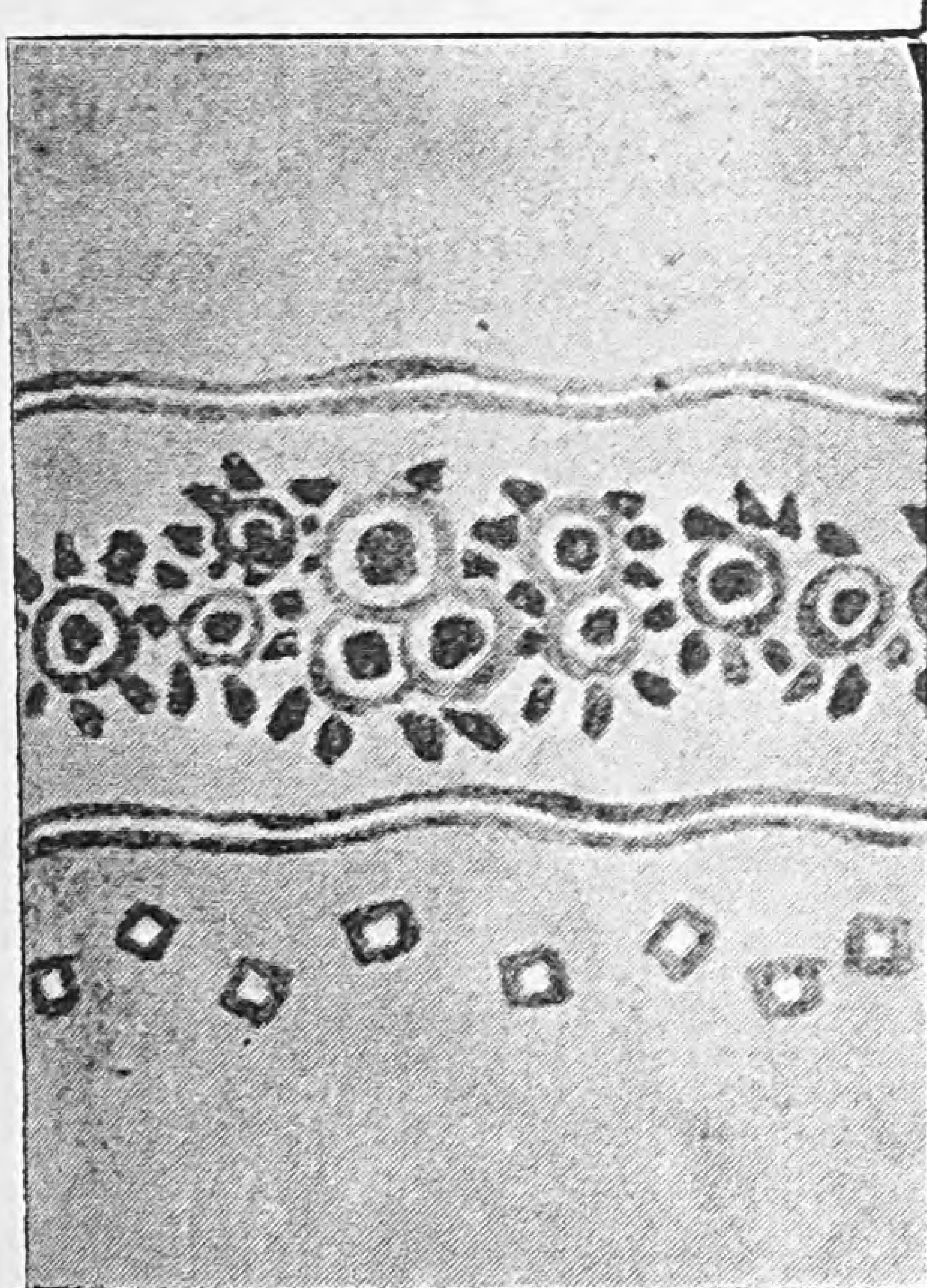
速成二ヶ月卒業　會費 全學期分 金三圓也　[illegible]　東京市神田西小川町一ノ一　振替口座 東京 九一四八番　美術造花講習會

花薔薇



立川氏夫人都子と愛嬢

さくら草

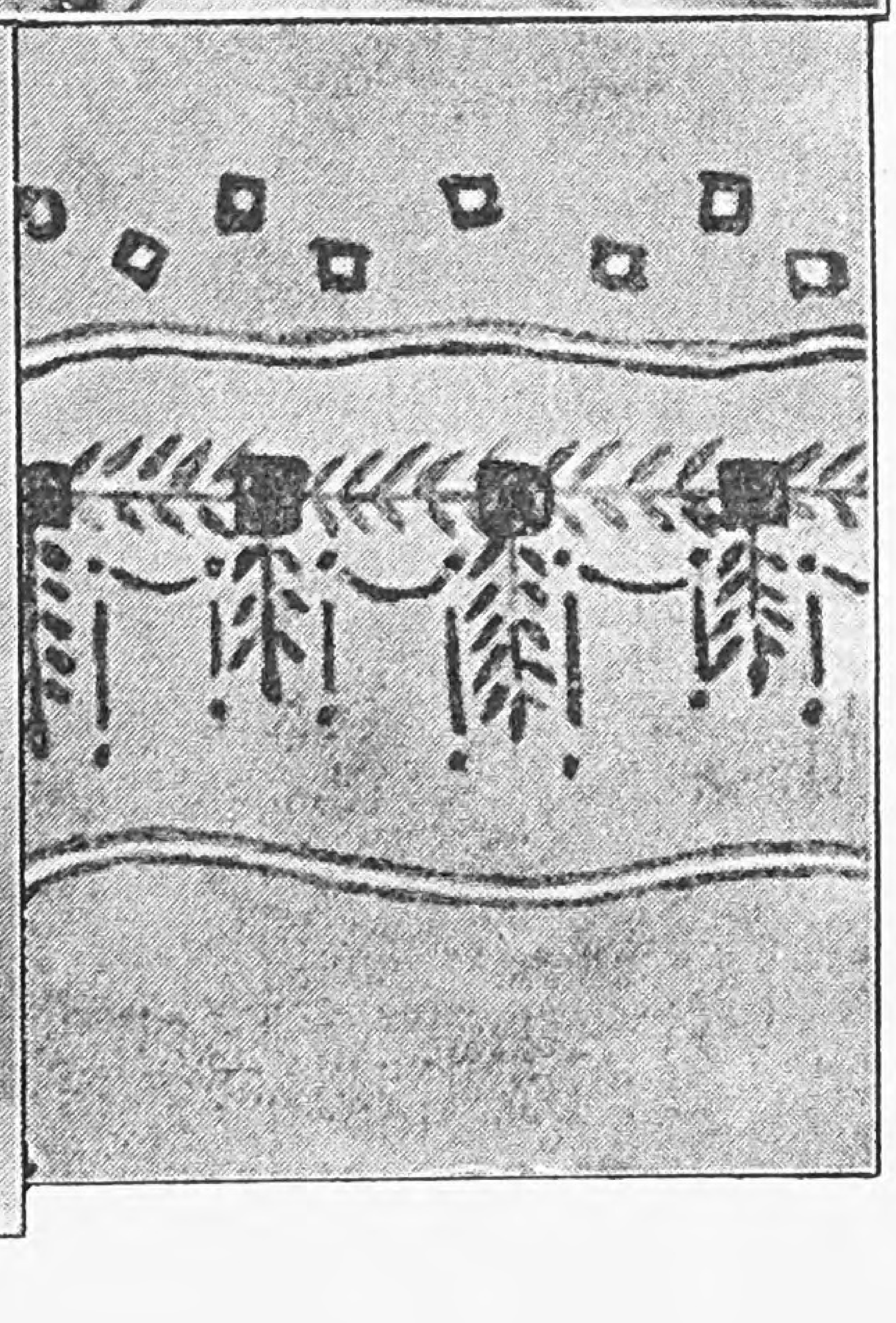




鈴木ふき子孃、鈴木ずま子孃



田丸流濱女、森の女美子孃



ハイカラタスキ

（御使用法注意）

時代の要求に應じて生れたるハイカラ襷は御覽の通り袖が自由自在いろ〳〵になります女學生諸君女子事務員、奥さん、女中さん共に必要

特色

一今までの襷とちがひ袖へ（しは）のつく心配がなく掛けはずしにも面倒でなく御便利です

一せなかへ（はす）に掛けると右の袖がうしろへ引かれる故水仕事の時には最もよろしく腕が充分に出そうとするには袖口の近くへ（ばね）を御付になれば自由に出ます

一十文字になりませんから晝中などにも衣類へあせが付かずわづか一尺五寸位の紐さへ御取りかへになれば永年御使用が出來て甚だ御經濟です

御使用の節は必らず兩袖へ（ばね）を一ツヽ付てから後でいろ〳〵に御掛になればよろしいのです



各女學校御用品 （新案特許 一九五〇三）

定價 一個入金八錢 送料二錢
五個入金卅八錢 送料四個迄八錢
十個入金七十五錢 送料二個迄八錢

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 **竹中商店** 電話芝二八八四番 振替東京三二二三番

◉持約販賣希望の方は郵券十錢封入を乞ふ見本及規則書送付す

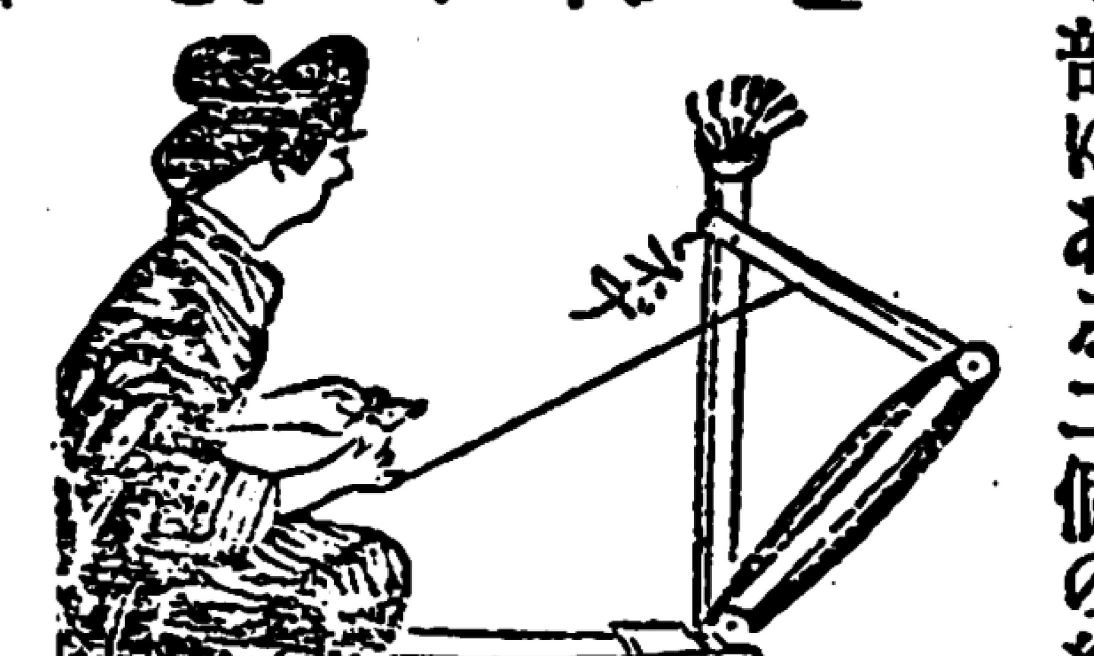
特許竹中式絲掛付絎臺

◉御婦人方の新福音！

弊店發賣いくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絲を糸巻にまき取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリタ、ミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に糸巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用へ願ひます。



定價

御誂朱塗製	金七拾錢
御誂黒塗製	金六拾錢
特製	金參拾錢
上製	金廿五錢
並製	金貳拾錢

美麗なる箱入なれば進物用に好適也●小内は一本にても御一報次第無料配達す●送料地方は拾錢●滿鮮臺樺は三拾錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 **竹中商店** 電話芝二八八四番 振替東京三二二三

◉特約販賣御望の方は御照會あれ



東京市丸の内

經通丸

月々楽く

調劑元

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難症の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は入銀を要す

江戸屋

有樂町二ノ二

梅どく りん病 ぢ疾症 わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横 ㊡朝八時より夜九時迄 **中央醫院**

色の黒き人 にきび 子宮病 月やくとまりたる病 子なき婦人 皮膚病

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ た蟲等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精早漏 發育不充分 記臆力減衰

▲專門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る 病狀を記し郵券四錢を送れば其病を速治する

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横 **中央藥院**

ちゞれくせ毛 根治法



本院は世上毛髪に就て完全なる療法なきをなげき天眞堂先生が幾多の研究によりて始めて完成したる根治的療法は短時日に全治の實を擧ぐ試用望みの方に右療法を授く切手二錢要す

東京市牛込區赤城神社横

好生藥院

肥滿病者の福音

やせる新藥

●多血症●脂肪過多●便秘●中氣●酒ぶとり●凡てふとりすぎた人やせて中肉美容となる新藥あり郵券三錢封入御申越あれ自宅療法説明書進呈す

東京市牛込區赤城元町三十三

池田製藥部

爛漫



林田衆議院書記官長夫人令妹

宮本央氏令嬢けい子

新婚の面影



帝國ホテル支配人林愛作氏と夫人高子



桂侯爵令嗣與一氏と夫人貞子



紳商山口勝造氏と夫人兼子



見よ◎月經なき女子◎病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

有効確證



◎本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◎肥滿病新藥

（米國新輸入）

諸孃姉の福音



子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶとく肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◎ぶとく\ふとり◎血太り◎肉太り◎酒太り◎水太り◎顏赤◎にきび◎ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艷白となり皙て**美顏**窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥價一劑一圓五十錢三劑四圓卅錢送料十錢
二劑二圓九十錢四劑五圓半

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

植松美佐男著　少女小説　**君影草**　定價四十錢　郵税六

谷と谷との間の雜草の中を探して御覽なさい、白くすゞろく小さな花を見出す事でせう。野に住んで野の歌を謳ふ少女の花子は、此人しれず咲く淋しい鈴蘭が好でした。君影草！なんと云ふ優しい名でせうなつかしい名でせう君影草は深山鈴蘭とも云へば谷間の姫百合とも云ひます只谷と谷との間に咲く寂しい花だと思召せ。

溝口白羊著　少女向隨筆集　**少女パーク**　定價四十錢　郵税六

少女パークには輝に春の日が照つて居ます、少女パークには美しい花が咲いて居ます、少女パークには樂しい聲で小鳥が囀つて居ます、然して誰でも入つて自由に遊ぶ事が出來ます、こんな面白い、然して美しい樂園は、世界中にたつた一つ此少女パークが有るばかりです、何方も早く入つて御覽なさい、未だ少女パークを見ない樣な人は近代的の文明を語る資格がありません。

植松美佐男著　家庭少女小説　**磯千鳥**　定價四十錢　郵税六

うら若き美少女、胸に何物かを秘めて泣き或は悲むそも其若き少女の紅き涙を絞らしむる秘められし胸の思とは何ぞ、天氣妄りに漏らす可らず、只これを知るものは著者と而して我「磯千鳥」の讀者諸孃のみ此書を物の哀を知り初めし人々に捧ぐ

沼田笠峰著　少女小説　**姉妹**　定價卅八錢　郵税六

溝口白羊著　少女小品　**さくら月**　定價四十錢　郵税六

沼田笠峰著　少女小説　**お友だち**　定價四十錢　郵税六

お友だちは少女の美しい交りと、其の優しい情とを描いた清新なる家庭の讀物ですと著者が少女に對する深い同情は此一卷に注がれて居ます、世の少女諸子は、此書を眞の善き『お友だち』として愛讀せられよ。

植松美佐男著　少女小説　**月見草**　定價卅五錢　郵税六

植松美佐男著　家庭少女小説　**露子の運命**　定價四十錢　郵税六

植松美佐男著　家庭少女小説　**露子の運命後篇**　定價四十錢　郵税六

露子の半生は若い血の叫びでした、胸に波打つ紅い血汐が露子をして泣かせ起らせ然うして最後に氷の樣な短刀を握らせるのでした、若い處女の誇のために生き其誇のために終つた一篇の哀史を讀んで下さい。

發行所　東京本郷東片町十　**本郷書院**　（振替口座東京壹四九六壹番）

賣捌　東京堂　上田屋　至誠堂　前川　北隆館　（大阪）杉本　三宅　盛文館　（京都）東枝律

うそと思ふて使用してきゝめが有て今更に願ひ叶へし嬉しさに恥かしながら御禮申上候と德川家某子より禮狀其他あり此黑澤山は本家秘製に燒法並神法燒あらぬ有効なればたるは間違なし▲實價保險付金一圓送料三錢小包送付は八錢▲僞店續々現はる御注意御來店被下度候



由來説明書進呈　切手三錢封入送れ

東京神田區五軒町壹番　**だるまや**

ちゞれもくせも　一大奇法　もはへうけあひ

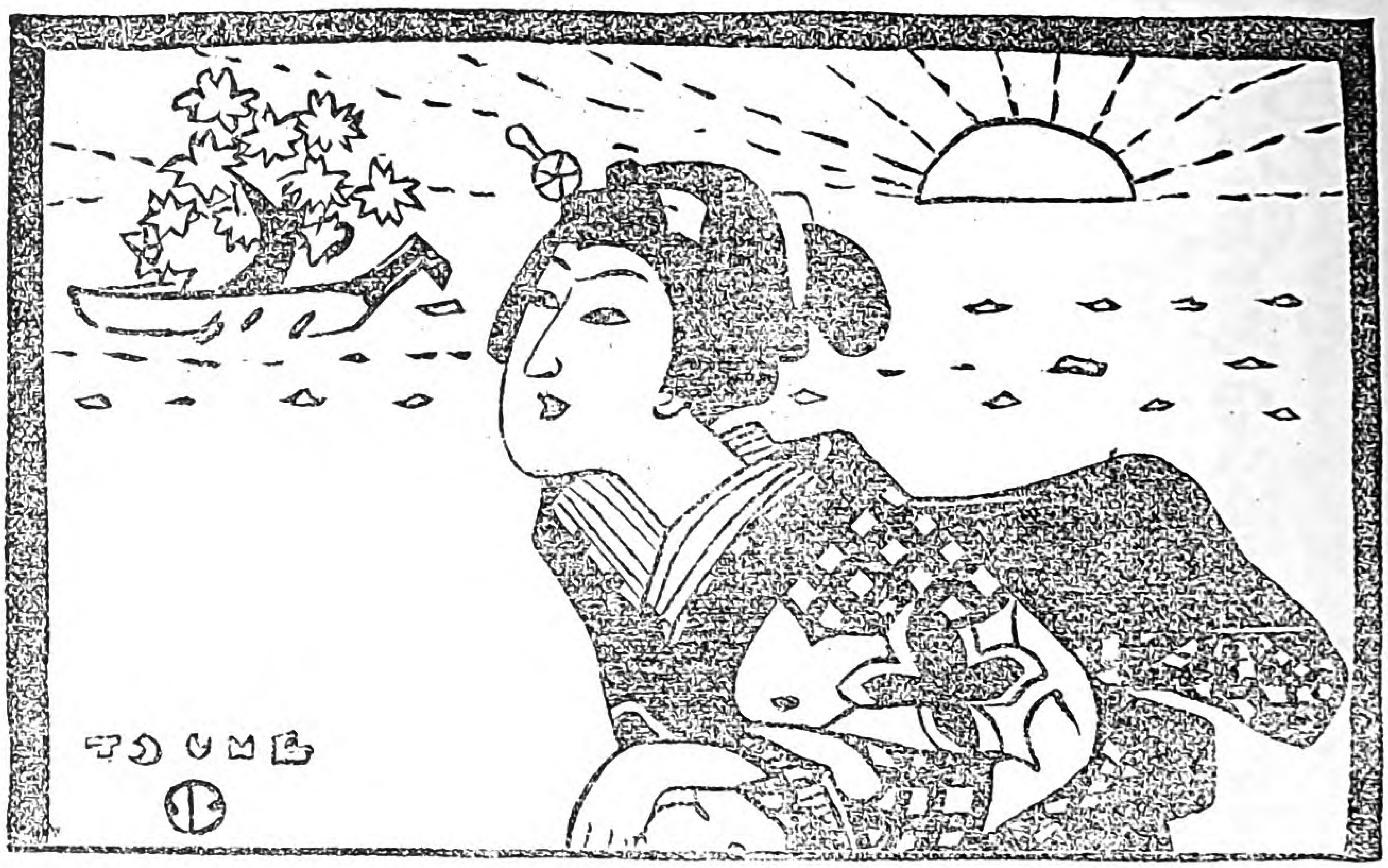
本法は女髮結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

ぢ

イボ痔　核痔　脫肛痔　出血痔　裂痔　痔瘻　痒痔　一切痔にて御困難の方は二錢郵券を添へ御照會あらば病原理由全癒説明書を送附す

東京市京橋區疊町　小松盛林堂



第八年第四號

女子文壇

四月特別號

春の地上

春の地上に
月出づる時
夢を待つ
花の莟は歡樂に
わなゝく香り
眠りかけては
薄ら明りに
水の流るゝ足音が
蝶の寢息か
ぬくもる空の
やるせない苦しさに
春の夜の
明けるまで
張り切つた
夢のふくらみ

—醉茗—



大阪東京優劣論

大阪の進歩と東京の進歩

岩野泡鳴

▲大阪の卸商、東京の小賣商

東京と大阪とを比較するに當つて、商賣のことを除いてしまつたら、大阪の方に非常な不利益な點ばかりになるだらう。婦人雜誌に出す話だからッて、この問題を僕は除きたくはない。大體で云つて見ても、東京には、御用商人でなければ小賣り商ばかりだ。卸し屋などは、十五區のうち、日本橋の而も一部に少しあるに過ぎない。それが、大阪へ來ると、小賣商の方が心齋橋筋ぐらゐにあるばかりで、跡はすべて卸し屋の存在地だと云つてもいゝ。その上、その卸し商人が、東京に於けるやうな政府のふんどしに縋つて僅かに手を擴げ得るのでなく、獨自一個の見識ある活動をしてゐる。

今回の支那革命事件に關しても、直接の利害を受けるものは東京人ではなく、大阪人である。と云ふのは支那貿易は大阪が殆どその全部を占有してゐるからである。これまでが既に直接の手を出してゐたばかりではない。東京では、北京にゐる伊集院大使の報告によつて、たゞ政治的に、而も間違つた方向に動いてゐた間に、大阪人の機敏なものは、早や大金を懐中して、何かいゝことがあらう位の考へで、南清は上海や漢口まで乘り出してゐた。それほど實際の事情に通じてゐるものが大阪には多いのである。と同時に、卸し屋もしくは貿易商としての大阪人は、東京人に比べて、幾歩もしくは幾十歩の機先を制してゐることが分らう。

▲不斷の煤煙、電車の發達

次ぎに、事業界のことに關しても、東京よりも大阪の方が活潑だ、前者の半分もない都會に、殆ど百倍以上の大きな煙突數があつて、年中、それから何かの事業の實を擧げる黑い煙を吐いてゐるのを見ても分る。東京の事業界は、かの利光鶴松のやうな人物が出て、初めて活動の動機を投げ込んだと云つてもいゝ。その傑物でさへも鬼怒川水力電氣を完成せず、その希望の東京灣築港問題が計劃中にあるのに、大阪では、もう迅くに築港と新淀川開鑿との大事業が出來あがつてゐる。

大阪築港が既に現代の時勢に後れたと云はれる缺點もあらう。また、大阪の利光と云はれる岩下清周は、前者ほど大きな人物でないと云ふやうなこともあらうが、事業に先見があり叉大膽である點に於ては、大阪人は一般に東京人に勝つてゐる。水道、電燈、瓦斯等の事業に優劣はないとしても、電氣鐵道に至つては、東京に市街電鐵の外に、京濱、山の手があるだけで、京成、京王兩線はいまだ工事中なのに反し、大阪では、既に街鐵の外に、阪神、南海、京阪、箕有、阪堺の五會社がある。そしてなほ奈良直通のが近々開通する。この諸會社の附帶事業に於ける、公園、動物園、海水浴場、温泉、大運動場、住宅地等の經營が、東京の模

倣ではなく、外國の流儀を日本化して出來てゐる。

▲大阪には遊んでゐる者がない

次ぎに、社會的狀態だ、東京は大きな消費地であるに反し、大阪は非常な生產地である、前者には貴族、官吏、學生等の消極的人間が多いが、後者には殆ど全く積極的な人間がゐるばかりだ。貴族がなかつた代りに大商人が多い。官吏が少い代りに、製造者がその空虛を滿たしてゐる。學生もしくはそれまがひの遊民が稀れな代りに、皆それ〴〵職業を持つてゐるものだ。實際、大阪には遊んでゐるものがない。人間はいくらでも何かに使用される。東京では新聞の夕刊賣りが學生や大の男であるのに、大阪では子供ばかりだ。女さへそんな頓馬なことはしない。前者では先づ『どうです御氣嫌は』と云ふところを、後者では直ぐ『何かぼろいことはおまへんか』と云ふ。大阪人は直ちに金儲けの話になるのがいやな點だが、その代り、仕事に對する元氣が溢れてゐるものばかりだ。東京でよく見受けるやうな陰鬱な人、衰弱した人、喰らひ過ぎて胃の惡さうな人、希望に破れた人、ひねくれた厭世家、世を茶化した禪宗坊主のやうな大平樂者などは少ない。すべてが活動的なのは、東京よりも氣持ちがいゝ。

然しこれは、交際界や街道で見た觀察だ。建て物までが非開放的で薄暗い家庭に這入り込めば、大阪人の生活は東京人のそれよりも、概して見じめらしい。後者が家庭生活と社會生活とを開放的に同じやうに見爲す――それは東京人の一長所だ――に反して、前者はそれを立派に區別する、東京人の贅澤もしくば儉約には家も外もない。が、大阪では、主人は、職人や巡査でも外へ出るには立派な衣物を着、飯食店へあがるにしても、蕎麥屋や牛肉屋ぐらゐでは滿足しないのに、家では粥をすゝり、まづい肴を喰つてゐる。從つて、虛僞もしくは僞善は東京よりも大阪に多いやうだ。この習慣が、事業に現はれては、非常なやりくり算段となるのだが、それが爲めにまた銀行の活動が東京よりも烈しくなり、銀行で融通して貰ふ人々の商買的熱心も

一層強くなるわけだ。兎に角、病人、弱者、失敗者等が社會の表面に比較的に顔を出せないだけ、東京よりも大阪は社會が緊縮してゐるのであらう。

▲東京は貴族式、大阪は平民式

次ぎに、思想のことだ。東京は帝都でもあり、中央政府の所在地でもあり、おもな高等學府の集つてる所でもあるからどうしても貴族的である。官權主義的である。空想的である。之に反し、大阪は、昨年三男爵が出來たのさ



へ特色を破つたと云ふ非難があつた位、平民的である政府などの指圖や報告を待たないで、とし〱自己の利益に就くのは、自我的である。空理を避けて、直進するところは實行的である。一言にして云へば、たゞ貴族的と平民的とで兩者の思想は區別される。東京人は人を待ち、人の説に動かされるのに多忙だ。從つて、新しい思想や流行などを受けるのは早い。大阪の思想界を駄目だと云ふのは、さう云ふ方面ばかりを見て云ふことに過ぎない。

わが國今日のやうな官權中心の時代では思想の貴族

的なとは乃ち標準的な意である。然しその新らしい標準が往々他から——乃ち、外國や地方から——徒らに受け繼いで來たもので、土臺の餘り無いやうなことがある。そこへ行くと、大阪人の思想は、獨自一個でその生活の歴史と共に發達して來たもので、土臺がしつかりしてゐる。新らしい方へ移るのには鈍いかも知れないが、その代り、新らしい物を受けても、たとへば外國的なのでも、そのまゝではなく、自分の方へ比較的によく消化してしまう。大阪に於けるいろんな事業上の施設や經營法を見ても、たゞ平民的だと見えるばかりでなく、同時に、日本的だと受け取れる氣味があるのは、大阪人特有の思想があるからである。

　平民的なのが日本的で、貴族的なのが外國的だと云ふやうな偏見から、そんなことを云ふのでは決してない。然し東京の新らしい貴族的な文明に日本人的消化の度合が足りないと思つてゐる僕が、大阪へ來て、すべての新らしい平民的施設や事業を見ると、それに似た施設や事業が東京にあつたにも拘はらず、初めて、成る程、外國の事物を日本化するにはかうしなければならないかと云ふやうな感じが起つた。そこが大阪人に潛んでゐる思想の取り柄だ、渠等が反對に貴族的であつて、東京人が却つて平民的であつたとしても、必らずさう行くだらう、して見ると、東京人の今の貴族的は附け燒き刃が多く、大阪人の平民的なのには深い根がある。

　然し惜しいことには、現在大阪人の平民的思想が、新時代の表面に充分抽出させるやうになつてゐない。東京よりも大阪は十年後れてゐると云はれるのはそれが爲めだ。これは渠等があながち保守的だからではない、特有の思想を直ちに實行する事業ばかりがあつてその他の機關が備つてゐないからである。その理由としては、最高學府がないのが一つ、研究者を奬勵しないのが二、大阪人を代表する文學者がないのが三だ。企業と貿易とに於ては、大阪は既にわが國の中心である。この上、若し大阪大學が出來、平民的學者の府となつたら、その結果として、第二の近松や西鶴が現は

れて來て、東京人に對して、大阪人の特有思想を確立發揮させるだらう。

▲東京人の意氣、大阪人の金

次きに、趣味のことだ。東京人は意氣と名譽とを尊ぶに反して、大阪人は金と女さへあればいゝのだと云はれる。そこにも、貴族的と平民的との區別が附いてゐる。精神に重きを置くのが前者の特色だ。先づ物質に就くのが後者の元氣だ、精神的に傾くものはあつさりとして上品だが、物質的に偏するものはこつてりとして下品だ。然し誰れも女や金を欲しくないものはないから、大阪人の内部的生活はこの點に於て寧ろ正直過ぎる位だ。渠等の社會的虚僞や僞善とは殆ど正反對で——この點ばかりは、東京人の不正直もしくは不自然を無理に堪へるやうなところがあるのよりもましだらう。上品、下品の別があるのは止むを得ないが、それはほんの表面のことで、若し大阪人の實を握つて、東京人の名を博することが出來るのが現代的な行き方だが、兩方に別れるとしたら、どちらも時代後れで、訂正する必要がある。

それに、東京人は一般に消費的遊民であるから、いろんな精神的自由が利く餘地もあらうが、大阪人は今のところ專ら生産に忙しいから、精神界を自由にあさる餘地が少い。暇があれば、直ちに簡便な物質的快樂に向ふのも尤もだ。然しそれが彼等の元氣と活動を一層發展させるに至つては、精神的であるのではなからうか？つまり、前者は意氣と名譽とをおもてにして、裏で金と女とをあさり、後者は金と女とを正直な糧にして、陰で意氣と名譽とを養つてゐると、見る方が正當だらう。それが趣味の上に現はれて、一方は上品で然し淡白過ぎる趣きとなり、一方は下品で然し却々執着の味はひを出してゐる。人生に密接した度合は、趣味の上でも、後者の方に多い。

▲東京のあつさり、大阪のこつてり

次ぎに、婦人の比較だが、これは曾てこの雜誌で論

じたことがあるから、簡單でよからう。東京婦人は擧動が活潑と云つてもよく氣取るところがある。大阪婦人は口がだらしなくおしやべりだが氣取りが少い。郊外電車が諸方面に出來てから、大阪婦人も却々出あるくやうになつたが、かの衣物の裾の切れるのを惜しんでまくしあげ、赤い腰卷を見せる風は、もう段々なくなつて來た、きりりとして而も惚れ易い東京婦人は友人として親しみたくだらしないやうで、而も人の惡い大阪婦人は色女として見たい。趣味のあッさりと、こッてりとも、婦人に於て最もよく對照される。帶や衣物の色彩に於ては、東京のはぼかしを好み、大阪のは獨立した原色のまゝの配合を選ぶ。

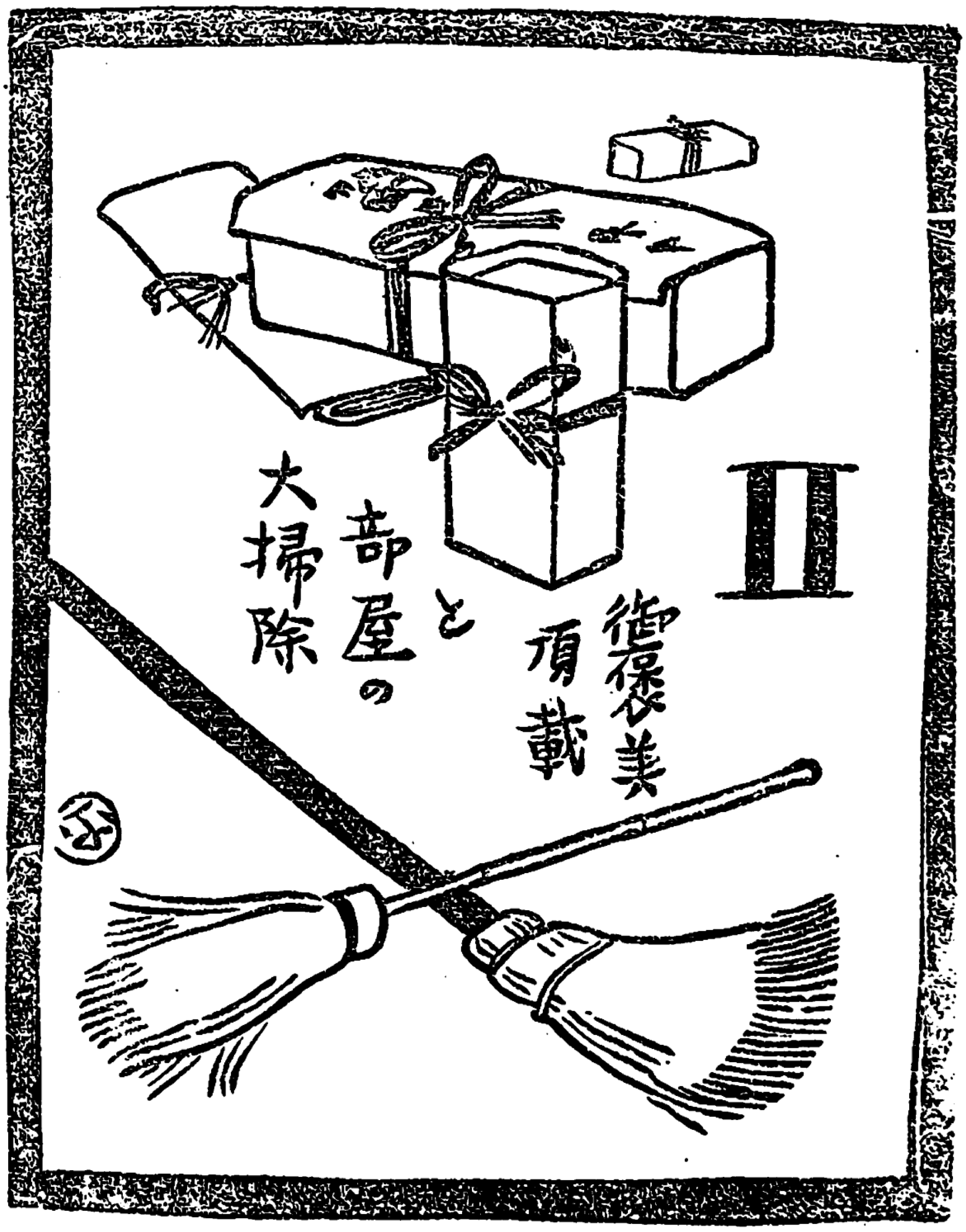
次ぎに、食物のことで、これにも東京のあッさりが大阪のこッてりだ。西洋料理に甘いのはないやうだが日本料理は先づ東京のよりいゝ方だ。然し東京での好物なるまぐろがない。その一種のハッと、云ふのがあるが、卑しんでつくり、乃ち、刺身に出さない。きッと、鯛が出る、鱧は東京に少いが、大阪に多い。いかないと云ふのは下品だが鳥渡甘い、これは東京にない、酒は、東京ではいろんなのを混合したのを出すが、大阪では飽くまで純粹なのが飲める。然し壽司は東京のに限る。まぐろ、こはだ、海老のしんじようなどの握り壽司は大阪では喰へない。鯨の乾した身を煮たのを、大阪では、時々料理屋で出す、然し『うなぎまむし』何々どんぶり十五錢などと云ふ看板が大阪の郊外の飲食店に出てゐるのは、それを喰はせるのが目的であるよりは、極始末屋の婦人が同伴の家族を休ませる所で一行が五人であらうが、六人であらうが、そのどんぶりをたッた一つ注文して分食し、十五錢をその代價兼茶代にするのである。

▲言語と風景

次ぎに、言語のことだが、東京と大阪とは、一つの言葉の——たとへば、濱の——アクセント、乃ち、強聲の落ちるところが全く顚倒してゐる。大阪ではハの方は落ちるのが、東京ではマの方に落ちる。然しその

アクセントが大阪語ではやはらかいので、連續した言葉になると佛蘭西語のやうに聲え、東京語ではしッかり響くのでそれが英語のやうだ。

最後に、兩都の風景だが、東京は紅塵萬丈の都であるに反し、大阪は煤煙天を蔽ふ都である。ほてりを吸收するのもいやだが、すゝが大阪市民の肺裏に黒くてぴり付いてゐるさうなのもどッとしない然しまた東京は實際の花と學生とをてきませた都である代りに、大阪は水と舞ひ子との都だ。市中を和船や汽船が縫つて歩けるのは、大阪の風景に一つの特色を加へてゐる、郊外に出ると、東京よりは大阪の方がいゝところがある。前者では、鎌倉、茅ヶ崎、高雄山、成田、銚子など云つても、ずッと離れてゐて郊外と云ふ範圍では、大森の海水浴、目黒の不動、堀の内の祖師、王子の櫻道灌山、龜戸の梅位の眺めだが、大阪に於ける濱寺の海水浴、住吉の神社、箕面の紅葉、寶塚の溫泉、香爐園の松原、香里園の松茸等の便利で且眺めがいゝのとは比べ物にならない………。



以上は各方面に渉つての大阪東京優劣の概論だ。

大阪の婦人と東京の婦人

須藤南翠

▲大阪名物――娘の掛取

大阪の婦人と東京の婦人とを比較するには、先づ雙方の家庭を研究せねばならぬ。東京の家庭は三階級に分れて居る、上流の家庭、中流の家庭、下等社會の家庭の三つの階級がある。其の中流の家庭が又二つに分れて、中の上、中の下と言ふ樣になつて居るところが大阪の家庭はそう多くに分れて居ない、上流に位する分限者の家庭と、普通市民の家庭との二階級である。この分限者の家庭は、奥と店との間に畫然たる區別が立つて居て、互に相侵さない樣にして居る。店の小僧――大阪の言葉で言へば丁稚――にも二種あつて、上働きの者と下働きの者とに別れて居る。近頃はさういふ風も無くなつたが、つひ近年まで上働の丁稚は袖の長い振袖を着て居る者である。これは大名の小姓を眞似たもので分限者は總て大名の眞似をして居たのである。斯う言ふ家庭に育つた娘はお姫樣然として居る然れども大阪は商業地であるから、假令分限者の娘でも錢勘定には精通して居る。分限者の娘でさへ錢勘定に踈くないのであるから、普通市民の娘に至つては錢勘定には却々拔目がない。それであるから月末の掛取りには大抵娘が出かける。大阪は東京の樣に毎月勘定でない。二ケ月目勘定で、二月四月六月八月十月十二月の末日が勘定日である。この勘定日になると妙齡の娘が美しく着飾つて得意先へ勘定を取りに行く、普通の商家では娘一人で出かけるが、少し大きい商家になると娘が若者を從者に伴れて行くのである。これは柔よく剛を制するで、男が掛を集めに行くよりは成績がよいのである。

大阪の女が算數のことに明るい證據としては、子供

の時から然う云ふ風に感化されるので、一寸した町の童謠でも、東京では『雪やこんこ、霰やこんこ』と歌つて居るが、大阪の少女は『雪は一升、霰は五合』と歌ふ、以て算數のことには先天的に感染して居ることが分るであらう。

▲着物を欲がる理由――觀劇

女が着物を欲がるのは別に珍しいことでもないが、大阪の女は特に着物を欲しがる、それは如何いふ譯かと言ふと、大阪の女は演劇見物と遊山とに憂身をやつして居るからである。演劇――と言ふよりも俳優――の大阪婦人を感化することの偉大なるには驚かざるを得ぬ。大阪の娘は、今日では大分女學校へ通ふ樣になつたが、それでも大部分は縫物屋と云つて裁縫の師匠へ通ふて居る。この縫物屋に通ふて居る娘の談話を聞くに、朝から晩まで俳優の話で持ち切つて居る。斯う言ふ娘の間には小說が愛讀される。その小說は單行本や雜誌は餘り讀まれない、多く新聞小說である。其の小說は如何にして愛讀されるかと言ふに、單に小說として愛讀されるのでなく、其の小說に現れて來る人物を直に俳優に擬して、誰は雁次郎に演したらよいとか彼は延二郎に演したらよからうとか、小說を自分で演劇化して、小說を背景として俳優の話をするのである。斯う言ふ風であるから、新聞小說が直に劇になる樣に書かねば受けない。演劇や俳優の話は若い女の間にのみ取り交されるかと言ふに、若い女ばかりでなく年をとつた女でも女が集まれば必と演劇と俳優の話が出る殊に私どもの意外に感じたのは、母親と娘との會話である。東京の者は親と子との間に一種の隔がある。ところが大阪人の親子には隔がない。母親と娘とは友達の樣な關係になつて居る、そして母親と娘との間にも演劇や俳優の話が公然と行はれて居る。それと言ふのも大阪人は親も子も擧つて演劇趣味に富み、觀劇を以て唯一の娛樂として居るからである。斯う言ふ風であるから演劇見物に行くことが頻繁である。頻繁であるから幾度も同じ着物を着て行く譯に行かぬこれが大阪

女の特に着物を欲がる大なる原因である。殊に大阪女の觀劇と言ふものは、演劇を自分が觀るよりも、自分を人に見せるのが目的の樣である。と言ふのは衣裳のある女が演劇を見物に行くと、初めから終まで決して同じ着物を着て見物して居ない、幾度も幕の間に着物を着替へる。斯う言ふことをするから着物が多く要るのも無理はない。

五　着物の拵へ方の上手

今一つ着物の要る原因がある。大阪は食物を非常に節儉するところで、殊に多くの雇人を置て居る家では一層食物がよくない。多くの雇人を使ふて居ては、主人だけが美食する譯に行ぬ。然し年中雇人と同じ粗食では身體が續かない、そこで主人は外に出て養生食をする、如何に主人でも、只養生食に外へ出ると言ふては、奉公人の手前甚だ面白くないから、何か外出をする理由をつけねばならぬ。そこで花見だとか、大師參りだとか種々の口實を設けて外出をする。これが又着物の要る原因となるのである。斯く言へば大阪の女は無暗に贅澤をして居る樣に聞えるが、元來が經濟思想の發達したる大阪人のことであるから、身の程を考へずに贅澤をする樣なとは決してない。それでは如何して新しい着物を取り替へ引き替へ着るかと言ふに、これには東京人の氣のつかぬ話がある。それは如何いふ話かと言ふと、大阪の女が着物を買ふ場合には、なるべく地質の良い、そして染め直しのきく物を買ふ。其の着物が少し古くなつて來ると直ぐ染め直す。一度染め直して古くなると又染め直す、地質の役に立つ間は幾度でも染め直すから、一枚の着物が幾度も新しい物として用ひることが出來るのである。又帶にしてもそうである。一本の帶を買ふ場合に、丸帶を一本買ふ人よりも、丸帶の三分の一づゝ三種買ふ人の方が多い樣である。丸帶を三分の一買ふて如何するかと言ふと、これは大阪人の發明で、丸帶三分の一を以て、前へ出るところと、後の結目とを器用に作へて、これを着けると前から見ても後から見ても丸帶を締めたとしか見

えない。斯う言ふ便利な手段を知つて居るから一本の丸帯を買ふて同じ帯を毎もするより、三分の一つゞ三種買ふて三度變つた帯を締めた方を得策とするのである。大阪の女が着物を買ふ標準は東京の女が着物を買ふ標準と隨分違ふ。東京の女が着物の縞柄を選むには、自分の年齢



に適當したものを選むのであるが、大阪の女はさうでない、自分の年齢よりも五ッ六ッ老けた縞柄を選むのである。これは如何いふ譯かと聞くと、今恰度適當な縞柄を選むで置けば二三年も經てば派手過ぎて着られなくなる。それでは甚だ不經濟であるから、今は少し老け過ぎて居

ても四五年經つて恰度よい位の縞柄を選むで置けば、長く着ることが出來ると言ふのである。斯う言ふ着眼で着物を選むのであるから、大阪の女の着物は皆ぢみである。そこで着物が斯くぢみであるから襟とか袖口とかと言ふものをウント派手にする。これは東京の女と全く正反對で、東京の女は着物を派手にして襟や袖口をぢみにするが、大阪の女は今言ふ如く着物をぢみにして他の取り合せで派手に見せるのである。大阪の女は斯う言ふ風に、假令着物に憂身をやつして居ても、絶えず經濟と言ふことを念頭から離さない。この點は東京の女の樣に無算用に贅澤をするのよりはよい。

▲大阪の化粧は濃い

それから化粧であるが、大阪の女の化粧は東京の女の化粧と全然趣を異にして居る。東京の女の化粧は天然の美を助けると言ふ方針で化粧が淡い。大阪の女の化粧は人造的に美を作ると言ふ方針で化粧が濃い。これ如何いふ原因から斯くも東西の女の化粧の方針が違ふのかと研究して見ると。東京女の化粧の淡いのは風や埃の多いのも一つの原因となつて居るであらうが深川の全盛時代に藝者が素顔を自慢したのを眞似て今日に至つたのであらう。又大阪の女の化粧の濃いのは例の演劇の感化であらうと思ふ。大阪の女は徹頭徹尾演劇の感化を受けて居るから、化粧までも舞臺面の濃化粧を眞似たのである。斯う言ふ濃化粧をして居るものであるから絶えず顔を修繕して居なければならぬ。それだから大阪の女は懷中に化粧道具を離さない。劇場へ行つて見ると直ぐ分る。幕が閉ると女と言ふ女は皆懷中から化粧道具を取り出して顔の修繕に取り掛る人が見て居てもそんなことには頓着せぬ、鏡と首引で一生懸命に化粧をする、演劇見物も却々忙しいものである。

▲東京風の女髮結

髮の風は大分東京風が大阪に入り込むで來た。東京髮結と言ふ看板を出した女髮結が大分出來た樣である

斯う言ふ樣に東京髮結など言ふものが出來たのを見ると、大阪の女の髮が東京化して來るのは事實であるが、然し全然東京化する樣なことはない、幾等東京髮結でも大阪の女の髮はどうしても大阪式を離れることは出來ぬから、東京風の髮を大阪化して結ふに過ぎないのである。

大阪の婦人が化粧にうき身をやつすと云ふことに就いて、今一つ云ふべきことは、うぶけぬきと云ふことである。うぶけぬきは一つの女の職業で町家ではぬきやさんと云ふ。女の項の胎毛を拔くので、項脚が綺麗になるやう胎毛を拔くのである。且砥石、剃刀をも携へて居て、胎毛を拔いたあとを剃るので卽ち女の顏剃である、之も東京には絶えて無い。

彼の東京の女子大學が大分大阪の女を感化して居る女子大學の校長は元大阪の梅花女學に居た人で一あるから、大阪女の氣質をよく了解むで居る。大阪女の氣質をよく知つて居るので、大阪の女を集めるのが巧いそれで女子大學には大阪の女が隨分多い。その中で卒業して大阪へ歸つて居る女も尠なくないから、斯う言ふ女が盛に東京式ハイカラ風を吹かす。然れども幾許東京式ハイカラ風を吹かしても、東京式にはならぬ、一種のハイカラ則ち大阪式ハイカラとなつて流行する

▲遊藝、洗濯、女衆

最後に大阪女の特長を言へば、大阪の女はどんな女でも大抵茶の湯と挿花の心得がある。それであるから身體のとりなしが優美である。又三味線も大抵の女には心得がある。然しこの三味線は習ひ方が東京と大分違ふ、東京では唄を主たるものとして三味線を從たるものとして居るが、大阪ではこれと反對で、三味線を習ふと言ふのであるから、三味線が主たるもので、唄は三味線の附屬物の樣になつて居る。これを要するに大阪女の特長は茶の湯、挿花、三味線などの心得があつて、そして經濟思想が發達して居て、お世辭がよいことである。

又、女の箴張も大阪の家庭に能く行はれることで、

東京の中流以下の女や下女は、水道の水でざぶ〳〵と洗濯をやるが、大阪では川へ出て洗濯をする。殊に沖洗濯（沖或は置？）と云つて、初夏若くは孟秋の頃、蒲團、蚊帳其他の大物の洗濯をするのに、天滿橋の上流とか櫻の宮あたりまで持出して、川の中で充分洗濯し河原で干上げ、又は糊をつけて夕刻までに持つて歸る風がある。遠い處だと無論男の肩を借らねばならぬけれど川の中で女が白い脛を露はしてボチヤ〳〵洗濯をしてゐる處は、粂仙には見せられない一種の浪花女の風俗である。

最後に大阪の婦人風俗に加へたい一項は、今なほ船場邊に殘つてゐる殊勝なる女衆風である。今橋、高麗橋などの途を通ると、現代の粋を聚めて盛粧したる所謂とうさん（とうはいとの略、いとはいとし兒の略と思ふ）のお供をして、島田髷美くしく結上げたる上に白い丈長を蝶のやうにかけて、何の飾りもなく、無地の半襟に本綿の紋の衣服、黒無地の帶を行儀よく結び雪駄履で隨行するのを見かける。此が卽ち船場風の女衆（女中）で、素顏の美しきは往々粉黛を施せる主人を壓するものがある、楚々として人を動かす處は確に浪花風俗の一つの特色であらう。併しそれも今は餘程少くなつたらしい。

大阪の食物と東京の食物

村上浪六

△青い魚と赤い魚

大阪と東京とを比較して何か話をせよと言ふのですか、それは面白い、イヤ面白いと云ふよりは宜ことだと思ふ。何故かと言ふに、所謂江戸ッ子はナーニ上方贅六がと、上方を輕蔑して居るが、その上方に東京が漸

次征服されて行くと言ふことに氣がつかぬ、それと言ふは、東京の者は上方をよく知らぬからである。この意味に於て東東の者は上方を研究する必要がある。今『女子文壇』で上方と東京とを比較研究すると言ふのは時宜に適してる企で、誠によい思付と思ふ。

然し漠然と大阪と東京とを比較すると言ふたところで何を比較してよいか分らない、又ありとあらゆる事を比較すると言へば、これは又一朝一夕のよくするところでない。そこで先づ食物に就て比較をして見よう。

魚類は大阪と東京と全く系統を異にして居る。東京の魚類は青い、背の青い魚が魚類の中堅となつて居る、東京の者は鮪、鰹、鯖など言ふ背の青い魚を賞美するが、大阪の魚類は赤い、背の赤い魚が魚類の中堅となつて居る。大阪の者は鯛、魴鮄など言ふ背の赤い魚を賞美する



野菜物で言へば、大阪の野菜は料理で食はす料理の味で野菜を食はすのである。東京の野菜は山葵、三葉、蓼などの樣に人工を加へないものに甘味がある。干物に至つては東京は全くの乾物である。くさやの乾物などはそれである、大阪の乾物は半乾である、いゝくかの一鹽などがそれである。斯く

食物に相異のあるは、全く土地の關係から生ずる結果に外ならぬのである。と言ふのは、東京の生活は半露營的である、出火の多い關係もあらうし、浮沈の劇しい關係もあらうし、又都を成して未だ多くの歲月を經ざる關係もあらうが、要するに東京の生活は永住的の生活でない。之に反して大阪の生活は永住的である。永住的であるからものに秩序がある。從て食物にまで其の氣分が現れて來る。東京は露營的であるから、食物店も料理屋と言ふよりも寧ろ、煮賣屋に近い、分量が多くて、一寸甘くさへあればよいと言ふ樣な風である。大阪はさうでない、其の生活たるや永住的であるから、食物などにも却々硏究して居る。分量の多い煮賣屋式でなく、眞の料理と言ふものを發揮して居る。

▲進步せる大阪の料理

今日の東京は江戶ッ子の東京でなくして田舍者の東京である。現在東京に於て中流以上の地位を占めて居る者は殆ど田舍者である。この田舍者に依つて現在の東京は支配されて居るのであるから、東京の趣味と言ふものは、この成功せる田舍者に依つて作られてる趣味である。料理屋なぞでも勢力の微弱なる江戶ッ子の趣味を標準とすることは出來ない、如何しても現代に勢力のある田舍者の趣味を標準とせねばならぬ、玆に於て東京の料理屋が田舍者の趣味に適する煮賣屋式となるのは蓋し已を得ざる次第と言はねばならぬ。大阪に至るとこれと反對で、現代の大阪を支配する者は全く大阪人である。大阪に於て中流以上の地位を占めて居る者は殆ど大阪人であるから、決して他國人の趣味を容れない。從つて食物も大阪趣味を遺憾なく發揮して居るのである。料理屋にしても、東京の料理は種々雜多な田舍者の趣味に投ずる樣にせねばならぬから、勢ひ分量の多い、田舍者の口に適する煮賣屋式となるのであるが、大阪の料理屋は全く土着の人間を顧客として居るのであるから、趣味が一定して居る。大阪土着の人間は如何しても田舍者よりは口が贅澤になつて居るから、自然料理も進步して居るのである。燒肴一

つでもさうである。東京の照燒は味淋と醬油とで赤い照を出すのを得意として居るが、大阪の附燒はさうでない。反つてこの照をぬく樣にして居る。吸物にしても亦東京と大阪と趣きが違ふ。東京の吸物は醬油で味がつけてあるから汁の色が赤い、大阪の吸物は醬油を主眼として居ないから汁に色がついて居ない。刺身でも東京では鮪の樣な赤い肉のものを賞美するが、大阪の刺身は鯛の樣な白い肉に限つて居る。

▲美術的なる上方の食器

それから食物を盛る食器でも東京の方は餘り注意しない、只見た目に綺麗であればよいとして居る。大阪はさうでない、食器でも却々凝つて居る。單に器物の中の肴を食ふのみが目的でなく、其の肴を盛つた食器を美術品として觀賞するのが又一つの目的となつて居る。これと言ふのも東京は露營的であるから、食器なとは如何でもよい、只だ綺麗であればよいと言ふのであるが、大阪は永住的であるから、食器にまでも贅を盡して、之を觀賞すると言ふ餘裕がある。然し東京も近來は餘程大阪式になつて來た大阪に征服されて來たと言ふと語弊があるが、大阪の長を取つて東京が進步したのである。これは當然のことで、敢て不思議はない、何を言ふても京都、大阪は先進國で、文明國である。東京は後進國で、野蠻國であつた。函嶺を間に置て西と東と文野の區別は明である。京都は皇城の地なり。大阪は秀吉に依つて開拓され、共に文物整然とした先進國にして而かも文明國であるが、東京は所謂武藏野であつたのを、德川に依つて僅に開拓された後進國で、從つて諸國の人間が雜然と集つた野蠻國であつた。それが皇居を移されて帝都となつて未だ五十年にもならないのであるから、漸次先進國の上方式を學むで、野より文に進むで行くのは當然のことだ。

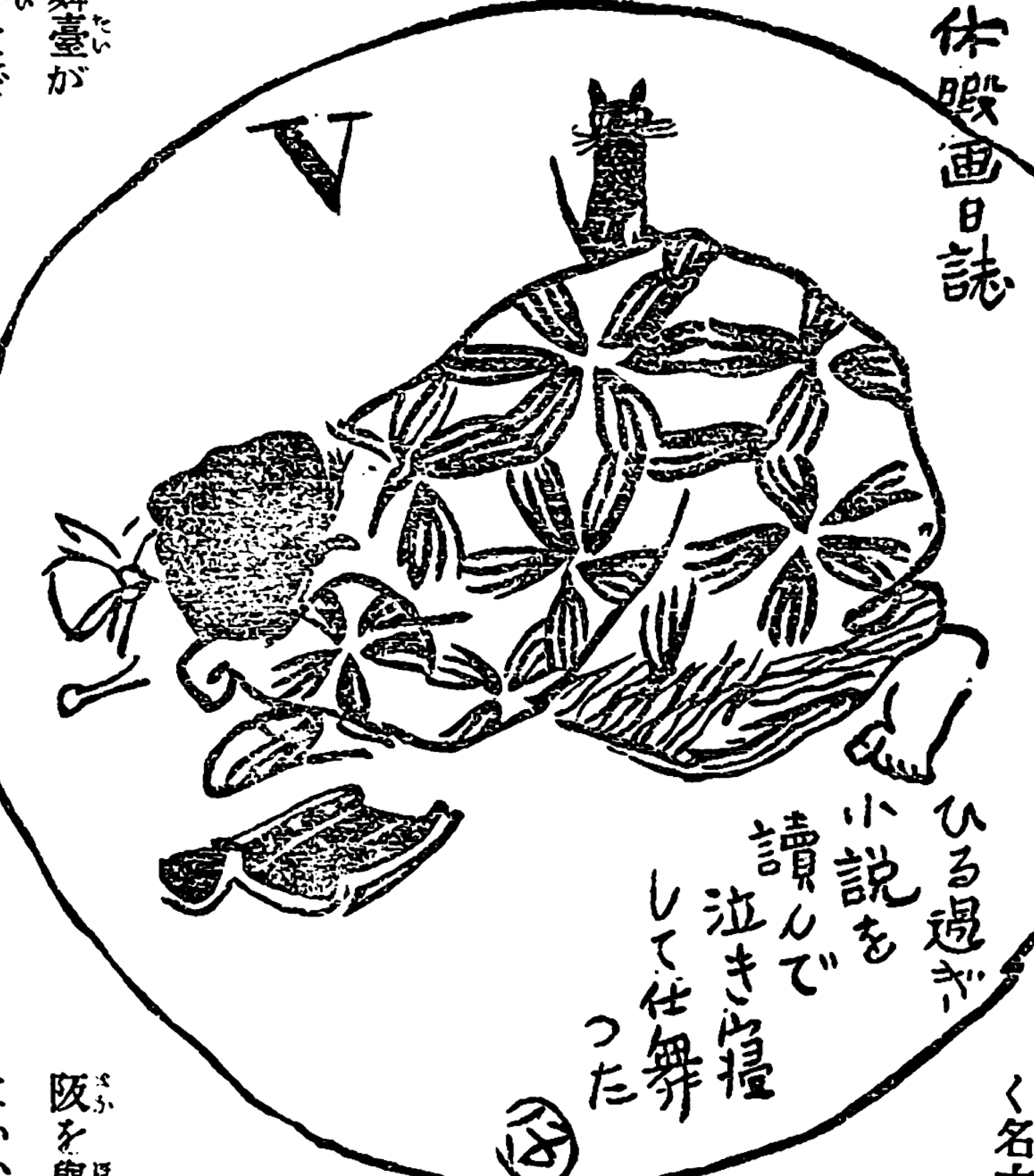
▲上方式に化して行く東京

東京も近來は火災保險が盛になり、消防の設備も調

ふて來たので、露營的生活から、永住的生活に移つて來た。斯く東京の生活が永住的になつて來たので、勢ひ永住的模範たる上方式を學ぶのは順序である。故に料理なども近頃は大分大阪化して來た。汁の色も白くなつて來たし、食器にも注意する樣になつて來た。以前は何日何時火事に罹るか知れないので、食器などには殆ど注意を拂はなかつたのが、火災保險や消防設備の結果、斯う言ふ心配が少くなつて、又近頃は家庭問題などが喧しくなつて、家庭に於ても料理などを研究する樣になり、從て食器の必要を感じ、またこれに對する趣味も向上して來た。斯く上方式が漸次東京へ入込むで來るので、東京の料理屋の料理も餘程變つて來た。元來料理と言ふものはたゞ甘く食はすのを以て最上とは言はない。料理で甘く食はすのは其は中である。料理の上と言へば甘く食はすのみでなく、趣きと言ふものがなければならぬ、料理の趣きと言ふのは則ち變化である。變化に乏しい料理は未だ料理の上なるものでない。同じ物を同じ味ご食すのは、眞の料理でない。同じ物を種々の味に食はして始めて料理の眞價が現はれるので、東京の料理は變化を現はす點に至つては未だ〳〵大阪に及ばざること遠してある。然し大阪の料理屋でもこれの出來る所は多くない。大阪に於ける料理の一流と言へば、先づ高麗橋の鶴屋、堂島の魚岩、北の新地の門野、南地の壽亭、同じくひがらきの五軒である。その中で眞に甘く食はすのは魚岩で、甘い上に變化のあるのは鶴屋である。何故鶴屋の料理がそれ程よいかと言ふと、今は店を閉めたが以前土田と言ふ有名な料理屋があつた。この土田の板場が實に料理の名人で、其の男が土田の店を閉めると同時に鶴屋の板場となつたから、其れで鶴屋の料理がよくなつたのである。東京の料理屋でこの鶴屋魚岩などに匹敵する料理は一寸見當らぬが、強て求むれば、魚岩の敵手になるのが三河屋で、鶴屋の敵手になるのが小常盤であらう。

▲使ひはたして二分殘る

東京は斯く食物に於ては大阪に征服されつゝあるが美人に至つては、美人の本場たる京都にも又大阪にも征服されて居ない、と言へば東京には土着の美人があるかと言ふに、それは殆どない、皆無と言ふてもよい位である。それなれば何故京都なり大阪なり、美人の本場地より供給を仰がぬかと言ふに、京都や大阪の美人は、遠く東京まで遠征に出かける必要がない。京都なり大阪なり立派に活動すべき舞臺があるから、却々東京三界まで出て來ない。玆に於て中京美



人が活躍し出した。オキヤセ美人がどし／＼東京へ押し寄せて來た。以前の東京は越後美人で占められて居たが、今は全く名古屋美人に占領されて了つた

東京で住むで居る者が江戸ッ子／＼と口癖に言ふが、眞の江戸ッ子と言ふ者は東京には極少ない、そしてその江戸ッ子も威張つて居られるのも品川までゝある。品川より西へ行けば、とても威張ることは出來ない。斯う言へば東京を押さへて大阪を譽める様に當るが、さうではない、所謂江戸ッ子性質と言ふものは決して賞譽すべきものでない

露骨に言へば江戸ッ子は稚氣と蠻氣とに富むだ者であるから、露營的時代には惡くはないが、永住的時代に入つては少しく改めねばならぬものである。宵越の金を持たぬのを無上の名譽として居る樣では決して世の中は進むで行かぬ。これからの社會は如何しても贅六風を學ばねば成功はせぬ、所謂江戸ッ子は忠兵衛が二分殘したのを笑つて、江戸ッ子なら二分も殘さぬと威張つて居るが、若し忠兵衛が江戸ッ子で、二分も殘さぬと言ふ氣前であつたら、二の口村まで逃げて行く途中で既に捕はれて居る。二分でも殘すだけの心掛があつたればこそ二の口村まで落ちて行つて親にも逢へたのである。何と言つても秩序的の今の社會には江戸ッ子性質では成功せぬ。如何しても贅六根性にならねば中流以上の地位を占めることはむづかしい。

大阪の郊外と東京の郊外

加藤朝鳥

▲雜司ケ谷と螢ケ池

東京の郊外は武藏野の幽しい趣きがあつて、假令開墾されたり、借家が澤山建てられたりしても、何となく、處女地を踏んで居るやうな氣持があつた、殊に僕の永らく棲むで居た雜司ケ谷の鬼神母神の杜などは、蓊鬱とした樹立と、墓地と、傳説とそして牧場とが運んでくれる空想が當時の生活に適して居りシユーバアバンライフを味つて居る想か深かつたが、大阪の郊外に棲むやうになつてからは、一向に落付が無い。一帶に東京の土は黑いが大阪のは赭い、東京の郊外の借家は大抵一軒立であつて、粗末ながらも相應な間取と風致とがあるが、大阪の借家は長屋ばかりである。

今僕の棲むで居る螢ヶ池は大阪の西北に走つて居る

箕有電鐵線の一停留所である。大阪二三里箕面二三里と云ふ、郊外の名には稍々大都會から離れすぎた感があるが、電鐵事業の盛な大阪では三里や四里は眼中に置いて居ない。電鐵の沿線は皆郊外と見て差支へない從つて東京の郊外の色別――例せば、澁谷の新開地的な處、大久保の草原、雜司ヶ谷の沈靜、日暮里の悒鬱三河島の水田、御殿山の天空海濶式な區別を大阪の郊外に當て嵌めるならば、阪神線、京阪線、箕有線、南海線等でそれぞれ特色を發揮することが出來る。

▲大阪郊外の電車線

阪神線は絶えず滿員の實用向な電車であつて、箕有線の全然遊覽を目的として居るに比べて、甚しく多忙な氣に滿ちて居る。沿線に舊跡の澤山あつて、歷史的な感想をやるのは京阪線で、東京人が伊豆を思ふやうに、南國的な紀伊の蜜柑の國に行くのは南海線である其のうち特に大阪式を發揮し、大阪の文明風俗習慣を遺憾なく露出したものは箕面有馬線である。箕面の動物園と寶塚の新溫泉とは此の電鐵會社の經營したものであるが、共に氣持の好い程大阪の特色を具體して僕等のやうな東京から來たものを驚かせて居る。

▲寶塚溫泉記

僕が昨年六月始めて寶塚溫泉に行つた時の感想記に『僕が始めて寶塚に着いたのは初夏の夕暮であつた。茶褐色な山の肌に疎らに松が簇生して居るのと、河原の多い武庫川とは、箱根の湯元や塔の澤やとは異つて殖民地の樣な感じを與へるが、何れの家からも聞こえて來る三絃の響が如何にも虛空の遠きに響き擴つて行く心地がして、京阪地方の遊樂の調子を合奏して居る壯大を感せずには居られなかつた。煤煙から遁れて急いで來た僕は何よりも先に新浴室に足を向けた、けばけばしい廣告板の色彩は什うしても商業の旺な地方を思はせる。紫や赤に染めたシトロンとビールとの旗の間から浪速節が蓄音機の朝顏から響いて來て、造花の樣な躑躅の花にその音波がさ迷つて居る。水のせゝら

ぎが、聞てえると云ふ程では無いが、武庫川の岸の松と、それに纏る夕靄が何となく親みがあつて、夕暮と云ふ其の時刻と溫泉と云ふその場所とに無限の感懷を味はずには居られなかつた。

溫泉に行くには必ず夕暮を選ぶのが僕の癖である。實は照りつける白日のもとに、白粉の女や、ペンキ塗の廣告を見るのが不愉快である。電氣の光線と太陽の光線とは什うしても僕等の感觸に深い差別を與へる。急いで電燈の明るい浴場に這つて見ると華やかな毯子、黃色の盲簾、それに今里清香園の楓樹の盆栽がおかれ各々紳士と淑女との浴室に分れ行く廊下には、石鹼を賣る少女や、種々の色彩を咲き分けて居る楓樹があつて、燦然として居る。澄みきつた鏡の前で衣類を脫いで扉をあけると、池の樣に廣い湯槽には、頸まで來る程に湯の深さがあつて泳ぐことが出來る。又二つの女神の乳像から、湯と水とが撒下されて、俄雨の樣な響をなして雲斑岩の敷石を叩いて居る。

僕は不圖此の湯槽のなかで、東京の帝國劇場を思ひ出した。何故思ひ出したか、それは偶然である。僕は東京を去る時心に別れを惜むだのは、あの百萬圓建築の帝國劇場であつた。金飾燦爛とした何處やらロココの樣でもあり、そして何處までも遠慮のない時代錯誤のあの建築の中で演ぜられる新藝術を一つ一つ見ないで、大阪の繁雜に消えて行くことを絶えず殘念に思つて居た。不思議にも此の殘念が幾日も幾夜も續いて忘られないものゝひとつとなつたが、不圖此の新溫泉に這入つて殘念が晴れた。永らく腦にかゝつて居た雲翳が一瞬のうちに逃げてしまつたやうな氣持がした。溫泉と演藝と……それに何の關係があらうか、僕は自分の不思議な心地を、不思議な儘に放つて置いて、無心に再び鏡の前に、氣持よく溫まつた身體に衣服を纏ひつけたのであつた。

其の身體を間もなく電車の中に置いた。線路の兩脇に電柱が外側に傾斜を持つて間隔が少く置かれ、電線が天井のやうに引つ張つてある。車掌臺の窓から覗いて見ると、無限に電柱が柵の樣に續き、其の間を進行

して居る電車は、丁度迷宮の絲を手繰つて居るやうに思はれる。僕は不圖感じたこの『迷宮』と云ふことが、何となく此の電鐵に意味があるやうな氣持がする。箕面と寶塚とは長く大阪人の目ざした迷宮の臭で之れを開いた電鐵は一種Cul である。寶塚の新温泉と箕面の動物園とは、大阪人の遊樂地として絶好な位置にある、箕面に晝を過ごし寶塚に夜を過ごして歸るとも心身を一掃するに十分である。僕は遊樂を目的で此の二つの場所に行つたのでは無くて、何處



を居所とも定めぬ淋しい漂泊の心で、梅田から電車に身を托したのである。電車と云へば、東京の上野呉服橋間を通つて居るのが一番心地よいものと思つて居たが、更に新式な日本化した慰樂的な此の電車のMA〇のクッションは、疲れた身を投げ凭すには相應しいものだ。僕の聯想は茲に演べるにはあまりに緣遠く自家[illegible]ではあるが、巴里の藝壇に居堪へないで、鄕里のブルゼの郊外に庵を構へて居る歌人ローデンバッハの心事を思はずには居られなかつた。人

生のあらゆる計畫に心を勞した困憊の果、靜かな書齋に閉ぢ籠つて、モスリンの窓掛と、カシミアの椅子座蒲團とに人生の慰安を求めて居る、あの灰色と死との詩人を、不圖この電車で思ひだしたとは、寶塚溫泉と帝國劇場とを聯想したのよりも更に奇である。漂泊の思の寸裂斷々として纏らぬ僕は箕面も寶塚も徒に印象を爛らすに過ぎなかつた。瞼を塞いで見ると、箕面動物園の千疋猿が種々な奇怪な姿態をして騷いで居るのが彰れて來る。願くば無事な終日をあの猿どもの前で考へることもなく停滯して居たいものだ。』

と云ふ一節がある。以上はあまりに寶塚のことを書き過ぎたが、要するに箕面と寶塚との分岐點なる螢ケ池に郊外生活をして居る僕は、雜司ヶ谷の沈靜に較べて、何となく漂泊的な感想がある。

▲人間慾の滿足を計る

更に箕面動物園と上野の動物園とを比較したら、東京と大阪との特長が心地よき對照をなす位に現れて居る。第一東京の學術的なのに對し、大阪のは娛樂的である。箕面の經營者は如何に多くの客を呼ばんかと腐心した結果は、動物舍の美術的と、動物配置の巧妙と娛樂機關の備つて居る點で、一つ間違へば淺草の花屋敷になりさうな處があるが、流石に敎育的方面に力を努して居る。總じて何事も現世的な大阪では、東京よりも多く人間慾を滿足させて居る。寶塚の浴場が、宛然羅馬の暴王が耽溺したフロラの大浴室のごとく、同じく箕面動物園が、動物に對する硏究心と云ふよりも愛好心を以つてすると云ふやうなことは、慥に東京と大阪との區別である。中村春雨氏が云つた樣に大阪は巴里に似た點が多い。食道樂の如きも脂肪質を喜ぶところや、感覺が狎れてしまつて刺られる位にならねば滿足せない點、例せば大阪の活動寫眞の看板には血の出る處が多く描いてあり、低級の芝居には必ず血の騷をやるなどは、東京のアッサリに比べてコッテリの大阪がある所以である、一つは靈性的で一つは現世的、一つはヘブライズムで一つはヘレネズムである。

大阪の結婚と東京の結婚

澤田撫松

▲相互に人物よりも金錢

結婚は人生の大事であるから、大阪だからといつて東京だからといつて、さう大した違ひのある譯はないのであるが、大阪人と東京人と自ら氣質の異なるところから自然結婚にまで相違が生じて來るのである。大阪は商業地である。商業地であるが故に金は無上に貴まれる。其の結果何事にも金力が附て廻る。結婚も亦金力の支配するところで、結婚の準備も人物本位でなく金錢本位である。嫁を求める方からでも、嫁となる女の容貌性質などは第二として、第一に着目するのは荷物である『一體其の娘には何荷の荷があるのか』これが嫁選みの場合に、第一に發する疑問である。そして此場合に其の荷物の數が自分の豫想した數より少ないときは、『本人は容貌もよし性質もよし、申分はないけれど、荷物がそれだけでは如何も困る、世間の手前、それだけ位の荷物の嫁を貰ふ譯には行かぬ』これで折角の縁談も破談になるのである。女の方から男を選むのも亦此標準で、人物とか學識とかは第二にして先づ嫁に行く先の家の間口と雇人の數を聞く、間口が何間、番頭が何人、丁稚が何人、女中が何人と奉公人の數を詳く尋ねる。それは之に依つて相手の富の程度を計るのである。若し此場合に相手の人物に申分がなくとも、家の間口と奉公人の數が、自分の定めて居た標準點以下であると『本人は氣に入つたが、先の家があれでは、世間の手前、まさか縁組も出來まい』と言ふので又破談になるのである。初めから眼の着け處が違ふのである。

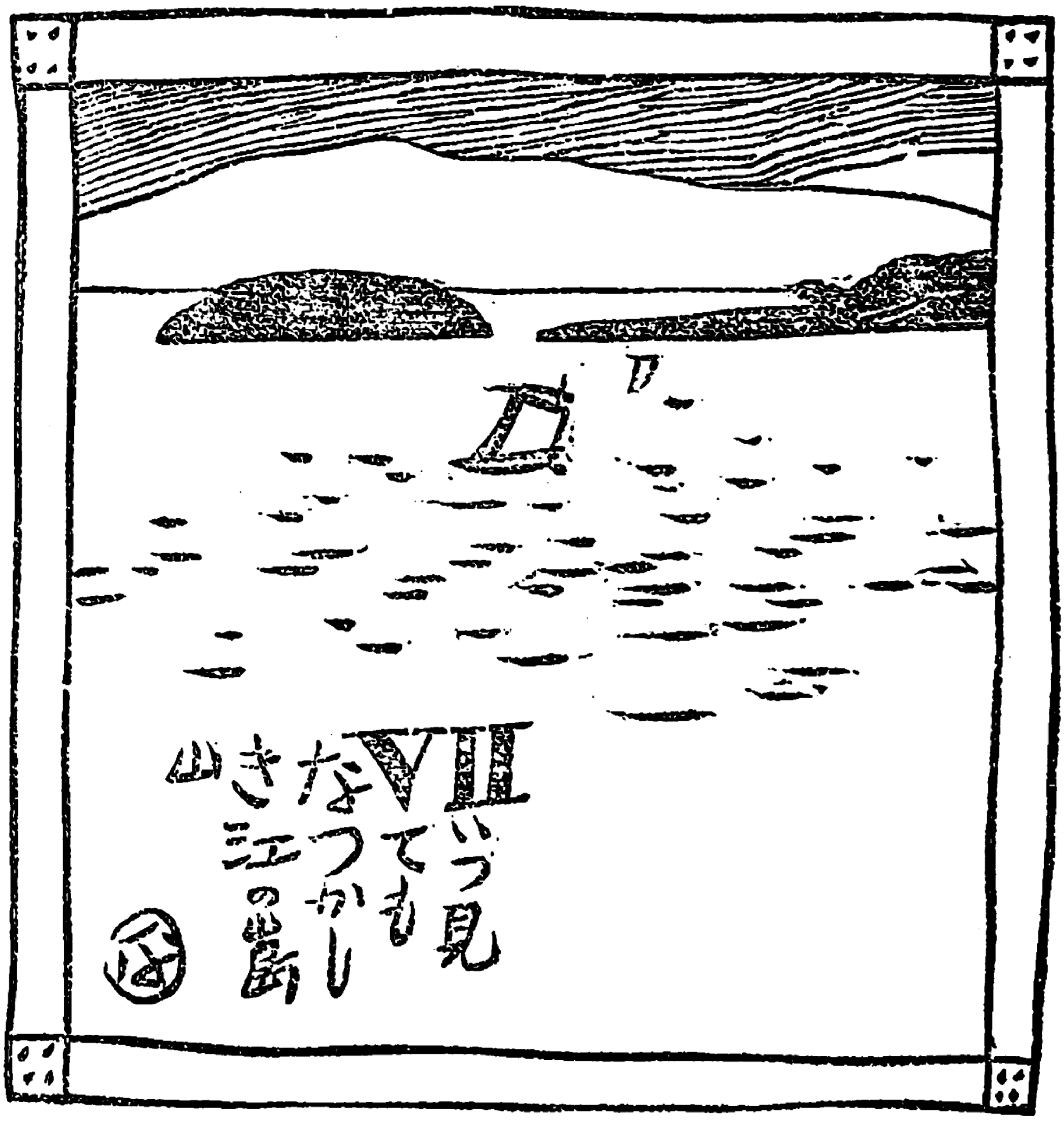
▲嫁の衣裳見せ

斯う言ふ樣に、嫁を貰ふ場合にも、又嫁に行く場合にも常に世間と言ふものに重きを置て、其の結果富の程を以て結婚の標準として居る。それが爲めに、假令相手の人物が氣に入つても、富の程度が意に叶はないと其の緣談は纏まらないのである。この場合に於て、嫁を貰ふ方が財產家で、嫁の荷物が少ないけれど、是非其の娘が嫁に貰ひたいと言ふ時は自分の希望するだけの荷物を作るに要する金を娘の家へ贈つて、其の金で自分の望むだけの荷物を作らして世間ていを繕ふのである。これを拵取と言ふ。斯う言ふ風に嫁の價値は荷物の多少に依つて定まるのであるから、人が噂をする場合でも五荷の嫁とか七荷の嫁とか、荷物の數に依つて嫁を品評するのである。斯うなると嫁を貰ふのか荷物を貰ふのかゞ分らない、或意味に於ては嫁よりも荷物の方が主たるものとなつて居る傾がある。大阪では嫁の荷物は結婚式の日より一週間程前に婚家へ送り込む、すると嫁を貰ふ家では此荷物を受取つて、之を自分の家の表の室、(大阪の家は大抵格子の塡つた室が往來に面してある、これを表の室と言ふ)へ陳列する、此所へ陳列するのは往來の人にも見て貰ひたい爲である。其の陳列の仕方も、簞笥に入れてある着物は悉く取り出して衣桁に掛け、長持に入れてある布團も長持の上へ積み重ね、箱や抽出の中に納めてある小道具も皆取り出して箱の上に陳列する。斯うして置いて親族緣者を呼び集めて之を見せるのである、すると皆集まつて來て嫁の荷物を一々批評するのである。それであるから幾許必要な物でも、木綿の着物の樣な物や又は人に餘り見られるのを好まない物なぞは、此荷物の中へ入れないで、自分の身體の行つた後から持て行く樣にして居る。

斯う言ふ風に女が嫁に行かうと思へば先づ荷物に金を掛ねばならぬから、親の資力のない者の娘は容易に行く事が出來ない。そして又この結婚の式が東京から比較すると餘程面倒である。尤も大阪でも身分に依つ

て其の式に等差はあるが、大體が東京の如く簡略に行は普通でない。

はない。やれ何だとか彼だとか却々以て金が要るので、資産の乏しい者の娘は妙齢になつても容易に嫁に行かれない、それも貧乏を露出にして居る人間なれば反つて心配はない、それ相當の結婚も出來るが、一番哀れなのは、虚勢を張つて居る家の娘である。虚勢を張つて居るのであるから、世間には困つて居ることを知らし度くない。さらばと言つて娘の結婚にまで虚勢を張つて充分な荷物を作へると言ふことになればそれこそ破産をせねばならぬのであるから、其苦しさ



▲離婚は東京に多く大阪に少い

大阪の結婚と比較すると東京の結婚は頗る簡略なものである。日比谷大神宮へ行けば松竹梅の三等の中で身分相當の式を擧げることが出來るし、荷物だと言つても大阪程喧しい問題にもならず。又婚家先で之れを陳列して見物同様にすることもないから、家の爲めに婚期を空しく過す樣なこともない。この點は確に東京の女は大阪の女よりも幸福と言はねばならぬ。然し茲に大に研究する問題がある。それは外でもないが、大

阪には離婚が少なく東京に多いことである。大阪の結婚は前に言ふた如く、財産結婚であつて、結婚する當人に餘り重きを置て居ない。嫁を貰ふと言ふよりも荷物を貰ふと言ふ樣な傾があり、又嫁に行く方でも人間に嫁くと言ふよりも、財産に嫁くと云ふ樣だから、この點から考へて見ると、如何してもうまく落ち着かないで離婚が多くなければならぬ筈である。之に反して東京の結婚は人物本位で、財産や荷物は第二にして居るから、離婚なぞも自ら少なくなければならぬ筈である。それが如何であらう、事實は全く理窟と正反對で、財産本位の大阪に離婚が少なく、人物本位の東京に離婚の多いのは奇異なる現象と言はねばならぬ。これには種々な原因もあるであらうが、金錢を無上の貴きものとして居るから、假令其の結婚は人物本位でなくとも、夫たり妻たる當人同士お互ひに多少の不足があつても、元來が財産本位で出來上つた結婚であるから、金錢にさへ困らなければ、大抵のことは我慢し合ふて圓滿に治まつて行くのであらう。これと反對で、東京の結婚は人物本位とは言ひながら、人物と言ふものはさう一見しただけで分るものでなく、又人の噂や仲人口で分るものでないから、却つて眞の人物を得ることは困難である。それに東京は人の運命に盛衰が烈しく、生活が六ケ敷いから、從つて離婚も多いのであらう。今一つの原因は、大阪では前に言ふた如く結婚が困難であるから、初めての結婚でさへ却々容易に出來ないのを、二度三度するに至つては到底大阪人の堪得るところでない、のみならず、大阪では出戻りと言ふて離緣された女を非常に卑める習慣があるので、一度嫁に行つた者は滅多に離婚をしないのである。ところが東京では結婚が容易であるのと、再婚をそれ程恥辱として居ないのとで、自然離婚も多い譯であらうと思ふ。

結婚の方法としては、東京より大阪の方が非文明的であるが、文明的に行ると離婚が多いと云ふのは、誠に矛盾した現象で、大阪東京結婚比較論は一面に於て博き意味の重要なる婦人問題であらうと思ふ。

骨相學より觀たる 大阪人の性質と東京人の性質

心相學館長 船井梅南

大阪人の顏と東京人の顏

大阪の人と東京の人とは、性格に於て、大分異なつた點がある。其の性格の相違するところは悉く顏に現はれて居る。久しく觀相に從事し、殊に自分は神戸が生國であるので、大阪人の骨相上より見たる性格をよく知つて居る。東京へ來てからも餘程になるゆゑ東京人のことも熟知して居る。

一寸と斷つは置くが、私が玆に大阪人と東京人とを比較研究するのは、無論骨相學上からではあるが、然し骨相學上より顏面のこの部が斯うで、あゝでと一々說明して行く事が甚だ面倒であるばかりでなく、讀者にも反つて分り難いかと思ふから、一々顏面に就ての說明は避けて、直ちに大阪人と東京人との一般的性格の相違を述べようと思ふ。

生れた土地を愛するか否か

先づ第一に擧げるのは居住性である、居住性と言ふと、自分の住むで居る所、則ち鄕土を愛するの心である。これは如何しても東京の人の方が強い樣である。斯う言ふことをしては東京者の名折になるとか、そんな事をしては江戸ッ子の面汚だとか、何かと言ふと直ぐ自分の土地を持ち出して威張りたがる。これはとりも直さず自分の鄕土を愛するの念慮が強い證據である。これは東京人の誇りとするところで、又特色の一つである。大阪人にはさう云ふことがない大阪の名折になるとか、大阪ッ子の面汚になるとか言つて憤慨する樣なことはない、金さへ儲かれば名前なんか如何でもよいと言ふ人の方が多い。此點は確に大阪人が負けで東京人が勝である。

根氣があるか無いか

次には持久性である。持久性と言ふのは、何に依らず物事を永く持續する性質である。この點は大阪人の特色とするところで、東京人の到底企て及ぶところでない。買物しても直ぐ分る、東京の商人は客が値段を値切と、場合にはエヽ面倒くさいまけちまへと値段を引くことがあるが、大阪の商人はどうして却々まけるものでない。それも判然とまけないとは言はずに、まける樣な顏をしてまけない。結局客の方を根負けさして賣りつける。斯ういふことは確に大阪人でなければ出來ない事で、とても東京人の眞似の出來ることでない。この點は大阪人が勝で東京人は負けである。

親切があるか無いか

次は友愛性である。友愛性とは讀むで字の如く親戚朋友隣人を愛するの性である。これは東京の人も大阪の人も別に變りはない、一時に出すと濟崩に出すとの區別があるだけである。東京の人は親切を一時に出して了う。假令ば人が困窮して居るのを見ると『可愛相だねこれでもやれ』なんて、自分の着て居る着物でも脫で與るが、然し其の親切は永くは續かない。大阪の人はさうでない。さう言ふ場合には東京人の樣に、自分の着て居る物まで脫で與ることはせぬが、其の親切は東京人の如く直ぐ忘れた樣にはならぬ。親切の度は薄いが永續的である、要するに大阪人と東京人とは親切の分量には變りはないが、一時に出すと永久に出すとの相違があるだけである。身を殺してまでも仁を爲すと言ふ樣なことは、東京人にも大阪人にも孰れにも求めることは無理である。

抵抗する氣があるか無いか

次は抵抗性である抵抗性は所謂鬪志で、ものに抵抗する性質である。これは東京が本場で『ベランメ何言てやがるんでい』なんて、直ぐ抵抗性を發するのは東京人の持前である、大阪人は、『德にもならんことに阿呆らしい、力入れることおまへんがな』と如何なる場合にも打算的で、どんな事があつても利害の問題を離れない。故に抵抗性に於ては東京が勝で

大阪は負けである。

忍耐氣があるか無いか

次は耐勞性である。耐勞性とは耐へ忍び勞を厭はざる性能である。これは東京人は如何しても大阪人に及ばない。東京の人間は根氣に乏しい物事に耐へ忍ぶと言ふ性能が充分發達して居ない、又勞を避ける傾きがある。大阪の人間は却々根氣がよい、そして物事によく耐へ忍び又勞を厭はない。この點は東京人は負けで大阪人の勝である。次は進取性である進取的の氣性は大阪の人も東京の人も別に變らない、これは双方に勝負なしである。



物を秘密にするかしないか

次は秘密性と言ふて、物事を包み秘す性能である。これは大阪人に多くて東京人に尠い。大阪人は何事に依

らず秘密にしたがるが、東京人は露骨で餘り物事を秘密にしない、大阪人は秘密性に富むで居るから喜怒哀樂を外に現はさない、腹が立つても夫れ程怒つた顔をしないと同時に、嬉しいとがあつても左程嬉し相な顔をせぬ。ところが東京の人はさうでない。東京人は秘密生に富むで居ないから、喜怒哀樂が直ぐ外に現はれる嬉しい時は直ぐ悦ぶ代りには腹の立つ時は直に怒るこの點は孰がよいとも惡いとも言へないが、秘密性に就ては今言ふた樣な相違がある。

金を欲がるか欲がらぬか

次は財慾性である。これば言ふまでもなく大阪人の特長で、東京人の企て及ぶところでない。大阪人の希望は全部金である、金が慾いと言ふのが希望の全體である。何としても儲けたいと言ふのが大阪人の終生の目的である。東京人はさうでない、東京の人間は金も欲しいが名譽も亦た欲しい。金と名譽と兩方を得たいと言ふのが目的であるから、金儲は東京人の希望の全部ではない。であるから財慾性は大阪人が勝ちで東京人は負けである。

名を欲がるか欲がらぬか

次は好譽性である。これは譽を好む性で則ち名譽心である。前の財慾性と反對で、大阪人にはこの好譽性は東京人程劇しくない。名を取るよりも實を取れと言ふのが大阪人の主義である。東京人はどちらかと言ふと、實よりも名を好む方で、金を使ふても名譽を慾しがる。故にこの點は東京人が勝で大阪人が負である。

注意力が深いか淺いか

次は警戒性である。警戒とは物事に注意する性質で、これは東京人よりも大阪人の方が進むで居る東京の人間は大膽であるから物事に餘り注意をしないそれが爲めに失敗も尠くない。無論大膽なるが爲めに大に成功することもないではないが、失敗するとも隨分ある。大阪の人間は小心であるから何事に依らず注意深い、餘りに注意深いが爲めに大なる成功はない代りに又大なる失敗もない。故にこの點は大阪人の勝で

東京人の負である。

物を惠むか惠まぬか

次は慈惠性である。慈惠性とは人を憐れみ物を惠むと言ふ性能である。この性能は東京人には多いが大阪人には少ない。大阪の人間は言では却々親切なことを言ふが、それ程口で親切に言ふなら物でも惠むかと言ふと、さう言ふことは容易にしない。東京人は口で喧しく言はぬ代りに實行する。斯う言ふ風であるから慈惠性は東京人が勝ちで大阪人が負である。

人を敬ふか敬はぬか

次は尊上性である。尊上性とは人を敬ひ尊む性能で、これは大阪人は東京人よりも優れて居る。東京の人は頭を下げ無暗に人を尊敬するとを餘りしないが、大阪人は人をそらさぬ。人を尊敬することは寧ろ過たりと言ふべきである。

意志が強いか弱いか

次は堅固性である。堅固性とは意志の堅固なことで、これは東京人より大阪人の方が優れて居る、一寸と見たところでは東京の人より大阪の人の方が意志が弱い樣に思はれるが、如何して〳〵大阪人の意志の強いことは到底東京人の企て及ぶところでない。東京人は元氣はよいが薄志弱行が多い。大阪人は却々粘氣があつて容易に屈しない。この點は大阪人の勝で東京人の負である。

正直か嘘つきか

次は眞直性である。眞直性とは正直のことで、これは東京の人の方が優て居て、大阪人は東京人に及ばない。東京人はそんなに嘘を吐かぬが、大阪の人はよく嘘を吐く、大阪では嘘を吐くのを商人は掛引と言つて、商人にとつては一種の智惠として居るから、嘘を吐くことを別に惡いことゝ思ふて居ないのである。

希望が多いか少いか

次は希望性である。希望と言ふものは誰しも持つて居るものであるが、大阪人と東京人と比較すると如何しても東京人の方が希望が盛である。即ち野心家が多いのである。大阪人は現在の地位を保つことに重きを

置て居るから無暗と野心を懐かない。

信仰が厚いか薄いか

次は靈妙である。靈妙とは神佛を信仰する性能で
これは東京の人より大阪の人の方が强い。東京の人は大阪の人から見ると、如何も信仰の念が薄い、この信仰の念は大阪人は東京人よりも優れて居ると言はねばならぬ。

機智が働くか働かぬか

次は機智である。大阪と言ふところは商業地であるから、何事も商業を中心として發達するのであるから、人の智識も亦斯う言ふ方面の智識がより多く發達する。從てこの機智の性能なども東京人よりも大阪人の方が發達して居るのは、自然の結果に外ならぬのである。

模倣が上手か下手か

次は模倣である。この模倣性も亦東京人よりも、大阪人の方が發達して居る。東京人は人の眞似をするよりも新に意匠を凝して、新機軸を出さうとする傾向があるが、大阪人は新しく意匠を凝らさず、他の作つた通りの物を製出して、そしてより安く賣ると言ふことに長じて居る。斯う言ふ性能が通有性となつて總ての事に模倣性が發達したのである。

順序があるか無いか

次は順序である。順序とは物事に順序をつける性能である。この性能は東京人には殆どない、東京人は物事に順序を定めると言ふことには頗る智識が乏しいこれに反して大阪人は此方の知識が非常に發達して居る。

時間を貴ぶか貴ばないか

次は時間である。東京人は時間の尊ぶべきことを知つて居るから、自然時間を大切にして、人と約束した時間を守る心掛があるが大阪人は時間を餘り尊まぬから、從て他と約束した時間は往々守らぬてとがある。大阪人は東京人より時の觀念に乏しいと言はなければならぬ。

言語と判斷力

次は言語である。大阪人の言語と東京人の言語とは一長一短であるが孰れかと言へば、東京人の言語の方が優れて居ると思ふ。最後に擧げたいのは比較と知因である。比較とは物事を比較研究する智識で、知因とは物事の原因結果を研究する智識である、この二個の性能は東京人と大阪人と一長一短で、物事を比較する智識は東京人よりも大阪人の方が優れて居るが、その代り物の原因結果を研究する智識は大阪人よりも東京人の方が優れて居るのである。

大阪の人と東京の人と結婚せよ

要するに大阪人と東京人とは其の顔面の構造に於て相異なる如く、其の性格に於ても餘程相違した點があるのである。孰れも長所があると同時に短所があるのであるからお互に彼の長を取り我が短を補ふたなれば、理想的の人物が出來るのである。然しこれは容易の仕事ではないが、さりとて全く不可能なことではない。此目的を達するに唯一の手段がある。それは外でもない。結婚の改良である。結婚の改良とは互に性質の相反する人間が結婚することである。大阪人と東京人と結婚して雙方の長所を子孫に傳へるのは則ち結婚の改良である。優等の人間を作るには如何しても結婚の改良と言ふことに着目せねばならぬのである。

大阪	春の夜の緞子に寢た旅籠かな	子規
天王寺	梅散ってそれより後は天王寺	鬼貫
長柄	藪入や浪華を出て長柄川	蕪村
田蓑	春雨や田蓑の島の鰶賣	中邦
堀江	くる〳〵と堀江の鴨の浮寢哉	支考
浪華	顔見世の浪華や夜は夢なれや	太祇
川口	帆柱や難波は浪に夏木立	埜太
高津	昔誰かれを始めて川凉し	都貢
難波江	蘆の花折つて舟出の[illegible]せん	才麿
住吉	升買て分別かはる月かな	芭蕉
堺	しぐるゝや堺の町を軒づたひ	丁江
有馬	十六夜や有馬を出て歸る人	許六
中山寺	廣き野の塔見よとてや揚雲雀	不卜
膽駒山	ひきとめよ春行く雲の膽雲山	宗祇

大阪江戸風俗ことば合せ

（和田信次郎所有）

大阪にて	江戸にて
ぬくい　といふこと	ぬくとい　といふ
物かふてくる	かつてくる
物かつてくる	かりてくる
こわい事	おつかない
そふじやけれど	そふだつて
こゝへおこしや	こつちへくんねへ
お家さま	おかみさん
かみさん	おばアさん
御りやうにん	御しんぞう
いとさん	おじやう様
をとて	やらう

大阪にて	江戸にて
しんきな　を	じれつたい
まことに	しんに
いぢのわるい	むねきもの
わしぢやとて	わつちだつて
つまらぬ	うまらない
ようお上りになる	どんとたべなさい
そふいわれた	そふいつた
でりがん	でんぼう
茶や行き	女ろやへ上つた
りやうりや	茶　屋
けいし子	はをり

大阪にて	江戸にて
けつたいなを	おつくうに
太　夫	おいらん
とんといけぬ	ずぶいけない
むしやうに	むやみに
そふか	そうだつて
ぞめく	ひやかす
ふろへいた	湯へいつた
きのきいた	きいたふう
まぬけ	うすのろい
つ　ぼ	か　め
はしり	ながし

をなご	あま	尾	しつぽ	いかき	ざる
川ばた	かしばた	だます	かつぐ	はつ	まぐろ
とこすぢ	何通り	くらわすを	ぶつくじく	ちぬ	黒だい
地持てゐる人	地ぬし	いまいましい	ごうはらだ	かれ	ひらめ
家持てゐる人	大屋さん	大きなこと云ふ	ちゆうはらいひやがる	いな	おぼこじやこ
家もり	いへぬし	はら立る	ちうぱら	つなし	こはだ
男の子を	おぼうさん	直しておく	しまつておく	ふか	さめ
でつちを	こぞう	わるいせ	いけないよ	なりもの	水ぐわし
何や何兵衛かしや	何町何兵衛店	よしにせい	よせいく	さつまいもむしたて	大ふかし
しやくやにん	たなこ	かたいじもの	いこじもの	なんきん	とうなす
うらかしや	うら店	ツイそこじや	じつきそばだ	まぶし	どんぶりめし
あほらしいかほ	ばかづらな	物がいわれぬ	口がきかれぬ	ねぶか	ねぎな
くんじゆする所	さかりば	まるで	からつきり	たうな	たかな
せつねんへ行く	用たしに行く	ようお出被下	よくいらつしやりました	せうじん日	おひがら
はか所	らんとうば	茶にする	まぜつかへす	さかい といふところを	から といふ
しんぼうして	がまんして	ほり出しもの	めつけものだ	な といふを	ね といふ
てうしもの	おさきもの	よこつらはる	よこぞつぽうはりくじく	じや といふを	さ といふ

橋と坂

紫火

▲大阪の橋に對して、東京には坂が多い、橋も相當にあるが、大阪から見ると遙に少い、大阪には殆ど坂がない、東京の半分は坂の多い町だ。

▲有名な九段坂を初めとし、繁華な神樂坂、淋しい幽靈坂、傳說を持つてゐる淨瑠璃坂、或は切支丹坂、目白の方には胸突坂など云ふ恐ろしい坂もある、

▲近松の淨瑠璃に道行橋づくしなど云ふ文句が出來てゐるほど、大阪には橋が多い、天滿橋、天神橋、浪華橋などの大川筋に架つてゐる橋は勿論、東西の横堀、道頓堀、堀江邊の橋を數へたら、大阪の八百八橋と云ふ名の空しからぬことが分るだらう

▲大阪の橋の名には、人の名が多い淀屋橋、太左衞門橋、助衞門橋、久安橋、三休橋、心齋橋など皆然り。

▲東京の橋の名には、人間の名よりも自然から取つたものが多い、兩國橋、吾妻橋、厩橋、淺草橋、櫻橋、など。

▲橋の名だけではない、町の名も東京と大阪とは、各異つた性質を持つてゐる、大阪には人間性を持ち、東京には自然性を持つてゐる。

▲大阪に順慶町、久太郎町、安治河道頓堀、道修町、勘助島、善庵筋など

▲東京には千駄木、森川町、根岸、槇町、檜町、榎町、早稻田、青山、霞町、富士見町、濱松町、三田など。

▲大阪に橋の多いのは、川が多いからだ、東京は坂が多いから、自づと谷が多いわけだ、區の名には四谷、下谷などがある、町名には市ケ谷、千駄ケ谷、入谷、茗荷谷、雜司ケ谷などがある。

▲橋や川の多いのは濕ひがある、谷や坂の多いのは、乾いてゐるやうだ

▲乾いてゐる東京の地面が、毎も水を吸收む力が乏しくつて雨が降つても、水を撒いても、地面に溜り易い大阪の地面は能く水を吸收む、雨が降つても沼のやうになる氣遣ひはない、而もから〳〵に乾く事もない。

▲大阪は平たい板の上に建てたやうな都會だ、東京は山をくづして其上に建てたやうな都會だ。

▲橋の上を俥で通るのは快よいが、坂を電車で越えるのは氣味がわるい

▲何處まで行つても平たい都會は、單調だ、坂の向ふや、谷の向ふに町のある都會は大陸的だ。

▲橋の多い大阪は、比較的海に遠い、橋の多からぬ東京は、却つて海に近い、大阪は海の方へ向つて、發展して行く餘地があり、東京は山の方へ向つて、廓大して行く。

▲東京はしまりのない都會のやうに見え、大阪はしまりのある都會のやうに見える、孰も地形の關係だ。



父と妹

（ヰルヘルム・シエエフエル作）

鷗外譯

ユデア人は天人の頭になつてゐるゼバオトの神を持つてゐる。フイリステル人は半人半魚のダゴンの神を持つてゐる。人間は誰でも背中に自分の神を背負つてゐる。かう云つたからと云つて、何も人間が項の行かうと思ふ方角より、外の方角へ行く事が出來ないと云ふわけではない。それは氣の向き次第で、右の畠へでも、左の畠へでも飛び込む事が出來る。だが、そんな事をすると、又元の眞つ直ぐな道に戻つて來るまでには、膝を擦り剝いたり、頭に瘤を拵へたりする。

アメリカヰルムと云ふ仇名の附いた男は、直きこゝから二時間程の村で、ラウバハと云ふ所にゐた。誰でもこの邊の百姓に、ヰルムが事を聞いて見るが好い。みんなろくな事は言はない。併しそれは物を惡く云ふ奴が物を惡くするのだ。雀なんぞがべちやくちや臆面なしに惡口を叩いてゐる所には、一番結構な餌がある。

一體ヰルムはどこか外へ生れる筈の男だつたらしい。それを鸛が嘴に銜へてラウバハの上を飛んで通る時、ふいと腐つた藁屋根の、眞つ黑い穴を覗いて見て、びつくりして嘴を開くと、襁褓にくるんで銜へてゐた赤ん坊を、その穴の中へ落してしまつたのだ。ヰルムが石屋のフリッツの子に生れたのはかうしたわけである。



石屋の上さんは、ヰルムを襤褸に卷いて殘して置いて、自分を墓場へ擔いで行かせた。でもラウバハでは、あの墓場がまだ一番立派な所である。

ヰルムは襤褸の襁褓を脱いで、麻のずぼんを穿くやうになつてから、毎日毎日、朝から晩まで樅の木の下に腰を掛けてゐた。大きくなつてからは、さうも出來ないので、日曜日だけは木の下にゐる事にした。その外の日は街道へ出て、蹲つて痩腕で、青い玄武石を叩いて、その賃錢でパンを食つてゐた。

どうかすると、膝の下に敷いてゐる石が餘りとげ〳〵しいとか、手で揮つてゐる槌が餘り重いとか思ふ事がある。そんな時早足をさせた馬に曳かせて、土煙を立てゝ、山の方から降りて來る車の列がある。車は段々傍へ來る。傍を通り過ぎるのを見ると、車の輪は光つてゐる。車の中には笑ふ人間が乘つてゐる。ずつと下の方へ車の列が降りて行つてしまつても、暫くは土煙が見えてゐて、たうとうそれがアルトヘックの森の青い茂みの向うへ隱れてしまふ。

さう云ふ時は、ヰルムはぢつとして手を休めて、あの青い森の向うを見通すやうに目を睜つて、遠い谷間を見下ろしてゐる。さうすると一旦森に隱れた土煙が又見えて來て、野から野へ躍つて行つて、日影と一しよになつて戲れてゐる樣子が、丁度犬が自分の影にじやれてゐるやうである。

一體ヰルムは、ラウバハに生れる筈の男ではなかつた。或る朝の事、ヰルムは街道へ出たが、狹い自分の影が先に立つて、西へ西へとゆらめいて、山を降りて行くのに氣が附いた。併し自分もなぜだか知らなかつた。兎に角玄武石の積んである第一の山をも通り過ぎ、第二の山をも通り過ぎ、先へ先へと、アルトヘックの青い森を穿つて、ライン河の谷間へ降りて行く。



街道は村の間を通る。市中を拔ける。とこまで行つても盡きない。難義な日が幾日も續いた。そしてたうとう海の傍へ出た。

海は船が渡してくれた。向岸に上がつて見ると、又街道がある。それがとこまでも續いてゐる。それを歩くのに、難義な年を幾年も越した。

キルムはそのうち或る日氣が附いて見ると、人が自分に逢つて、帽子を取るやうになつた。そして自分の右の肘に指を掛けてゐる若い女がある。それは財產のある地方裁判官の娘である。

キルムは一週間程思案した。それからカバンに金貨やら、札やらを一ぱい入れて細君を連れて、海を越して故鄕へ歸り掛かつた。細君には父親の事、兄妹の事、それ等が貧乏でゐる事を話した。細君は、なぜ夫がその事にもつと早く氣が附かなかつたかと不審に思つた。―キルムもさう云はれて見ると、我ながら不審に思つた。それからキルムは優しい詞で、故鄕の家の古びた部屋の有様を薄鼠色に畫がいて、その中へ父親をかき添へ、兄カルルた、妹アンナをかき添へた。どれもどれも鼠色に、暗くは見えても、醜くはなかつた。かういふ人達の難義は卽ちその美である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二人がノイキイドを出たのが夜の明けぬ内であつた。午前の内にラウバハに着いた。シユレックスバハの直ぐ傍で、蹇のヤコツプが籠を傍に置いて、道端で咳をしてゐるのを見付けた。十五年前からあんな風に咳をしてゐるのである。只骨々しい兩手が、今は昔より餘計に顫えてゐるのと、赤くなつてゐる目が、今は昔より餘計に潤んでゐるのとが違ふ。



二人は暫く塞のいざつて歩く道連になつた。そして二人がおそる〳〵問ふ事を、塞が鴉の啼くやうな聲で答へる。二人はそれを聞けば聞く程、道を急がなくなつた。

「石屋のフリッツですか。へゝっ。もう槌の胼胝が手に出來る氣遣はなくなりましたよ。日に燒る氣遣ももうありませんね。罷めないのは酒ばかりでさ。もう二週間すると、カルルが又娑婆へ出て來ますよ。六年が立つて出るのです。もうあいつも長くはありますまい。手錠の味を一度覺えると、手がむづ痒くて、嵌めて貰はずにはゐられないものですつてね。アンナは內にゐますよ。あれの生んだ餓鬼も二人共ゐるのです。もうあの顏では、町にゐたつて商賣が出來なくなつたのですね。この土地へ歸つては、そんな事で金を儲ける事も出來ませんやね。」

ヰルムは足を止めた。「好し」と云つた。そして細君を連れて宿屋へ引き返した。細君は夫に接吻して、別に何事も言はなかつた。唯大きい苔のやうな綠色をした目が心配げに光つて、口の兩側に細かい皺が寄つただけである。

午後遲く、ヰルムは一人で同じ道を歩き出した。丁度疲れ切つた旅人が、これから先何里あるかと云ふ事も問はなくなつたやうに、ヰルムは默つて歩いてゐる。アルトヘックの靑い森も通り過ぎた。こゝからは街道が爪先上がりになる。昔のやうに玄武石を積んだ山が道端にある。あれあの短かい草の生えてゐる瘦地の牧場の向うに、ラウバハの藁屋根が、しやがんだやうに並んでゐる。屋根は錫のやうな空に透して、鐵のやうに黑く見える。

これがヰルムの生れた村だ。十五年目に、又歸つて來たのだ。それにどうも歸ると云ふ氣はしなくて、別な世界へ出て行くやうな氣がする。身の周圍は「死」のやうに靜かである。これまで渡つ



て來た世界を、キルムが心に結び付けてゐる蔓が、鋭い小刀で切られるやうな氣がしてならない。

黑く朽ちた敷居を踏み越える時、キルムは背中を屈めなくてはならなかつた。家の中は薄明りで鼠色に見える。子供が二人、黑い塊のやうに床の上に重り合つて、聲を嗄して泣いてゐる。眞つ黑い姿の物が、二つの塊を引き分けた。泣聲は息まない。

「今晩は」と、キルムは聲を掛けたが、その聲は自分の耳にも聞えなかつた。

「泣くのぢやないよ。」女は一人の子を奥の方へ押し遣つて、一人の子の髮を摑んで引き起した。「泣くのではないてば。」

泣聲が切れ切れになつた。

「今晩は」と繰り返した。今度は聲が自分に聞えた。丁度紙を裂くやうな聲だつた。「御亭主は留守かね。」かう云つて、キルムはなぜこんな事を問ふのだらうと、自分で自分を怪しんだ。

「いゝえ。」女がかう云つた跡は、長い間しんとしてゐた。

「今晩は泊めて貰へるでせうか。」キルムはかう云つたが、なんだかこの間の外へ出ずにゐたら、息が詰まるだらうと思はれるやうな聲だつた。

案内せられた二階の部屋は狹くて鬱陶しい。だが女が下へ降りて行つて、跡がひつそりした時、キルムは重荷を卸したやうな氣がした。そこで藁布團の縁に腰を掛けて、キルムは四角な小窓の薄明りを睨んでゐる。下では二人の子供の泣聲がしてゐる。その間に骨々しい、叫ぶやうな、女の高聲が聞える。

キルムは自分の言つただけの詞を一々思ひ出して見た。餘り澤山の詞數ではない。そしてあの女

が妹のアンナだらうかと思つて、頭を揮つてゐるのに、自分は氣が付ない。上り口の下の透間から明りがさした。梯子段がぎい〳〵鳴つた。女が又自分の前に來て立つてゐる。薄暗い蠟燭を手に持つて、地の惡くなつた赤い寢衣を着て、黑い髮をほどいてゐる。

女はどうしてこんな所へ來たかと問うた。

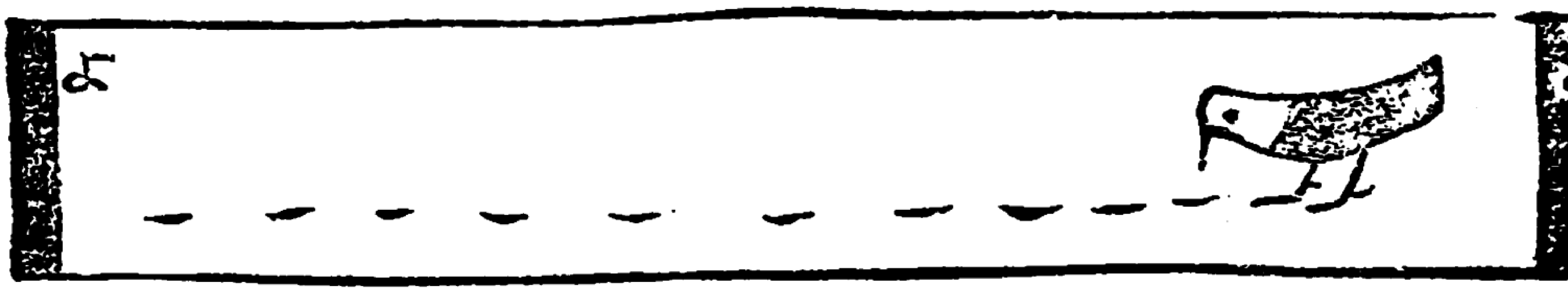
「土地のものではないのですよ。つひ道に迷つて。」

「もう何も御用はございませんか。」女はにつこり笑つた。その笑つたので、骨々しい顏が、胸の惡い程醜くなつた。そして黃いろい蠟燭の光が背後の壁の上へ、長い、氣味の惡い影を寫した。

キルムはこの家の石壁が崩れるやうな聲を出して叫びたかつた。それを堪へて、「別に何も」と云つて、吭の所を手で抑へた。そして目を大きく睜つて、暫く女の顏を見た。それから鞄を引き寄せて開けて、中から札を出して女に遣つた。幾らだつたか知らない。「これは子供に何か買つて遣つておくれ。もうあつちへお出で。」銳い、尖つたやうな聲が出た。眞つ黑い戶の向うに、黃いろい蠟燭の火が隱れてから、餘程立つても、女の札を物欲しげに受取つた手附き、その鞄を見た目附きが、長い間目に見えてゐた。

キルムは又藁布團の縁に腰を掛けた。そして一時間ばかりぢつとしてゐた。何もかも好く考へて見なくてはと思ふ。併しどうも羊の群に狼が這入つて來たやうに、考へが少しも纒らない。どうぞ早く明るい日の下に出たい。自分の今までゐた明るい日の下に出たいと思ふ。窓の方を見ると、もうそこが暗くなつてゐて、周圍の黑い壁と、殆ど同じやうに見える。どうしても夜の明けない內にこゝを出て行きたい。闇夜でも構はない。そして夜が明けた時は、あの女の傍へ歸つてゐたい。さ





うしてからは今の事が闇夜の中の夢になつてしまふだらう。

　ヰルムは立ち上がつて手搜りに上り口の戸の所へ行つた。丁度昔玄武石を積んだ第一の山、第二の山の傍を通つて、次第に遠く、明るい世界へ出て行つた時のやうな心持である。

　この内のものに聞き附けられないやうにしなくては。かう思つて、そつと音のしないやうに戸を開けて出た。梯子段をそつと降りた。

　一番下の段に足を掛けた時、ヰルムは息を詰めて立ち留まつた。下の部屋には薄暗い明りが點いてゐる。そしてその明りの中に、二人の人の姿が見える。一人は赤い着物を着て立つてゐる。一人はしやがんでゐる。そして囁き合ふ。目と目を見合せて相談してゐる。男の手に何か光つてゐる。斧である。

　ヰルムは暫く立つて二人を見てゐた。二人は動き出した。ヰルムはそつと梯子を上つて引き返した。そして二階の戸の内へ這入つた。戸に錠を卸さうとしたが、錠はなかつた。そこでそつと寢臺を戸の内側に押し付けた。がたりといつた。暫く息を凝して下の樣子を聞いてゐたが、何事もなかつた。戸口は首尾好く塞がれた。

　ヰルムは暗い二階の部屋に立つてゐる。自分の息を衝く音が聞える。なんだか自分の踏んでゐる床が、小さい球のやうで、どつちへ一歩動いても、底の知らない深みへ落ち込さうな心持がする。

　下から靜かな足音が近づく。梯子がぎい〳〵鳴る。暫くしんとしてゐる。ヰルムはもう息をしない。又ぎい〳〵鳴る。二人は戸の外まで來たらしい。戸がこと〳〵いふ。力を入れて一度戸を押したらしい。その跡は又しんとしてゐる。いつまでもしんとしてゐる。

　ヰルムはまだ部屋の眞ん中に立つてゐる。そしてなぜ己はこはくないのだらうと不思議に思ふ。戸の外で囁く聲がする。その聲を聞いて、ヰルムは今更のやうに、あの光る斧を持つてゐる男が自



分の父親で、それと話してゐる女が自分の妹だといふ事を思つた。さう思つたのが、腹を立たせはしないで、氣を挫けさせた。併しさつき自分をこの場から立ち退かせようとした、或物が、又前よりも力強く働いて來て、この場を立ち退かせようとする。そこでそつと窓の方へ行つた。そつと窓を開けた。そして落ち着いて、窓から外へ、石壁を傳つて這ひ降りた。

キルムは無事に下へ降りて、暫く立ち留まつて、黑い壁を見上げた。空は濃い鼠色で、星一つ見えない。キルムは家の周圍の棘を搔き分けて街道へ出た。街道の白い土が闇の中で薄光に光つてゐる。街道は白い帶のやうに、眞つ直ぐに、山の下へ續いてゐる。折々道端に黑い山がある。それが玄武石を積んだのである。アルトヘックの森まで來ると、あたりが眞つ暗になる。そこを通り過ぎると、又明るくなる。ノイキイドまで來た頃、空の雲が所々に寄つて來て、丁度深い水の上に萍が浮いてゐるやうになつた。

細君が窓の下に坐つて待つてゐる宿屋の部屋へ這入つた時、微かな、赤い色が、冷たい空の壁を這ひ上つて、黑い雲の近所へ屆かうとしてゐた。

細君は涙を流して、強くキスをした。丁度何年も別れてゐて逢つたやうであつた。併しなんにも言はなかつた。

その朝二人は旅立つた。女も問はなければ男も話さない。

船に乘つてから、或日日が青い霧と一しよに海に沈む時、細君が小聲で、罪のない子供だけはどうにかなりさうなものだらうにとほのめかした。

キルムは殆ど腹を立てたかと思ふやうに色を變へた。そして目を大きくして細君を見て云つた。

「それは罪は誰にもない。只誰とも己は掛かり合ひたくないのだ。」かう云つて、キルムは手を長く伸べて西の方へ指さした。其時「己達の家へは、外の神を持つてゐる人間は入れられないからだ」と、夫が呟いたやうに、細君は思つた。

（をはり）

名取弟子

森田草平

兩國の橋の袂迄來ると、前の電車に故障が有つて動かない。濱町河岸に沿うて、幾十臺となく車臺がつゞいて居る。氣の早い乘客は、窓から覗いて見て、ぶつ〳〵言ひながら諦めて降りて行く。お長も其後からつゞいて降りた、こんな事が無くとも、天氣の好い日には好く此處から歩いて行くのだが、何だか今日はうつとりと考へ事でもして居る樣に見えた。

「姉さんも――姉さんも餘まりが可い。」

お長の腹ン中では、今朝出掛けに姉から云はれたことが煮えくり返つて居た。あんな事を云ふのは姉さんの僻みだとは思ふ。僻みだと思つて勘辨はして居るもの〻――そりや、姉妹の中で末ッ子の自分一人が甘やかされもした、可愛がられもした。姉さん達は淸元のお師匠さんへ上がつて、漸う漸う絲道が開いたと思ふ頃には止めて居たのに、自分だけは唄から鳴物から手の廻るだけ稽古して今でも踊のお師匠さんへはつゞいて通つて居る。踊のために兩親が使つた金子は何の位だか知れない――そりや、子供の時分から方々の溫習會へも出た。溫習會がなくとも、平常の付け屆けやら何やら、いよ〳〵名前を貰ふ迄には、本町の藥種問屋、番頭の娘の分際としては隨分な物入りで有つたに違ひない。が、左樣して、嫁にも行かず、うか〳〵と暮して居る間に歳を取つて、加之、去年の夏阿父さんが亡く成つてからと云ふものは、そりや――そりやア自分の苦勞ッたらない。

お長は舌癌で死んだ父親の死顏を面影に見るやうな氣がした。

何故死んで呉れたらう。阿父さんが死んでからと云ふものは、長い間勘當同樣に成つて居た兄さんの歸參が叶つて、お店へ勤める樣に成つたと云ふもの丶、そんな風だから勿論手賴には成らず、阿母さんと二人で引取られた牛込の姉と云へば彼樣云ふ女ではあり、本當に自分の力に成つて呉れるものは一人もない。阿父さんの生きての頃は皆默つて居ながら、一旦亡く成つたと云へば、さア只今踊りを止めろの、踊の師匠なぞされちや親類の者の外聞に係はるのと、頭から叩き附けられても思案に餘る。そりや女の纖弱い腕一本をたよりに、踊の師匠に成つた所で、生計活計の立たないことも知らぬぢやない。知らぬぢやないが、あれだけ長く遣り通して來たものを、丸切り捨て丶仕舞つて、今更何うも播木も握りたくない。それも高慢な心からお店で世話をして下さらうと云ふ男を嫌ふのぢやない。左樣かと云つて、又自分一人で遣つて行く目當がある譯でもない。自分ぢや何うも口に出して旨く云はれないが、只此儘捨て丶仕舞ひたくない。自分ぢや、最う如何して可いか解らない――

お長の心は、彼方此方駈け廻りながら、足は慣れた平常の路筋をとつて、日本橋倶樂部の側の露路を這入らうとした。

恰度向ふからも一人顏ののゝぺりした下廻りらしい若い男が遣つて來たが、にた〳〵と氣味の惡い笑ひ方をしながら近寄つて、

「今からお出ですか」と、輕く頭を下げた。

「へえッ」と、うつかりして居たお長は思はず立ち停まつた。

「大分立込んでますよ」と云つたきゝ、前の男はさつさと通り過ぎた。
お長は返辭を出し後れて、耳の根迄眞赤にしながら、急にしやんとして歩き出した。最う何にも思ふまい。何でもない事に心を取られて、お稽古の時に耻でも掻いたらそれこそ仕樣がない。露路を拔けて、裏通りへ出てから左へ一丁餘り、表に「井づゝ香油」と蟲ばむだ看板を下げたしまふた家の前迄來て、お長はそつと格子戸の中を覗き込んだ。成程、上り口の瀬戸物を敷いた三和土の土間一杯に、繻珍だの天鵞絨だの美しい鼻緒の吾妻下駄が亂雜に揃へて脱いである。突當りの圓い櫺子窓を越して、舞臺でする足拍子の音も聞える。お長はぼんやり立つて居たが、やがて徐々と格子戸を開けた。土間の片隅に下駄を脱いで、右手にある三疊の寄附で半コートを脱いで褶んで下に置いた。それから又上框へ戻つて、低い拔き戸を押しながら中へ這入つた。
拔き戸の中は綺麗に拭き込んだ廊下で、眞直に行けば兩便所、左へ取れば、櫺子窓の直ぐ背後が弟子達の待つて居る廣間で、其右手一面に舞臺が見える。お長は並み居る大小の藝者や雛妓の前を拔けて、師匠の前へ出て一禮しながら、「西川玉壽」と朱で彫つてある自分の番號札を掛けて、二たび壁の側迄退いた。
「被入しやいな、此方へ」と、大きな圓い火鉢を圍んで居た年增の藝者が脇へ寄つて席を讓らうとした。
「えゝ、最う何卒、此處で澤山ですよ。」
「だつて、話が有るんだから一遍被入しやいな。」
「左樣?」と云ひながら、お長も火鉢の傍へにぢり寄つた。

不圖、眞向ひに居た若い藝者がお長の顔を見てにつこりしながら頭を下げた。

「まア染子さん、暫くでしたわね。」

お長も禮を返しながら斯う云つた。平常見る事もあるが、雛妓から一本に成る時の變り樣位目に立つものはない。別けて此子は小柄な所爲でもあらうが、かうして地味な物を着て肩上げを卸した所を見ると、一目には見違へる程變つて居る。それに何の子でも左樣だが、一本に成立てと云ふと屹度お稽古を休む。お稽古を休むばかりでなく、屹度何處か加減の惡いやうな顔をして居る。

「一寸これ、私ね」と、前の年增の藝者が横合から口を出して、今日貴方が來なけりや、此儘お稽古をして頂かないで歸らうかと思つて居たのよ。」

「まア如何して？」

「だつて」と、急に聲を低めながら、「ほら、彼の女が私の遣つてるものを此間上げたばかりなんだせう。だから私が出りや、屹度相方に立つてよ。彼の女の相方ぢや——全くよた計りで踊るんだもの——此方が堪らないわ。」

斯う云つて、年增の藝者は大業に眉を顰めた。お長も隨分な事を云ふと思ひながら、つけ〳〵物を言ふのが面白く思はれないでもなかつた。

「だから私の番が來たら、直に立つて呉れなきや不可ませんよ。彼女が立たない間にさ、ね、好う御座んすか」と念を押して、「屹度よ。」

お長も笑ひながら點頭いた。そして、そんなに迄云はれる相手の女のうしろ姿を窈と見遣りながら、急に笑つたのが氣の毒の樣な氣がして俯向いて仕舞つた。

「瓢さん、お上さんが喚んでるよ」と、奥から出て來た子役らしいのが云つた。蟲齒で上顎の前齒がすつかり無い癖に、頭髪はちやんと兩方へ分けて居るから可笑しい。

「又擔ぐんぢやないの」と、年増の女は物に動ぜぬ風をして云つた。

「左様思はれるなら、左様思つてりや可いや」と、其儘行き過ぎようとする。

「由ちやん、本當かい。」

「本當にも嘘にも、わざ〳〵僕を使に寄越したんぢやないか。何だか知らないが、まア行つて見るさ。」

「はてね、何だらう」と、頓狂な身振をしながら立つて行く。

お長はそれを見送りながら、不圖、廊下の戸の陰で、此方を向いて小手招きをしては拜む眞似をして居る雛妓が目に附いた。最初は何をして居るのかと思つたが、お長の顔を見ると、一層烈しくそれを遣り出したので、

「何?」と云ひながら、お長も座を立つて傍へ行つた。

「如何したの、若松さん。」

若松は何とも言はずに、お長の袂を摑んだまゝ、ずん〳〵舞臺の裏手に當る兩便所の中へ連れて行つた。

「まア何處へ連れて行くのよう、此人は。」

「えゝ此處で可いのよ」と、若松はやつと摑んだ袂を離した。

「さ、此處で可いから敎へて頂戴。」

「何をさ。」
「私、今日三番叟の上げ浚ひなのよ。偖て婚禮の吉日は――彼處の足拍子が抜けちやつて、幾許如何しても想ひ出されないの。」
「ぢや、遣つて御覽なさいな。」
「偖て婚禮の吉日は、緣を結びの日をゑらみ、チン、チンチ、チリツツン、此處の合の手ですか。」
「えゝ左樣、左樣でしたわね。」
折柄、一人の雛妓が子役に追はれてばた〱と駈けて來たが、突然若松の背後から打突かつた。若松はよろ〱としながら、「まア酷いわねえ」と云ふ間もなく、子役は前の雛妓を取つて抑へて「此奴が、〱、隱れて煙草を喫んで居やアがる。さ、出さないか、此處へ出して仕舞はないか」と、ぎゆう〱緊め附けた。
「出してよ、出すから其處を離して頂戴よ」と、下に成つた雛妓は苦し相に呻いた。
やがて少し緩められた手で袂から卷煙草を出して渡すと、子役はそれを取上げて、又ばた〱と駈けて行つた。雛妓もつゞいて駈けて行つた。
後の二人は惘れて見て居たが、不圖、われに返つて、
「さ、最一遍遣つて御覽なさいな」と、お長から言ひ出した。
「えゝ」と、若松も氣を取直して、一緒に足拍子を踏みながら、「斯うなの、斯うなの――如何も可笑しいわねえ。」

「えゝ、其處は入れ違ひに踏むのよ。足をなんばに出すのだから、一寸間が取れないのよ。」
「あゝ左樣でしたわね」と、若松は一人で足拍子を踏みながら、「えゝ何うも有難うよ。最うこれでお師匠さんにも叱れないで濟むわ。」
「ぢや、最う可いんですね。」
序に、お長は一人厠へ這入つた。少時して出て來ると、若松は未だ外に待つて居て、お長の手にぶら下る樣にしながら、一緒に舞臺の方へ戻つて行つた。見ると、廊下の外れに瓢姐さんが待つて居て、にた〱笑ひ掛けながら、
「一寸、お前さん達は何をして居たの。此次が私の番だから、何處へ行つたのかと思つて、他人が氣を揉んで居るのに――」
「何うも姐さん濟みません」と、若松が代つて返辭をした。「今ね、私が一寸三番叟を浚つて貰つて居たもんだから。」
「左樣、それぢや可いけれど、前に約束がしてあるんだから、私に斷りもなしに連れて行くのは酷いねえ。」
「何うも相濟みません。」
「今度から氣をお附けなさいよ」と、瓢姐さんは眞面目臭つた顏をして云ひながら、三人連れ立つて火鉢の側へ戻つた。
間もなく、『子寶』を稽古して居る若い藝者のぐにや〱した踊りが濟んで、瓢の順番に成つた。瓢姐さんは一寸お長に目配せをしながら舞臺へ上つた。

お稽古は『關の扉』の下の卷、墨染が關兵衛に絡んでの口説から始まつた。

「立ち舞ふ間に落ちたる片袖、これはと墨染取上げて、ハア、、、」

此泣落しが可厭だと始終云つて居たが、それでも瓢姐さんは上手に泣いて見せた。其處へお長の關兵衛が出て、

「コリヤアそなた何を泣くのぢや」

「エヽ？　オヽそれ〳〵此片袖は他所の女中さんから書いて寄越しなさんした起請で御座んせうがな」

「イヽヤそりや片袖だ」

「イエ〳〵起請で御座んせうがな」

「ムヽ成程起請ぢや」

此處で墨染の思入れあり、スックと立つて、二歩三歩前へ出で、關兵衛の胸倉を執つて、

「チエーお前はなア」

と、小突き廻しながら、

「これ此樣に始めから起請誓紙を取交し、深いお方が有りながら、隱して置いて又私に、色で逢ふとは能うも能う、瞞さんしたがエヽ憎らしい、」と成る段取である。

その墨染が關兵衛の胸倉を取る所で、「當前なら一寸指尖が襟に觸る位で止めるのを、何と思つたか瓢姐さんは本當にお長の胸倉を取つて小突き始めた。お長が呆氣に取られて見て居ると、につてり笑ひながら平氣で其後をつゞけて行く。

此一節の稽古を三度繰回した後で、二人とも師匠の前でお叩頭をして舞臺を降りた。

「貴方驚いて？」と、瓢妲さんはお召の羽織を取つて着ながらお長を振回つて訊いた。

「えゝ驚いたわ」と、お長も額の汗を拭きながら云つた。「だつて隨分だもの。」

「左樣？お氣の毒樣でしたのね」と、濟ましたものである。

二人は又火鉢の傍に坐つた。

それから十二三番の稽古が濟んで、やつとお長の順番に成つた。お長は二たび羽織を脫いで袖疊みにして、壁際へ押遣りながら、又師匠の前へ出てお叩頭をした。

お師匠さんと云ふのは、最う餘程の年配で、小形の桐の圓火鉢を抱へて、稍前屈みに成りながら一服喫つて居たが、お長の顔を見ると煙管を下に置いて、

「ありやァ最う好かつたんだね。」

「はい」と、お長は二たび頭を下げた。昨日『松風村雨』の上浚ひをしたばかりである。

「左樣、それぢや何か——」

何か註文でもあるかと云ふのであらう。これが藝者なら近頃お座敷で出るものをと云ふ所だが、お長は只師匠の顔を見上げたまゝ、

「いえ、別に——」

師匠は少時默つて横綴の長目な帳面を繰つて居たが、

「『鷺』は如何だつたね。」

「最う習ひました。」

「『椀久』は？」

「それも――」

「左樣か、それぢや『雛助』の狂亂にでもするかな、ありやア仲々皮肉なものだが、矢張一通りは習つて置かなきやアね。」

「はい」と云ひながら、お長は立つて舞臺へ上つた。師匠もつゞいて立上つたが、流石に舞臺に立つと、曲つた腰もしやんとして、これが七十の餘の老人とは見えなかつた。

長唄の本にしたら三行許りの所を同じく三度繰返して、

「ぢや、今日はこれだけにして置かうね」と、師匠は先づ舞臺を降りた。お長も扇子を片附けて、二たび師匠の前でお叩頭をして引下つた。

此時は最う大抵歸つて仕舞つて、後には四五人しか殘つて居なかつた。お長は遽てゝ羽織を引被けながら、

「皆さんお先へ」と挨拶して、其儘玄關へ出た。穿物の數もずつと少なかつた。

表へ出ると、二三間ばた〳〵と駈出したが、急に又ぐつたりとして、下駄を引摺る樣にしながらぶら〳〵と歩き出した。それでも腕車に突當りもせず、又元の露路を抜けて電車通りへ出た。平常なら其處から電車に乘るのだが、何と思つたのか反對の方角へ向けて、又ぶら〳〵と歩いて行つた

久松橋の上迄來ると、背後から「お――いッ」と喚んでるやうな聲がした。誰のことかと思つて振向くと、一人の女がせい〳〵息を切らしながら駈けて來て、

「隨分澄まして行くのね、あんなに喚んでるのに」と、突然お長の肩を打つた。それが瓢姐さんであ

る。
お長は只上眼使ひに相手の顔を見上げたまゝ、「左樣でしたか、些とも知りませんでしたから——
「まア隨分ね」と云つたが、急に氣を變へて、「何處へ行くのよ、今日は？　一緒に其邊迄歩きませぬか。」
お長は只默つて點頭いた。
二人は二三間並んで歩いて居たが、少時して、又瓢姐さんの方から口を開いた。
「あのね、今日久し振で梅吉さんが來て居たでせう——氣が附かなくつて？」
お長は何やら解せぬやうな顔をして、相手の顔を見返したが、「左樣、左樣でしたわね。」
斯う云つて、少時してから、
「彼の方、隨分長らく見えませんでしたわね」と附足して云つた。
「丸二年振ですもの——そりやア左樣と、あの女がね、今日私の顔を見ると、突然わつと泣出しんですのよ。」
「まア如何してゞせう。」
お長はいよ〳〵可訝相な顔をした。
瓢姐さんの話によると、一度自分も或田舍の大盡に引かされて、二三年引いて居たことが有るさうな。身代金一萬圓と云ふので、當時は有名な話であつた。それが都合上、旦那とも別れる話に成つて、又元の新橋から二度目の褄を取る身と成つた。其時、自分の出た後釜へ坐つたのが、例の梅吉さんである。自分の方ぢや、別に何とも思つて居ないのだが、先方ぢや始終氣に懸つて居たもの

と見えて、今度あの女が又其旦那と別れて、矢張新橋から出ることに成ると、如何しても前から遣つてる者には下手に出なけりや成らず、まさか昔の事を根に持つて虐められると思つた譯でもなからうが、何やら彼やら取交ぜて女心の口惜しさに泣出したく成つたものであらうと云ふのである。

「まア左様ですかね」と、お長は何となく身につまされて聞いて居た。

「をや、最う此處は水天宮ですねえ」と、瓢姐さんは不意に頓狂な聲を出して立ち停まつた。

「全體、貴方、何處へ行くつもでりしたのよ。」

私？」と、お長も足を留めた。「一寸本町へ廻つて歸るつもりでしたけれど。」

「そりやア大變だ。これぢや餘ッ程來過ぎですよ。まア惡い事をしましたね、自分の勝手な話ばかりして——さア被入しやいな、私が又其處迄送つて行くから——」

「可いんですよ、そんなにして頂かなくとも。私一人で歸られるから——」

「だつて、それぢや私が濟まないからさ。」

「だつて、それぢや——」

二人は少時同じ樣な押問答をして居たが、お長は强つて其處で別れることにした。そして、瓢姐さんが電車へ乘るのを見て、又一人ぶら／＼と人形町の通りを井筒油の方へ戻つて行つた。

踊の師匠に成つた所で行末の見込みも立たず、それに何時迄姉の宅に厄介に成つて居るのも心ならずしすれば、いつそ藝者にでも成つて阿母さん一人養はうかと云ふやうな心も動いた。そんな心が動いたばかしに、本町のお店へ廻つて、内々兄にだけ相談して見ようかと思つたが——今の樣な話を聞くと、矢張心がぐらつく。藝者と云ふもの、少さい時から眼にも見、耳にも聞いて知らぬぢやないが、あんな内幕の話を聞くと、矢張心がぐらついて極まらない。

「あゝ、私は如何したものか知ら——」

お長は人通りの多い人形町の角に立つたまゝ、ぼんやり街の上を眺めて居た。（をはり）



黒ダリヤ

北原白秋

黒ダリヤ

烏羽玉の黒ダリヤをば胸にあて
加特力の尼はなにをかゆらめむらむ。
角帽子雪かとばかりわなゝけど、
聲さへ立てず、緑玉、息をひそめし瞳こそ
精靈の日本の秋の啜泣吸ひ取る如し、泣く如し。
片戀の清きうれひに泣く人よ。
煩悩の塵うち拂ひしづ〳〵と入日のかたに歩みつゝ、
冷やかに尼のごとくも涙せよ。
紅びらうどのいと黒き
つや〳〵と胸のあたりに光るとき。

萬年青

ほれ〴〵と空に小鳥をとりにがし、
君涙して悲めどそれもせんなや。
ひと鉢の萬年青すら、いまはその兒に、
手をのべてこそ諂ひ寄りし君がその兒に、
人妻よ、二人してふかく秘めたる赤き實も
遂に知られてあまつさへ、もぎりとらるゝ。

耳袋(四)　猿丸太夫

▲大阪平野郷の念佛宗大本山の管長が、女子大學の卒業生百濟千惠子を引入れて金碧燦爛たる奧殿の襖に、古今集あたりの甘たるい歌をらく書していゝ氣になつてる最中だつた。執事の活佛も何日の間にか生佛になつて、何處かの尼さんにたうとう丸髷を結はせて見たところ、豈料らんや外面如美人內實如獅子、櫛の齒も通らぬ程の縮れ毛だつた。女子文壇の讀者なら早速藤波芙蓉先生の厄介物だが、坊さん有難い藥の有ることは知らないから、矢つぱり墨染の方がようおますわい、と日夕說法してゐる。可哀さうにまた丸めさせるのか。

▲印度の婦人は或點に於て虐待されてをるが又或點に於ては非常に保護されてゐる。例へば夫婦連若しくは男女連のもの、中で、其女が便所にでも行かうか、此時男は便所の前に立番をして女の出て來るまで保護の任に當つて居る、停車場、船の中、芝居などで多く此例を見るのである。

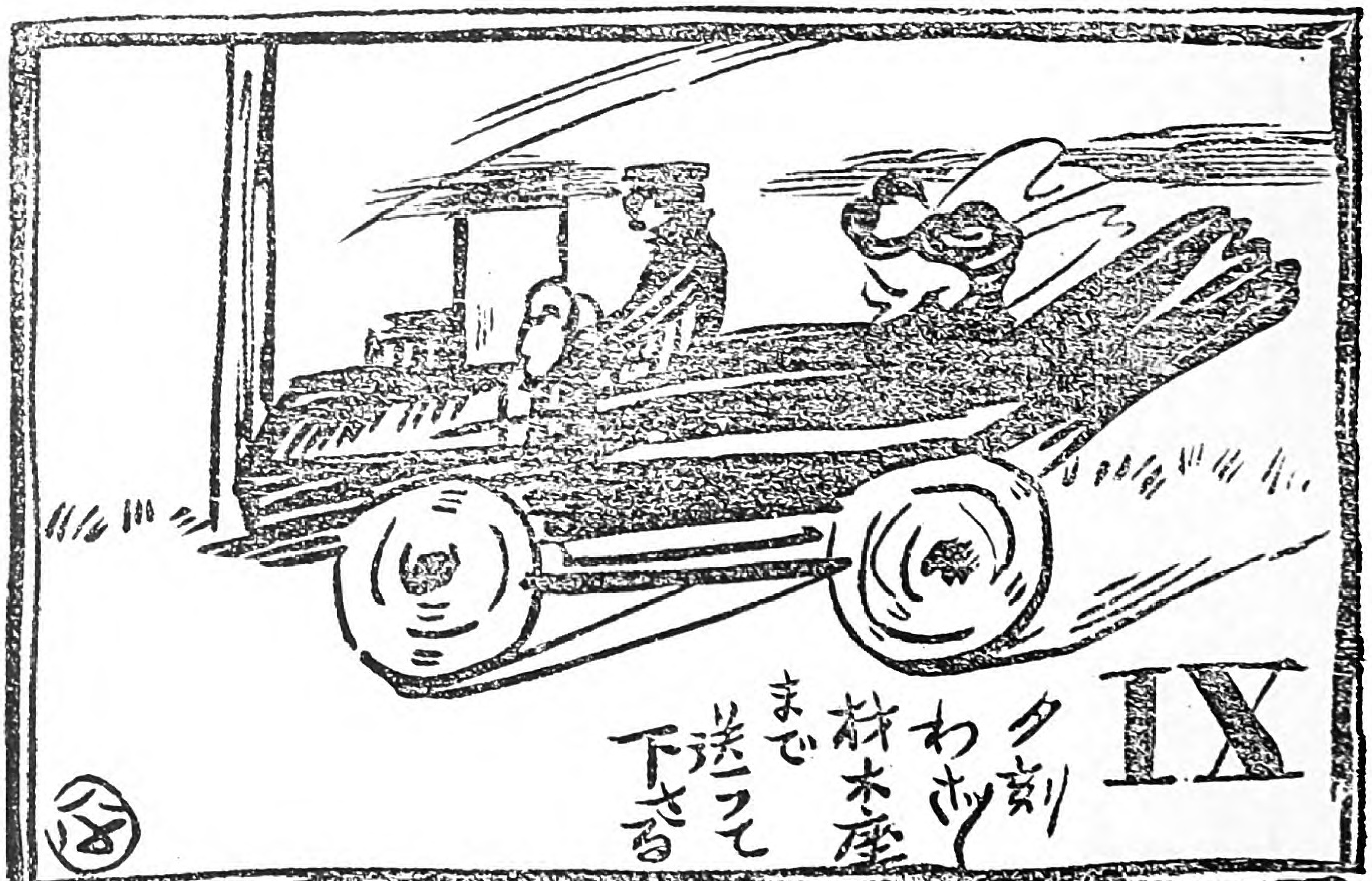
▲「詩人と結婚する勿れ」を書いた人は詩人にどういふ怨が有つてか知らねど、豚は豚づれお三は權助と一しよになつた方が幸福なのは事實である。ルーソーのもとの妻は料理店の酌婦、ゲーテ夫人は造花を賣つて、日を支へてゐた婦であつた。ルーソーがワレンを棄ててヴァシュアに乘換へ、ゲーテがスタインよりヴァルピアスに移つた動機は思ひやられる、尤この二大人物が日月と光を爭ふ著述を爲したのは其妻の愚なりしが故也。賢夫人を娶りてより後のミルは再「經濟論」ほどの物を書くことが出來なかつた、「持つべきものは愚妻なる哉」とこれは高木壬太郎さんの說なり。口の惡いのは私ばかりだと思はれてはつまらないから註をしとく。

▲福井石川富山の三縣に傴僂病に似たる風土病有り、傴僂病の必ず五六歲以下の男女兒を犯すに反し、之は全部女子にのみ限られて、發情期若くは姙娠中に發す、初め骨骼柔軟となりて久しくして畸形を成すに至るのみならずついで步行不如意となり呼吸器を犯して死すすなはち骨軟化病である。もとは日本に絕え

て無き病氣としてあつた。博士緒方正清氏、佝僂病と異りて妙齡の女子にのみ來るを疑ひ、潛心病原を發見するに努め、終に卵巢を切除いて、たやすく治癒し得るに至つた。三縣地方では子女のこの病に罹るものあれば、一室に籠りて死を俟たしむる外は無かつたのである。卵巢を除かれたる女は生々に適せざれど、猶結婚し得べし。これを彼の國手の手を待つに及ばずして佝僂世に生くる薄命の人に比べ見よ。

▲名古屋新聞編輯長某氏、城で持つの唄に因みて長女を鯱子、次女を光子と名づけた、が、次女は一月中に亡くなつた、お父さん自ら戒名を撰んでお經は坊さんに賴んだ、曰く『寸光女史』かうして子供を翫弄物にしながら長ずると孝行を强ひるのだから人間はむごいものだ。

▲江木榮子の君の、裹博士と共に或



會に作れる。名古屋甚句。「テンも數ある其中にネ、ト、コロテンかカンテンか、難有いのは摩利支テン、魔除になるのが南テンで、油斷のならぬがロテンにペテン所天と書いて良人とは、嬶天下の知らぬ事、印袢テンデン車道、七テン八倒ひど工面、ニテン作五圓札、一寸と一枚貸しテンか、貸さなきや御緣がネ、テンと無いよネー」奇才仰天に値ひす。

▲長野縣の安藤技師が、高井郡仁禮校で植林の講義最中に[illegible]の山火事が起つた。火は學校から一里ばかりの入合山と聞きもあえず、聽講員百餘名全部進めの號令一下、安藤氏總指揮となつ

するも聴講席に混つて居た婦人連も、

て驅け出した、直に三十餘名の娘子軍を編成して、飯綱颪に赤の湯文字を靡かせつゝ、市川を横斷して山上の大活動に男をへコませた。安藤指揮官喜ぶまいことか「秋の山、火を見て走る女かな」と感吟立ちどころに成つた。走るは無論逃ることではないと知るべし。兎角名句各吟は註が要るので困る。

▲下總國水海道



町に近頃瓦斯燈が點くやうになつた、點燈夫が唯一人で驅廻るのだから場所によつては點くのが遲くなつて八時九時になる、攻撃火の如しで點燈夫先生、正午十二時にはもう脚立を擔ぎ出して一時時分から點けに歩くことにした。町の手合はこれでも餘りだとまた候ぶつぶつが起つた、「へン茨城縣人多しと雖も一時に明りをつけるのはおれ一人ぢやないか。」

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

美髪劑（びはつざい）

くせ毛
根治請合

婦人の頭髪は、婦人に取りて何よりも大切です。此美髪劑は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の攝養となる純植物性のものより成り、

どんなクセの多い毛でも之を使用すると根本的に直ります。譬へクセ毛の人でなくとも毛がやはらか過ぎて、ハエギワが藤のやうに下つたり、ビンも、タボも下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます。又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、此の美髪劑を用ひておけばすなほな好い毛髪となります、加ふるに毛髪の色澤を美しくすることは驚くべき程で之を常用すれば漆の如くつや〳〵となることは保證致します。毛髪に限らず此美髪劑が如何に皮膚を美しくするかは、試みにアレ性の人が少計り手さきにでも塗抹すれば、直に皮膚滑澤となり其効果は顯著に分ります。只**天性チヂレ毛**の人は此美髪劑を用ひて二時間位は其のチヂレ毛を直すことが出來ますが**根本的に直すことは出來ないのです、**前に述べたクセ毛なら何んな困つたクセ毛でも直ります。此美髪劑は藤波芙蓉先生が多年研究の結果實地試驗の上創製されたる最新の美髪劑であります。論より證據速に御試用あつて其苦痛を忘れ給へ。

▲美髪劑 定價
小瓶金三拾錢。中瓶金五拾錢
大瓶金壹圓
送費 市内四錢地方八錢清韓臺灣三十錢

藤波芙蓉先生發明

美髪香油

定價金壹圓五拾錢
送費小包八錢、市内四錢
清、韓、臺、樺、三十錢

「美髪劑」のすべての効能を具有してある外に、一時的にチヾレ毛を直し、毛をフクラマス[illegible]をもつて居りますから如何なる毛の薄い御方でもこれをつけて髪を御結ひになればフックリとし、澤山の毛のやうに見えます、それに攝毛料たる純粹の晒椿油と頭皮及び毛球に勢力を與へ脱髪を豫防するアルニカ油と、此等美髪の料となるものを深く毛根に吸收せしむるの媒をなす精製オリーブ油とを適度に混和してあるから、皮膚が剝脱してフケが出たり毛髪が赤く細く枯瘦したりすることなく、又斯くなつたのを直す權威を備へて居ります、既に特許局審査官の上席に居らるゝ先生の御友人が是非専賣特許を受けなさいと切に御すゝめになつて居らるゝに見てもこの美髪香油の如何に先生が苦心精練の結果に得られたものであるかゞ御わかりになるでせう。

▲注意——先生發明の特賣品は冗費を省くため、わざと他の化粧品の如く一切粧飾を施さず、極めて實用向にせり、之を諒せられよ。

専賣元 東京京橋區大鋸町十二番地 振替口座東京第壹七貳九番 （電話京橋六〇七番） 女子文壇社代理部

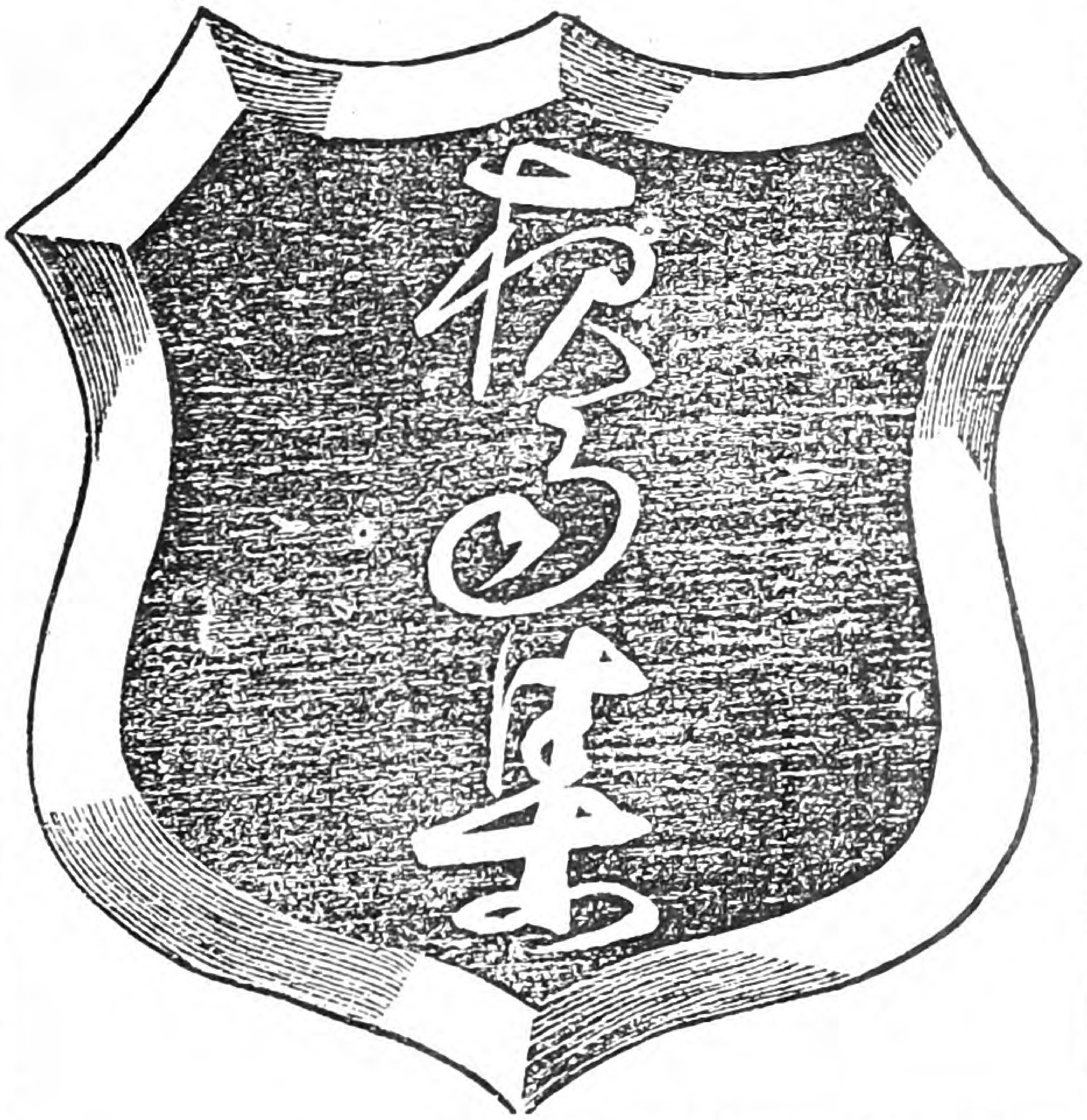
横瀬夜雨先生新著　大好評

（四十五年一月新版）

全一册上製

四六判三百三十頁
舶來柾紙印刷鮮明
色クロス天金美裝

定價金八拾錢——送料金六錢



▼**國民新聞**（二月）

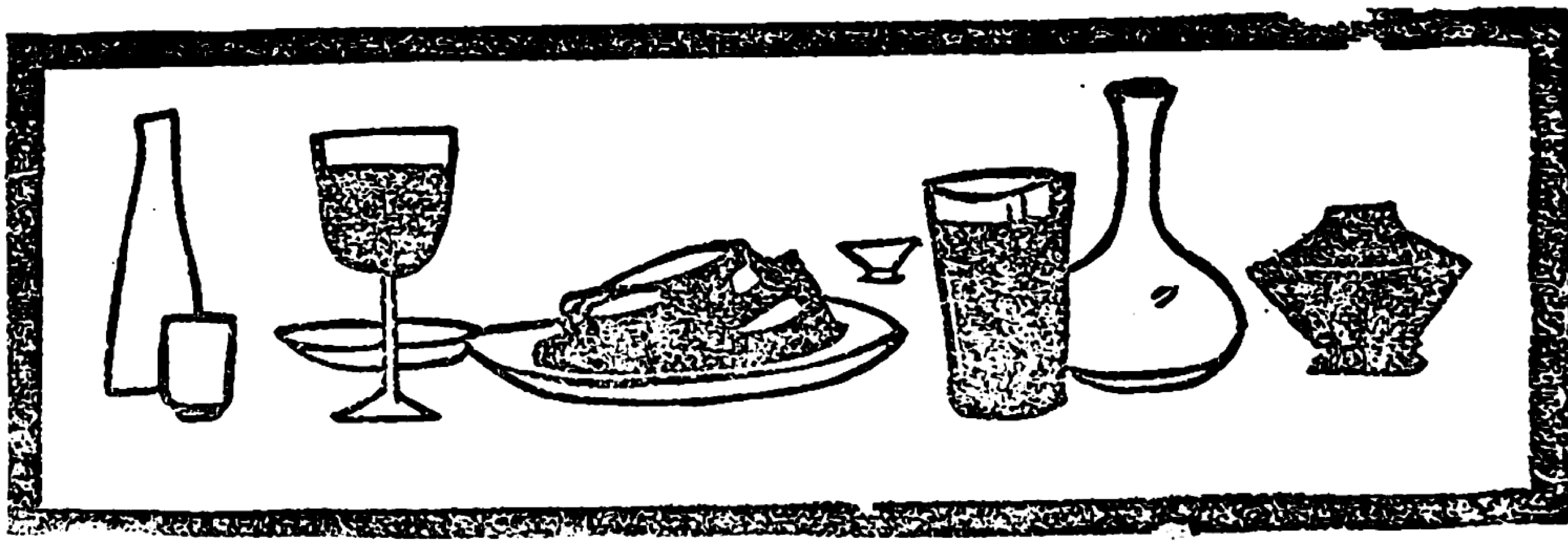
評して曰く。夜雨は天成の詩人也自己を飽までも其懊惱の出立點とする處は夜雨の先天的境遇已むを得ざるに出づる處夫だけ狹けれど深し陰欝にて且つ沈痛也殊に此集には戀に對する執著の影に人間としての詩人の現世に對する苦悶を描いて多恨胸を撲つて痛恨せしむ文藻の豐麗と相俟つて彼の詩に醉ふものに無限の感銘を與ふ新調と否とは早や問題に非らず

▼**萬朝報**（二月）

評して曰く。著者は今筑波山麓に不斷の坐禪にあらざるべからざる薄倖の青年詩人にして坐禪の夢と想との凝つて成れるもの卽ち此集なり詩、小品、紀行、日記、隨筆、手紙等集むる所凡て十九篇、新しい**ロマンチツク**な幻影に獨特の筆致と相集つて自ら一種の色彩をなし紀行日記最も見るべし裝釘又瀟洒

出版元　東京市京橋區大鋸町　振替口座東京壹七貳九番　**女子文壇社**

●特約販賣○東京堂、北隆館、東海堂、至誠堂、上田屋、良明堂○大阪盛文館



食味の感想

芋と南瓜の觸感

高村光太郎

嫌ひなものから話しませう。僕の嫌ひなものは今、日本にある西洋料理です精養軒なんぞではそんな事はありませんが、其の他の西洋料理で心持よく食べさせるとこは、殆ありません。皿の使用法を間違つて居るのを見るのも氣持の惡い事ですし、バタの匂がしたり、油の臭がしたり、焦がして煙臭い匂がする日本の西洋料理は、思ひ出しても嫌です。

酢のものは嫌ひぢやないが、たんとはいきません。もとはしほからや、鮭の玉子等も食べなかつたのですが此の頃は食べます。

魚では、皮の光つた魚は食べられません。それに齒が惡いので、固いものは駄目です。貝類、なまこ、鯖、皆食べません。

僕の好きものは芋なのです。薩摩芋の燒いたのは實に甘いと思ひます。以前

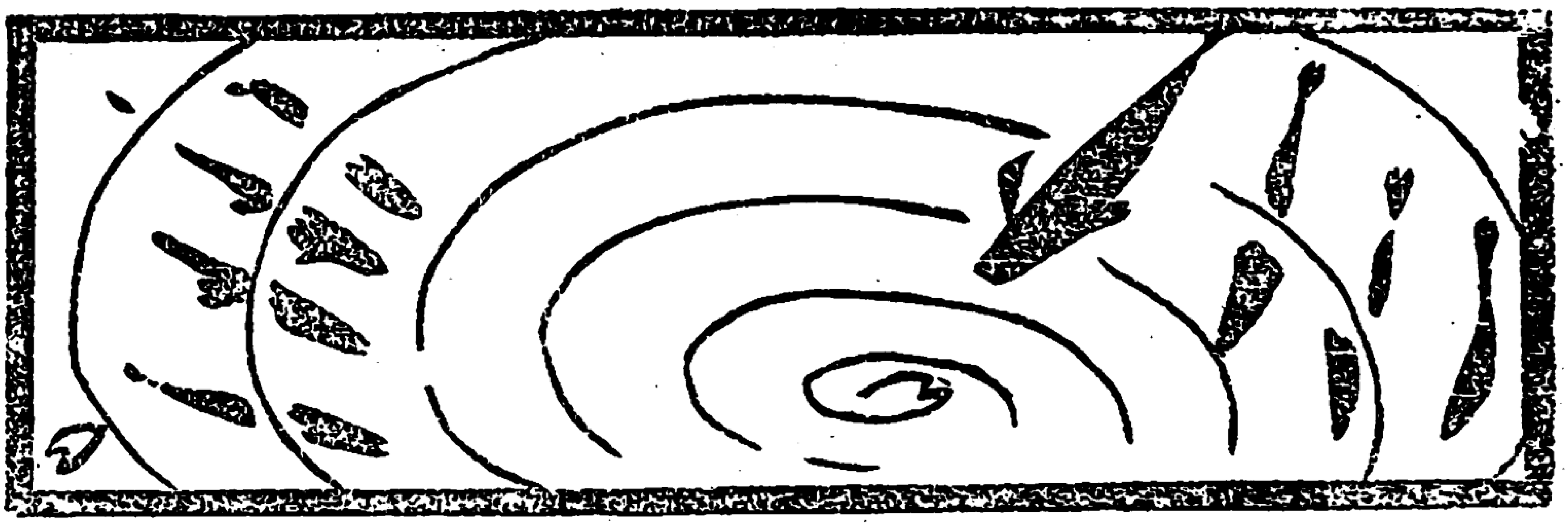


大學の赤門の正面に一寸名の賣れた燒芋屋がありましてね。僕の名は大層信用せられてしまつて、誰でも芋を買ふのに僕の名を言つて行くと、直ぐ持つて來てくれた程、芋を食べたものです。殊に新芋は甘いですね。綺麗に透き徹つた色だの、あの匂だの好きですね。

煮たのはあんまりおいしくありません。どうしても芋は燒いたのに限ります。西洋では、天火の中に入れて甘く燒いて、バタをつけて食べるもので、芋に似たものがありましたが、僕はそれが好きでした。それからもう一つはやつがしらを上手に煮て、どこもかも同じ程に柔らかく、崩れない樣に、淺く味をつけたのも甘いと思ひます。濃く味をつけると駄目です。

僕は此の芋の味に對して一種の觸感を持つて居ります。芋に對する僕の憧憬心です。口に入れると柔軟くてかたくて、どこからどこまで固まつて居て、同質であつて、舌にさはると、極く幽かな勞力ですぐ崩れて了ふ……此の觸感が非常に氣持が好いのです。芋があたへる觸感は實に懷かしみがあると思ひます。

かうした柔らかな氣持のいゝ觸感は、外のものには決してありません。牡蠣なんぞはずる〳〵します。里芋も同じ芋と云ふ名がついて居ても、矢張ずるずるして、質が粉を固めた樣なものでないので好きでありません。つまり木材に近くなると僕は嫌ひです。やつがしら、薩摩芋の質は大理石の樣になめらかで

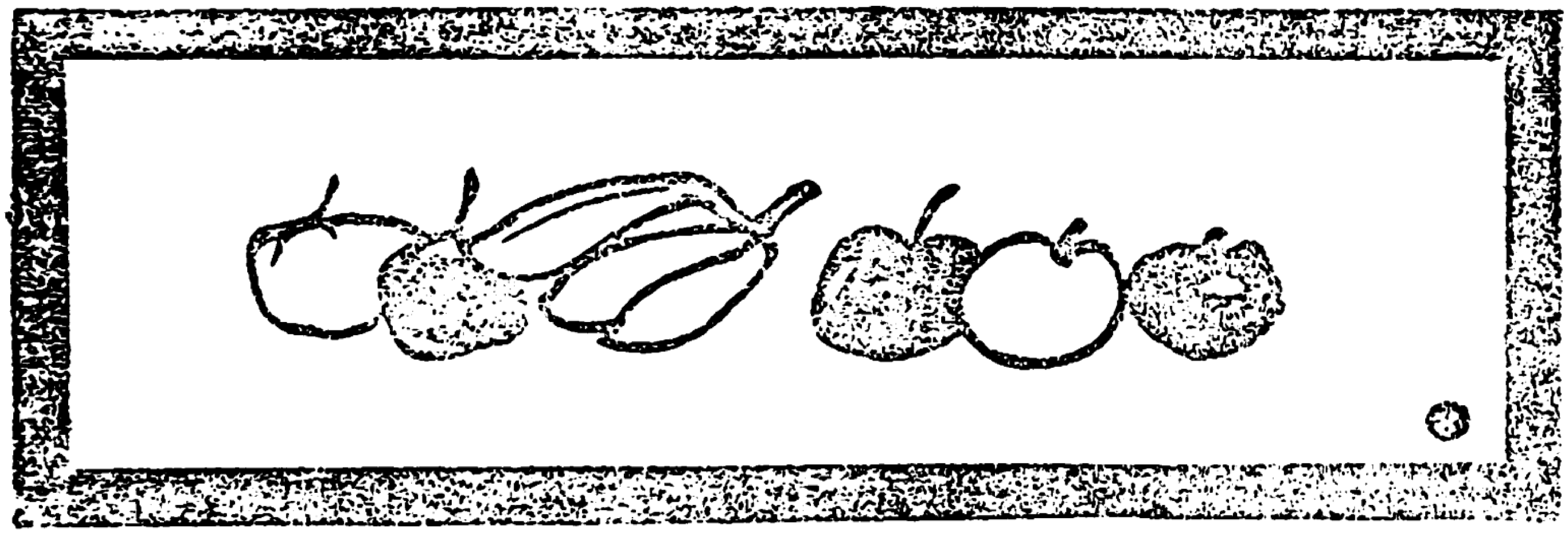


もくめが無く、一寸觸るともう、横縱、自由にとてからでもくだけてとける樣にくづれる——此の觸感がほんたうに好きです。

里芋も、甘く煮て、木の芽をあしらつて頂く時は甘いと思ひます。唐の芋、あれも非常にうまいものだと思ひます。彼の匂をかぐと一種の聯想が起るのです。恰度年の暮の酉の市に、昔からの慣習で、笹の枝にとほして持つて歸りますね。酉の市の爲めに懷かしく思はせます。

馬鈴薯は料理の仕方で非常に味が違つて來ます。僕の觸感から云へば、水の切れる樣に料理が出來て居なければ甘いとは思ひません。水つぽいのは茹で方が拙いのです。始めに空茹をよくしてないから水つぽくなるのですから、芽を取つて、空茹をして、含んで居る水蒸氣を十分に蒸發させます。そうすれば大理石の樣になめらかに固まつて心持のよい觸感をあたへます。木材の樣になると、調理法が下手なのです。それで僕は馬鈴薯を食べると直ぐもう其の人の料理の巧拙が解つて了ひます。

それから芋に近いものであつて芋が舌にあたへるのと殆ど同じ觸感を感じさせる爲めに、僕が今一つ好きなものは南瓜です。南瓜ではもとなりが一番美味い樣です。末熟はいけません。すゑなりは煮ても木材に近くなります。絹漉しの豆腐と云つた樣に非常に軟かく、物質が飽和し、分子と分子とが抱和して居て舌の僅かな勞力の爲めにすぐ崩れて了ふけれど、それかと云つて齒答へがない



と云ふのではない。云ふに云はれぬ此の間の舌ざはりが、芋だの、南瓜だの、味に重大な位置を占めて居ると思ひます。

斯樣した觸感の元始的な感じと云ふ者が、あらゆる食味の根柢となつて居ます。香よりも、色よりも、此の觸感が僕に對して、好き嫌ひの標準になり易いのであります。それで同じ原料を使つたものでも、料理の仕方で此の舌ざはりが違つて來るので、隨つて好き嫌ひが出來て來ます。

鰻。これも調理法の如何で木材に近くなる事もあるし、又お芋の樣になるのです。木材に近くなつては食べたくありません。

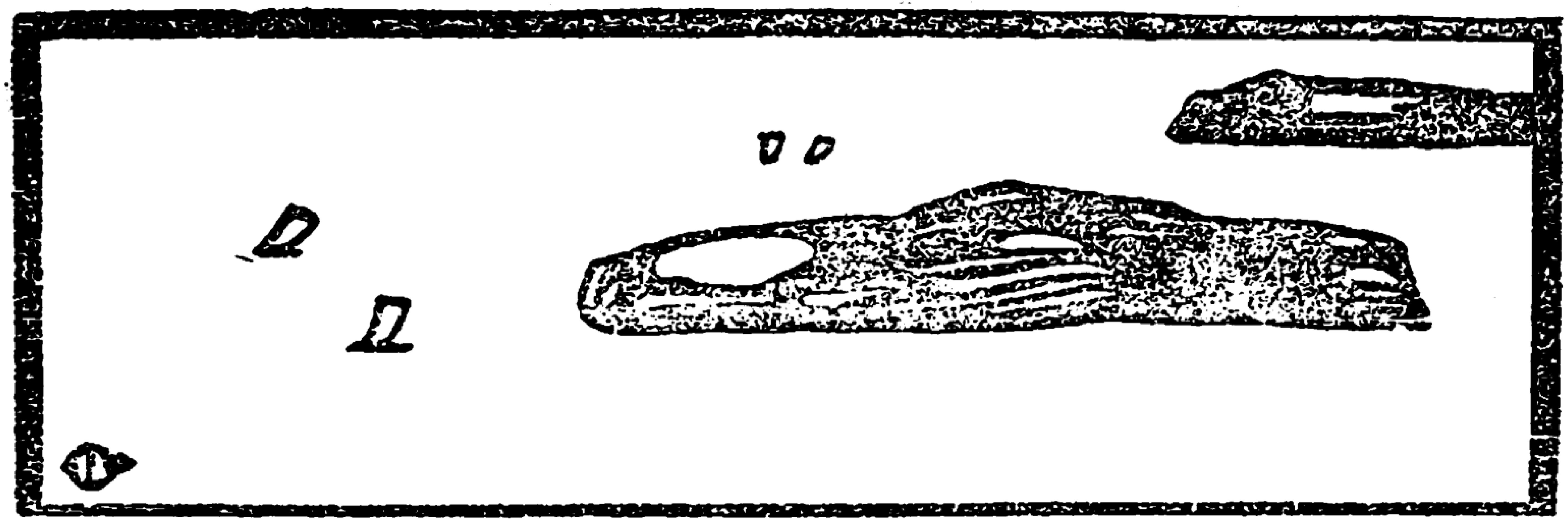
肉では羊の肉が好きです。カツレツにすると好い味です。矢張軟かくてお芋の質に近くなるからかも知れません。それに此の匂が非常に好い。いかにもデリケートな味がします。牛肉はビフテキにしたのが一番好い樣です。西洋にはグリールと云ふ者があつて、待つて見て居る間に燒いて呉れる、意氣なもので好い味でした。鳥の肉は僕はあまり好きでありません。一帶に粒が固まつて居るものでありさへすれば好くのです。然し鮭のたまでは同じ粒が固まつた樣なものでもあれはぬるくして、好きと云ふ譯にはなりません。

野菜で好きなものはサラダ、と云ふものです。サラダは唯葉ですが一番好かつたのです。もとは羅馬にあつたものだそうですが、今では巴里が一番好く産出る樣です。

果物では無花果、苺が好きです。柿は齒が弱い故と見えて食べません。最好きなものはバナヽです。バナヽを切つて牛乳をかけて食べると快よく感じます。飲む物では珈琲ですね。あれは誰でも匂を賞美るのですが、僕は匂よりも主に重たさが好いのです。其の點から、紅茶よりも好きです。珈琲の粉には脂肪が含まれて居る故と見えて、お茶よりも、舌に觸る感觸が重いと思ひます。其の重たさが、チヨコレート程しつこくなくチヨコレート程ねばりません。此れが好きです。而して飲むと如何にもきりつと引き締まる樣な、眼の醒める樣な氣持がするので、朝起きて顔を洗つた後、靜に、安樂椅子に凭れた時等に飲むと實にさつぱりします。

然し、珈琲はいれかたが非常にむづかしいので、いれかた一つで旨くもなれば拙くもなります。古くなつても味に關係をするし、豆のあたひで早大變に味が違ひます。焦がさないで濃く黑い、黑珈琲が好いので牛乳を入れない方を僕は食べます。牛乳を入れないのを食べると珈琲の味が眞正に解ります。

酒は日本の酒は少しもいけません。飲むのが苦痛です。ベネジックチンと云ふ強い西洋酒を好みます。ベネジックチンはある一派の僧侶が飲む酒であつて是れを少し飲みますと、玉露を飲んだ時の樣に、匂が身體中に沁々擴大ります而して麝香の樣な匂が自分の毛孔から心持よく發散するのです、實にあんな酒は外にないでせう。



獸類の肉は絶對に食はぬ

小川未明

私は牛とか豚とか四足獸の肉は食べない。嫌ひと云ふよりも絶對に食べないそれは必ずしも幻想からではない、先天的食べられないのである。子供の時、牛肉屋の店で、血の滴つて居る肉や、赤い形のまゝの肉を吊り下げてあるのを見るのが非常に不快であつた爲、牛肉屋の前はいつも避けて、遠く反對の側を通つたものである。

肉をてんなに嫌ふのが遺傳であるかと云ふとそうでもない。私の兩親は牛肉でも何でも食べて居る。然し私が家に居ると。私が嫌ひな事を知つて居るので食べない。私も煮させない。

遺傳でもなくさればとて宗敎上からでもない。子供の時から牛肉は香を嗅ぐのも嫌であつたが、今でも、何處の會に行つても肉は食べない。學校へ通つて居つた時も、下宿屋でして吳れる辨當のさいに、もし肉が入つて居ると其の飯は食べられなかつた。ミルクホールに行つても牛乳がどうしても飲めなかつた。然し今牛乳だけは少し飲める樣になつてゐる。

此の樣に四足獸のものを食べない譯はと云ふと、私は此んな考を持つて居る



魚とか植物とかに比して、四足獸は極めて人間に近い感じがする。殊に牛とか馬とかは、或る程度まで、人間の感情を理解する事が出來ると思ふ。此の樣に吾々の感情を理解する犬や牛や馬の樣な、種族の近いものゝ肉を食ふのは甚忍びぬ感じがするのである。

好きなものは果物である。中にも蜜柑、葡萄が好きである。蜜柑の好きと云ふのは、私の國は寒い國であつて冬は雪が深くて、蜜柑の木は育たない。たまたま、越後の糸魚川方面から小さな蜜柑が送られて來る事がある。其の蜜柑は小さくて、味が酸ぱい、それにも拘はらず非常に嬉しかつた。殊に一月二月になると東京から來る大きくて、色の鮮な蜜柑は、江戸蜜柑と云つて此の上もなく喜んだものであつた。

昨年の一月に私は伊豆山に行つた。熱海の海岸を散歩して居た時、オレンジの畑を見た。オレンジ畑を眺めた時私は新しいフレッシユな感じがしたものである。

或る時には私は蜜柑を皮をむかないで食べたいと思ふ事もある。それ程まで私は蜜柑に對して憧憬を持つて居るのである。

野菜では青い匂の高いものならば、好きである、芋や南瓜は嫌ひである。

※　※　※　※

蘭人接待の古畫

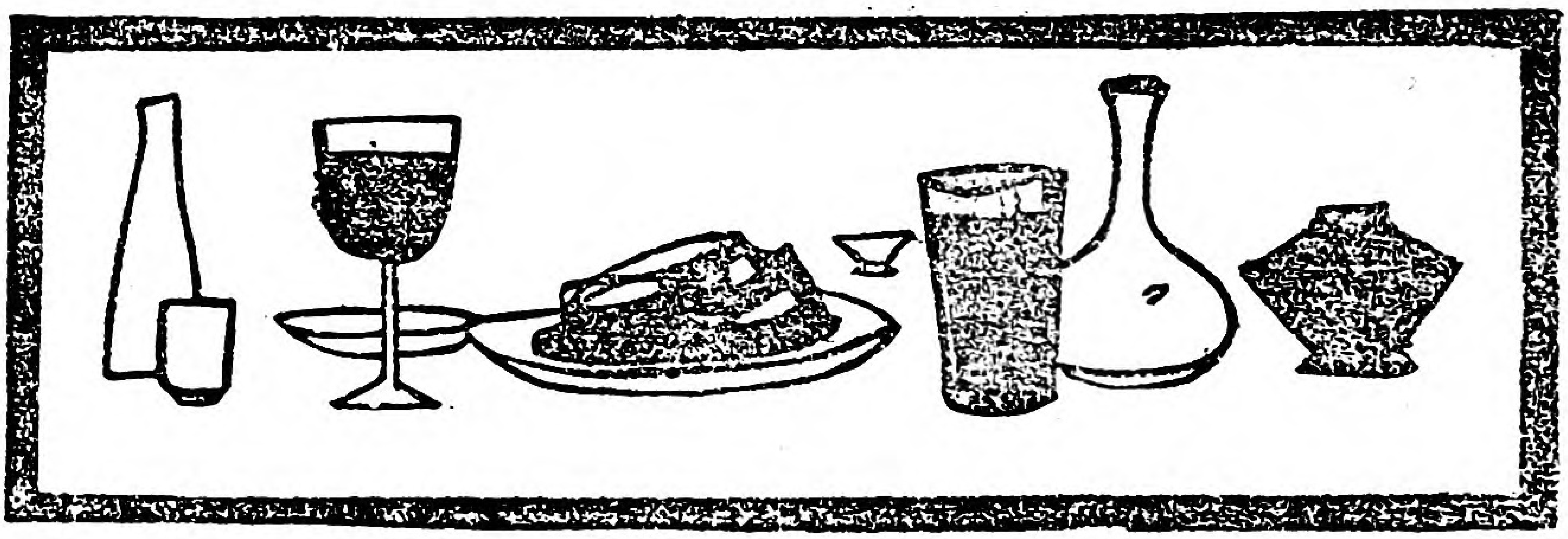
木下杢太郎

御葉書拜見仕候。小生は味覺に對しては些の自負も自信も無之候へども、奇妙なる御課題が、突然予の頭にいろ〳〵の聯想を惹起し候ゆゑ、それを順序なく書きつけ申すべく候。

味は調和といふやうの事を永井氏なども申し居候やうに覺え候。舌端の味、香ひの感覺、齒の觸覺などを味感の內的要素とすれば、食事の時の、その所の氣分や雰圍氣、心頭に浮動する輕き聯想などは、その外的要素とも名稱すべく候。而して食物通ならぬ小生には後のものこそ尤もめでたきものに有之候。

茶を飲み分ける遊戲などはもはや趣味の墮落に有之候はんも、いまもなほ酒倉の多き灘伊丹などに、きき酒する古風の老人もあらんかなど〻思へば、その地方を漫遊せむとする欲望むら〳〵と念頭を掠め候。

もとは屢夜深く魚河岸の屋臺店にて鮨の立ち食ひを致した。するとそこの老女のなれて、屹度てはだと、山葵を強くした鐵砲とを卷いてくれ、あとでオリエントを一本くれた。それからいろ〳〵の賣物の呼び聲をき〻ながら水の流を見たるやうの事有之候。てはだも鐵砲もさまで美味なりとは思はねども、何と



なく夜の河岸の情趣には適うものゝやうに思はれ候ひけるなり。また橋の下天麩羅屋にて六錢五厘宛の天丼をたべ、吉井君、平野君と一緒であつた、それから二洲亭へ女義太夫を聞きに行つた事があつた。その時はゴルキイ崇拜の頃ゆゑ、古帽子にぼろ外套を着、工兵のはく靴をはいた。鴻の巣といふ家の出來たるはそれより遙か後のことに有之候。

冬の夜のストオヴの
湯のたぎる靜けさ。
ぽつと、やゝ顔に出たるほてりの
幻覺か、空耳かしら
談里玻璃杯の、まだ殘る酒を見入れば
ほのかにも人の聲する。
ほのかにも人すゝりなく。

『え、ゝ、ま、あ、な、に、で、と、ぞ、い、な……あ……』
さう云ふは呂昇の聲か、
此春聽いた京都の寄席で、
それをきいて人の泣きたる――。
乃至その酒のしわざか。

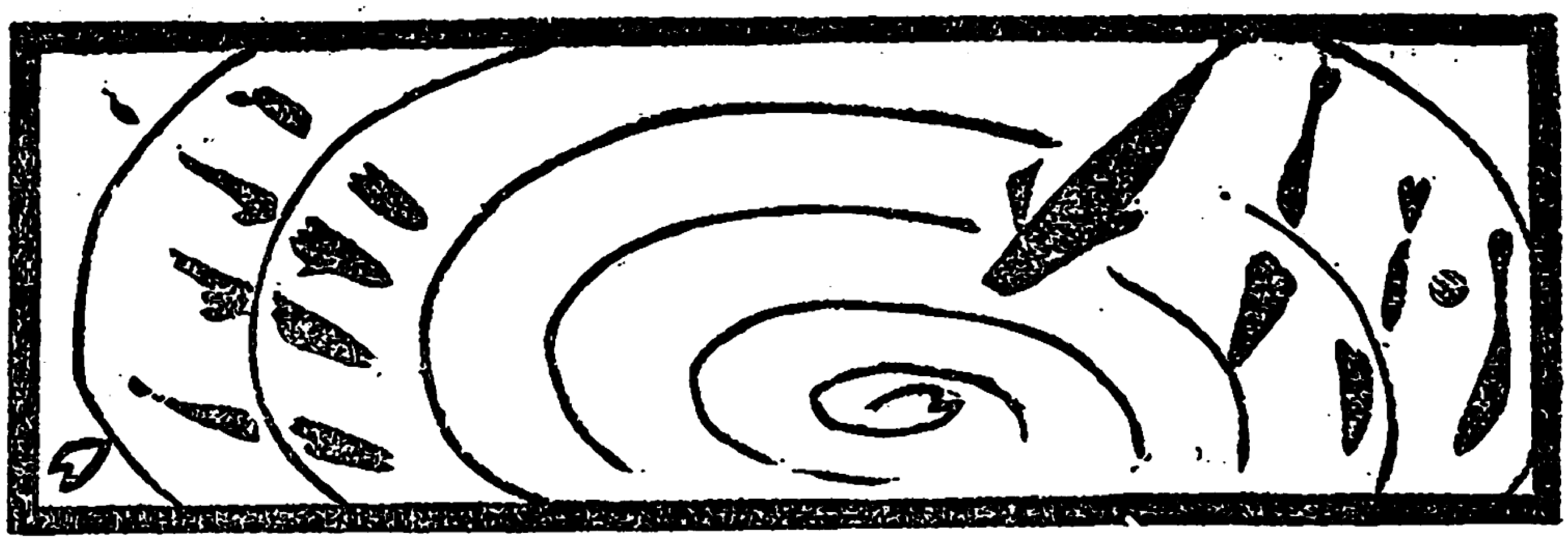


冬の夜の靜けさに
褐くすむ該里の酒。
さう云ふは呂昇の聲か。
乃至その酒のしわざか。
幕あげて窓から見れば
星の夜の小網町河岸。
舟一つ——かろき水音(該里酒)

右は鴻の巣の主人へ。そんな心持で貴君の店で酒を飲んだ事もあつたよ。

小生は日本料理は丸花や中鐵を二なきものと心得る位ゆゑ、てんで話にならず、酒ふ飲まぬゆゑ、會は西洋料理でなければ御免の方に候。西洋料理屋にて藝者の椅子に腰をかけて三味線を引き、お酌が體操のやうな歌ざはぶりを踊る『パンの會』は、その昔の蘭人接待の古畫をも思ひ出され、すきのものゝ一つに有之候。日本人には少しく量多きにすぎ、やゝ滿腹したるあとにて、日獨郵報にユリウス、クウルトが『寫樂』の評の通を讀み、海老名彈正が日本の國家主義と基督敎とを妥協させるのは滑稽だなどいふ惡口を、半ば西洋人になつた氣で讀むなどは好ましき事に候。殊にかゝる時に、西川祐信の古風の美人圖などを見たしと思ひし事あり。

上田敏先生と、若き西洋人二人と、高い所に建てられるミヤコホテルの出

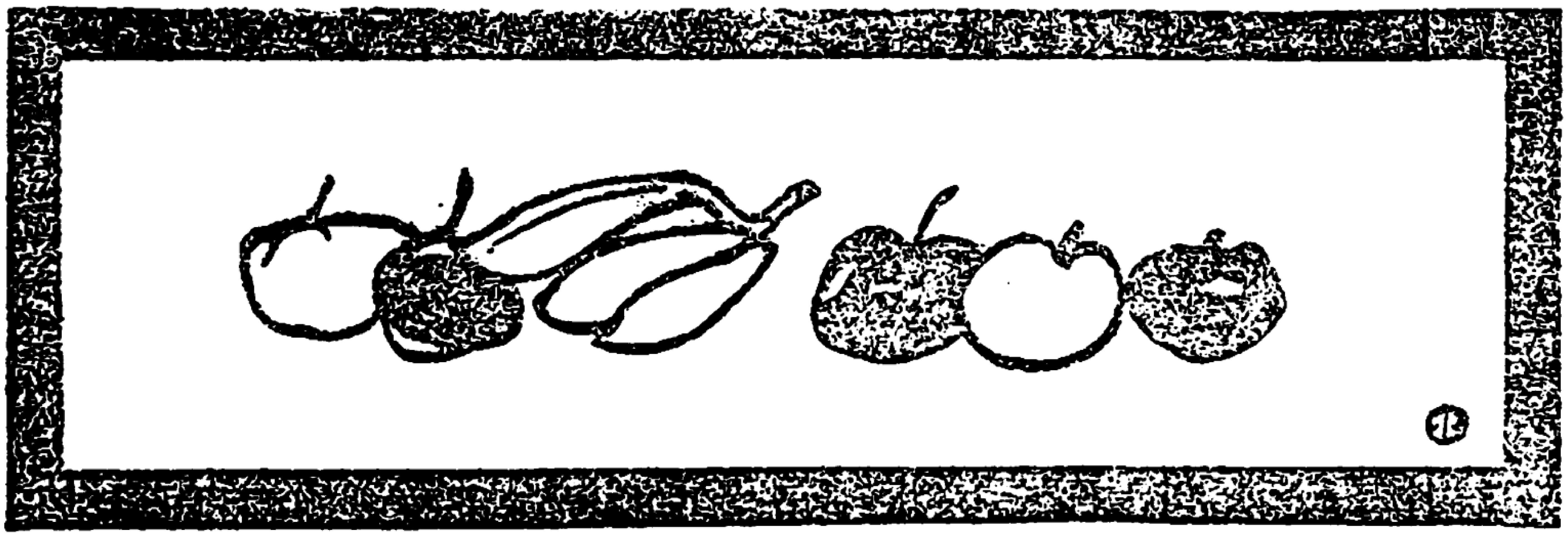


ぱつた食堂から、夜の京都市のうち微む青色の屋根の原を見下しながら、紅提灯の下に、ソテルン酒をたべたる事ありしがその時上述せしがごとき、小生の趣味が滿足され候ひき。紅茶を喫しながら、猿澤の池の向ふの、奈良の塔に落つる日を眺めたるも同じ心持。

湯が島にて夏の早朝非常に氣持よく、椎の木のかげにて、二匹の犬を正賓にした。俄づくりの木の食卓で紅茶をのんだ事あり。その時詩をつくりかけたりしが、遂に未成のまゝに手許に殘り候。何でも『雨後の朝』といふ題にて半分ほど出來上り居り候。

薊の花の紫が
まだ露のまゝ、起きたまゝ。
露か、涙か、簪か、水銀珠か、重さうに。

で、私はあまりの氣持よさに、
粗末な食卓を庭の隅の――
溪流に臨んだ庭の青草の上へ運ばせた。
聲高に、さも可笑しげに宿の女中が笑つた。
それから主婦も、
牝鶏と、ひよつこも、



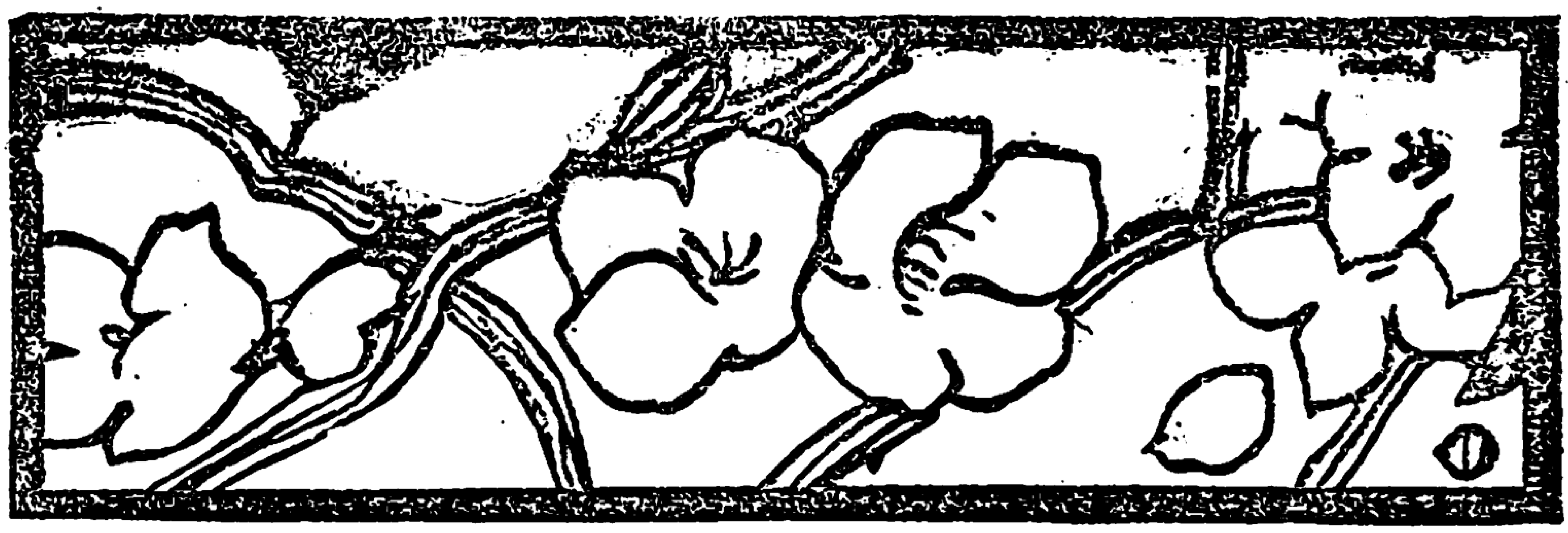
このさゝやかな香を見て、
白犬もまた慌惶しく驅けて來た。

ふるゝ、ふるゝと口笛を吹いて
そして紅茶の碗を取り上げた——。靜かに口許に。

何と綠の夏草の冷いことよ、
その中のたつた一つの紫の薊の花が
かうゆら〳〵と露を落すのを見やりながら

本鄕の
五丁目の
靑木堂の金ちやんが送つてくれた Lipton の
お茶の香のよき、味のよさ——
と子守歌のやうに唄ひながら、
私はふと茶碗の罅を見付けたのだ。

既に日はまつ靑な
天城山の峰から顏を出した。

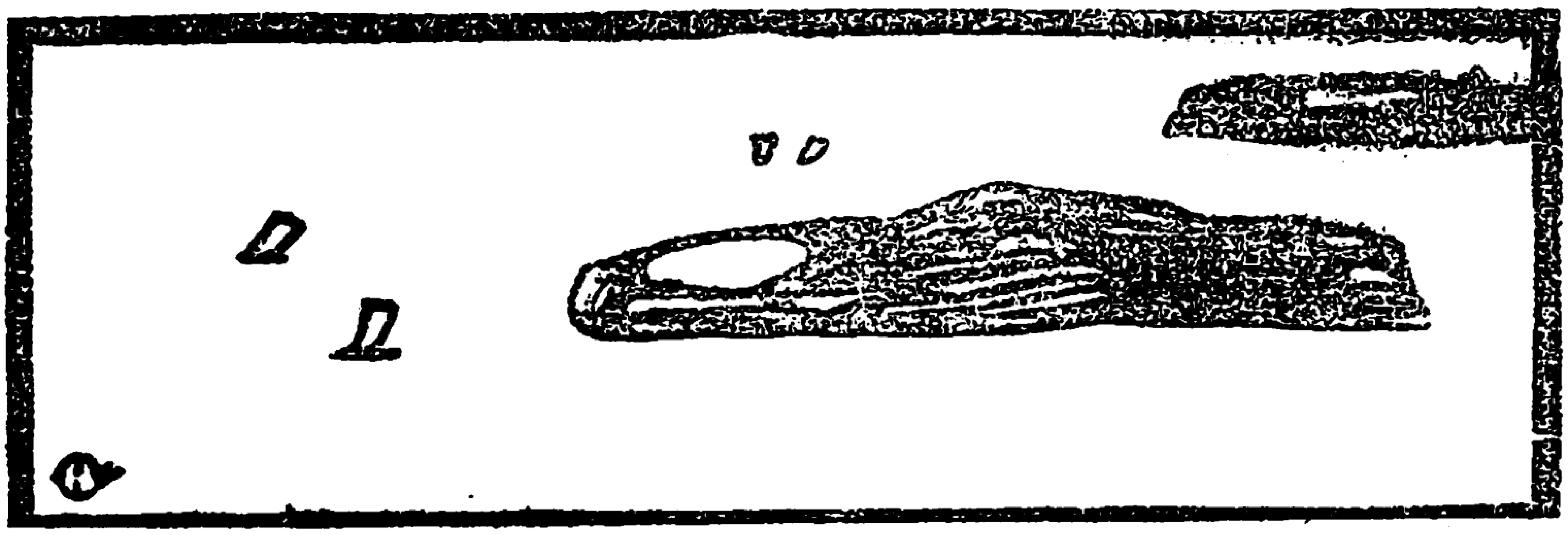


霧が多い朝の谷は、
　穏かに、美しい光と音を以て反響した。
之まで出來て居る。
右にて蠟燭の燈のやうに聯想の影も暗く相成候。少く長過ぎ候。以上。（二月二十三日夜半）
附。去年なりしが神田青柳の古書畫の展覽會にて、明治初年の東京の料理屋の小さい紙の繪札を一帖に集めた本を見たりし時は、一寸食指動き、垂涎三寸の體にてありき。

色彩の美しいものは旨しさう

田村とし子

私は味めくらとでも云ふんでせうか。ほんとうの舌で味はう食物の味と云ふものは私にはよく分らないんです。唯油つ濃いものは嫌ひ甘いものが好きと云ふ單純なものなんですからお話のしやうが御座いませんね。
　間食の好きな人間でお菓子なら何でも頂きます。一體に刺戟の強い食物は、食べられないのですが、お菓子なら上品な甘味でさへあれば、どんなに甘つたるくつても頂きます。そうして私は色によつて食物を好き嫌ひしてゐるやうな



ところがあります。色の美しい爲に隨分好きになつてるものがあります。お豆腐なぞも煮たりいつたりしたのはちつとも頂きませんけれど、夏、氷に冷やした色の白いやつこを見ますと、何うしても食べずにはゐられなくなります。そうして食べて見ると、何とも云へない涼しいおいしい味がするのです。

果物でも、蜜柑だの苺だのは色の爲めに好いてるのです。蜜柑の皮の黃色い色を明りの下でしみ〴〵眺めて、いゝ、おもちやにしてから、それから皮をむいて、一と房づゝむしつて、(あの房の軟か味のあるオレンヂ色も一と皮包んだ雲の樣な薄い色も好きます。)筋を取つてきれいにしてから、ちゆうと舌で甘酸い味を吸ふ時はいゝ心持です。苺も牛乳の上に赤い實をおいて、その上に眞白なお砂糖をかけて、それを銀匙で一つづゝすくつて食べるのが好きなのです。

お魚でも白魚だの鯛だの針魚だのは、色が綺麗なのでおいしく頂けるので、外のものはあんまり好みません。お菓子なぞは殊に色の綺麗な爲につひ食べたくつて〳〵仕方が無くなる時があります。

直接に舌の上に乘せて、其の食物の特色の味を味はつて、その味だけを好むとか嫌ふとか云ふ樣な事が私にはないんです。

＊　＊　＊　＊　＊



食ふべき人生、味はふべき人生

森川葵村

食味の感覺？　甚だ難問ですね、私の樣なけちな人間が半可通を振りまはしても始まらぬ話、そこで私は方面を換へて少し理窟が言ひたいと思ふ。

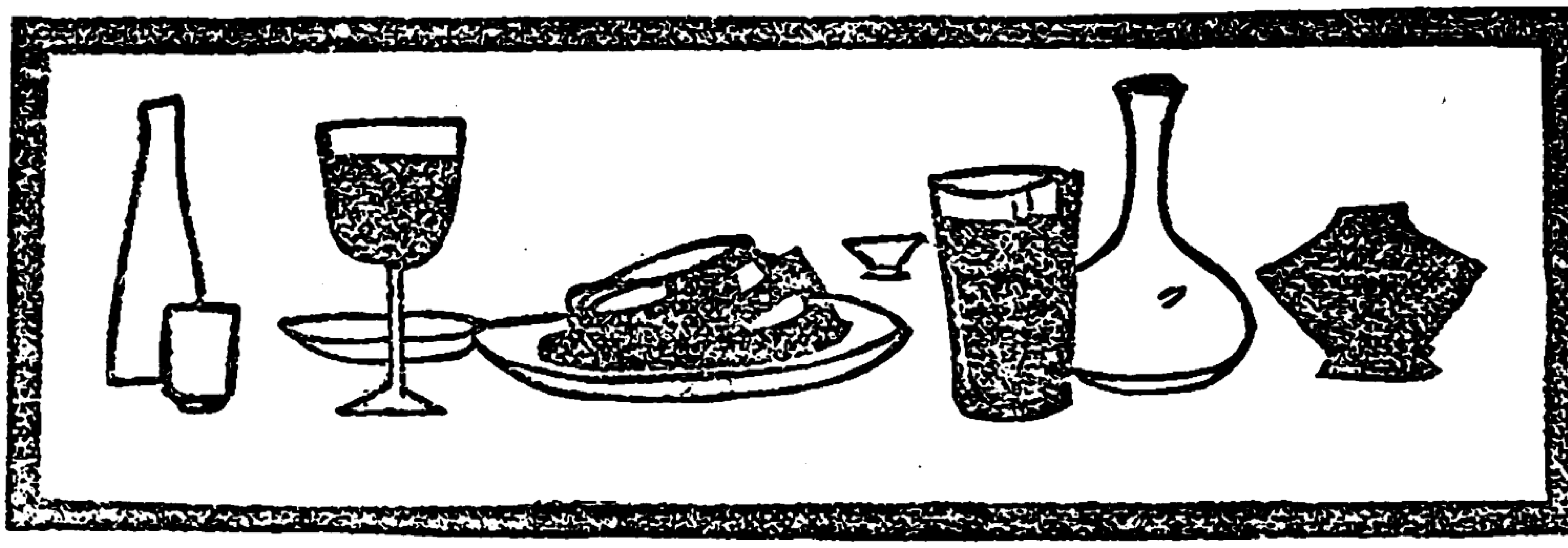
食味と言ふ文字に就て先づ疑問を起したい、即食うて生く可き人生であるか味うて生く可き人生であるか。食ふと、味はふとは違ふ。

自然と人生とを想像を以て結び付けようとするのが藝術家である。所謂味はふ可き人生である。自分は藝術に依り味はふ可き人生を得んとして居る、然るに私と反對に藝術に依りて食ふ可き人生を得んとして居る人等がある。所謂自然主義論者の一部は是である。現に一兩年前に此種の議論が盛に見えた。慥か啄木君であつたと思ふが或る新聞に「食ふ可き詩」と云ふ論文の發表せられたのを見たことがある。また正宗白鳥氏の出世作「紅塵」を或る大家が見て、此の作は今迄の小說に嘗て見たことのない經濟上の思想が含まれて居ると言つて歎賞したと云ふことも聞いて居る。恐らく日本の小說位社會上の現象を無視して居るものはない。騎士がコスメチックの學生となりお姬樣が女學生に變つただけで、現今の社會組織がローマンス時代の社會組織とどれだけ變つて居るか

は日本の小說に求むることが出來ない。そこへ行くと脚本にしろ小說にしろ外國の者は根本的に現實的である。いや話が大分外れてしまつた。食ふ可き人生は少くとも私の藝術論には用が無いのだ。

食ふ可き人生は努力の人生である。苦鬪の人生である。味ふ可き人生は遊戲の人生である。遊戲とは其れ自らを目的とする行爲卽ち目的の無い行爲である。味つて目的が無いから味ふ可き人生は遊戲の人生となる。味ふの外苟も腹の足しにする目的があるならば、それは食ふ可き人生である努力の人生である。この理由で以て私は藝術を遊戲であると說くのであるが是には隨分と攻擊があつた、否倘あることであらう。

私はプレラツフアヘエルの亞流を汲むのではないが、少くとも藝術上の立場から絕對に食ふ可き人生を呪咀する。所謂實利論を罵倒する。あゝ併し其の呪咀も罵倒も恐らくは敗者の泣言となるであらう。世は食ふ可き人生となつたらしい。過ぐる日も區裁判所か銀行見たやうな新築の大文字に二圓五十錢の正符が貼り付けてあるのを見て、M君と深い歎息をついた。凡てが耐久と堅固とを旨として來たのは所謂西歐の美點を採つたものとして實利論者の誇る所であらう。日本帝國も萬々歲である。八百善の鯛は食はずに、神田の裏通りの安洋食の二三皿も食ひ給へ、その方が蛋白質の含有量は遙かに多いにきまつて居る。只一と言所謂敗者の泣言を繰り返して置かう。



How vain and dull this common world must seem
To Such a one as thou, who shauld'st have talked
At Florence with Mirandola, or walked
Through the Cool olives of the Academe;

Wilde

原始的の味を好む

秋田雨雀

私は日本の魚はあまり好きでない。どうも刺撃が少いので欲しいと思ふ感情が起らない。然し酒を飲むので、なまこだのたこだのは食べる。

鶏肉とか肉とかは好きである。野菜では三つ葉、芹。菓子では羊羹が甘い。

一體私は細い味、刺撃の少い味は好かない。全然わからないのではなく欲しいと思はないのである。總じて刺撃さへ強いものなら好む。

果物では林檎と蜜柑。是れは味よりも色彩の方から好むのである。

私は都會に育たないので都會の食物の味についてあまり深くはない、且自分の嗜好から言つても元始的の味を好んで居る。



食卓に向つた時

水野葉舟

食物の好き嫌と云ふ事は主觀的の話であるから、私は私一人の世界から感じて居る種々の感覺をお話して見よう。

一帶に現代の人には美しいとか汚いとか、好き嫌と云ふ事が、段々主觀的になつて來ると思ふ。殊に食物には其れが激しいと思ふ。

而して食物の好き嫌と云ふ事は、其の人の生活の習慣から養はれて、發達した事もある。然れどもそれだけではない。それよりも其の人の生理狀態が重きをなして居ると思ふ。子供の時から今日に至るまで、好きなものも嫌ひなものも、種々と變遷して來た事を考へて見ても、食物に對する要求の根本は其の人の生理的からであると思ふ。其の上に私には感情から激しく起つて來るのである。

或る時には脂肪分が非常に欲しい。殆脂肪分が無ければ暮されないと思ふ時がある。又ある時には、非常にさつぱりした水の樣に無味なものが欲しい。舌で種々な味を感じる事がなくて、唯一つの單純な味であるものを食ひたいと思ふ。其れを食べずにはぢつとして居られない時がある。



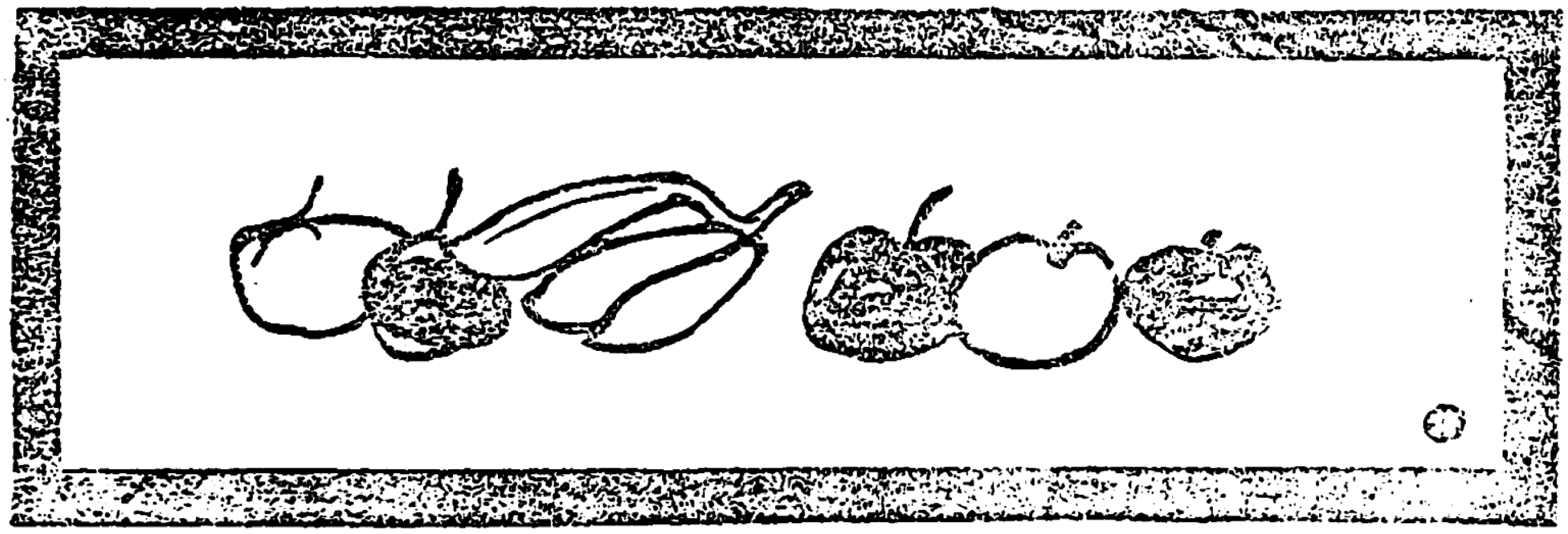
私は食卓に對つて、非常に喜んだり、失望したりする事が多い。而して喜ぶのも失望するのも、色々な感情から起るのである。私は取り別けそれが激しい方である。

書齋で熱心に仕事をして居る時、食事だといつて呼ばれて食卓に就いた時、どうかした拍子にあぶらつこいものがむらむらと欲しく思ふ。濃厚な味の深い複雜な暖かい食物が食ひたい。今其れを食べたならばどんなに心持好く胃の腑に落付くであらう。それを食べたならば、強く力がつき、元氣が湧いて次の仕事に氣持よく進む事が出來ると思ふ事がある。然し食卓に着いて見ると淡泊したものや酒の肴の樣なものがあると、酷く失望をする。好き嫌ひと云ふ以外にその食卓が限りもなく不愉快になるのである。かうした私の要求は、家族に取つては實に厄介な事であらうと思ふ。

またある時には、胃袋が飽和して居る樣な少しだるい心持がして、唯少し、淡泊したものを取りたい。飯も食ひたくない心持がする。是れは殊に近頃多いのである。

多くの人は飯を食はなくては居られないと云ふが、私には飯を食ひたくない事が每々ある。或る時は、習慣的に飯が欲しいと思ふ時もないではないが、食はなければならない程欲しいとは思はない。

食物の材料をよく選擇んだ上で、調理をしたものが唯少し許りあればそれで



ひゝと思ふ。然し大體から云ふと、私と云ふものは非常に大食である。

もう一つ云ふ事がある。よく人が舌に慣れたものはうまくないと云ふが是れは事實であると思ふ。私はそれを菓子で經驗をして居る。私は學生の時分に菓子が非常に欲しくて、一日に一度か二度かは、菓子を食はずには居られなかつた人間である。甘いから好きであると云ふ様な理由ではなく、お酒を飲む人が酒をこのむ様に要求したものである。而して隨分様々の菓子をあさつて食べたのであるが、どんな菓子でも關はず菓子でさへあれば取ると云ふ事は決して無かつたのである。

何處の店の菓子がいゝと聞くとそれを食ひたいと思ふ。大抵のいゝ菓子店を喰べ歩いて見たものである。

而して一つの最中を食べると、私には其の餡の製造り方、餡に含まれてゐる砂糖、餡を包んだものゝ味を非常に感じるのであつた。むしろ餡よりも包んだものゝ味が好き嫌に關係を持つて居たのである。

前、上野の空也と云ふ菓子店があつて、空也の菓子と云へば隨分名代の旨いものであつたが、私には、其處の最中が非常に旨かつた。其の最中の皮には味噌を少し混和てあつたが不思議にそれが旨く、中の餡よりも其の皮の方の味が忘れられないのであつた。

それから或る時には本饅頭の餡が大變旨く感じたこともある。然れども決し

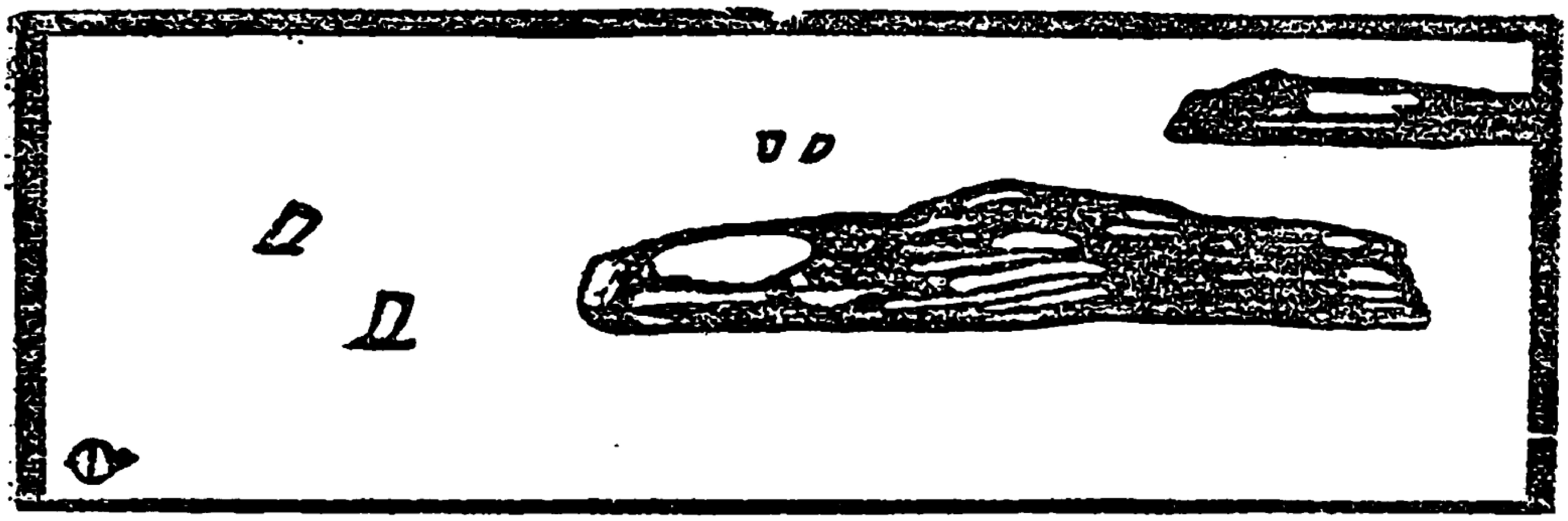
て私は菓子通ではない。方々食ひ歩いて。求めて比較をして上手下手を話す通人ではなかつたのである。此の様な事は長い間やつては居らなかつた。約二年位で菓子は食べなくなつたのである。私はそれが好奇心ではなくて、生理的要求から自然に起つた事であると思ふ。次に何か取り代へ得るものが起るまではそれで濟まして居られるので、決して食道樂といふのではなかつたのである。

兎に角、食物の好き嫌ひは、生理上の要求と密接な關係があると思ふ。

然し私が生理上の關係があると云ふのは、唯單純に物理的の方面を云ふのではなくて、複雜した處からさう感じるのである。

私は又から云ふ一種の食物論を持つて居る。と云ふのは食物の料理の仕方については、日常われ／＼が暮して居る上に、愉快に食物が身體の要求にあてはまる樣に、私一箇の自分についての議論を持つて居る。いろ／＼考へて見ると食物は少しづゝつくつた方がいゝと思ふ。私の家では家族の人は私とは反對の傾向をもつてゐる。私の心持では非常に綺麗なものを、美しい皿の中に心持よく置くのが一番いゝと思ふ

此頃新聞や雜誌に殆料理法を掲載して無いのはないが、私はいつも夫れを讀んで居る。然し此等の料理法を讀んでも何等の利益に立たないと思ふ。何故なれば此等の料理法を敎へる人達は、唯種々の材料で、かうして食つたらいゝと云ふ事を云ふ丈で、直接に料理と云ふものにむかつて、何にも書いてはないの



である。說明が極めて下手である。少しも腹の實際から說明をしてはないのである。此事について云ひたい事はあるが此の『食味の感想』と云ふ話には直接に關係をしては居ない。

料理の書物が教へて居るものには概してうまいものが無い。此方で見付けなければ無いのである。牛肉はあゝして食ふ、かうして食ふと云ふ方法は多く說いてあるが、考へて見て旨味さうなものは無い。然れどもそれは止むを得ないことかも知れない。而して此れ等の人達は美術的に料理をすると云ふ。此の所謂美術的の料理は何の利益にも立たない。日本在來の生花の樣な極く發達をしない美術思想を中心として、全然、押繪や香箱でもつくる樣に料理をして居る料理をいゝ、おもちやにして居るのだと思ふ。

彼の口取などは少しも吾々の食慾を刺擊する力は無い。寧此の樣なちよてちよこしたものを作つてあるよりは無い方がいゝと思ふ。料理した食物の美しさや旨さは食慾を刺擊する事が第一である。ビフテキの燒け上つて黑い樣な油切つた褐色をして居るのは實に美しいものである。

而して其れを白い皿の上に載せて、側に青い物をつけてあるのを見ると、非常に旨く感じられ、强く食慾を刺擊する。私は夫れが眞實の美術的料理であると信じるのである。

從來の日本の料理法の中で、眞實の旨い味を作る事の出來る料理法は保存す



る必要は勿論ある。保存すべきものは保存してもいゝが、感覺の乏しい人々が理解する所もなく、經濟とか、美術的とか云ふ名の下に種々見當違ひをして居るものに旨いものがあるべき筈は無い。

次に私は自分の食物に對する感覺を述べて見よう。私は奈何しても食物について、直接に何でもいゝと云ふ心にはなれない。好き放題の設備をすることが出來ないのである。併し其の中には自分で經驗して、要求を充す事が出來ない事もないのである。

私が一番心好く感じるのは、肉類が持つて居る幽かな酸味である、それが非常に快く感じる。牛肉を素燒にして、僅に食鹽をつけると必ずそれがある。是れは獸類が持つて居る純粋な味であつて、清冽な水を飲む樣な感じがする。勞働した後の疲勞を感じ、身體の細胞がだるんで、ぐつたりした時等に、特に其の旨さを感じる。實に身に泌み渡る程の優婉な感じがするものである。

此の牛肉の素燒の味はビフテキにも幽かにある。今日本で手輕に此の味を味はふとするならば、鐵の鍋にバタを敷いて、鰭を燒くのである。すると極めて簡單に料理する事が出來る。それを大根おろしに醬油をかけたものゝ中につけて食うと旨い。然れども今の感じから云へば、食鹽をつけて食べるのが一番旨いと思ふ。

豚の肉は脂肪が濃いだけ此の味が認めにくいが、鳥の肉にはそれがある。殊

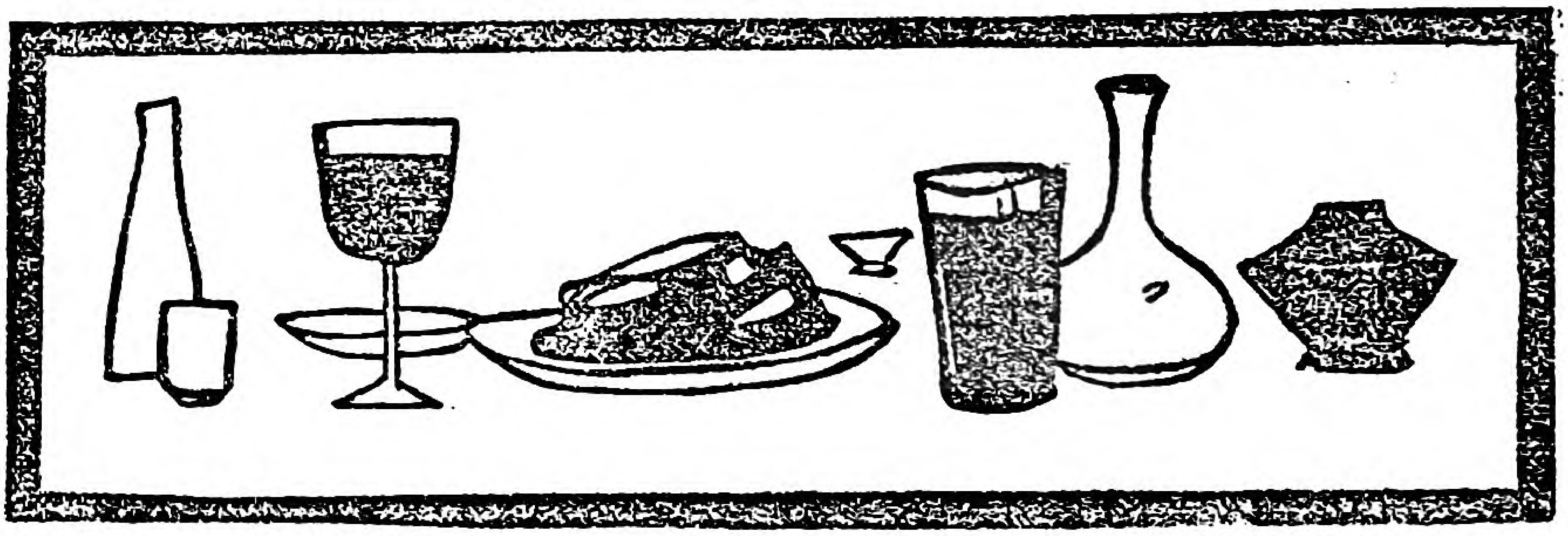
に鷄には澤山に含まれてゐる。東京は鳥の料理が發達して色々のものがある樣で名は忘れたが、柔らかにむしたものがあつて。其れは申し分の無い程好きであつた。

此の樣に私が此の肉の素燒の味が非常に好きであるのは、多分生理上の關係からであらうと思ふ。

それから今一つ偶然に味を覺えたのは牡蠣である。大久保に住んで居た時、剝身屋のお爺さんが新鮮な貝藻類を持つて來たのから覺えた事である。此時深く貝類の旨味を知つたのであるが特に其の中で、牡蠣の味と云ふものを私は私の自然的要求から覺えたので、決して人に敎はつたのではなかつた。

然し私が少年の時に國の方へ、よく廣島の知人から、牡蠣を剝いて送つてくれるには途中で腐るので、かますに入れて、殼ごと送つて來れるのが常であつた。私は冬の休暇になるとよく其れを剝かされたもので。下男と一緒に剝きながらよくそれをそのまゝ洗つて食つた事を幽かにおぼえてゐる。牡蠣の含んで居る味には鹽分が少しまじつて居て云ふに云はれない旨味がある。牡蠣をからして食べるのは、極めて野蠻な仕方で、田舍の海岸の漁師等がやる事ではあるが、非常に旨いものである。

獵師の子供が海岸を歩きながら、潮の干た後に行つて、石垣の下を石で突ついて取つた牡蠣を洗つたまゝで直ぐ食ふて居るのをよく見掛けた事もある。それ



から思ひ付いた譯ではないが、私は大久保に居た時、剝身屋の爺さんが持つて來た牡蠣を生のまゝで食つて見て、實に旨い味だと思つた。

牡蠣を殼のまゝでよく洗つて、火にかけ、煮えてから食べるので、東京では蛤を矢張此の樣にして食ふて居る。けれど私の嗜好から言へば、蛤よりも、此の牡蠣の方をかうして食べるのが旨いと思ふ。かうして食べる事が、牡蠣の料理の中で一番うまい樣である。それから牡蠣と云ふものは、四月からは殼がいけないさうで、十月の末頃から十一月十二月、越えて三月までがいゝ季節である。

其の外にもあるが特別に二つ三つの話をして見よう。

私は食物について、ひそかに誇として居る事がある。それは其の食物の旨さを知つて居ると云ふ事である、かう云ふと笑ふ人があらうが私は凡てのもの、旨さ、例へば駄菓子の旨さ、魚の旨さ、肉の旨さ、野菜の旨さ其外各々が持つて居る特有の旨さを感じ得られることを私は得意に思うてゐる。あれが旨いとか、これがまづいとか云ふ好き嫌ひの意識で特別に味を知られいと云ふ樣な事はない。何によらず其のものゝ旨味を解する事が出來るのを、誇に思うて居る。

で、今一つ私の旨いと思ふものを云ふと、鮎である。鮎は鹽燒にしても旨いものであるが、私が旨かつたのは鹽燒ではなくて、鮎を多く產する地方では、

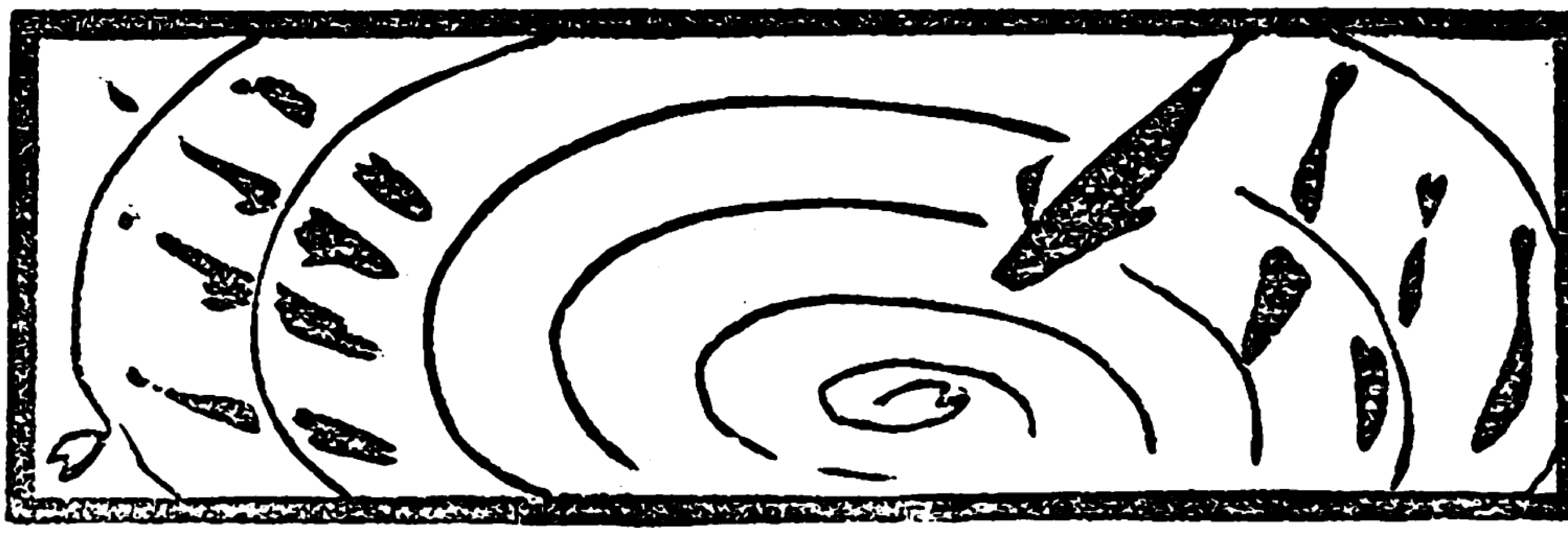


玉子を保存する爲にする藁のつとと同じ樣にこしらへて、其の中に鮎を入れて吊して乾してある。其れを煮て、砂糖と醬油とで甘辛く煮付けて食べたのが旨かつたのである。それから鮎狩りに行つて、磧で、石の上で火を燃やして、其の石の上で燒いて、鹽をつけると、石の燒けたのが手傳つて、眞に旨い味であつたと覺えて居る。

其の他に猶少しづゝの旨みを持つてゐるものはあるが單に名前ばかりもならべた處で、つまらないことであるから止す。

終に私は讀者の爲めに、料理の方から云つて見たい事がある。と云ふのは、家を持つた場合、殊に若い夫婦だけで新しい家庭をつくつた場合には、家庭の食物を始めとして、細々した事は此の樣な割合で、徐々に習慣を形付くられて行くと思ふ。卽ち細君が生れた家庭で敎はつて來た習慣が六分、殆ど大部分を占めて居てあとの四分と云ふものが、男からの要求と、重に細君の受けて來た敎育を土臺にして、夫婦間の一種の計畫とからであると思ふ。其の事に就いての議論は、家庭論に入るが、要するに食物の一切の順序及び習慣は細君が生家から持つて來た智識が重きを成すのである。

そこで若い細君達は、新らしく學校で受けた敎育の分量、習慣を基礎として判斷と云ふ事に重きを置き充分に意識し、批判して欲しいと思ふ。それが第一である。



次には、夫の家の習慣と云ふ事も研究をして欲しいと思ふ。男と云ふものは一體に食物などには意識のない人が多い樣で、別に考へる事もなく暮すものである。然れども、ある時の食卓に對つて不圖自分の幼い時から染み込んでゐる夫の側の習慣を見せられたならば、何とも云はれない一種の嬉しさを感ずるものである。

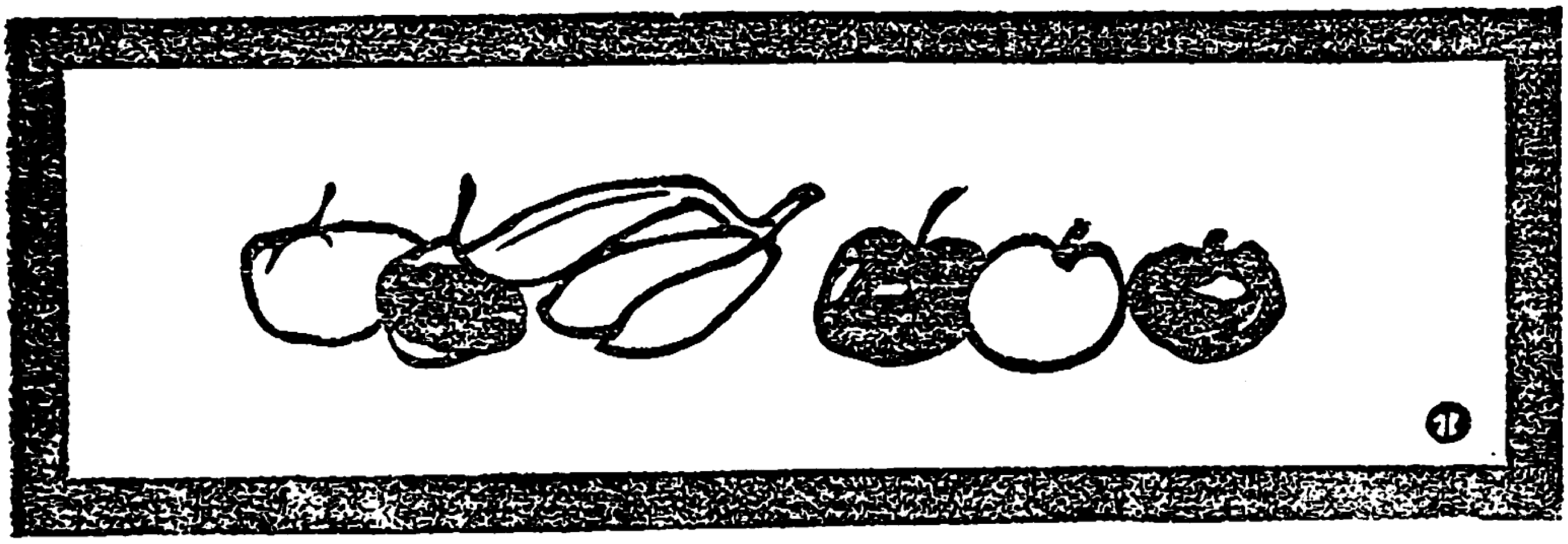
是れは極めて、ロマンチックなポエチカルな要求ではあるが、此の事と、學校で敎はつた智識をよく呑みこんで、正確に判斷をしてゆくと云ふ事がなければ、家庭と云ふものは決して進むものではないと思ふ。

お染は何んな米を喰て居たらう

兒玉花外

昔の仙人は霞を喰つて活きて居た樣に、私は詩の紅い霞だけで活きたいロマンチシストの仲間だが、やはり肉體は食物とは離れられないし、で浪漫派としての食味感を描いて見よう。

第一人間位ゐ殘忍殘酷な動物はない。大は牛から小は草の芽と蝦ざこに至るまで、山から海から、味があると見れば何でも採つて喰ふ。惟ふに文明とは益益殘忍な光る惡魔に進むといふことだが、隨つて人間の靈性の價値が漸次に薄



くなつて來る。で、文明人ほど食味の官能が發達し且つ鋭いわけである。西洋の假りに牛肉の文明に對して、日本特に東京は近時迄、江戸ッ子は鮪の身の文明をもつて誇りとして居た。今日では同じ赤い色でも鮪の江戸文明は追追亡んでゆく。

ビフテキの匙を振ひながら江戸趣味の退却を嘆く詩人はあつても、鮪の赤身に涙を注ぎつゝ江戸風雅の褪せに悲む詩人はない。……私は少し黒味あつて刺激性の烈しい江戸兒の血が好きだ。

東京の鮪の刺身にたいして、大阪に鯛の作身がある。上方の人の血が必ずしも白いとは言はぬ、しかし關東人の血が荒々しくて色が濃いやうに思ふ。鯛よりも鮪の方がはるかに美味い。

大阪の鱧の附燒に似て、東京は鰻の蒲燒だ。大阪京都の饂飩に、東京に蕎麥がある。私は蕎麥屋の看板の方が氣がきいて面白い。たとへば空氣でも空の雲でも關東の方が放奔で變化が多い……私など半分は空の雲で活きて居る浪漫派は、雲でも尠なからず生活に影響する。

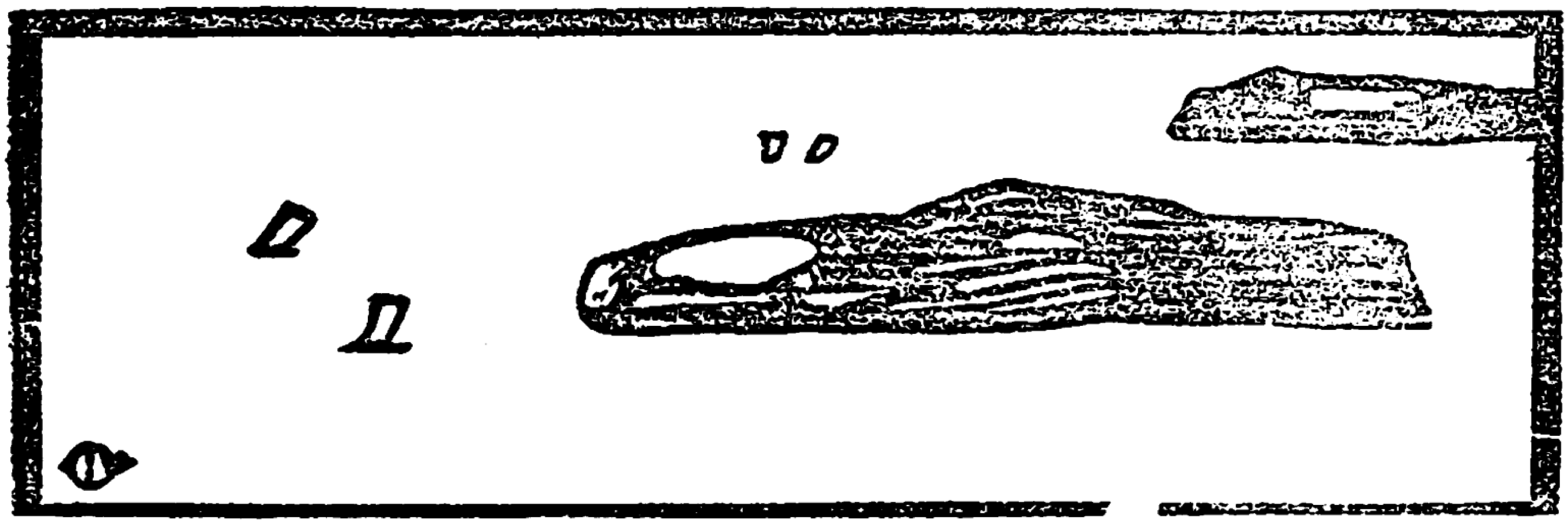
友人醉茗君は果物は嫌ひださうな。私は果物は普通で枇杷の甘たるい汁と、無花果の緋黒い柔かい肉は好きである。あの赤い肉が齒を染め舌と腸にしみ入るこゝちは、何かに甘へたい、又害のない甘い毒の如で、熟した無花果の赤い爛た肉は女の舌のやうだ。

林檎は皮の色で欺すわりに、白い肉が淡白すぎる只輕い味はひだ。ビーヤホールの食卓に獨り就いて、バナナの黄色な軟かい肉は甘い悲みがあつて、口を拭ふハンカチに黄な粉と汁がつく樣なも、詩情があつて宜い。果物を剝くナイフは光つてゐても、私には憂愁の折にはなつかしい光である。

紅薔薇を匂はして金髪の美人は、クユラソーや葡萄酒は適するけれど、あの歌麿の浮世繪に見るやうな曲線美の夢の女に、私は果して何んな飮食をとつて居たかを思ふ。殊に昔のお染抔はあの姿にどんな米を喫つたであらうか？詩人小泉八雲は日本の女の持つ箸と茶碗を神秘の一つと見たさうな、私は女の紅い蕾の口元の茶碗に觸るゝ官覺を想ふ。

貴族的の詩人ゲーテすら涙でパンを喰はねば人生は知れぬと言つた、バイロンは何んな悲憤悲痛の涙でパンを咬むだか、耽美派のオスカーワイルドのパンを氣取つた贅澤の喰振り、晩年のベルレーヌのアブサン酒くさい廢頽の色のパン……。私は青い寂寥のうちに飯を味はふのは、詩を思ふ上にも常に好きである。

私は夜ふけて原稿を書いて疲れた折、腕を電燈に當てゝ、脈下を流れる血を透して視る。何といふ血液の熱く美はしきかよ、造物主が人間の血を赤くしたのは天下の奇蹟だローマンチックの極である。溫かい一重の肌は白いではないか、私は深夜感情の亢奮して充血した時、ナイフに脈を裂いて熱い牡丹色の血



を見たいと考へる。で、この時に血を啜ると甚麼味ひであらうかと思ふ。……人間の血の働らきの凄さよ、男女の紅い情史と、世界の歴史はすなはち血の大きな塊でなからうか。

詩を作つて疲れた後の紅茶はたしかに甘味い。

私は昔の吉祥寺の間で美しいお七と吉三が、零れ紅梅のやうな飯事をした詩の情調を味つてみたい。

魚は大嫌ひ

久保田萬太郎

私は食べず嫌ひです。箸をつけずに嫌ひなものが澤山です。魚なんぞは大抵な魚は一寸食べても腹が痛くなります。魚は一番嫌ひなものです。それで何時か友達と一處に房州へ行つて、一週間と云ふ間を、魚の本場で、玉子と野菜とで暮したものでした。

然し西洋料理は可成いたゞきます、乙なものは大抵食べません。野暮な人間ですから。

飲み物では、紅茶も、珈琲も飲みますが、私はどうも日本の茶の方が好きです。お菓子類はそう頂きません。歯が惡いからです。



果物では、林檎等そう好みません。さくさくするのが嫌です。好きなものと云つては格別ありません。澤山な嫌ひなもの丶跡に殘つたものが好きなものだと思ふ位です。

京都料理

三木露風

京都料理は、一帶から云へば上品で、貴族的で、東京の人の舌では、味つて見て旨いと言へる人は少いであらう。

京都料理に使用つてゐる醬油は色が極めて薄い。ビアの樣な色をして居る。播州の龍野の醬油であつて、此れで味をつけると決して料理に色がつかない。京都料理が一目淡淸と見えるのは此の醬油を使ふからである。東京人の樣に濃い醬油をつかつて、煮上げるものを醬油色に染める樣な事は決してしない。

京都料理にはこつてりして居る濃厚な味はない。非常に淡泊で上品で、規則的である。而して京都の料理を食つたものは、料理よりもその膳部の方に目をとめるであらう。京都の料理屋は非常に道具に凝つてゐるのである。京都料理の特徵は、器具と料理とが調和して、一つの忘られ難い味を作つて居る點であらうと思ふ。



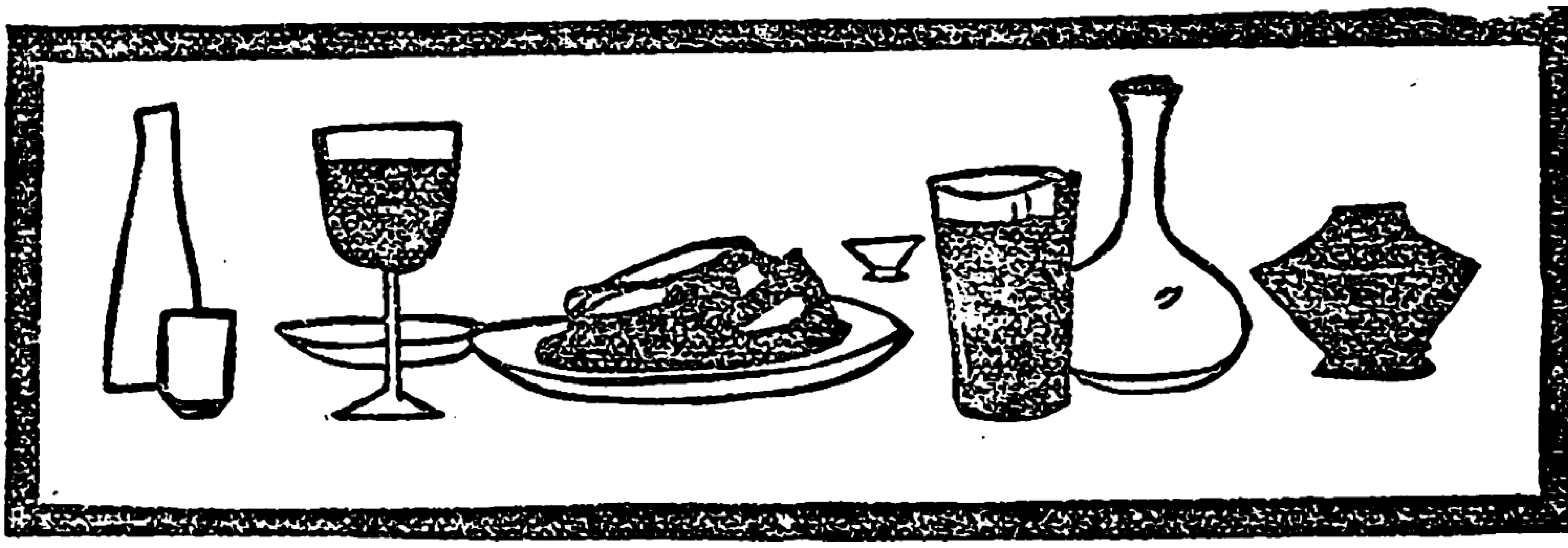
京都の料理程調和と云ふ事を重んじる所も少いであらう。例へば、室内を始めとして、膳部、器具など盡く數奇をこらして、此れらの周圍のもので料理を食はそうとして居る。大阪の食ひ倒れと云つた樣に旨い味のものを矢鱈に陳列させるのと違つて居る。

京都料理は、また京都の山水と調和をしてゐる。京都に行つて西洋料理を食べようとは思はれない。西洋料理は京都のロマンチックな空氣と調和しない樣な感じがする。

京都に行つて上品な京都料理を味つた私は、一方に西洋料理も好きである。牡蠣が好きでフライになつてゐるのをよく食べる。脂ていものは食べられないが淡泊したものならば何でも食べる事が出來る。

マカロニなどは人が賞美して居る程に好きではない。しつこいものを食べる氣にはならない。

飮物では、以前は机の下にウヰスキーの小瓶をひそませて置くと云ふ事もやつたものだが、今では少し量を減じて居る。酒を飮むのには、甘いものよりは極めて強い酒を少量にリクウルグラスで飮むと云ふ方を好む。又白いクロスの掛つた卓上で、ベネジクチンを飮むのも好む。色の美しい綺麗な酒を飮むと云ふ事も惡くはないけれど、酒を眞に味はふと云ふ上からは矢張、幾分か強いのを量は少し飮んだ醉ひ心地が氣持がいゝのである。



それから食物の味のうまいのとうまくないのとは、周圍の空氣から影響される事が多い。落付いた、靜な空氣の漂つて居る所であると、旨く食ふ事が出來る。レストラントへ行つても、椅子が亂雜になつて居たり、何かなしにざわざわして居たり、どこに自分の腰をかけていゝか解らないと云つた樣なおちつきのない場合には、どんなものでも旨く食べられるものではない。光線の具合のいゝ室で、矢庭に這入つて行つても、直ぐ自分の席を見付ける事が出來ると旨く食べる事が出來る。而して其れが食味に好い感情を添へる。

私の求める女―食物

鈴木三重吉

私は日本人だと云ふ考を何時も持つて居る。然し西洋の者も少しは讀んで居る。私は小説家ぢやない積で居る。然し小説を書いて居る。種々な理由で書いて居る。あんまりいゝ理由では無いが兎に角まあ書いて居る。けれども自分が書きたいと思ふものを書いて居ない。嘘ばかり書いて居る。どう云ふものを嘘かと云ふと、自分の經驗しない事を書いて居るのである。

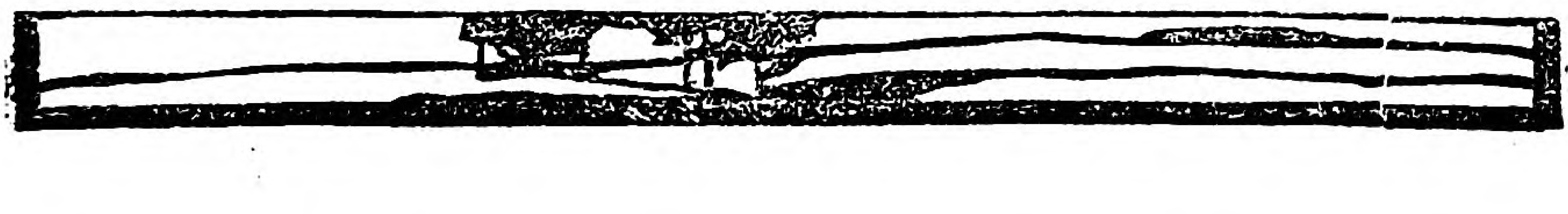
嘘を書くと云ふ事も色々の意味がある。けれども私は自分の書きたいものを書いた事が無い。



奈何云ふものを書きたいかと云ふと、女と云ふ點から云へば、女らしい女を書きたいと思つて居る。此の女らしい女と言ふのは色々な意味がある。それは人によつて違つて居る。

私が書きたいと思ふ女らしい女は、私のお母さんの樣な女を書きたいと思ふのである。言葉をかへて云ふと、自分の欲しいと思ふ女子を書きたいのである自分の欲しい女子には色々な特質がある。食物に對する事などは微々たるものである。斯う云ふ點から見ると、食物の問題によつて、私の求める女がきまるきまらぬと言ふ事は無いのである。食物よりも急ぐ問題は外に多いのである食物に限らず、何に依らず、私は自分が貧乏な故かも知れないが、美い着物を着たり、旨いものを食べたり、美い容色を持つて居る女を見て、自分が欲して居る女子は此の樣な女では無と云ふ氣がする。それはある階級の人に取つては、いづれも必要な條件かも知れない。もし此處に私の境遇が違へば、又私の此の考が違つて來るかも知れない。然し此の話は私の樣な境遇でない人の爲に話して居るのではない。私の樣な境遇の人に味方を求めて話をして居るのである。

僕はいつも道を步く人間であるが、折々電車に乘つて見たときに、電車賃を出すのに、一錢銅貨を九枚數へて往復切符を求めて居る女を見る事がある。其れを見ると此の女は僕に近い女であると云ふ感じがする。若しも其の女が、自



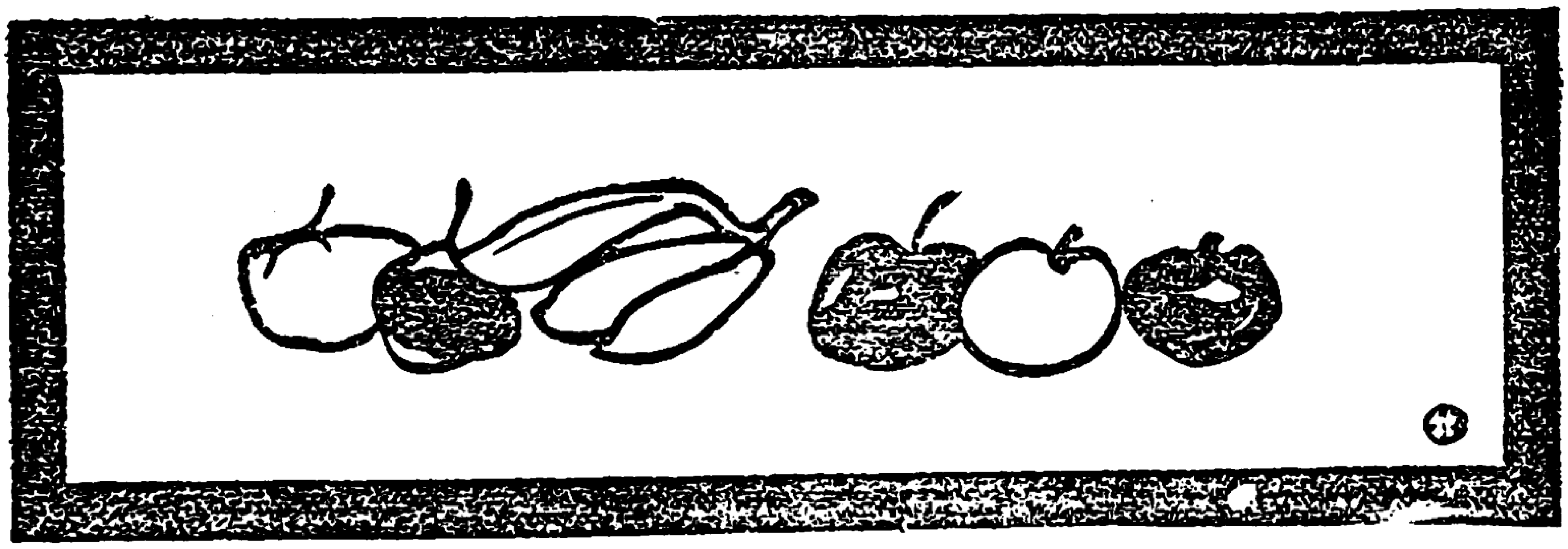
分の母として、或は姉妹として、耐え得る程度の容貌を持つて居るならば、——そう言ふ程度の女であるならば、(此處に重要な點がある) 此れが女らしい性質であるならば、僕は同情するです。

而して私は、そう云ふ程度の境遇にゐる婦人が、或は其の婦人の子が、孫が、そう云ふ點を中心として、自然に發達したものであるならば、杉の木の木理が年數によつて一年毎に木理を増して行く様に、無理がなく、だん〳〵と進化して行つたものならば何を贅澤しても惡くは無いと思ふ。道德的に、或は經濟上から、自然に進歩發達をして、所謂輝く様な婦人になつたならばいゝ。

日本で今貴夫人と云つて居るのは、僕は直接には知らないが、想像して居ると、成り上り者が多い様である。相場師などの様に境遇上の成り上りものは、まだしもであるが、精神上の成り上りものは非常にいけないと私は思ふ。

其の様な精神上の成り上りものが、往々にして、婦人の社會を代表して居る様な傾向がある。或はそう云ふものが代表して居る様に、世の中の人が思つて居るかも知れない。かう云ふ様な意味に於て、所謂立派な着物を着、立派な周圍を有し、立派な装飾を有して居るのを見ると、どうも私らは仕様がない。

食物の點から言へば、私が只今侯爵と假定する。私は侯爵であつても、窓を開けて、豆腐を買ふだらうと思ふ。侯爵には、そう云ふ事は出來ぬと云ふかも知れぬが、そう云ふ意味にたとへを取つて呉れては困る。



言葉をかへて云ふと、私は私の自然に生きると云ふ事である。藝者が、然も車夫の娘に生れて賣られたる藝者が一躍して、侯爵夫人となつた生活は、年數にならされた結果としては自然かも知れないが、人間の自然な進化ぢやない。そう言ふ意味で、私を侯爵にしたら、矢張豆腐を呼びたいです。それで、況んや侯爵ならざる私は、私が窓を開けて呼び得る、自ら求め得るものを食ひたいです。

そうして、私の細君にも、そう云ふものを食はせるのが自然であつて、且經濟であらうと思ふ。それから私の考では、食物は人に食はせるものぢやないのです。自分が食ふのです。もし人が來て食ふならば、自分が食ふ心持になつて食はせるのが當り前だと思ふ。隨つて、人を饗應する場合でも、俺が食ふものを食つて貰ふと云ふ事が、尤正直であつて、尤意味のあるもてなしぢやないかと思ふ、人を饗應する時も然り。

そこで問題は、自分の境遇に應じたるものを、いかに旨く食はすかと云ふ事に歸着するのである。而して是れが重大な問題であると思ふ。

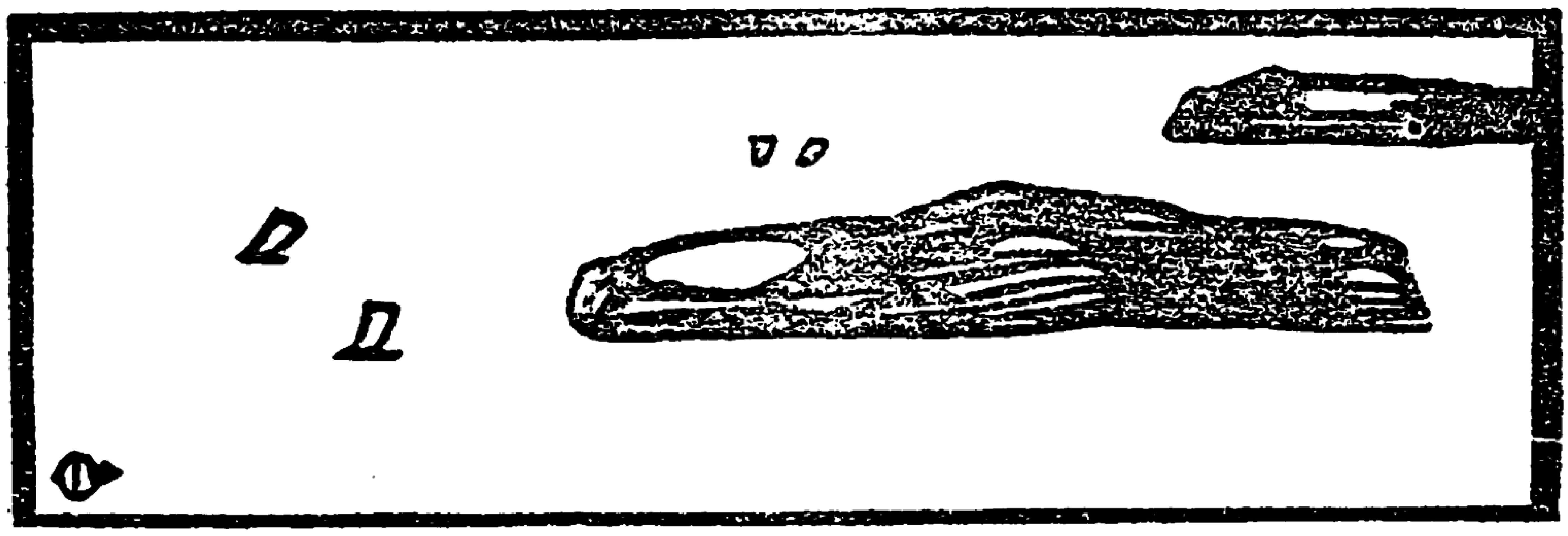
單に旨いものを食ふ。變つたものを食ふと云ふならば、時間と經濟と、人手さへ許せば、何でも食へる譯である。然して自分が食ひたいと思ふ、然るべきものを上手く調理して食ふと云ふ事が何よりの問題である。隨つて私は、もつとも簡單に得られるもの、手續きの簡單にすむものを、境遇と經濟とに應じて

料理したものを食ひたいです。其の種類はいくらでもあるのです。例へば假りに十のものがあると假定する。十のものから二つづつ取つて、如何に變つた組合せが出來るかと云ふ事は、數學上のパーシュテーションが敎へて居る。そこで假りに四十くらゐあるとすれば、其の中から二つづつ取つて組み合せる。すると隨分澤山なものが出來る。そこで吾々の程度にある婦人が、食物の調理をする時に、先づ如何なる食料品を求めるかと云ふ事は問題でない。如何なる食料品を配合するかと云ふ事が問題である。

普通の料理の本を見ると、調理法はくはしく說いてある。原料品は澤山に求めてゐる。然しそればかりでは價値は乏しいものであらうと思ふ。

同時に又、方向を變へて議論すれば、自分の經濟が、或は其の他の事情が許す範圍に於て、一家の主婦は出來得る丈違つたものを求めると云ふ事が必要である。それから調理に對しては、自分からあらゆる經驗をつむ事が必要であるそれには、出來上つたものを澤山味つて見ると云ふ事も一種の經驗であるが、どうしても自ら作らうと試みる事が第一でなければならない。

今の多くの婦人方は（私の接したる）料理は洋食を如何にしてこしらへるかと言ふ事等を苦心して居て、其の苦心の結果として、焦げた洋食等を食べさせてくれる樣な事がある。此の苦心は極めて尊重すべきものであるが――ところが此の洋食の製造者が、漬物の漬け方を知つて居らない。是れは顚倒してるで



す。それでどう云ふ品物を用ひて、食物を調理するかと云ふ事は、私の説くべき問題ぢやない。別に其の人があるです。

私は若し――お役に立つならば（立たなくても關はんです。）私の食物に關する意見を一つの比喩として、婦人全體を論じて見たら面白いものと思ふんですが、これも私の任務ではないのです。

三月頃の筍、五月頃の胡瓜

川路柳虹

面白い題をお擇みになりましたね、私は人の家で一寸二月の『新小説』に出てゐる『酒、色、味』と云ふ感想をあつめたのを何の氣なしに見てゐて食味の嗜好がよくその人の性格を表はしてるのに微笑しました。『食味の感想』――（飲ものをも含む）と云ふ括弧の中の言葉までが、あの葉書を頂いた時の大變な感興でした。

私はまだ下宿屋の飯を食つてるものです。御馳走を始終食べてゐるものでありません。だから所謂結構なものは知らないのです。夫れにどての料理と云ふ立派なものにも出つくわしません。だから貧弱な舌と喉との經驗から申上げるより仕方がありますまい。と云つて旨いものは私だつて好きです。決して辭す



るわけはないのですが、未だ私を昏倒さすまでの旨い物にもぶつつかりません一體私はいくら好きであつてもあまり一つの食物に執する方ではありません但し飯は別です――、これは仕方のない習慣性ですね、吾々の祖先からの歴史的遺傳で止められないのです。がパンを常に代りに食へと云へば食へない事もありません。朝――ことに夏の朝などは飯が嫌になります。冷い珈琲か牛乳にパンを食ふ味は快よい氣分を起させます。

私の好きなものは概して淡白なものです。支那料理の樣なゴテ〳〵したものは嫌ひです。肉類は大體好きですが油味の多い處は嫌です。從つて天麩羅なぞも強いて食ひたいなどゝ思つた事がありません。私の一番閉口したのは馬肉です。一度無理に友だちに強いられて食つて見ました。これ丈けはどうもやり切れません。ビフテキ、シチウ、カツレツなど大好きですがカツレツは牛よりも鷄が好きです。西洋料理の中で一番うまいと思ふのがビフテキをのぞいては、チツキンカツレツです。夫れからサラード、ことにハムサラードは好きですねあの薄紅い薔薇のやうな肉が青いキヤベージと共に皿に載せられて出る時は眞に愉快な心持がします。食ふにも矢張り目の感覺が支配しますからね、赤兒の死骸のやうな鶩の丸煮なぞは見た丈でも厭になります。

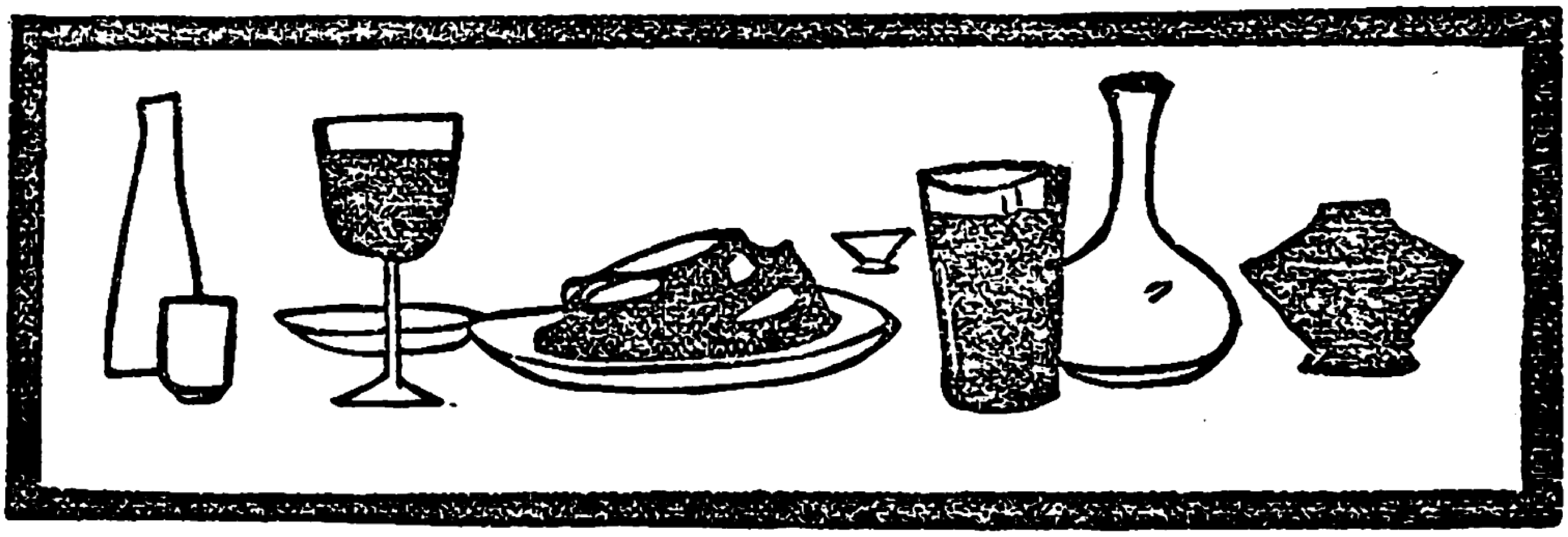
そこへゆくと日本料理は綺麗です。夏目さんの「草枕」に大變日本料理を激賞してあつたがあの色彩本位の論法からゆかなくともたしかに裝飾的で良うムい

ます。私は日本料理では刺身と吸物と口取りを激賞しますね。刺身は魚を擇みません。たゞ新しいのをとります。海のわきで育つた私は遺憾乍ら山の手の赤い刺身にはあまり贊成が出來ません(ことに下宿のはね)、刺身に關連してあのツマです。あれが私は大好きです。ツマのない刺身の皿には調子がありませんと同じく西洋料理でもあの赤茄子を愛しますね。可憐な少年の唇の樣なトマトオを見ると接吻したい位です。夫れから吸物はごく淡いもの、あの白魚に一寸海苔を入れたなぞは一番好きです。味噌汁は嫌です。口取りは子供の時分口取食ひと云はれた位好きでした。栗の金とん、隱玄豆、羊羹なんでも好きです。概して豆類は好きです。あの青い鞘豌豆や、十五夜時分の畔豆と云ふ奴、お正月の黒豆みんな好きです。辛いものでは生薑、山葵などの刺戟物を好みます。

夫れから初物と云ふものは何んでもいゝ感じがしますね。三月頃の筍、五月頃の胡瓜などは、ほんとに心持のいゝ新しみですね。

菓子は皆日本のがいゝと思ひます。割り合に甘黨の私は日本菓子を擇びます。大變な工場で造らへ上げる西洋菓子はちつともAfectineでありません。

菓物では林檎、バナヽ、蜜柑、苺などを好みます。梨、柿はあまり欲しくありません。林檎の齒切のいゝ事、バナヽの舌ざはりの豐かな事。蜜柑の汁の喉を流れる味は、いつも何んとない藝術的興趣を惹きおこします。新しい藝術の味は林檎を嚙む時の樣な味ひです。それから柑子の匂ひのいゝものは懷しい



人を思ひ出す樣です。苺は牛乳へ入れて夏、氷とともに掻き廻して食ふときが一番美味いです。それからパイナップルも好きですよ。

飮みものゝ中では紅茶、珈琲、コヽア、牛乳みんな好きです、お茶は大さわぎやるほど好きません。

酒を飮む時はビールか、日本酒です。私は愉快になるために酒を飮みます。日本酒のいゝのは心持ちがようムいます。しかし多くではありません。夫れから一寸話し乍らリキユール、グラスにつぐ酒はほんの一杯ですね。

キユラソオ、ベルモツト、ベネデイクチンなどを好みます。強いヂンや、アブサントはとてもグツとはゆきませんからね、それからウイスキーと云ふ酒がどうしても私は嫌ひです、何んだが藥のやうな匂ひがする樣に思はれて、それにあの素枯れた野の樣な色が左樣アツトラクチーブでないのです。葡萄酒も多くは飮みません。葡萄酒はたゞ懷しい感じがする丈けです。

煙草は西洋の強いのは御免です。あれは喫むのではない吹かすのですね。夫れからあの葉卷などもたゞ嗅ぐ丈けですね。味覺には遠いものでせう。たゞ贅澤品として香水を嗅ぐ樣な氣で葉卷は好みます。私の常用は世間一般の敷島芙蓉、刻みでは「さつき」です。疲れたときの心のやり場所、只ブラリとしてゐる時、製作や讀書のあひ間に平凡なる煙を平凡に煙管から吹かしてをります。イヤ大變長くかいて終ひました。もうこの邊で措きませう。



飽きたる羊羹

服部嘉香

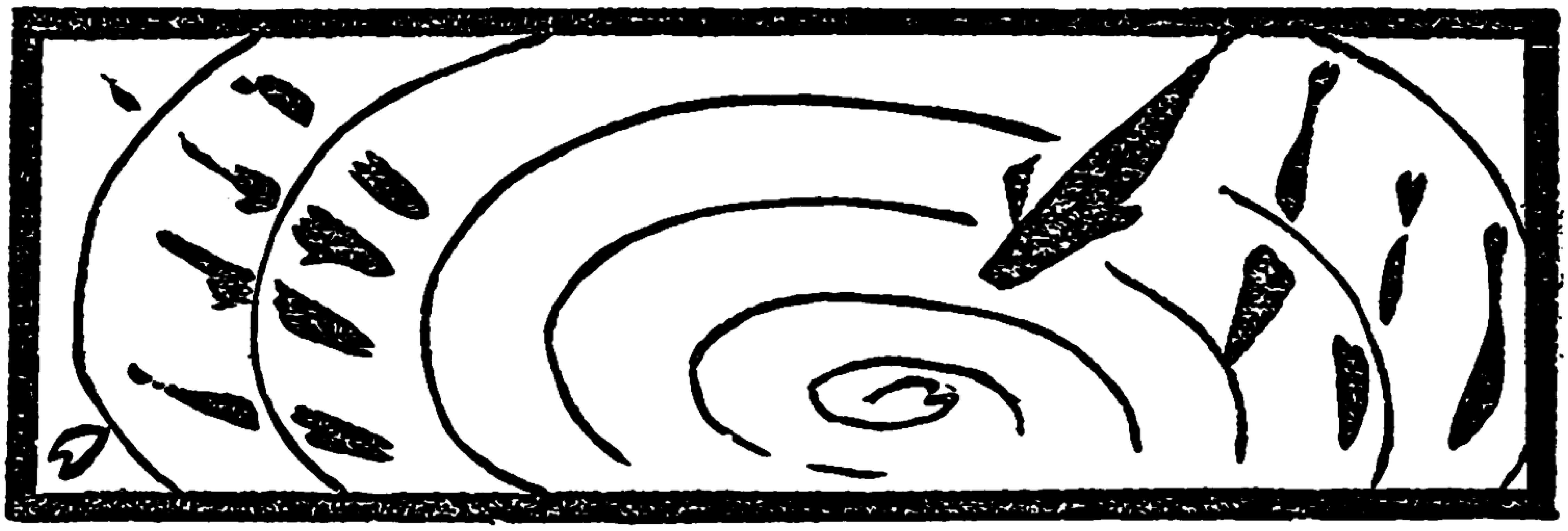
○

私は一體に感覺の鈍い爲めか、食べ物に對しても格別深い好き嫌ひを感じた事が無い。食ひ意地の張つた方だから、食べさへすれば可いので、別に細かく咀嚼翫味する事も無かつた。あまり體裁の好い話では無いが、「食味の感想」などと云ふ問題を前に置いては、通がつた事も言ふ事が出來ない。

名物に旨いもの無しと云ふ事は聞いてゐるが、その名物も私はあまり食べた事が無い。旨いもの無しと云ふ事が眞理だか嘘だか、其れに就いても自分には實驗上の智識が無い。東京のものでも、天金のてんぷらを食べただけで、その外には何があるかも知ら無いくらゐである。

○

それでも嫌ひなものは二つある。それは慈姑に納豆。人間の肛門のひからびたやうな仙臺のホヤ――香もあまり好いものでは無いが――を可なり旨いと思つて食べた事はあるが、それでゐて納豆は食ふ氣にならぬ。全くの食はず嫌ひで、筋を引くのが見て不愉快なばかりで無く、母などが食べてゐるのを見ると



何となく嘔吐を催すくらゐである。

此の二つのものを除けば大體普通のものは口に入れてゐる。何でも食べる爲めに、自然味覺が鈍つて、極く幼稚な甘い辛いの區別しか知り得ない人間となつてしまつた。

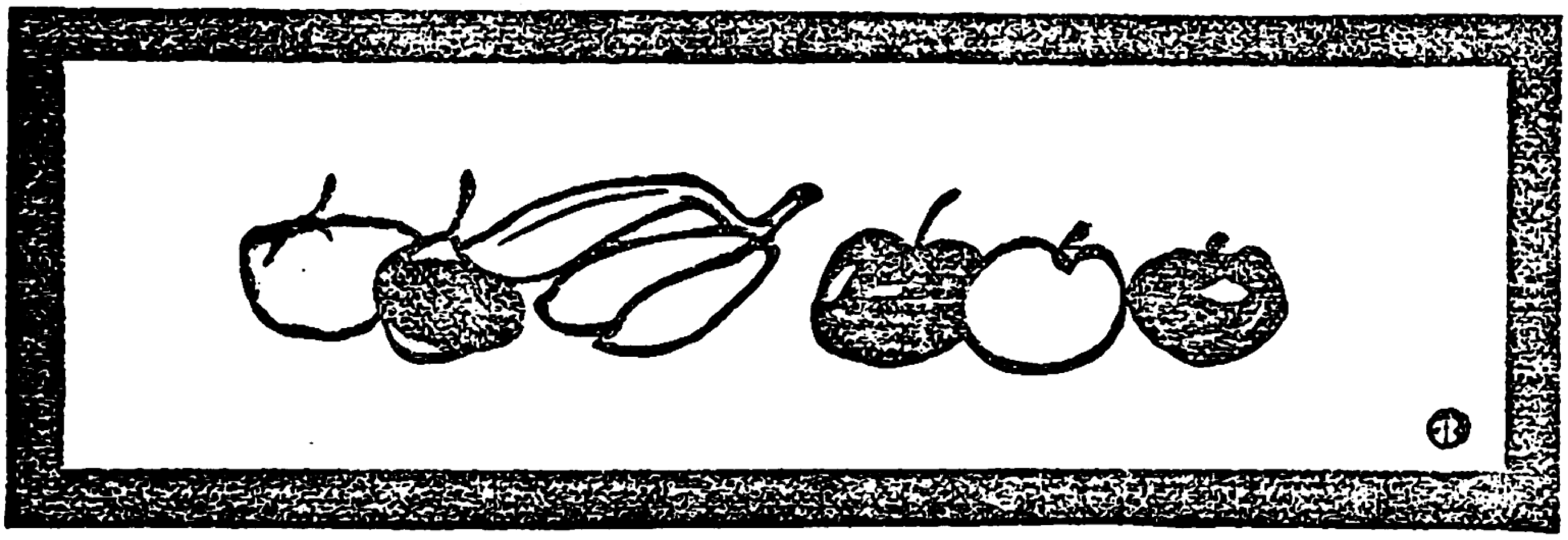
○

河井醉茗氏は果物が嫌ひである。是は千人中の一人に見るやうな奇蹟に近いものであらうが、時候々々によつて何となく心を誘はれるものは、やはり香の高い果物であらう。とりわけて好きなのは、林檎に柿に苺、私の故郷にある內紫――例の朱欒と同種のものかとも思ふが――は、いつまでも忘れ得ない味はひがある。

○

菓子では日本のものは羊羹。羊羹だけは色んなものを食べてみた。榮太樓や風月や青柳で少しづゝ買つてみたり、大垣の柿羊羹、栃木の干瓢羊羹、靜岡のわさび羊羹、何でも羊羹と名の附くものは大抵食べてみた。私が腸加答兒で寢てゐる時に、藥の後口に羊羹を食べたといふので親類間の笑ひ草となつてゐる。

小さい時から甘い物が好きで、たうとう其の爲めに胃腸を弱くして了つた。今では大分飽きが來て、澤山は食べられないが、羊羹だけは種類の何たるを問



はず幾らでも食べてみたい。

西洋菓子ではドロップ、マシマロー、平凡なものばかりが好きである。

○

酒ではキユラソーとベルモット。女の好みさうなものばかりが好きだ。ホイスキーは飲めば直ぐと脊筋のあたりがうすら寒くなつて醒めて行く、その心持が忘れかねる。ビールは好きでもなく嫌ひでも無いが、三本ぐらゐは飲む。

私は初めは甘い物好きで、酒は自分でも飲めないものと思つてゐた。ところが實際飲んでみると日本酒は五合ぐらゐまでは何とも無い。醉はうと思へば直ぐに醉つて了ふが、醉ふまいと思うといつまでも醉はない。

○

西洋料理は何でも旨い、神樂坂の東陽軒で、一しきり品書きにあるものを十日ばかり通つて片ッ端から一つ〱食べてみた事がある。然し長つゞきのしたのはハムサラダだけであつた。

龍土軒へも鴻の巣へも行つた事が無いので通は言へないが、カフエープランタンで二三度フランス料理を食べてみた。それと帝國ホテルで友人の結婚披露のあつた時は、珍らしい念入りのフランス料理であつたが、名を一つも覺えてゐない。內へ歸つてから覺えて置かうと思つてプログラムをポケットへ入れて歸つたのに途中で無くなしたので、遂に覺える機會が無かつたのである。

林檎の山椒和に鯡の燻製

生方敏郎

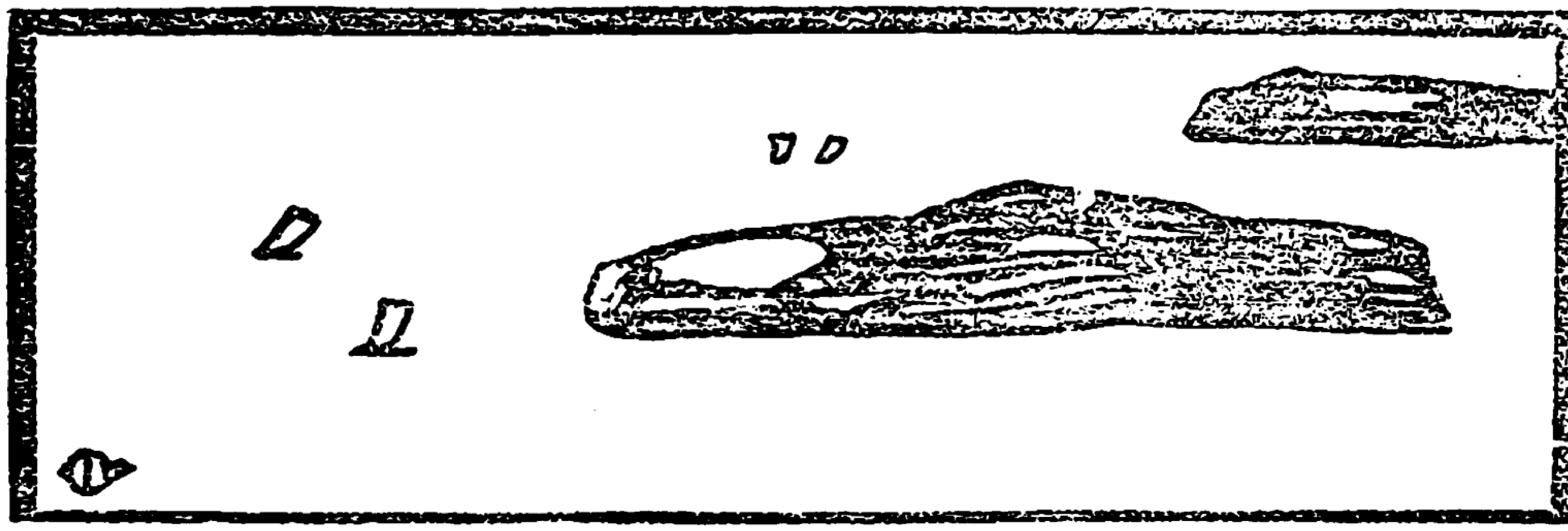
嫌ひな食物から云ひませう。僕の嫌ひなものは南瓜、胡麻よごし、鹽辛いもそれに豆腐も嫌ひです。江戸つ兒ぢやありませんからね。

好きなものは僕は取り立てゝ、是れと言ふ食物もありません。唯淡泊したものでありさへすれば何でも好きます。

一度僕は饗庭篁村君の家に行つて、晩餐に實に甘いものを食べた。それは綺麗な皿の上に、林檎の山葵あえと、ニシンの燻製をつけてあつたのを食べた時です。僕は此のニシンの燻製に舌鼓を打ちましたよ。其後の事ですが、理學博士、岸上鎌吉氏に逢ひましてねニシンの燻製が實に美味かつたと話したら、岸上君の曰く、それよりも更に甘い物がある。其れは鮭の燻製だ。一度君に食べさせたい、とかう言ひましたね。

僕が今まで甘味かつたもの丶記憶と言へば此れ位です。

※　※　※　※



母より遺傳の鮓の味

金子薫園

小生は食物に際立つた好き嫌ひはない。でも申さば概して濃厚なるものよりは淡泊なるものを好んで居る。即ち濃厚な西洋料理よりは淡泊な日本料理が好きです。

日本料理でも、刺身とか、すのものとか云ふものが嬉しい方、さうした嗜好から延いてすしを好きます。すしの中にても鮪をつけたもの、赤貝をつけたものが舌に心好く感じます。自分の好む所から、客等にもよくすしを出して笑はれます。

可笑しな事を申す様ですが私がすしを好きなのは、母の遺傳です。亡くなつた母は最も鮪のすしを好んで居ました。生前よく『私が死んだら命日命日にまぐろのすしをあげておくれ』など笑つて申されし位好みました。

酒は嫌ひではないが自ら進んで飲まうと云ふ程ではありません。客などあれば相手になつて、一二合位は飲みます。西洋酒よりは日本酒がよいのです。果物は、バナヽ、無花果、柿、葡萄（日本の）などが好きです。



周圍の空氣と自分の心持

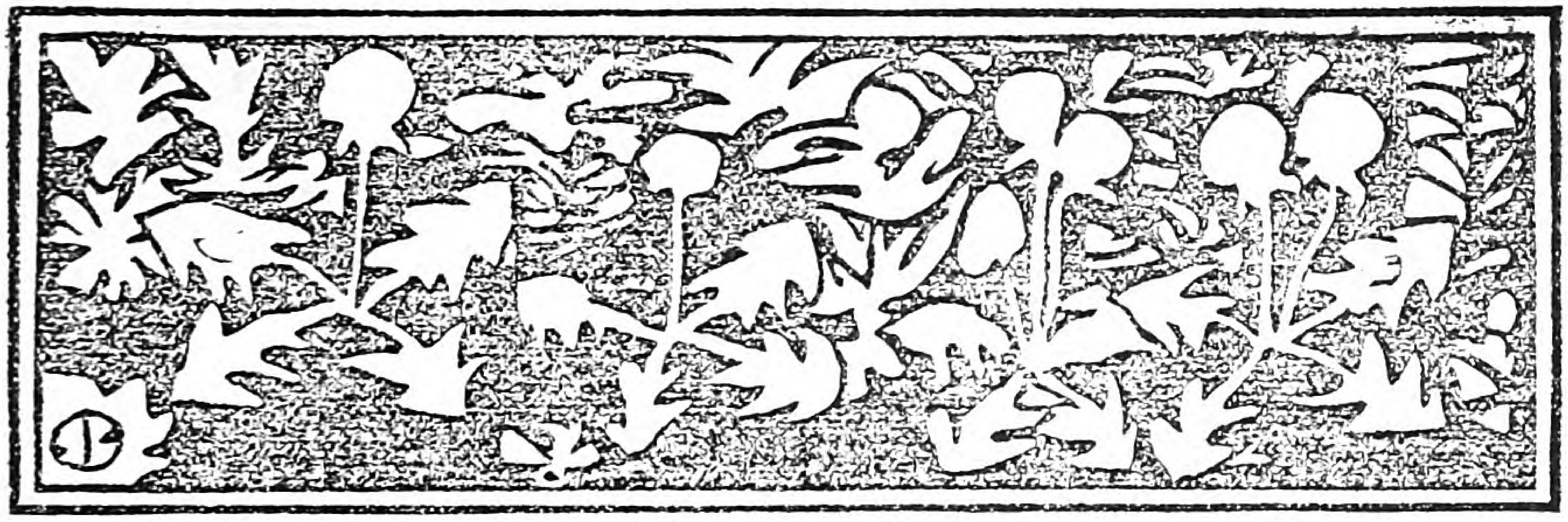
福田夕咲

僕は取り立てゝ云ふ程の好き嫌ひは無い。食物に對しての好惡と云ふよりも周圍の空氣、或は食物から自然に起る樣々の聯想と云ふ事によつて味を好くもし、惡くも感じて居る位である。

で、僕は幼い時の事であるがよく、金平糖と云ふものを食べた。又ニッケイ水と云つて、赤い色や、青い色や、黄色い色を染めた水を、薄いガラスで球や瓢單の樣に製つてある中に入れたのを、飲んだ事がある。其の樣な事を考へると、今は直接に食べなくても、其れ等の味を思ひ浮べて、子供の時代の思出を樂しく感じ、思ひ出が亦、味を洗練して、一層スヰートな味に思ひ浮べられる。

どうも金平糖の樣な日本の菓子は、甘いけれども單調である。ドロップの樣な西洋菓子が持つて居る複雜な味、複雜な匂が直ぐ感覺に觸れて來ると云つた樣な事が無い。然し乍ら、僕に取つては、複雜な味と匂とを持つて居る西洋菓子よりも、却つて單純な甘さの金平糖の方が好きである。

周圍の空氣と云ふ方から見ると、和服を着て居る時には、淡泊した日本風の



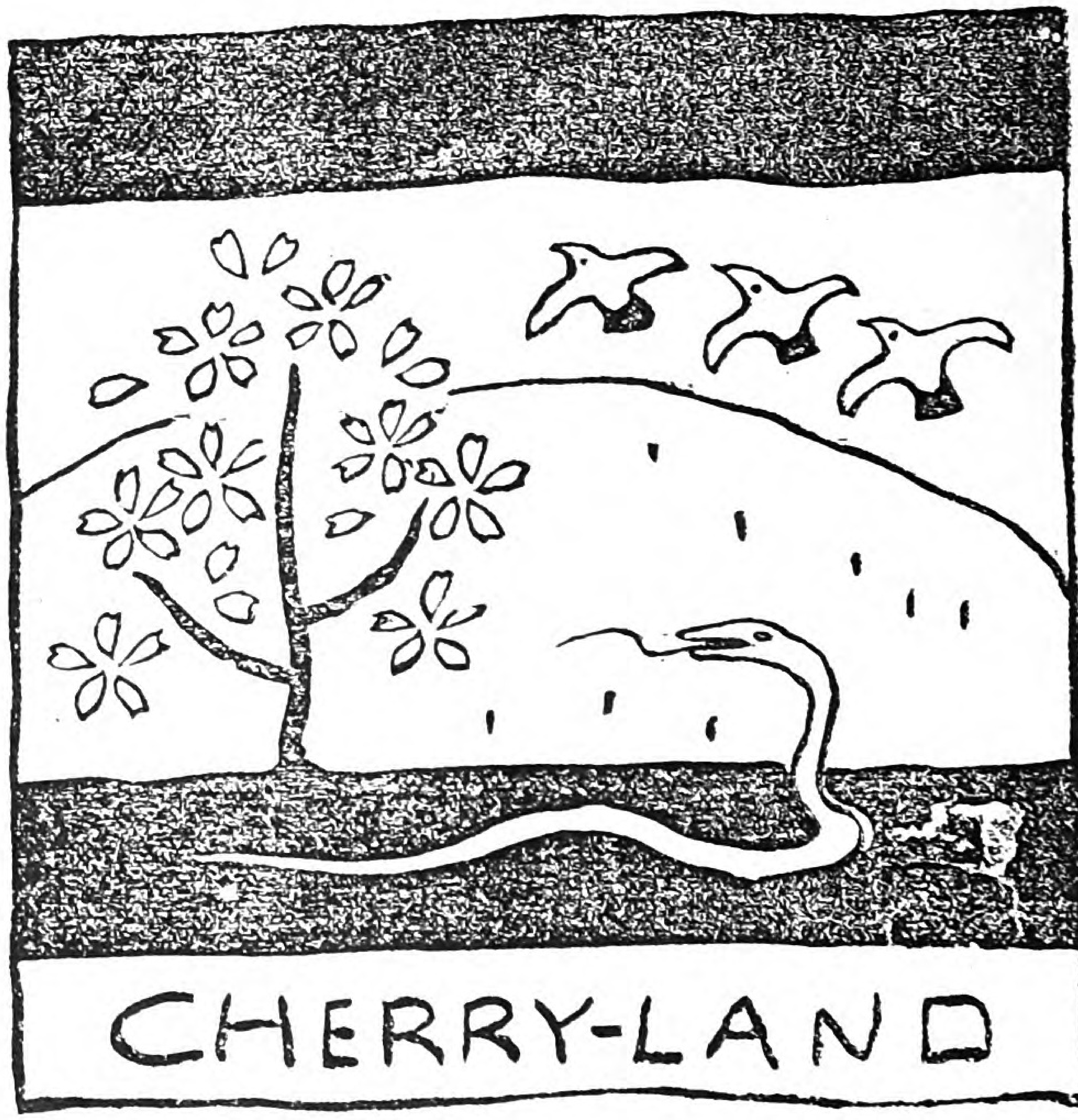
食膳に向ふと云ふ事が心持が好い。洋服を着て居る場合、仕事に出掛けて行つた時等には洋食を取つた方が甘いと思ふ。

酒は、強い西洋酒を飲んだ方が好い。

凡て氣候と心持とにあてはまつた食事をするのが一番うまいので、冬などは冬の感覺が喜ぶ樣な食物を取りたいものである。例へば、ねぎまに上燗の強い酒を飲むと云ふ事が、非常に舌の感覺に滑かに感ずるのである。夏の暑い時汗みどろになつて歸つて來た時分には、平凡な話ですが、冷やゝゝこに熱くない酒を飲むのが心持が好い。又其氣分にかなふと思ふ。

何人によらず食物の好き嫌ひと云ふ事は主觀的のものであるから、一樣には云ひにくい事である。つまり自分がAと云ふ者を望む時にBと云ふ者を持つて來られると、Bと云ふ者の味が極めてまづいものとなるのである。Aを求むる時にAを得る事が出來、Bを求むる時にBを得られたならば、始めて美味を感ずるであらう。





繪日記

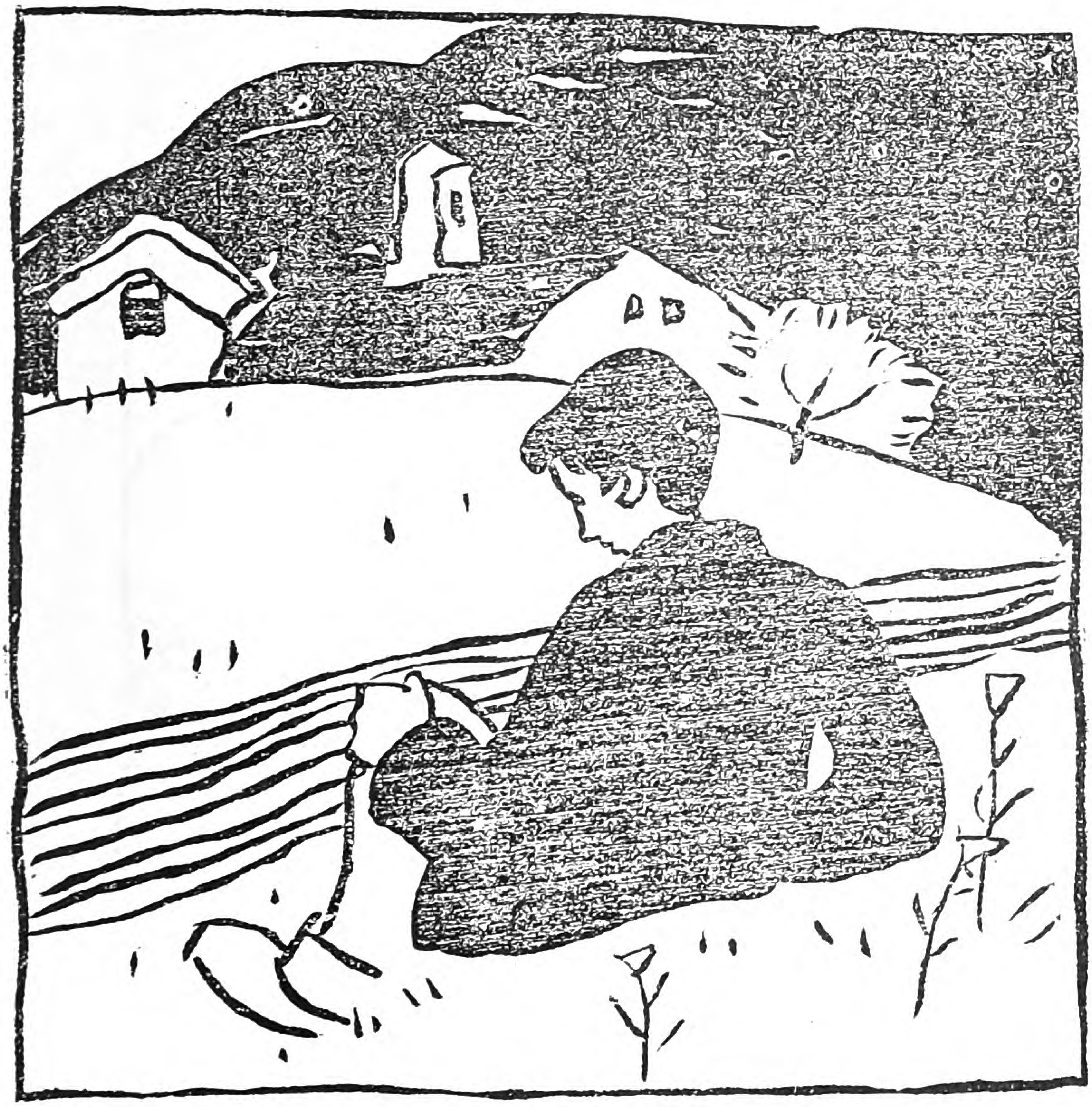
竹久夢二

この頃、私のスケッチ帖には繪よりも文字の方が多く書かれるやうになつた。また近いこの頃は、何も書かぬことが多くなつてきた。

必ずしも、見ること、もの思ふことがないためではない。

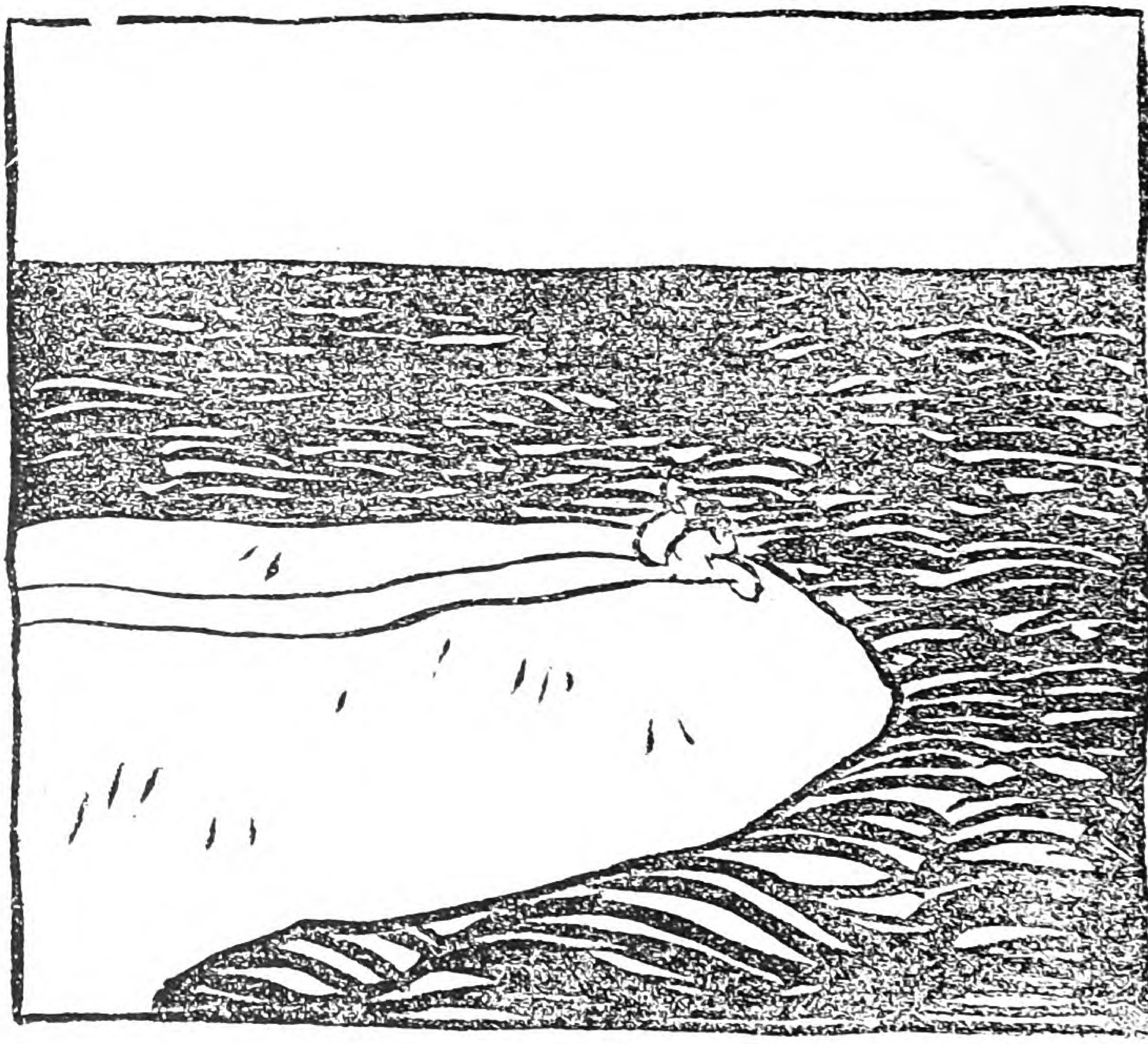
近頃はまた、親しく往來してゐた友人に逢ふのさへいやになつた。話しても合奏出來ないし、人間の顏を見れば腹がたつ。

必ずしも、世の中がいやになつたのではない。私には、白紙のまゝの日記の方が意味がある。「繪日記」と言てもいつの日記だか私は知らない。スケッチ帖には、なんにも書いてはない。



岡にて

夜は夜とて
カアッチ、カアッチ、と木の頭
幕のあくのをまつ心。
晝は晝とて
三味線草に身をなげて
あの夜の人をまつ心。



岬にて

ふたりの「路」はつきて「岬」へ出た。

俺はそこへ腰かけて、暗い海を毎日毎日ながめてゐた。

どこの港からどこの島へゆくとしも知らぬ船が、何艘も何艘も岬を廻つた。

黒い煙を殘してゆく船、赤や黄の帆をあげてゆく船もあつた。

「私はもう歸ります」と女が言つた。

女とは、來た「路」を何度でも引返し得るものだつた

そして、また他の「逸樂の門」をたゝいて、そこの「家」で、またムスメの涙を流すことが出來るんだ。

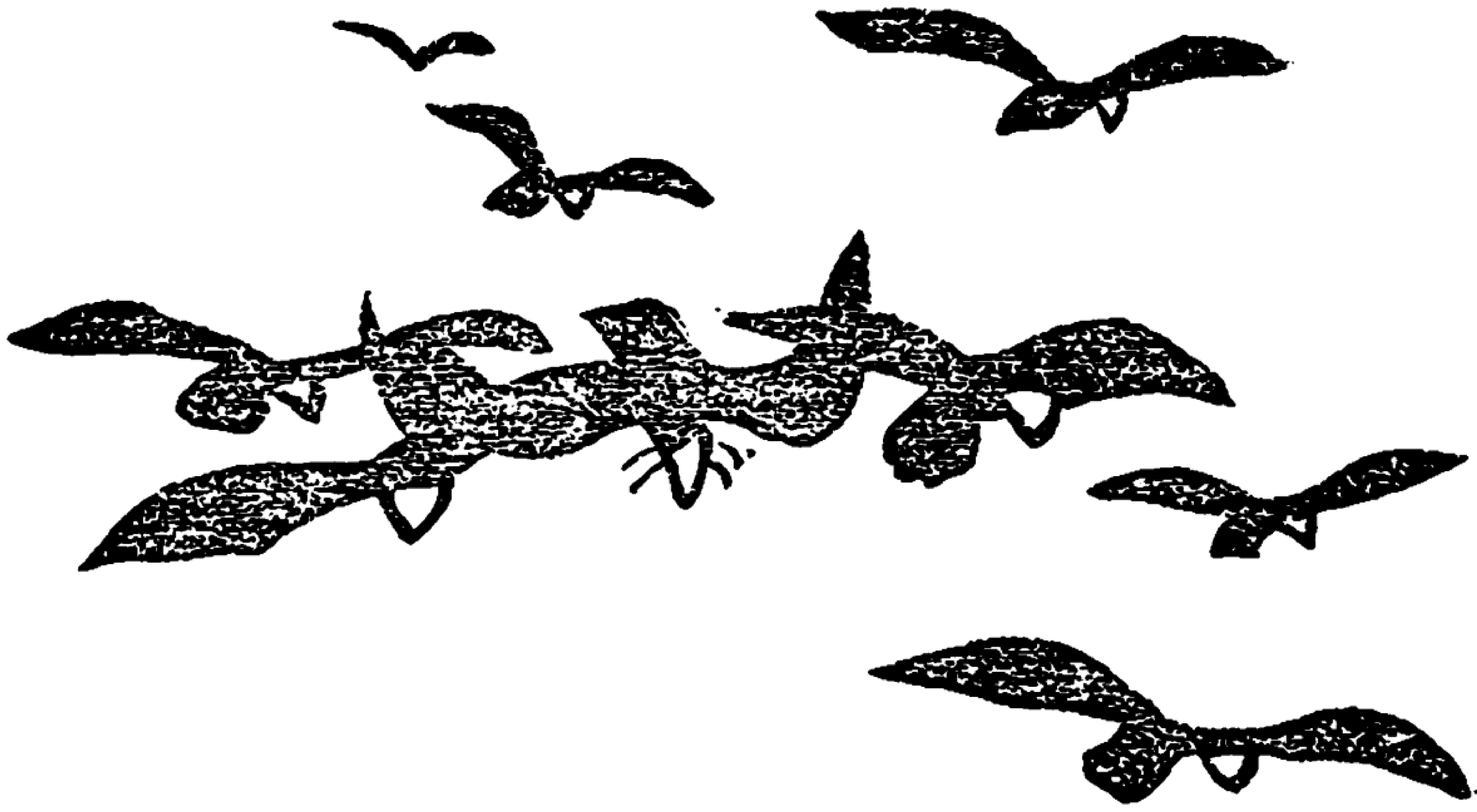
「常春の女」よ。おさらばだ。

俺は、この岬に今日も今日とて「見しらぬ島」を望んでゐる。



黒門町にて

春だといふのに
雪が降る。
黒門町の繪草紙屋の娘の
出來ごゝろな夢を
そつと覗きこむ
浮氣な春の雪。
ちらり、ほらり
歌麿の女の臑へ
消える淡雪。



畫室にて

――然し、掟られた運命のあるつたけべん〳〵だらりと生きのびて、與へられた末期におめ〳〵死ぬなんていやなこつた。好いかげんな所で見切をつけたいものだ。机の引出には青い薬を忍ばせてあるし、ピストルも持つてゐる。僕はその機會をまつてゐるんだ。

――上野の動物園のまへに、枝ぶりの好い櫻の木もあつたつけ

――でもひとり死ぬのはいやさ。まだ若いんだもの。

――だが君の美しい機會のかはりに死の運命の方がさきに來たらどうするんだい。まさか、死の神と情死も出來まい。――……

――天才の夭死を悲しむばかりさ。

――無理心中てやつは君のやうな男がするものだ。

――だが俺は無理心中がほんとの心中だと思ふね。合意の情死なんていふなア、ありやうそだ。俺は相手の女を無理に道連れにせうとは思はないが、好きな女に頼まれりやいつでも死んでやる。少くも、自分が死ぬといふ心持に僞りはないからねえ。



山の手にて

知らぬ女に
アスクしたいよな春の夜。

アメリカのオオルドミッスに
跡いてゆく
ニッポンのマンネンムスメも
げらく笑つてるよ。

孕んだ小犬が
おどろいて逃げ出す。

主のない娘の丸髷を
浮氣な春の月がかいまみた。

ても、氣にかゝる春の夜。



新橋にて

（告知板）。

とう〱THE ENDが來ました。隨分、長い間可愛がつて下さつた。お蔭で女といふ幻の素顔も見たし、見知らぬ少年の謎をも解いて下さつた。感謝に堪へませぬ。

出發は九時と言つたけれど、故あつて七時半で立ちます。また思の殘るやうな涙を見せられるのがいやですし、たとへ二時間半でも早く、私からあなたを捨てるといふのが嬉しいんです。ではおさらばです。

Sより。

姉と呼びけるAさんへ。



銀座裏にて

紺の蛇目に
うす日がさせば。
死んだ螢の襟あしへ
ひやりとおちるおくれ髪
わたしや輪廻がおそろしい。

綠野

本郷　平塚白百合

青桐はスウ〳〵とのびて、落ついた雨上りの朝の空はさわやかに、白い花からあけた。

野を流れる川にはそゝられてこみ上げるやうな音とまぶしい程かゞやく野の光にいき〳〵と汽車は走る。

サラ〳〵とくる風は小さい草の葉や花に一つ〳〵鈴をかけてゞも置いたのかのやうな擦音をひゞかせて、綠の野を時々吹き過る。

夜明には青鷺のわたる聲を、夢のかづきのやうな霧の中にきいたが、頓てかうした綠の蒸すやうな日ざしとなつた。（二等）

白い手と赤い糸と

横濱　千鶴子

春の光は薄すりと、店の中程迄流れ込むでる、硝子の中の高砂の尉と姥と、赤と白の積綿が、ぱつとした色彩に映えた、娘は絲車の側に默坐つて、昨日も今日も、高く結んだ赤い帶に淡く日が當つてる、高い鼻と心持つり上つた眼と、細面ての顔の輪廓が浮出た樣な………。

花瓦斯の青白い光りは娘の顔を横から照して、眞白い襟足に赤い襟はかすかに見えて、緋鹿子かけた結綿はゆるらゆれた、きり〳〵と絲車がなつて、くる〳〵廻る、ルビーの光る細い手はそれにつれて動く、苧環の赤い絲と娘の白い手ともつれて……　……。

くる〳〵絲車が廻る、耳元の赤く色づいた、白い手

と赤い絲と。痩せた若い男の瞳はじつと見守つた、絲を渡す時娘は上向いた、男の眼を見ると、女の頬は赤うなつて、眼を伏せた、男は小さく笑つた。

くる／＼絲車は廻る、赤い絲と白い手がもつれて‥

（三等）

深川の河岸

深川　矢澤榮子

油川の水は、にごりに、にごつて、ゆら／＼と流れて行きます、淺野の煙筒から眼に見えない樣な灰が降つて來ます、家も人も灰色にしづんで、街の色はすべてにごつて居ります。

生木臭い材木のいかだが、にごつた水の上を靜かに靜かに流れて行く、若い男は、いなせな姿でいかだをこいで行くのです。

河岸から‥‥河岸へ‥‥河岸づたひに、若い女が通つて行きます、油氣のない銀杏返し、黄楊のびんかき横へさして、素足に白桐の小町下駄、ハタ／＼とつまさばきもやさしくて、墨繪の長どうぎが仇にこぼれるさびれ行く江戸の面影を悲観して居る私は斯うした昔なつかしい深川の女の姿を見て、わけも無く嬉しかつた、女は河岸から河岸へと姿は消えてしまつた。（三等）

嚴寒

百瀬ひで

花がさいた。常磐樹へも枯木へも花がさいた。大雪がふつてから今日で三日めだけれど、まだ雪はさほど減つた樣子も見えない、寒暖計が華氏十五度である。近年にない嚴寒だ。道を歩くと、キユッ／＼と齒の浮くやうな音がする。冷たい空氣が全身を、針をさすやうにおそつてくる。頬が痛い、息をすると胸の奥まで氷るやうだ。遠くの冬木立は、丁度細かい／＼白い花が眞盛にさいたやうで美しい、その中でも榛の木は實に美くしい。遠い所はあゐ色に煙つてゐる。あたり一面朝日にキラ／＼と輝いてゐる。木々の梢から、眞白い花がたえまなくヒラ／＼ヒラ／＼と落ちてゐる。（三等）

渚の春

森本俊子

母と私は、青く延々した麥畑を耕す手を止めて、小高い砂山に上つた。コバルトの空から、春の太陽は、かつと照り付けもせず温い。幾本も並んだ磯馴松の間

から、ちらほら見える藍色の海は、油を流した樣に恐ろしく靜かだ。白鳥か白帆か浮雲か、緩く隱岐の方に流れて行く。

『春のうら〻の隅田川――』透る樣な清い歌に、ふと渚に瞳を落すと、妹と二三人の群が花貝拾うてくる。白い廣々とした砂濱に打上られた藻や、石英や、雲母の粉末がキラ〳〵光つてゐる。若芽刈る舟が、幾つも大岩小岩を背景に浮んで、時々鎌や竿が鋭く輝く。松影の寫る所、取分て深い樣だ。

『サア、俊さんそろ〳〵仕事にかゝらう』母の聲に振向と、今年二つの弟が、母の白い乳房にすがつて、綿の樣なソフトな手で、母の頰の邊をいぢつてゐた。（四等）

閑日

茨城　紫色女

庭に筵が二三枚敷かれて、其の上に搗麥か干されてある。緣側に、お母あさんが、穿きふるした足袋や、ほころびた着物などを、とりちらして針仕事をしてゐる。その側にブチが寢て居た。折つた前足の上に、白と黑のある小さな頭が斜にのつて、吐息するたびに腹の方が、護謨風船玉をわすらするやうに、縮んだり膨んだりして……。私はブチと呼んだ。眠つて居た眼が靜かに開いた。瞳が瑠璃色に光つて目一ぱいに見えた。すぐ絲のやうな眼になつた。そしてブチは小さな欠伸をした。（四等）

落ちたる琴爪

麻布　百合香

梅が香にさへ昔偲ばれる今宵、濕やかに降る春雨、音は處女の胸に―心に―可懷しう響く―俤人の聲きく如くに溫いやうで又悲しいやうな雨音―。寂しいけれど可懷く可懷いけれど淚がわく程物悲しい。器物の中の水鏡を亂すまいと勉める如に胸に浮ぶ―琴を好む人の俤を守つて靜かに立琴をおろす。夢よ〻淡き記憶の糸をたどり、好きな曲を――ゆる〳〵歌ひながらも心は―人の永別する日の悲哀を思ふこ苦しく―彈く手指も力なきに、新らしき爪は、爪袋から離れて白椿の花片の如に木目の上に一點を彩る。今迄じつと堪へてゐた遣瀨なの淚はハラ〳〵と零れて俯いた膝の上ににじむ。六疊一杯に照す電光は、曇つた目にも、指先の微細な慄きを明瞭にうつして―。いくぢなく物怖ぢする心

よ!!!。

外に雨音は猶も續く、亂れた鼓動と、セコンドを數へるやうに、兩手をソツと胸にあてゝ、靜かに目をとぢた。(四等)

眠るまで

江東の女

「今夜こそ!!!今夜こそ安眠しなければならない」斯んな事を思ひつゝ私は床に入るのが常だつた。けれど種種な思ひに惱まされて、偖ては、鼠の音に驚き、障子を搖らす風の音に身を震はせ……衣桁に着物の有りしを見れば、人が立つて居る樣に思はれ、針の先にも似たる感覺の鋭い神經は、闇にも明らかに物の影が見えるのだつた。「貴女に彼れが見え無いこと？」

義妹に聞けば、「義姉樣何も見えないものを、其麼こと云へば私恐くなつて了ふ」と。云つて、確と私に抱き付くのである。

熱せる額を十の指で押へて、私は、眼を閉ぢ「嗚呼！腦が痛んで來た」と、心に思つた丈で、聲は出さなかつたが、苦しさに絶え兼ねて、床を出ようとした時。「恐いッ！」義妹の叫びに驚き、私は後に倒れたつ切り、以後の事は夢中であつた。(四等)

××停車場にて

碁草

カツ／＼と燃える樣に火のおきてる三等待合室の火鉢へ五人が十の手を並べて當つて居る、太い赤黒い皮の硬さうな手、細長い色の白い節の莫迦に高い手、水水した太い丸い柔さうな手、指丈目立つて長い荒れた私の手の隣に、節の低いよく反る美しい手が二つきちんと並んでかざされた、四匁はかゝつてるだらう、延の指輪、一方は無地で一方は何か彫つてあつた、彫つてある方へ重ねて、明の星の樣な眞珠の細いのが嵌めてあつた、お召のコートから、銀鼠のショールからすうつと見上げた、脹つくりした頰、しまつた口元、格好のいゝ鼻、眉の落してあるせいか上瞼の脹ぼつたい樣なのがたまらなく美しい、惣髮にして心持根の低い髷が嫌味がなくつて、水戸迄と車夫に買した切符は青だつた、時計を見て、「大變待たなくつちや」と呟いたが、一二等の待合室へ行かうともしなかつた、私は淡いなつかしさを感じた。(五等)

＊　＊　＊　＊　＊

なつかしい思ひ出

近江　市川久子

艶やかな濃い桔梗色の空がはてしもなく續いて、遠い〱地平線の邊りにはまつ白い雲が湧いてあつた。蒸される如な花の香が生温い風に匂つて來る。赤いれんげ草や、黄な菜種、青々した麥畑…其れ等が皆、明るい光りの中にだんだらの如に美しく連なつてあつた。ビロードの如に柔かい花の中に寢ころんで、まぶしい空を見つめて居ると、小鳥の歌や、野川の水の可愛い響がだん〱遠くなつて行く。…するとお伽話の彼のきれいな天女がすつと降りて來て自分を抱いていつてくれる如ななつかしい心持でうつとり夢の如になつてると「久ちやんこんなに摘めたからもう歸ろうよ」よもぎの一パイになつた籠をさげて、いつか姉さんが立つて居た。……
美しかつた幼な心のなつかしさ。……（五等）

爪の斑

横須賀　貞枝

湯上りの、温たかい手に持つた銀色の鋏が、ヒヤリと右手の柔かい肉に傳はつて、何とも云へない、良い心持ちだ。白魚を並べた樣に、透き通つた五つの指は紅い電燈の光りを吸ひ込んで、肉色に輝き、其先の五つの爪は、一層紅く光つて居る。

右手の鋏は、パチ〱と快い音を立てゝ、左手の柔かい爪の先を切つて行く。親指―指し指―中指と、其次に遷つた時、突と紅い輝の内から眼を射た白い光りが……。おゝ是よ。過ぎし秋頃から、茲に現れて妹が着物星よと云つて羨んだのは。

是が出來ると必ず着物が新調さるゝとか、然し私は未だ一つも出來ない…夫だのに最う切り取つて仕舞はねば……。早や兩の手は切り盡して仕舞つたが、藥指計は長く延て、白い斑が眞珠の樣に光つてゐる。思ひ切て鋏を跨して見るが。噫忍びない。着物を慾しがる私ではないが……。（五等）

△短文に就いて　特に本號に限り募集しました短文は數に於ては非常に大多數に上りましたが、比較的傑作に乏しかつたので一等を缺きました、此處に載せたのは凡て入賞です、外に佳作と思はれるもの數十篇は誌友欄の方へ載せてありますから御覧下さい。（記者）

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

○女子文壇社から皆樣に御わけする化粧品類に就いて御質問下すつた御方々へ。美髮劑を使つて見たいが、代價及び使用法はどうの、姉妹劑(コールドクリームと乾肌劑)をわけて貰うにはどうすればよいのとの御尋ねを私に宛てゝなさる御方々が澤山ありますが、これには特に私に御尋ねなさらんでも其廣告欄を御覽になれば、誰にも直ぐ御わかりになることゝ、その規定の代價と送料とを御添へになつて社の用達部に御申込みになれば直ちに送品するは勿論、使用法も印刷されてありますから、別に私から御聞きになりませんでもと存じます、それ故茲に改めて其御答には及びませんから、今度右の化粧品類につき、若し御不審の點がございましたら私の方よりか直接社の用達部に御尋ね下された方が、相互の便宜であらうと思ひます。

○西川ゆり子さんよりの御言葉に因みて序でに一般他の質問を下さる御方々へ。毎度申上げる通り、化粧は個性的のもの、特に毛髮に於て然りと致します。されば等しく生際薄き人でも、それには各個殊別の原因があり、その原因をよく突止めた以上でないと、適當の方劑を以て御答する譯には參りませんのです。ですから此等質問者に對しては從來先づ其原因の調査から初めることですが、この原因の調査につきましては、勢ひ其方の體質上に於ける或秘密に屬することまでも御伺ひせねばならぬとがあります、と申して直ちにそれを露骨に御尋ねしては、或は鼻白ましき思ひをさせ、又はそれを意外のことゝして一種の疑惑の念を起させ申しても御氣の毒と考へ、一應その旨を申上げ、それに關し御答下さるか否かの御承認を受けることにして居るのです。斯かる考へは、餘計な警戒であると仰しやる方もあるでせうが、一面には私に對する誤解をふせぎ、一面御婦人方の人格を尊敬する所以であると信じてのことであります。處が先般西川ゆり子樣より毛髮上につき御質問を受けたので、例の如く其原因を調ぶべく、御同人の體質上に於ける或秘密に屬するとを御伺ひした上でないと正確な御答を申上げられないといふ意味の返事を差上げたのです。この返事は御同人の母樣の御手に開封され、其結果私に對して「單に方劑だけを返事して呉れゝばよいのに、體質上の秘密だなんていふ失敬なことまで書いて下すつたものだから大變な不首尾に終つた、實に御恨みします、もう思ひ諦めました、私は清い處女です」とやうな御葉書を頂き、今更ながら、私の女性といふものに對する警戒や注意の猶は足らなんだとを悟り、今後斯かる場合には如何に處して可なるかと當惑の外はありませんでした。一時はもう斯種の御質問には斷じて御答せまいか、それとも普通の生毛法を以てお茶を濁すことにしようかとも迷ふたのでしたが、私にはどうしても斯のやうな不信切な無責任な擧動は出來ぬので、現に今日まで斯種の問答に關し却つて皆樣方より御禮の御言葉さへ受けて居るのに、多數中の只一人、只一人の西川さんから斯く御恨みを頂いたからとて、他の御方々にまで累を及ぼしては何だか夜雨君の女性觀にかぶれるやうだと存じ、私は私の職責に對しその信ずる處を斷行すべきあるのみと決心を致した次第であります。で今後皆樣方の中に、斯種の御質問を下され、若し右樣の御迷惑ともならるゝ樣な御身上で、私に御怨言を賜はる程のことでしたら、何分初めから御質疑なきやう御願ひ致して置きたいと存じます。私は質問者より怨言を頂くべく、この大切な時間を空費して返書を認めねばならぬ程の義務を甘受する好君子人ではないのです。

○美髮劑の効果に關する質疑について。大抵五六本使つたら、もうサッパリとクセが直つたと云ふて禮狀を送られた方もありますが、今日まで三本使用しても、その當座だけは直つて居るけれど、また根本的に直らんのはどういふわけか、それとも使用法がわるいのかと仰せ越された方もあります。五六本位でサッパリと直つた方のクセは、クセ毛になられても年數が餘り長くないからでしたらう、でもなければ直り方が早過ぎるやうに存ぜられます。同時に二三本程

で根本的に直らぬと云ふて御叱りを蒙るのは、少々御無理ではあるまいかと申すわけは、同じ風邪に罹つた場合でも長いことコジラシた後と直ぐカシコマつて療養の手を盡したとでは、其直り方に遲速あると同樣、等しくクセ毛と申してもヒドイのとヒドクナイのとの差があつて、その差は遂に美髪劑をして其効果の現顯に早晩を生ぜしむる筈であるからです。無論使用法にも關係致しますが、それには先づ通常クセもみをなさる場合に、右の美髪劑の一部を其湯の中に入れ、それにてよくモミ、その上美髪劑の液のまゝ、毛にすり込むを定則と致します。右の次第ですから、若し女子文壇社の信用を認め、私の人格を信じて下さいますことなら、今暫し續けて御試用なさつて見て下さい。尤も只今とて私は化粧道の研究に身心を傾けて居るのですから、現存の美髪劑に優さるものを見出したら、何時でも改善改良を加ふるに油斷はして居らんつもりです。

問 手、顔共に黄黒くて見苦しうございますが白くなる良法がございましたら、猶はフケが多くて困ります、これを取ります法を（京都、道子）

答 密陀僧二十匁、白檀二十匁、蛤殻粉五十匁を細末にし、よく混ぜて、鷄卵の白味でトロく に煉通し、それを顔にすり込んで、しばらくしたら、モチ米の糠で洗ひ落すこと約二年も繼續しますれば白くなります。又コールドクリームを頭皮にすり込みますと、搔毛料となると同時に、フケも取れます。

問 私の手の皮が軟かくなく、殊に小皺が大變あります、これを直す方法を（蓉原の一少女）

問 コールドクリームを日毎にすり込みなされば皺も延び皮も軟かになります。

問 （一）チヾレ毛を根本的に直す法はございませんでせうか、又何々女史の發明とか云ふ藥品は實際効がありますでせうか。（二）細毛を太くする法は。（三）美髪劑を御願ひ申す時に、毛の硬いか軟いかを申さずともよろしいでせうか並製と特製とはどう違ふでせうか（越後、あや子）

答 （一）今の所、私の見聞せる限りに於いては、一つもないと斷言致す外ありません、何々女史云々は、私の知らぬ所であります。只その人は詐僞賣藥のかどを以て檢擧されたことのある人だと聞及んで居るだけです。（二）毛髪强壯水がよいでせう、これは芫菁丁幾五匁、沒食子浸劑五匁、麝香越幾斯一匁、カルミン五分、アルコール十匁、薔薇水百匁とを合せて調らべたものです。（三）硬いも軟いも御ことわりには及びません、特製と申すは香油のことです、これを特製と申すからとて美髪劑を並製といふ譯ではありません、斯樣な誤解もあらうと存じ、今月から美髪劑といふに對し、その特製を單に美髪香油と改めました。この香油と水劑との効用上の差は、水劑よりも毛の色艶をより多く綺麗にすると共に美髪劑のチヾレ毛には少しも効がないに對し、香油はそれにも一時的の効力があるといふ點なのです

問 私はこゝ二三年前から冬より春にかけて頭が痒くて、フケが恐ろしく澤山取れます、何かよい方法を（備中、頭痒女）

答 コールドクリームを擂込みなさい。

問 隆鼻術は永久不變のものでせうか、此術に長じて居る人は誰でせうか、又ソバカスが自然に殖えて困ります、これが良法を（高知、熊惠子）

答 隆鼻術がパラフイン注射の手術である限り、永久不變にして而も無害の良術とは申されません、從つて其術者も御聞きになる必要があるまいと存じます。ソバカスは難治症の一つですが、カンプル五匁、昇汞二匁、硼砂一匁、卵白十匁、薔薇水百匁を合せた液を御つけになり、若し皮が剝けたら、滑石と澱粉とを等分に合せた粉を其處に撒りかけ、新皮の發生せぬ間は洗顔せずに置きますと、大抵のは直ります。

問 眉毛が薄いので、今まで色々の毛生液を使って見ましたが何の効もありません、何かよき方法がございましたら（茨城、たき子）

答 その原因を取調べた上でないとシカとした御答は申上げかねますが、兎も角ベンゾールを氣永く御つけなさつて御覧なさい。

問 （一）ソバカスの奇麗に取れます方法と（二）ホクロの取れます方法を（宮美子）

答 （一）は本號の（高知、熊惠子）さんへの答を御覧下さい、（二）は發煙硝酸を細いワラの先につけて、それをホクロの上に塗りますと、ホロリと取れます。

問 生際を確實に濃くする藥はございますまいかございましたら、價は如何で、それを先生の御手許で調劑して頂けますでせうか（浪花、貧しき少女）

答　鹽酸ピロカルヒン五分、カンタリスチ幾三十匁、アルコール二百匁とを合せたものを毛尖を切った太い筆か、歯磨楊子の柔な毛ので少し擦り込む工合にして御つけになれば大抵密生致します、但しアルコールの外は劇毒薬ですから普通人には求められません故、醫師に御依頼なさつたらよろしいでせう。

問　私は脂肪性で赤顔なんですが、これに適當した白粉下クリーム、おしろい、石鹼は何がよいでせうか。シモヤケの發生せぬ法と其痕を直す法を御致へ下さい。猶は先生御發明の姉妹劑は何時でも御わけして頂けるでせうか、又姉妹劑の効能性質等を（伊豆の泣子）

答　白粉下クリームとしてはキセロルクリーム、おしろいはキセロル粉おしろい、石鹼もキセロル〇〇印石鹼がよいと存じます。この化粧品は三越呉服店と兩國米澤町紅屋とにそつて居る筈です。シモヤケにはカンプル三匁、ラノリンと黄色ワゼリン各十五匁、鹽酸二匁を合せたものを御つけなさい、その痕を取るには艶肌劑（卽ち姉妹劑の乙號）を御つけになるとようしうございます。姉妹劑（コールドクリームと艶肌劑とを云ふのです）は女子文壇社へ規定の代價と送料とを御送りになれば何時でも御求めになられます、これが性質等は本號の廣告欄にも掲げられてありますから、それを御覽下さい

問　私は生際が薄いため額が廣く見えますのです、いつかの本誌上で生際を濃くする薬を御尋ねなさつた方に、先生が調らべてやつてもよいとの御答を拜見致しましたが、私にも御わけして頂く譯には參りますまいか、又五年前私はすカマサゲで眼を手術しましたが、その痕がこの痕を消す方法がございましたら何卒（宮城、花子）

答　御望みとあれば無論調劑して差上げませう。併しそれには其原因を伺つた上でないと適劑を定めることが出來ません故、然るべくば直接私の宅に宛てゝ御尋ね下さい、果して濃生するとの見當がつきましたら、直ぐ調らへて御送り致しませう。手術後の眼下の痕は艶肌劑に白膠香を交ぜて氣永に御つけになれば消えて了ひます。

問　先生の御發明遊ばした美髮劑はチヾレ毛にもよろしうございますか、何日程使ひましたら直りませうか、代金は如何程ですか。又美髮劑は使ひましても害はないでせうか。猶は顏色をよくし白くなりますには、如何致したらよいでせうか（大阪の白百合）

答　チヾレ毛には無効です、美髮香油の方なら一時は直ります。代價は廣告欄にある通りです。何日で直るかといふ御尋ねに對しては其毛のチヾレ方の如何によつて遲速一定せずと申上ぐるより申上げやうがありません。顏色を白玉のやうにするには、菉豆五合、滑石、白附子、白檀、白蘞、甘松各四匁を細末にして、これを顏や膚に塗つて御洗ひなさい。これは艶面天上粉と申して舊幕時代の大奥で愛用されたもの、啻に膚を白くするのみならず、肌理を細かにしアセボやサメ膚を直す力を持つて居ります。今度文壇社から御わけすることになつた純植物性洗粉はこの艶面天上粉と化粧殿秘法嫩容七香散とを取捨應用して創製したものです。

問　毛髮の中にある入墨を取りたいのですがどうしたら毛髮に害のない樣に取去ることが出來ますでせうか、又四％過酸化水素水を顏に塗りますと暫らくしてから眼の開けぬ程痛みますが、これでも皮膚を害さないでせうか（京都、嵯峨の菊）

答　入墨を取るには電氣分解法に優るものはありません、若し藥液療法を望まるゝなら、レゾルチン三匁、サリチル酸五匁、コロヂユーム三十匁を合せたものを塗布し、剝離せしむるの外ありますまい。そのやうに顏が痛んでは四％のは貴女には強過ぎるのでせう、艶肌劑と等分に混ぜて御使ひなさい。

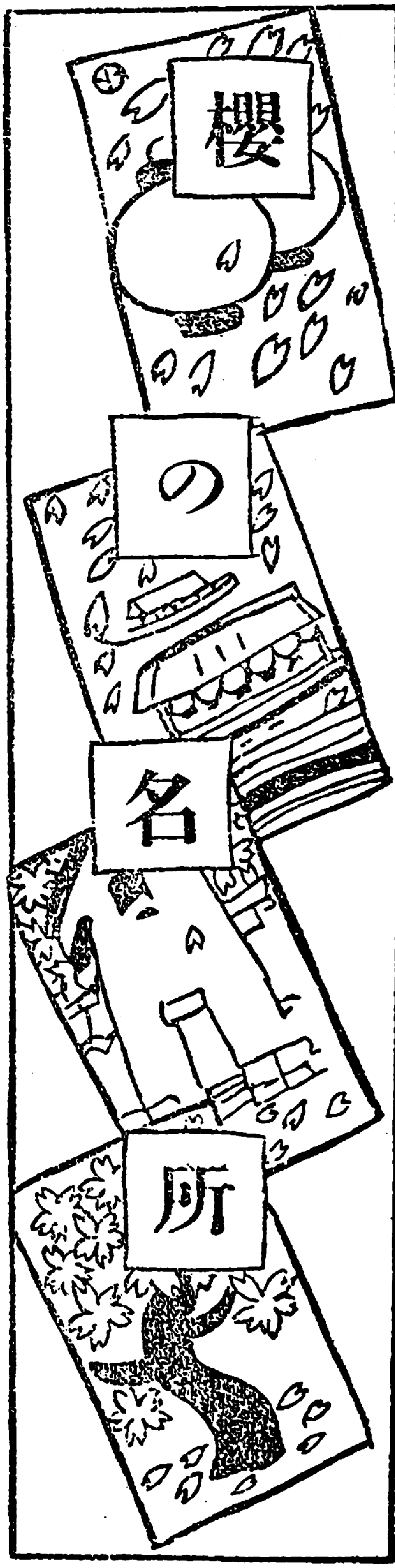
問　（一）睫毛を長く濃くする方法、（二）額の大皺を取去る法、（三）ソバカスの療法等を御致へ下さい、猶皺を直す法があるさうですが本當のことでせうか（長崎、佼子）

答　（一）と（二）とは精しく新式化粧法の中に述べて置きましたから、それを御精讀願ひます、（三）は本號にも答へてありますから、それを御覽下さい。又除皺面と申すのはありますけれど別に効能ありとも覺えません。

問　白色劑としての過酸化水素水は他のものを混ぜずに使つてもよろしいでせうか（廣島の尋ね女）

答　差支ありませんが、若しヒリヒリくするやうでしたら艶肌劑と等分に和して御使ひなさい。

本誌の讀者は質問自由なり



◆紀三井寺◆

ふる里を、はる〴〵こゝに、紀三井寺
花のみやこも、ちかくなるらん

西國二番の札所、四國八十八ヶ所の札所、赤い椿に、濃綠な草木の色に、色彩の鮮明な春になると、白い菅笠を赤い丸ぐけ紐で、あごに結へた女や、杖をたよりにとぼ〳〵と、眼疾になやむ老人や、片足引きずつた男女や、それは〳〵色々の巡禮が、參詣する、ふせ鐘をたゝきながら石段をたどる、はき〳〵しない歩調と、節長い御詠歌の淋しいかなしい調子と、あはれな泣きたい樣な思ひとは水氣多い南國の空に、たゞよふて、氣ぬるい紀州人や氣の勝つた東北の旅人の袖を、ぬらすのです。

紀三井寺は、和歌浦を去る十二町ばかり東少し南の名草山の半腹に位置をしめて居る、宗派は古義眞言宗本尊は十一面觀世音菩薩、刀三禮の靈佛、堂塔は木々の間に見えかくれて、建築物の立派なことは、流石に近國に其名の轟いてゐるだけのことはある。

山内は高燥の地で、空氣清淨なる故に、けがれたる人の心を拂ふに足り、開山堂、二重塔、鎭守社、經塚納札堂、鐘樓堂、大師堂、其の他小寺院等がある。

小さいけれども瀑が三つある、南のは楊柳水、中は

清淨水、北にあるのは吉祥水と云ふ。

仁王門は古色をおび、仁王の姿も又凛としたもの、石段は二百二十一段の高さ、本堂の北に千年ヶ谷と云ふ所があつて、そこに龍燈の杉がある。

開山の由來は、支那は唐の時代、宗皇帝の時に碩學の聞え高き青龍寺の爲光上人と云ふ僧があつた、佛敎東漸の機に乘じ、我朝光仁天皇の御宇寶龜元年に來朝して、靈地を名草山に求め、伽藍を造營し、法燈をかゝげ、佛陀の福音を傳へるによい所であると此所に錫を留められ、終に千手觀世音菩薩の靈像を得て、最初は草庵を結んで行ひすまして居つた。

經塚には上人の手づからうつされた、大般若經六百卷を納てある。

傳說には、龍女があつて上人の說法をきゝ、上天の妙果を得たるを感謝するために毎年舊七月九日の夜、海上に淨燈を獻じて、上人の德を輝かすことゝなつたそれで七月九日は、千日（せんにち）まゐりと云つて、遠近から多くの人が參詣する。

句碑が山內に多くたてられてある。その中で芭蕉翁の句

見あぐれば、さくらしまふて紀三井寺

行春の句碑は和歌浦あしべにあるが、紀三井寺の開山堂の前にもある、本堂の横の繪馬樓から見渡すと、和歌浦を抱きまはしてる海の上に眞帆片帆、かすみにけぶる淡路島山、電車と連絡してる驪津曳船と、巡航船、しほ焚く煙の風情、井然たる鹽田、何とも云へぬ景色である。尙當寺には、林道春の叙景文、花山院法皇の同樹の歌、六々山人の養寧の額等がある、當寺の多寶塔と大門及び鐘樓は特別保護建造物となつて居る。（一等　紀伊　宇田すが子）

◢薄墨櫻◣

御父君、彥主人命、崩せられて、後母君、振姬は、幼き王子二人を、抱いて、泣く泣く、その御生家に、歸られた。

さかしい振姬の御敎育によつて、二人の王子は、殊に、男大迹王は、片言まじりの御言葉の中にも、無邪氣な、御遊びの間にも、其の御賢明に在すことが、明らかに伺ひしれた。

かくて味眞野の宮に、成長せられ、民は、其の御德をしたつて親の樣になついた。

都では武烈天皇が崩せられて、皇太子が、在さなか

つたので、大伴の金村のはからひで、王をと、都に御迎ひ申した。
越前の民は、老若男女を問はず、これをつたへきくものは、泣かない者は、なかつた。親に別れる様に。
いよ〳〵と云ふ日、みな、別離の悲しさに、涙をながしながら、せめてものお名殘りにと、眞野の宮に集つた。
王も亦、子の様に、愛せらるゝ民の、この可憐の、様を御覧じまして、流石に、ためらはれた。
慰むべき言の葉とても在さねば、只涙をたゝへてゐられた。
やがて、今を盛りと咲



きほこる、櫻の大木の下に宴の幕を張られた。皆、涙を拭ひ拭ひ、唇をかんで、盃をめぐらした。聲をのんで、舞ふ袖に、櫻の幾片が悲しさを知るものゝ様に散りかゝつた。
大鼓、小鼓の音も、寂しうさえた。
其の名殘りとか、今でもこゝからは、春毎に、萬歳が出る。
この淋しい、宴に加はつて、拭ふても、拭ふても、あとから、あとからと、涙の流れ出る、玉照姫は、君の尊き御位につかせらるゝうれしさと、別離の、かなしさとが小さき御胸に、もつれて、どんなにか、お苦しく思し召したであらう。

やがて王は、さき匂ふ櫻の一枝を、自ら手折られて姫に、お贈りになつた。

　かくて萬民の別れををしむ聲をあとに

　きぬ／＼の都の空は遠けれど
　　心は國に殘しおくらめ

といふお歌を、おのこしになつて、都へと、立たれた。民は、この慕はしき、御名殘を忘れざらんがためにと、男大迹部との村の名をつけた。

　今は、變じて、粟田部と書く。

　其の後、この櫻は、次第々々に、黒ずんで、鮮やかであつたうす紅は、悲しい色になつて、薄墨櫻の、名を得た。

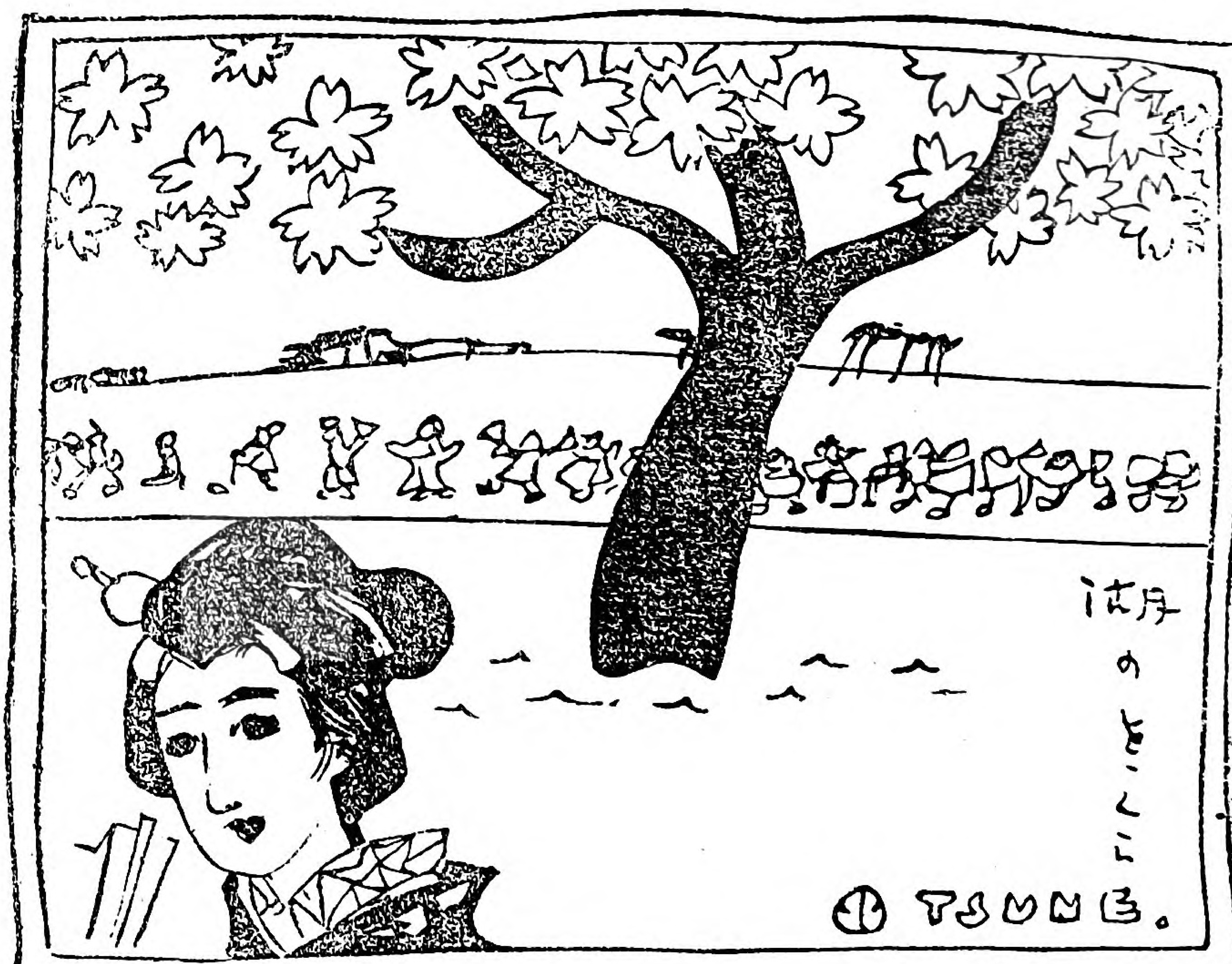
　回り丈六にあまる、大木は、粟田部岡太神社の、西南の深谷に、白く青く、むした苔は、幹をおほうて、春毎に多くの人を誘ふ。（入賞　若狹　長谷川英）

▲沖　繩▼

　東京の友から花の便りが來る三月頃には、この南洋の一孤島である沖繩では、七八つの可愛い小學生徒が「春が來た春が來た……」と歌ひます。けれども聲ばかりで、實は野にも山にも春らしい色はみえません、年が年中青々とした夏のやうな景色です。木と云ふ木は大概熱帶のものばかり、一人では抱へきれぬほどの氣根を有つて居るガヂマルとか、まがりくねりした大木に赤い可愛い花を咲かす梯梧（デイゴ）とか、ヒヨロ長いビンロウ樹など、變つたものばかりです、それで小金井の櫻上野の櫻の盛んな様は夢にも見た事はありません、雜誌や、繪葉書でみるたびに「あゝ一度でも花に憧憬れてさまよふて見たい」と思はぬ事はありません。

　私が小學校の時先生に連れられて二十人程櫻その他に有名な識名園に行つた事があります、そこは舊琉球藩主の別邸で、那覇より一里餘ある極靜な田舍であります、小さいお下げの人達は、畑道や惡い歩きにくい坂を上つたり下りたりしてもうすつかり心は花にとられて歌ふ唱歌も櫻の花のを、遠いのも忘れ足の勞れも覺えず、やう／＼目的地に着きました。森とした門がまへを入つて、廣々とした庭に出ました「先生櫻はどこに」とあちらでもこちらでもきゝます、山に來つて一番初めに見出しつこをしませうと、一、二、三の呼び聲勇ましく橋を渡り、築山を越えて、山に入つて吾れ先にとふみ分け、ふみわけ、上の方を見て歩くをかしさ「一番」誰やらが云ふとゾロ／＼そこに走つて行

つて見ますと、雑木の枝の間々より二つ三つの枝に漸々開いた赤い桃の花より赤味の濃い色が見えます「二番三番」と見つけてはそこに集り、集つてはさがしに別れる、それは／＼おもしろいものです早く人より多く見出さうと上にのみ氣がとられてとんだ所にとび込んだりハブの居りさうな草叢に入つたり、皆の影のみえぬ所まで迷ふたりして終日キヤツ／＼とさわぎ廻りました。疲れてもう花にもあきおなかも空いた時分には、皆の手に櫻の枝が折られて居りました、お辨當を青々とした芝原にひろげて、先生か



ら花に付いて理科のお話やなにかときゝました。そして終日をもしろく愉快に暮して家に歸つた、識名から櫻を折つて來たと近所の子供等に見せて自慢いたしたものです。さあその翌日學校に參りますと、他の組の人に昨日のお土産ですと一輪づつでも分けてやりますと、皆よろこんで本の間に挾んで大事にとりあつかひました、そして作文の時間にはきつと「識名園に遊ぶの記」とか「櫻見の記」とか昨日の事が題として與へられますからそれは何よりのたのしみで、毎年早く識名園に櫻が咲けばよいと待ちまうけて居りました、內地の櫻は三月に開きますが、

沖繩では十二月の初めそろ〳〵開きはじめます、まだ遲いものになりますと一月中ところ所でちがひますが、とにかくその間に開きます、それも一時にぱつと開くんぢやなく、一輪一輪ゆつくり開きますから、長い間咲いて居ります。（入賞　沖繩那覇　かね子）

◆洛西嵐山◆

この平安の都より二里ばかり西の嵯峨野で御座います、今は汽車も通へば、電車も通じますが、一昔前まで三條街道より、仁和寺街道より、いつたさうです。「嵐の山か山櫻」と歌にも歌う、嵐山は幾千本とも幾百本とも知れぬ程の山櫻、爛漫たる時は雲か霞か――。嵯峨野といへば、小督局や妓王の昔がそゞろにしのばれます、櫻見る人にはさゝやかな、小督の塚も一向氣がつかぬらしう御座います。

「まあおかけやす」「何でも出來ます、まあ御一ぷくおしやす」兩側から呼ぶ茶店女の聲もなまめかしい。

何時の頃よりとも存じませぬけれども、昔より句に現はれたのも多く御座います、やつぱり昔からで御座いませう、芭蕉の句に、

花の山二丁上れば大悲閣

大悲閣はいまもなを嵐山の奥に御座います、蕪村の句に、

筏士の蓑やあらまし花衣
花の香や嵯峨の燈の消ゆる頃
嵯峨一日閑院樣の櫻かな

また太祇の句に、

筏士の足もとまらめ花盛り
つきまとふ内儀の沙汰や花盛り

只今はもう猫も杓子も行かねばならぬやうにまでいはれてる、或はそのためにかへつて殺風景になりさうです、京の都に住む人で、嵐山の櫻を知らぬ人は御座いません。京都では昔から十三詣りとて、十三になる子があれば、智恵を頂きにと、この嵐山の麓の虚空藏へ御詣りするので御座います。維新時代の如き殺伐の時代には、女の子に男々しい男づくり等をさせてまゐつたのださうです。

時は丁度櫻花も滿開の四月の十三日です、私も父や母につれられて行つたのは覺ぼえて居ります。その子には出來るたけ立派な風姿をさせて、親兄弟親族はもとより知人までも招んで祝ふのです、そして智恵を頂けば歸り路、渡月橋を渡るまで後向いてはならぬ、後

向けば折角頂いた智恵を返すのですと申します。

名物と申せば花より團子のたとへ、こゝも驛から渡月橋畔まで軒をならべて居ります。只一軒橋畔に櫻餅賣る家が御座います、之は道明寺ぼしいゝでこしらへたあんころや、お餅に大きい櫻の葉で丁度柏葉餅のやうにしたもの。一寸おつなもので御座いますよ、天龍寺納豆も名物の一つでせうか、櫻漬の瓶詰等嵯峨の三軒屋といへば昔から名高い料亭です蕪村の句にも、

三軒家大阪の人のかやりかな

嵐山とゝもに名高いのです。(入賞　京都　壽賀子)

お染櫻

しつとりと、涙に濕うてゐる樣な寂しい春の宵、溫う露が降つてゐる中を白う櫻がちる。

(染よ、覺悟しやれ)、

(もとより覺のなきことなれど、――いまはの際に常世樣のお姿をみたい)と聲がふるへる、キラリ閃く白刄の下に、サッと散つた血汐に白い被衣の人を染めるひとしきり花吹雪――夢の樣に力ない淡い火がつと櫻の梢に燃えた。

邪智深い嫉妬深い公望家の老母は櫻に白刄を切りつけて狂ひ死をした。かうした春の宵に、美くしい公達常世の若衆姿が露にかくれて櫻の下へ通うてゐるのを村の誰彼がみたとやら。

美くしう咲き亂れたお染櫻は、椿のやうに花がころりくと散る、太い古い株に老母が切つた白刄の跡が今も鮮かに殘つてゐる。

德島縣名東郡加茂名村にほど近い小坂山の奧にお染大明神といふ古い祠があつて、櫻の時分には若い男女が戀の守り神として參るのである。(入賞　大阪　うきくさ)

新町の夜櫻

大阪には櫻の名所といつてはありませんが、市の中央にある新町九軒の夜櫻は、一寸附近で知れてゐます。

毎年たいてい十日頃から夜櫻であります、今年は大分大な樹を植ゑたので、一入景氣がよいやうであります、兎に角九軒の夜櫻は大阪での賑ひです。

だまされて、來てまことなり初櫻　千代

の句碑も今更のやうに床しい雅趣を呼び起します。こゝの夜櫻はずゐぶん昔から喧ましかつたものと見えて、彼の鷄鳴舍の主人曉鐘成翁にこんな作があります。

美婦日々に新たなる新町にこたび櫻花を植ゑけるを

今專ら流行せる大津繪節てふ唱歌に擬して物せよと妓婦のすゝめによりて

欺されて來てまことなる初櫻、今を盛と夕景色、おき客は大勢通り筋、吹雪は雪かと見まがう越後町、御代も太平のかほまでも、肉の林や酒の原、一目の千本、魁妓の群列、これはくとばかりにて花にのみ、心浮かれて思はずも、春の夜を櫻にあけて、今日もまた居續けの……。

この一節、前書が無うても新町の夜櫻であることがわかります、またこれは誰の作かは知りませんが、同じ頃新町に流行した大津繪節があります、やはり此處の夜櫻を唄つたものであります。

櫻の木の獨り言、私は廓へ木を賣られ、賣れぬ先から評判で、是れが咲いたら皆さんが、歌をよむやら短冊附けるやら、人に見られて賞められて、問さにや折られる事もある、食つたり飲んだり騒いだり、樂しんで私に惣嫁の勤めさす、門で開いて花が落ちそうぢやないかいな。

之を見て其當時の人が如何に風流で在つたかゞ想れます、歌を讀やら短冊を附るやらとあるを見ても分ります、之と同じ樣な意味を近松巢林子も云ふてゐます。

櫻まで廓は夜のつとめ哉

此の句は別に本に出でゐるものではありませんが、私が先年或友人の所へ行つた時、床の間にかけてあつた幅によつて見たのであります、又龜一山（七草庵と云ふ和歌を以て豫選に入つた人俳諧の宗匠今は死んでなし）が新町でこんな句を吐いたこともあります。

さくらく夜の里は夜がよかりけり

櫻まで素顏なりけり人の晝　（入賞　大阪　板東ますえ）

◆荒川堤の櫻◆

吉野櫻が惜し氣もなく淡紅の葩を春の埃にまじへて散つてゐる。市內にはもう花見るところもなくなつた郊外には青麥の綠と、黄な菜の花とに野はあかるい。私は江北の水をわたつた。

江北は千住から舟にするのもよい、歩くのもよい。荒川の流れをさかのぼつて汽船も小舟もゆく。堤は千住を起點として櫻の大樹は堤の兩傍に花のアーチをつくつて芝生には菫々櫻草もある。

ゆつたりと、春光漂ふ長堤の上下には、都の春をすぐつて來たやうに美しい袖や、はなやかなもすそが亂れを打つて、枝に盛れ切れず散つてくる花の中に、人は人

に醉つてゐる。そうして郊外といふゆるやかな氣分は、一層醉をしいるのであろう。

水には裝はれた舟に、色彩の化身のやうな美妓が舞ふ。唄ふ。そうして船よせて堤下の芝生に歡樂のむしろを張る。

堤にはよしづ茶店が目の届く限りつゞいて、すしや、しるこ、酒、ビールなどをひさぐ店の緋モーセンの上に美しい女がかざりもの丶やうに坐つてゐる。

向島程水に近くないもの丶、水をはなる丶二三丁、青麥のかなた一線の藍引くのを望む位である青麥畑の中には乘合舟



の小旗がゆるやかにゆれてゐる。そうして堤下は菫やれんげ草の草原が堤に平行して女子供のあそぶによい場所である。

髭の男が目がつら付けて醉ふのも、角がりの若衆が島田の下町娘を鬼事に追ふもかうした場所にふさわしい。

芝生に假小屋して茶番狂言に興ずる男のしなさだめする娘も美しい。

より〳〵に大旗立てた幾群かの花見連の中には揃ひの手拭して、今日といふ日をよろこぶ工女らしい女もゐる。店員の女も藝妓も娘も令孃も、一つの大きな淡紅色の幻の糸にまつはられてゐるや

うに、美しい昔語りにありさうな戀もかもされやしないかと思はれる。

堤ははてもなく長い。一里行つても二里行つても人は山のやうにみちてゐる。

路傍に莚包積んでコップ賣りの酒もある。紙櫻のかんざしもめがつらも。堤近い家では堤に向いた座敷をひらいて家族らしい人に貸すのも見える。

泥酔の男を介抱する藝妓らしい女や、花のれんの店に酌する女の頬は大てい色づいて見えた。

私は人込みの中に桃色の揃手拭して、四十女が十二三人、

お上りや、お上りしやんせ、セッセ、

花のお江戸の――

唄ふこゑにつれて手や足を、盆踊りに見るやうな振りに踊る。まはりに同じ位の女達がうたふのを遠巻にした人達の瞳に、どんなにそれが映つたかと思ふ。

莚の上には幼子供が菓子に食ひあきて母親の踊を物めづらしさうに見てゐる。

一年中、たえまなく働くこれらの女達！

私は花のつゞく限り快よくたのしませたく思ふ。

幸に空は汗ばんだしめやかな紫である。

子供の相手に菫やれんげ草つむ母の頬にも輝がある。汽船のつく度に汽笛はゆるく水を渡つてねぼけたやうな響を上げる。

水上には花見船が上下となく岸につながれて、紅白の幕をなびかせてゐる。それが多くは人氣もなく靜まつて、中には流れをかき亂れるやうにざわめいてゐるのもある。

上野の櫻に自動車のうめくこゑをきゝ、芝山内の夜櫻に馬車の轣轆とねるしづけさを味つた私は、江北は階級制度を打破した眞の花見場所であろうと思ふ。自動車の惡臭と、まき上ぐる砂は都會のみに限られた醜いものである。

堤の櫻の花さく度、三代公堤保全の深慮は、新らしく人の心にうるほふ。（入賞　白百合）

◀北見の櫻▶

花時は春だ、そして、萬朶の玉花と稱へらるゝ櫻の花も、春のさかり、歡樂の光りみつる三月頃の日に、香ひやかに、莟を破るのであるが、悲しいかな、我が北國は春も終りの五月末、南國などは、青葉のかげに、山ほとゝぎすの聲聞く頃、北見の山は春やう／＼至りて嫩

草萠えて櫻は蕾を破る。

他國は知らず、北見の櫻として第一に、北見の都會!!!オコツク海の浪高き、網走港を去る一里餘「三眺山」に指を屈せずばなるまい。否、外にも、二三の地もないではなかろうけれど、第一花より見ても、四圍の風景より見ても、位置より見ても、先づ三眺山に及ぶ櫻は他にはあるまい、自分は三眺山の櫻を云ふ先に、其の位置を語つておきたい。

網走港より一里ばかりの處に、大曲と云ふ小さな里がある、こゝより少しゆくと、その三眺山麓に達する事が出來る、山は高いと云ふ程でもない



が、そう低くもない曲りくねつた坂路を辿つてゆくと、やがて嶺に出る。櫻は嶺にもあるが、山全體にある、裾野にも、中腹にもと、云つた樣にあるから花見時の見事さは、想像以上である、嶺より前方を望めば、網走あり、水綾うオコツク海にそゝぐ處、全町千餘戸の網走港は、眼下に望み得べく、河流に沿ふてたま〳〵汽車の走るをも、見るを得べし、さらに東方に瞳を走れば、北見第一の斜里の高峰は、夏なほ雪をいたゞきて、海の彼方にそそり立ち。近くは、レッポ岩の奇なる、さては潮にただれしポンモイが岬など、すべて一望の中に集る。ま

た背後を望めば彼方は「サルマ」の湖に望み、左方にレブンシリの湖をひかゑ。湖水の面靜かに碧波うごかず花一朝に散り敷く時は、其の純白なる花瓣は、ことごとく兩湖の碧波に浮かぶ。兩湖をへだてゝ彼方、はてしなき北見廣野は、牧柵にかこまれて、白き樺の木立の下かげを、三々伍々に遊べる、巨大なる牧牛を見る。あゝ實に四圍みな、斯の如き影に包まれて、三眺山の櫻花は、五月の末つ方より開くのである。しかも其の花瓣は純白なる山櫻にして、芳烈なる香は對岸の牧場に咲く、乳色の「コブシ」の花と、其の清さを競ふて居る。あゝその塵をも交ぢへず雪を欺くばかりの山櫻の東風にひもときて、一朝に咲き、一夜に散り敷く樣は何と云つて稱へたらいゝか、私は、その言葉を知らぬ。

四邊みな廣々として、大陸的風景につゝまれし三眺山の櫻を、全道でも否內地でも中々見られぬ櫻の名處として、私は誇りたい。（北見大田　夢衣）

▲御所櫻▼

あらしの翌日であつた、春の花に滿たされた土手や黄色い布をしいたやうな菜種畑の横を通つて私は道を曲つた、眼にうつるすべては麥畑である。青い麥がゆるく吹く春風に右に左に大きな浪をうたせてゐる。そして茶の絲を引いたやうな細い道が蛇のはつたあとのやうにいつまでも長くつゞいて其はしが海潮寺の山門で終つてゐた、此處は小木の濱から餘程はなれた高い處である。若い僧が黒染の袖の下から青白い手を出して松の落葉をかきあつめてゐた。

古い此寺の前には海潮寺と筆太にしるされた額があつて庭には丈の低い山櫻も輪の大きい椿もさいてゐた然しそれ等の物から取り離されたやうに中央に六尺ばかりの石垣が築かれて古い櫻の木が一本植ゑられてある、花は盛りを過ぎて夕の風に大方散つたらしい、青白い花片が悲しげに芝生に落ちてゐた。浪の音がとほく〳〵きこえて思ひ出したやうに時々花が落ちる、私は石垣にもたれて一人默した。庭掃除を終つた若い僧は芝生の上に座した。そして花を見上げながら語つた、其話は幾度も幼い時にきいた御所櫻の由來であつた。北條氏のために逆境に立せられた承久帝は浪の音と千鳥の鳴く聲の外何も聞く事の出來ない此島でいつまでも都戀しと悶えられた、一日帝は此寺に御立ち寄りになつた、折から暴風雨のあと海の遠鳴がさえ渡つた空氣を動かして、さびしく聞えるのをなつかしげに

御聞きになつた、そして一本の櫻を御植ゑになつた、其後幾度か春を迎へて木は老いた、青白い一重の花が春毎に開いて枝は遠い海の彼方越後にむかつてゐる暖かい春の日に麥の草とる里の女がよく佐渡節を唄ふ、其中にはきつと此歌がまじつてゐるさうである。

「佐渡の岬の四所五所櫻、枝は越後に葉は佐渡に……」

語り終つた時墨染の袖には白い花が落ちてゐた。

今年も春になつた。若い僧は來る人毎に同じ歷史を繰り返して居る事であろう。（佐渡　わくらば）

◆將　軍　櫻◆

「もう千葉樣のお花見も幾日だ。今年は何を持つて行かう。矢張例年のお團子にするかな」

春三月の末頃になると、こんな話がよく猿川村地方の質朴な百姓等に繰返される、一年三百六十五日、手も足も松の荒皮見た樣にして、土ほじりに餘念もない人達に取つて、お正月と祭と盆との休みよりも、もつと樂しく待焦れるは、所謂千葉樣のお花見だ。那賀の猿川村と言へば、隨分廣いが、つまらない所である。夏と秋とは、植付や取入に忙がしい百姓等の眞黑な顏とそれに見紛ふやうな黑牛とが、田圃に出て働いた居る外、周圍は山ばかりで、冬は野上川の上流を下る筏の寒げなのが目につく。併し春の猿川村に、そのお花見が近づくと、人も鳥も浮立つて、長き冬眠から覺めた樣。千葉樣のお花見は、人をして何となく太古時代の感想を湧かせて、永遠にこの一寒村に美しい歷史を傳へて行く。

千葉家は地方に冠たる豪家で、祖先幾十代連綿として續いた由緒正しき家柄である、その昔某の朝臣が帝の御不興を蒙り、世を忍んで此地に落ち來り、遂に地方の長となつた。それ以來の系圖は今も主人のひそかに誇る處ださうである。この名家の生命とも言ふべきは、系圖と共に、數百年の歷史を默して語るかの如く見ゆる一本の櫻！。

何代の祖先が植ゑたかは誰も知らぬ。桓武帝の頃田村麻呂將軍がこの地に立寄られ、この櫻樹の下に憩はれたと言ふ傳説に依つて、將軍櫻の名がある。嚴然と建つた千葉家の邸宅と相竝んで、繁つた葉は天を摩す計り。その滿開の頃は恰も白い花の家と言はうか。年々に村の人を集めて花見の宴を開くのが吉例になつて居る。村人は莟の頃から待ち佗びて、その日となるや否や手にく丹精の大根や、草餠をたづさへて、寄り集

ひ、將軍櫻の下にまどゐして、恰も雪と散る花瓣を、杯に浮べて、飲みつ歌ひつ、御代泰平を壽いて、一日を老いたるも、若きも、樂しく無邪氣に游び暮らす。げに光榮ある將軍櫻は千葉家の存在と共にとはにこの村の誇であらう。（紀伊　紫陽花）

▲仙臺榴が岡▼

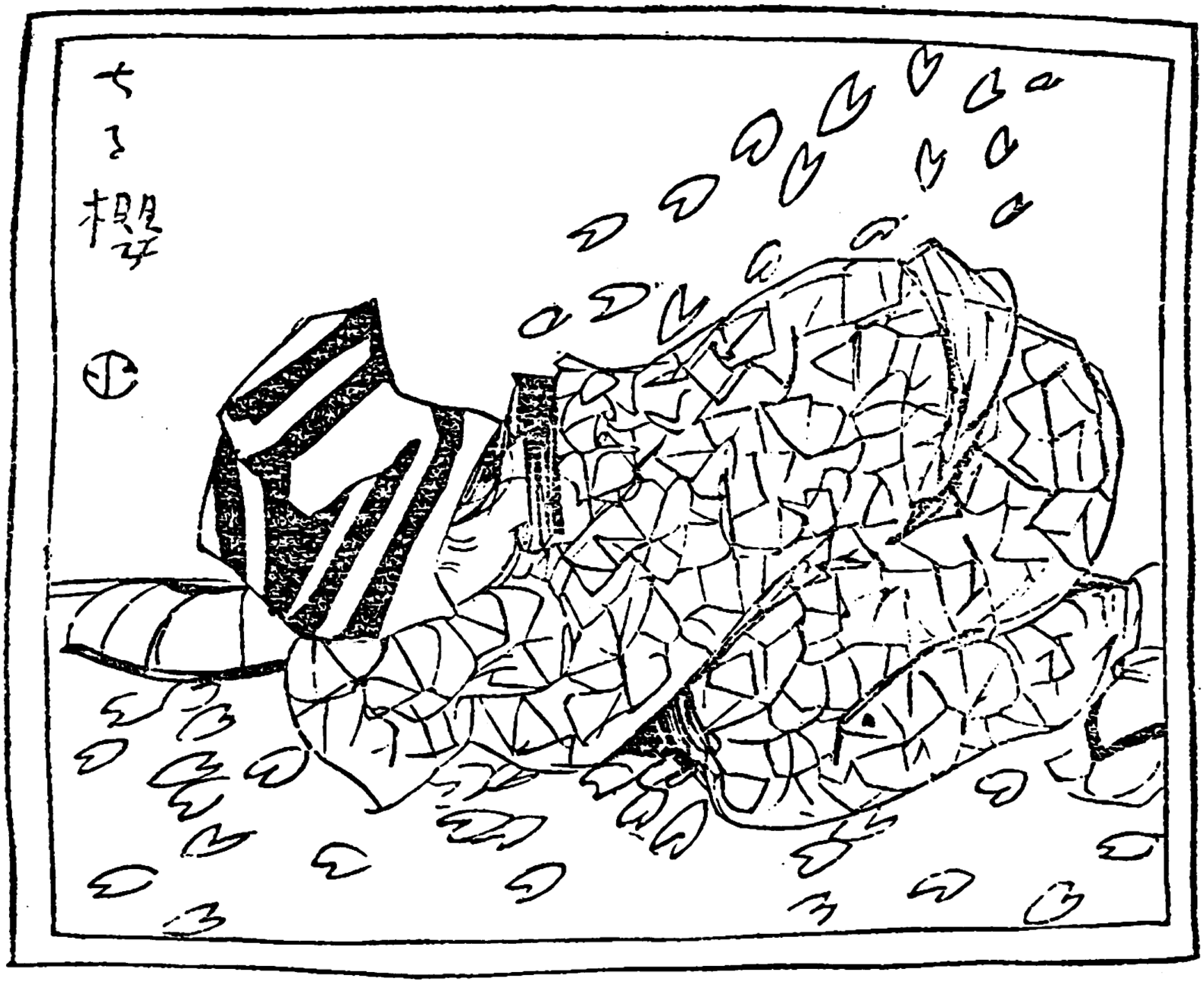
……春……さくら……お花見……斯う連想して來ると、ハット目覺めたやうに思ひ出されるのは、仙臺のつゝじが岡——

それは私が十六の年で御座いました、七八九廿廿一思へばもう六年になりますねえ、夢見る樣な眼をして何處ともなく見詰めると、ボーとおぼろげながら其時の有樣が、今でも私の眼の前に展開されるので御座います。

昨日けふ、裁縫の友の口から洩るゝのは大方花の便りでした、釋迦堂の櫻……榴ヶ岡の……と口々に。花其ものより外お花見と云ふことにさほど興味を持たない私は、只路傍の人に對するやうな氣分で、獨り人に背いて針を運んで居りました、が、或日おひるに歸つた時、日頃出不精な兄の口から珍らしくも、あした、釋迦堂へ行つて見ようかなと云ふのを聞きました時は流石に行つて見たい樣な氣がいたしました。其翌日、冗談かと思つた兄の言葉は眞となつて、病身な母と、淋しい顏をした私は、しかたなく／＼兄に伴はれて二番の汽車で仙臺に參りました、仙臺の町を歩くのは初めてゞ御座いますのに、足の早い兄は、弱い母を助け乍ら私の歩んで行く一丁も先の曲り角に佇んで待つて居るのが例で御座いました、斯うして釋迦堂に着いたのはおひる少し過ぎ、花は十二分の盛りでした、見る人は私達の外に二三人、上野や飛鳥山を以て此處を想像して居つた私は我が淺墓な考をどんなに恥しく思ひましたでせう、されど其意外な現象を私はよろこびました、驚きの目を瞠りつゝもなほ——

廣い公園には何十年の昔、何人の手に依つて植ゑられたものでせう、三抱位は確に御座います見事な大木がこゝにも彼處にも枝を張つて、霞か雲かの歌をその儘ふくよかな薄紅の花をつけて、あゝ其立派さ、私はもう息がつまるやうに覺えます、櫻は大方枝垂でした、枝のもとの方は花につゝまれて、先は恰度柳の樣に柔かな綠色の葉で御座いました、其が如何にも濃艶な柳櫻をこきませてと云つた趣なのが、深く／＼私の胸に

鑄つけられてなつかしい思出の種となりました。その美しい花に包れて中央に青い色をした小さなお堂が御座いました、たゞ青い小さなと許りお詣りした時の感じが其まゝ現れて來ないのが口惜う御座います、多分其時私の想は、主觀的に花にのみ傾いていはれ深い釋迦堂をおもつて居らなかつた故でせう、一時頃あの赤い毛布を敷いた茶店の緣臺に腰かけて、ちらしのお壽司をいたゞきました、前の聯隊のラッパの音にひらひらと花の散る風情を心ゆく許り眺めながら、其處に只一つなくもがなと思ふものが御座



いました、花蔭に出來た見世物小屋から洩るゝドンチヤンの囃の音たゞそればかり。人を見にゆく方かお召を見せにいらつしやる方でない限り、上野に埃を浴びながら、汽車に人にもまれ乍ら飛鳥山へ被入る都の君よ、是非一度仙臺の榴ヶ岡にいらしつて下さい其處には淋しい中に華やかな趣を見せた床しい櫻が微笑んで待つて居りませう。胸がすく許り眼に心地よい感じを與へた釋迦堂の櫻よ、永久にその俤を變へないやう私は今秩父の根に切に祈つて居るので御座います。

（埼玉　桂りはな）

奥州の山王櫻

所は奥州の片田舍、佐沼と云ふ少さい町に「山王の櫻」と云ふのがある。

抑々此「山王の櫻」と云ふは北條だ代の執權時賴卿のお手植であると云ひ傳へてある、險分恐しい古木だ、之が而も人家を遠くはなれた深山の別天地にある、……三方は山に閉ざされ、僅かに東南の一角が畑に面してあつて、中央の十疊ばかり敷かるゝ處に此大木の一本がはびこつて居る。

幾百年の星霜を經た此櫻樹は、男帶三本でなければまはらぬと云ふ太さ、屈曲が甚だしくて且つ瘤が多く見るからに恐しい程である、今はもう幹には苔蒸し、根は朽ちて大きな洞穴となつて居る、その神々しさ、鎌倉八幡神社の銀杏も如何と思はるゝ位の老木である。

花は淡泊な一重で人を醉はす樣な上野、向島の如き美しい色は有たないけれど、周圍の綠濃き青山を背景にして誠に調和がよい。

花は咲いても山にさへぎられて居る爲、風に散らさるゝ事はなく、自然にちら〳〵と舞ひ落ちる樣は、まるで春の大きな淡雪の樣だ……對山には絕えず朗かな聲で鶯がさへづり、その幽淸眞に掬すべきである。（郡女）

備前最明寺

高女二年の春運動會で行つたその時は滿開だつた。その後七年まだ一度も行かないが矢張今日此頃は滿開だらう。スカート蹴つて少女子のまたこの春群れても居やう。所は古京の町端れを東に二里國道を一直線操山を一巡して西大寺に近き麓、最明寺の境內に石垣繞らした一本の櫻樹。若き敎師の歷史物語が思出さるゝ。——その昔最明寺入道北條時賴が民の疾苦を訪ふて諸國を行脚したその序に宿を借つた古寺の庭へ差し忘れた櫻の杖が發育して芽生え花も咲き初めたと言ふ——寺の名はその儘に最明寺、櫻の名は岩間の櫻とも言ひ、不思議にも枝ぶりが下を向いて生えてゐたつけ、大方その櫻は枯れて今のは何代目か。寺の本堂は相應に古びてゐる。境內にはその他に數十本の櫻も植ゑられて、四方を廻らす綠の山の樹々に交ぢりて咲き揃ふ彌生の三月は美くしいものであつた。吾岡山には遠からず近からず頃合の遠足地である。（岡山市、桃の村女）

醫學得業士

（齋藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許

アトシア

atocia,

（腟内挿入小器具）

本器は産科婦人科ニ東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により腟内へ姙孕を補助する藥劑を入るゝ時は人工的に**懷姙**することを得べく又は本器によりて腟内へ姙孕素を消失する藥劑を入れて用ゆれば決して姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密にて用ゐて目的を遂ぐべし又本器は多年實驗を經て確證し得る所なり且つ本器は病毒を豫防すること**避姙**の目的を遂し得ると共に衛生上無害なるは發明者の確證する所なり又腟内に用ゐれば**梅毒淋病**其他の病毒を豫防し傳染するの患なく子宮を疵傷することなし又子宮炎腟炎性腟炎等の**子宮諸病**を患ふる者は本器へ是等の治療藥液を入れ應用せば自宅にて**自身治療**することを得るものなり本器は易に天然の感觸を鋭敏ならしむるルーデサック及子宮サックの如き不快の念なく世界唯一の理想的新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る者なり。

但し詳細なる說明書及使用法并に應用諸藥劑處方書は添付す。

（正價）ニッケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。

人體衞生上必ず携ふべき要用の良器なり。

現品に添附し小包郵便密封にて送付す。

郵券代用試用増し。送金即刻送品す。

子のできる器及子のできない器
懷姙避姙自由自在器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

一手販賣元

東京市神田區五軒町十九番地（電話番號下谷五百四十六番）

日新館藥房

有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價四拾五錢 ▲郵稅共參拾五錢 封送の事 郵券代用は

（目錄大要）虚弱の新療法●淫蕩病を必治する新法●除○の隱れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●造花即製法●髮の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮染法●腋臭汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新法●齒磨粉製法●西洋燕油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を冷涼にする法●雀斑類を消せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らずに寢へざる法●拔毛再生新法●盗入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白まずに即治法●五十の老婆を二八の娘に變ずる法●腳氣病必治法●妖怪化を見破る神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●えばしす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に他人と語る秘術●見染めし女を手に入れる神法●待人來る神術●一生中盜難に罹らぬ秘術●惚れ氣ある女をすゝる藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●驚かれたる時誘ひ効藥●避妊の術●神速に精力を強むる法●即座に身を隱す術●人を眠らす秘法●特即ち催眠術●顔赤く吹出物を生ずるを治する法●過男を治す妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦を識破る奇術●黒字夜光の奇術●老人終身孫を取りの奇術●腰臭を治する法●色を白くする内服藥新法●寶丹の秘製法●胼胝凍瘡治法●赤痢病の藥●送る法●脹臍を治する法●黄疸を治する法●脱肛を直す妙法●痔を直す法○痳病の治法●月經の不順を治する法●痛みを治する法●陰部の臭きを治する法●頭痛を去る法●百日咳の必治法●便秘の必治法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新法●淋病必治の新法●最新藥●中風豫防の新法●痔瘡の妙法●火傷即治の秘法●シャックリ即治法●小便を能くする新法●白髮を落す法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●あかぎれを治す秘法●豫防新法●陰部耳だれの諸瘡を治する法●疣を取る法●あせもを拔く新法●乳の出る妙藥●思ふ時目を醒す法●年齡により病氣を知る法●花柳病豫防の法●男女の髭の色を白くし且つ艶美ならしむる法●喘息を治す法●痔を治す法●秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●衣服の汚染を落す法●新しき鍋釜の臭氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に着きたる油のを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店



暮れゆく空

かすみ子

雨はやんだ、スリガラスの樣に一體に曇つた、空の間から、青い空がほんのりとのぞいて居る、光明に輝ける若き人の如！希望にちみたる空の色よ私は悵然としてそらを仰いだ、薄い日の光はゆるやかに流れて濁つた空の色は刻々に瑠璃色と變つてくる、どこからか梅の香をふくんだ風がふんはりとあたりを包む長閑な春の靜けさを破つて一聲ほがらかに鶯が啼く、あゝ現在の我身をおく此の境、幽寂な天地、其莊嚴な天地、のうち、私は包まれて終つたかの樣、過去もない現在もない明日の運命もない、生も知らぬ、死も知らぬ、只茫然として....あゝけれどそれは暫の心地であつた再び空をあふいだ目には一ぱいに涙があふれた、痛む....痛む....又一しきり堪へきれぬはげしい痛み!!!それもやがて消える樣に去つたので靜かに暗い方にねがへりをした、今もう私は明るい空の色を見るに堪へられないのだ。獨灰色のかべに向つて何かじつと考がへて見たい樣な氣がするけれど、それもやゝともすると種々の事が一しよにこんぐらかつて、目茶々々になつてしまう、あゝもう頭腦は一日々々と混亂してゆくのだ。それは去年の夏の頃だつた。

十四日の月は高くのぼつて、すんだ空から星はまばらに光を投げて居る、小川は寫つた月影を流そう／＼

として居るかの樣にサラ〳〵と流れるせゝらぎの音は夜の靜けさを破るには餘りによわい。岸にさく月見草のあまたるい香をなつかしむでもなく足にまかせて步るいた、草葉の露に浴衣の袖もしつとりとして、夏とは云ひながら身うちの冷々するのに、夜更たとひそかに思ひながら空を仰いだ。此夜の月は殊更銀盤の樣に美しかつた。夜更くる町を獨りであるくのは淋しかつたけれど、寂りとした立町通りを過ぎて櫻ヶ岡公園の新しいペンキの香のするベンチに腰を下した。紅葉の頃には目もさめる樣に美しかつた楓の植込から○○樓のあかりがチラ〳〵すいて見えるばかり、いつもは手に取る樣に聞こえる絃の音もせぬ、人聲もせぬ、帶の樣に流れて居る○○川は、處々に街の燈火をうつして金蛇を流し、街は空の光りを受けて仄白く遠くなるにつれて月の光が淡く〳〵薄れて居た。橋のたもとの乳色の軒燈は、殊更夢見て居るかの樣、四方はすべて深いねむりにおちて居た。

　恐らくお前の樣な妙な女は初めてだ、其氣分でおし通していつたらやがて破壞だ……破壞!!!から云はれたのは一度や二度ではない、口ぐせの樣に云はれた、其度まで〳〵と其顏を見た事はないけれど、破壞此言葉を聞く度に胸にはひそかに限りないプライドが湧く、そして相手の顏を見て冷笑したくなる、それが其頃の私の氣分だつた、而し突嗟の間になぜかそれ丈の勇氣が出てこない、返つて淚がホロ〳〵とこぼれる妙な女!!!やつぱり是が私にはふさはしい言葉なのだろうか?!

　此日の暮方だつた。

　姉樣ほんとに御決心なすつたの……?妹が繰返し繰返ししつこくたづねる。机につゝぷして默つて居た私は恨む樣な悲しむ樣な妹の言葉を何と思ふでもなく現に聞いて居た、最後に思ひ餘つた樣に姉樣あとで必と後悔なさるんだわと獨言の樣に云ひ切つて立上つた。あゝ私は夫に不貞だ、不貞な女は終に妹に迄見切られて終ふのだと、さすがに情なく思つて顏をあげたけれども、終に口をつぐんで何も云はなかつた。すご〳〵と出て行く妹の後姿を見送つて、是にも只淋しい冷笑を投げた。妹は私の今夜の決心を知らないのだ。否妹ばかりではない、此のひろい天地に誰一人知るはずはないのだ。

　綠が死に枯れてがさ〳〵とけたゝましく散る葉に云ひつくせぬ便りない淋しい思ひが胸にしみ入つて、人

知れず袂をぬらし夜半の夢をさます様な、高い音を立てゝばさりと落つる桐の葉に、痛しい思が湧いて過去をしのんで居る頃は、まだ女らしい優しみがあるのだ以前瞳にうつゝて居た世間と、暫くかくれて居た病の床からぬけ出て見た世間とは、異つて居る。否世間が異つたのではない、自分の目、自分の心が變つてしまつたのだろう。人情の義理のと其奈尤らしい言葉はすべて不用となつた、不人情義理知らずの女と四方からあびせられるとも、甘んじてそれを受けよう、元々燃える様な情、燃える様な希望は燃える丈燃えつくして、其の餘燼がわづかに胸のそこに殘りチラ〳〵して居たのが、まつたく燃えきつてしまつたのだ物：：淋しい冷めたい胸には熱もない燒け殘りもない、私に優しい女らしい泪を今一度流してくれと云ふ周圍の人等には只あきらめてもろうより外に道はないのだととこまでも荒びた心に堅い決心を抱いて、夜の道を公園までだとりついた。あゝすべてこれ等は過去であるすでに私の命はない命であるのに、不思議に今日までながらへて居たのだけれど、今は不治の病にとらはれて自から望まずとも一日々々にちゞんでゆく命のつなにすがつて、やがて息の絶る日をまつて居るのである。

あゝ些か五十年の人生!!!

我が半生のさても悲慘なる事よ、花匂ふおぼろ月夜戀人の腕にすがつて未來をたのしんだ事もあつたけれど、戀の熱もさめ果てゝは色も香もない枯木の様に私の初戀は雨に打たれ風にたゝかれた芭蕉の様に破れ果てゝしまつた、それ以來自分は情の人でなくなつた、優しい女でなくなつた、人妻となつても新妻の樂しさを味ふことは出來なかつた、そして〳〵終にかうした運命となつてしまつたのだ。

一度荒敗した心も、今は理性にもどつて人情も解し義理もわきまへる樣になつたけれど、もうそれは遲い靜かに過去をふり返り見れば、さすがに胸が迫つて泪が止度もなく流れる、其泪は人を恨む泪でもない、世を恨む泪でもない、如何なる大罪人でも世からはなれる最後に流す泪は美しいと云ふ、淸いと云ふ、私の泪はそれにひとしいのだ、最後の泪なのだ、あゝもう何も思ふまい、胸が苦しい。

今日ももう暮れてゆくのか…夕暮の淋しき色よ、いつか灰色に包まれた病院の窓の、冷めたき硝子に頬をふれて、外をながめた、希望もない、何もない、只暗きへ〳〵とはしる心の影のなほ何にあてがれうぞ。

死んでも放さぬ拜領の名劍

川上葉子

冷たい穴庫に捕はれに居て、そして强て明るい心を求めようとあせつて居るのも苦痛で御座いましたわ。

都に梅の噂は消行くを、山里の淋しさ、雪こそ降らね落葉の上には雨降りて、音なふものは筧の雫、猿の叫び、目の前にブラ下がつた春の氣をフー〲吹きつけてパッと燃え上がる枯木の火に獅嚙み付く樣に、そして物語の本に見る樣な小さい洋燈の下にセッセと針を動かして居ますと、夢の中に聞くそれの樣な車の音。醫師の往診の他めつたに聞かれぬ音に不思議と耳を立てゝ居ますとハタと止まつた私の家の門！

『ハテ心得ぬ』障子をガラリうづ高く積つた落葉の中に正しく二輛、ガヤ〲指圖して前に乘せた荷物を今しも車夫が下ろして居る所、提灯には○○驛、テッキリそれと私はピッタリ障子を閉めて轟く胸の高波を追懐の苦しい悶へと共にじつと押へて何故か足音を盜んで洋燈の下に斃れる樣に坐り込みましたの。

『末子』チエッ口惜しい、仇から呼び捨てにされる覺えは無い『末子』ガラリ表の戸が開いた、振り向きもせず私は唇を嚙みました『末子』中戸がサッと開たが私は後ろに脊を向けてプッツリ絲を切る、小鼻の邊りが痛くなつて見つめる灯に御光がさす『末子何故返事をしないんだッ』思はず聲が洩れさう、湯の樣な涙がハラハラと落ちるんですもの。

『末子たあ何です、私は貴君から呼び捨てにされる筈は在りません、隨分な、名乘りもせず侵入して來るなんて夜盜に等しきなさり方では有りませんか』外面如菩薩内心如夜叉、と云はれても私は甘んじて受よう、憎い〲仇の顏を穴のあく程睨み付けたい、拭いても拭いても涙が湧く、父も母も而して兄まで殺して、私まで苦しめる、憎い〲仇、私はシカと握つた剪の先を

グイと疊に突立てました。

『何だッ』小鞄を投出して私の前に坐つた其の人は突然右手を伸して痩た私の肩を小突て『夜盗たあ何だいオイ』凄い聲

『ホヽ夜盗で無くて何でせう、夜盗位は愚の事、貴君は殺人罪を犯して居られるではありませんか』初めて顔を上げた、色は少し黒く成つたが亡父に生き寫しの其の威ある顔美くしい鼻をピクリ動かして許しがたき體度に構へる、仕立下ろしの洋服チヨッキの胸にはソロモンの榮華も…と唱はれた白百合のメダルが光る『人殺しッ？』『手を下したばかりが殺すんでは有りませんよ』姐妃のお百に見た本の中にこんな會話が有りました、私は純潔なる處女だの、少女の羞恥だなど考へる餘裕は御座いませんでした。



『まあ貴夫、旅から着いたばかりで喧嘩なぞ：：』氣が付か無いのでは無く氣を付ける譯が無かたのです、潰島田に水色手柄濃納戸の鶉縮緬の半襟から抜け出た樣な白い首に長い牛の舌見たいな髱がゾロりと這つて居るんです、折れる程垂れた首のひまに亂れた前髪透かしてこれだけ見ましたの。何れ△△邊りの婀娜者か、水の垂る樣な女、番茶の

出からの樣な色に變つた破れ疊にベタリ坐つて只一言不思議な此の場の光景にあきれて見て居るんです、夫の姪と云ふ人は氣の强い意地惡るだろう位に考へて居ましたのね『まあ末子樣とやら待つて下さい、どんな事情かは存じませんが人殺しだの盜人だの、一面識も無い私、一束幾文の賤しい水には沈んで居ましたけれど酸いも甘いもチヤンと心得て居りますの出過者のお叱りは幾重にも……幾十里をはる〴〵歸りましたものを私は柳原の妻で茀と申します……』天にも地にもと賴む前の夫の下劣な品性を今目の前に露出して見せ樣、雲雀の樣に囀る其の女の顏を素向る迄私は仇人を苦しめる力の無いのを悲しみました。

『ね末子樣……』咄醜業婦、汝如きが伯母と呼ばれる資格が有ろうか仇の片破、去れど、此の時の私は屹度口から炎を吐いたろうと思ひます『貴女方勝手に歸つて居らつしたのでは有ませんか、父も死に母も死に兄妹に迄死に別れた不幸な私は中山家を一人で立てゝ居るんですよ、高等官が何です豪商が何です、可弱い少女力に及びますかよ、新聞雜誌の名前が晒してほしければ……そんなそんな見せ付けなくつても……見事中山家に立派に再興して見せますから、誰のお蔭でこんな苦勞するんです。私の家には餘分が有ません、宿屋にでも行つて宿つて下さい』よくまあと思ひ乍らふるいふるい怒鳴りつけました。

正直の塊だと人の信用を博した氣の小さい父は弟の不仕末の爲に頭も上がらず、行く先々で名前をカタられて茲から三百圓、此所から五百圓と借金の催促、それを一言で退ける事の出來ない性分の父でしたもの丁度八十圓許りの金、山林田畑は人手に渡し果ては心痛の極に達して洗ひ河原の樣な中に果敢ない一生を終りました。

病床に有つた母は間もなく取り殘された梢の柿の色見る秋の暮れ、ねぐらに歸る鳥の聲の淋しい日父の後を追ひました、殘された三人の孤兒の悲慘さ、夢二樣のお繪にだつてもつと花やかのが有ますわ、父によく似た病身な兄は兩親の死後二タ月目頃から狂ひ出しました『月の中にも美しい都が有るんだよ、白蓮の枕して運命の緒琴の高鳴りよ、湖心に投げる紫の花は、皆水神の御髮の飾りだよ、飾るに足らぬ榮ならばとも：：』云つては泣いて居りました、付添ひの妹、その小羊の目を盜んで星降る夜半狂へる若人は夢見た樂しい水底の藻屑と消えました、二十六で……。

これがまあ狂人の遺書？と思ふ程涙の滿たそれを見付けた時は兄が羨やましゆう御座いました、死んでは無い生れるんですつて釋尊の御手に抱かれて……。芽を出しかけるとノコ／＼歸つて來る畜性にも劣る叔父の前に遺書を突きつけたい、墓參の留守に簞笥から母の衣類の數々を持ち出して逃走したのを覺えて居るか、誰のお蔭で今の境遇になつたと思つて居るんでせう、養子先の財産を飲み盡し裸一貫で雪降の夜半を暫くお助けをと泣きついたのは昨日の事では有るまいか、三十の尻をからげて居て根絶にも成るべき生家の難事、二八少女の弱い身で千貫の大岩に手をかけて居るのも見て見ぬふり、賣女共の秋波を買ふ材料の苦心に現を拔かす腰拔。『これが家内で御座います』とよく連れて歸られた、



『靜が一人前の人間に成つて苦しい世帶の四分の一でも手を借して呉れたなら』落目に成つた時父の口から洩れる言葉は血の出る程私には辛う御座いました、燒跡の樣な中から兄の野邊送りするにも親戚の手からは

一錢も溢れはしませんでした、貧乏して居ても子供の物には、と此ればかりは殘して下すつた時めく時に買つて頂いた衣服や裝飾物も一つ二つと羽が生えて飛んで了つて十五になる妹と二人三つの新佛の前に抱いて泣いた時には野分した跡の野末もかくや、目に入る物は妹が心づくしの白菊黃菊が煤けた佛壇に光るのと、破れ疊ばかり。

『お姉樣どう致しませう』と妹は泣く、そんな事子供が心配しなく共と叱るだけの覺悟も勇氣も私には御座いませんでした『かうなつては暫らく別れねばならないかも知れません、千鳥ちやんは二松の叔母さんの所に行きます？』今行けと云つた樣に妹は身悶へして泣く『私御飯食べなくとも好う御座いますからお姉樣、置いて下さいませ』『だつて姉樣と居ると餓死によ』『ええお姉樣と一所なら……』『まあ千鳥ちやん』決して別れやしないわと話して喜てんだのも束の間、此の事有つて十一日目、たつた一人の味方の妹は急性腦出血の爲めに學校の教室で斃れました、蟲の息で戸板に上せられ不甲斐ない姉の細い膝を枕にした時は冷い骸で御座いましたのよ。

私は私を責めて／＼兩手で頭の割れる程打ち乍ら、妹の骸に噛び入つて聲の枯れる迄泣きました、佗ても許されないと知り乍ら……其の夜です私は呪はれる囚人の樣に吹き卷く風の中にスイと暗を突きました。過去も未來も無いんです、現在の捕はれから逃れ樣と氣を付けて見れば足袋跣足、グッタリと肩から覗く妹の死顏！！ブル／＼と身ぶるひし、私は死人を負つて菩提寺に驅け出しました。

それからの誘惑の數々、屋根は破れて星がさす、壁は落ちて暗も透かせる、ガランとした茅屋の中に若い娘が一人、倒れた中山家の再興をと（雲に梯子をかける）だの、（大川の水を堰上める）だのあらゆる冷笑を受乍らも、やつと漕寄せました時分には、孤獨と云ふ不安に恐怖を覺え乍ら、矢張り現在から逃れ樣とあせつて居ましたの。

中山秋汀女史、恥かしい程畫號を大書した昨日から奉職した學校宛に頂いた封書、放課後の寸時を絲櫻の古木に依つて懷かしい封に接吻けました（それは都に物學びする幸福な友）からの音づれを……嗚呼花やかな女優生活、オテロ孃やローレンス孃の巧みな表情に恍惚りしたのは昔の事、今の私にはそんな浮いた事所ぢやあ有りませぬ、中山末子の代になつて斷絕した

と云はれた申譯の仕様が何所に有るんでせう、一年間に四つの野邊送り、二十に滿たぬ少女の肩は爲めに毒蛇に血汐を吸はれた樣に日毎に細り行きますの、女優も尊とい天職には違ひ御座いませんでせうけれど今の私！「如何なる物好きのお方かは存じませんけれど、性格も知り給はず御目に掛つた事は勿論、それに學資を出して…御許樣のお心添ならば毫も危ぶむ所は御座いませんでせう、なれど、今暫くは父母の墓地で……」と早速御返事を出しました。

朽ちかけた橋を渡る樣な離れ業は私には出來ませぬよし出來るにせよ今日迄一生懸命、高位高官の親戚が有ても泣言一つ洩さずに引つ張つけた甲斐もなく人に便る事は死以上の苦痛なんでした、若い血の溢るゝ處女！御苦勞なさるのも心柄だわ末子さん程の顔や藝が有ば…と至る所で惜しい〳〵を聞くだに辛らき…

四人に逝かれて一と年も過ぬ間に墳墓を捨て故郷を捨て、迚も私には上京どころか（お姉樣と一所なら）と泣いた妹に私は恨まれて居りますわ。

『末子樣初めてお目にかゝりましてもお土産も何も御座いませんのよ、これ指古しで失禮ですが』フックリとした化粧指からスルリ拔けて掌に辷るダイヤの指輪相格崩して『まあ有りがたう』とはどの顔して云へませう、持前の反抗心がムラ〳〵と湧き立つて『何ですつて、見ず知らずのお方から譯なくしてそんな物貰ふ筈は有りません、汚らはしいッ』兩手をグイ〳〵とついて後にニジル、意固地な小憎らしい片意地張りの小女郎勝手にせよと啖呵も切り兼ねまじきお菊姐さん、夜寒に襟掻合す私の砂子の樣に絲目澤山の繼はぎの袷の肩をシゲ〳〵と見て『まあ好い御きりようですねえ』小聲でした藝妓させたら定めし位の事考へて居るんでせうよ『さ寢ますから歸つて下さい』『仕方が無い行かう末子荷物だけ置いて呉れ』『嫌です〳〵鞄一つでも持つてつて下さい』手強いとは思つたが『門になら置いても宜敷い内には眞平です』『何ッ畜性ッ』常人に超越したのを非凡と云へば私は…でせう。

其翌日でした宿て頂いた裏の小母さんに言傳て、家の寶物の正宗を五百圓で買つて遣ると申して來ましたその昔○○親王より拜領の名劍　苦勞の限りを盡すのも家寶を守る爲では無いか、五百や千の金で家の系圖に墨が塗られますか、正宗を横領したさに態々歸つて來たんです、食が盡たら正宗を抱いて死ぬばかりです、『小母さん逐歸して下さい』と瞭然斷つた。



新しき出發點

山の女

去年の夏から二重の束縛を受けてゐるので、日曜も夜も嬉しいものでは無く、暗い月日の中に葬つてきたのを思ふと、自分の拙い生命に對してとりかへしのつかないほど面目ないやうな氣がする。

どんなに寂しくつても、どんなに悲しくつても、純粹な心を以て自分の生命と親しむことが出來さへすれば、私の心は明るいのだけれど。

讀みたいものも讀めず、書きたいことも書けないなら、何でこんな山の中にこんな寂しい生活をしてゐる必要があらう、經驗の無いことでもないが再びあの東京へ行つて女工にでも女中にでもと思つて、落ちつかぬ身を電車にまかせて、埃のかゝつた朱塗の器のやうな暑中の市中をうろついたのも私だ。

それでも九月のはじめには此處に來て居た。無論死を決して來たのだ。三十日近く歸省してゐる間に癒らなかつた咽は、停車場からこつちへ日が暮れて夜露に打たれた爲か歸つた晩から苦痛を增した。

いよ／＼再發する時が來たのかと思つたら夜中に熱い涙が木の切口から出る脂のやうににじんだ。

あらゆる秋の蟲が鳴き立てるのでなほ悲しかつた。

翌日果して聲が出なかつた。人も不思議にして尋ねてくれたが、それが何より辛いのである。

聲からしひてしまう、何て情ない病氣だらう、村の醫者などにかゝつてうつかん名でもつけられては大變だから、東京の藥舗で調劑して貰つたのを、一生懸命服んだけれどちつとも効かない。

呼吸する度にあばらが痛む、痛だけ放り出してしまいたいと思ひながら、時ならぬ時に幾度も顔を洗つたり齒を磨いたりしたが心は曇るばかりであつた。死は怖れなくともそれに達するまでの苦みを防がずにはを

られない。この時私は遠い北の國の友から一包の良藥を送られたのである。たつた二日分であつたが驚くほど早くよく効いたために、どうやらみじめながら今日まで生をつゞけてゐる。親の力も自分の力も及ばなくなつたのを、人の情によつて保つてゐるのだと思ふと無暗に枯木だの石だのと言はれなくなる。

もとから寂しくしひなに生れた身はあまり人に馴れる方ではなかつた。それが一旦病氣といふ自分ながら厭な谷底へ陥つてからは、如何なる親友もこちらから絶交しなければならなかつた。そして幾年ならず暗い道ばかりを歩いてゐるので自分一人はまるで別物だと決めてゐた。それが又いつとなく一人二人と手紙を交換する人が出來てきたのは嬉しいことでなくつてどうしよう。

何か變化が欲しい、どこからか奇拔な手紙でもくればよいと思ひながら、障子を三方に立てた明るい室で讀書するならあぢきない生活だとは言はないつもりであるけれど、丁度鐵の橋をかければよいことがわかつてゐながら差しあたりの損益を考へては、五年か十年で朽ちる木の橋を架けるやうに、いつも泣きねいりになつてしまうのだ。こんな日がつゞいて一年になり一生になるのかしら。今日一日を空しくすまいと思ひながら、なほ明日は明日はと頼んで先へ送つてしまふ、ともすれば大切な自分をつゝかけものにする。何といふ不甲斐なさだらう。まるで死人とでも一所に居るやうな氣がする。低い板の間で食事したり、暗い湯殿で着物を着たりすることも、習慣となれば何でも無いがこのさきどうなるのかと思ふと、霧ふる暗夜の道をどこまでもさまよふて行つて、そのまゝさめぬ夢の中にでもはひつてしまひたくなつた。もうどこから誰が呼びに來たとて行ける身ではない。生きて行くだけの勢力すら無いのは誰も知つてゐる。それでも自分はどうかして生きて行かないでどうしよう。

いくら強く心に叫んでも堪へられないことが月に一度や二度はきつとある。火のやうになつて手紙を書く思はず不平や愚痴が筆に走る、天にも地にも一人の父の名を書いて封まではする。けれど一度も投函したことは無い、幾日も本の間などに挿されたまゝしまひには文庫に入つてしまふ。中に一つ××寺の住持へ宛てたのがある。今で考へるとまあ出さなくてよかつたと思ふけれど、その頃の日記にはかうある。どうしたら尼になれようか、髪を剃る外に種々考へなければなら

ぬ事を問ひ合せようと思つて、××寺へ書いた手紙、なぜ投函出來ないのか、書いたためにその潮のやうによせてくる苦痛を忘れたのであらうか、時間の經つに從つて堪へきれぬ悲憤もうすらいでしまつたのであらうか、とかう思ひついた時、それならよし今を喜んでゐられるわけだとひとりで理窟をつけて見たがちつとも合はない、すぐに心が塞がつてしまふ。せめて泣く時間だけでもあつたら何物か心の中に流れるであらうに、坂を上る車引のやうに足が前へ出なくなつた。これが青空晴れた秋の朝わが門口を出る時の心持だ。

（十月×日）

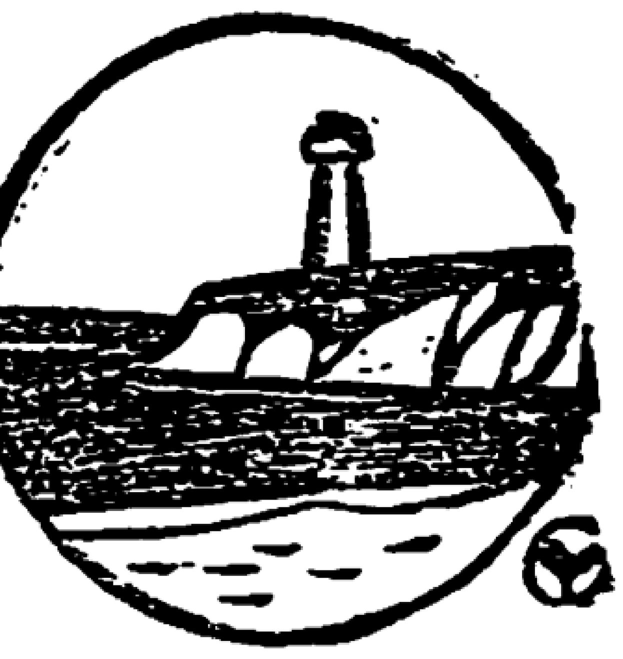
今年の春になつてたうとうそのお寺へ行つた。ほかに用事があつたのだけれど樣子によつては長くそこに居たいつもりであつたが、四日逗留した最後の晩、言ふだけでもと思つて、とりとめもない話の中へ少し悲しいことを交ぜた。白羽二重の頭巾に圓い頭を埋めた方丈はだめ〳〵、死なんていふことはすこしも思はぬやうにならなければだめだ、どんなことがあつても平氣にならなくつては、と言ひながら後ろの茶簞笥を小刀の柄で開けてこれを剝うと眞赤な林檎を二つ出した。

なほ越えよなほ悟れよと何事もとりあはざりしうらめしき僧

どんな人にでも眞心から敬慕される時には湯の中に入れた氷のやうな心を持つことが出來るが、やつぱり盲目の熱に包まれたのは心だけであつたといふことが明かになるにつれて、溶け合つて居た自分だけが、冷い水から分離して浮いて固まつた脂のやうなものになつてしまふ。かうなつた時にはもうそれに關る涙などは出ない。もとの孤獨に歸つた淋しさが更に更に大きい尊いものに近づけてくれるだらう。自分は無學である盲目である。何物をも見つけることは出來ないが、ただゆくところが澤山あるといふことを忘れまい。

悲哀と絕望の極から新らしく出發したのだから坦道が行けるだらうと思ふ。火の沓でも氷の沓でも歩けさへすればよい。決して失望すまい躊躇すまい。眞に自分の心の暗い理由はないと思ふけれど人々の標準がとれないからやつぱり暗いものと限つてしまつた。





大島の渚より

静香

桃代さん。貴女は今さらこんな女の消息を御尋ねになつて、何になさる。死の宣告を受けたも同然な私、消えて行くべき女の一歩一歩を、一刻一刻を、お聞きになつて、如何なさるんですか、又貴女の事だから、それからそれへ、ヒネクツテ御考へになつて、何かの材料にでもなさるんでせう。屹度そうなんでせう？貴女が、御父君御危篤の、電報を手にせられて夜行の列車で平沼を發せられる時、忘れもしません。あの停車場の暗い影に、私をお呼び下さつて、四方や、大島までなんぞ流されはすまい、花さんそれは大丈夫でせうから安心して居らつしやいよ。何しろ私の歸るまでは如何な事があつても、横濱で辛抱して居て下さいよ。と、御言つた、貴女の御言葉も守られないで嘸かし意氣地なしと御思召すでせう。けれど、私だつて御存知の通りの女ですもの、否と云ふ事は此の口からとても出せません。私を百も御承知のくせにあゝしたお手紙を下さつて、花を御泣かせになるなんて、何と云ふ御方なんでせう。私が横濱の地を離れる時から、此島へ送らるるまでの暗い淋しい心の中を書いてせめても貴女の最後の御言葉に對して、御詫申上げませう。これでは消息を知らせよ、との御言葉に逆らふ樣になりますかも知れません、けれど單純な日頃をまはらぬ筆で書いた所で、何の變化もないんですものを。私は今度程瞬間に成り立つ人の運命と云ふ事を、深く思つた事は御座いません。私は是れまで運命」こは、人生れながらに持つて居て動かす事は出來ぬ物」思ひつめて居たんですけれど、けれど、私は遂に一夜の中に總ての望を失はされました。又幾分か殘つて居た光も皆取り去られました。私は桃代さん、もう、二度生きられるとも思ひません。又暗い冷たい淋しい心を抱いて此世に生き永

らへようとも思ひません。桃代さん、花は一刻も早く安靜な影を辿り度う存じます。今で考へますと、花は反つて、かうした刺戟の無い島で總ての人を遠ざけて唯々涙の音を友に朝夕を送る：：花の心は、たしかにもう死んで居るんです貴女は私の事をよく同化され安い人だから、ぢき昔の事は忘れて了ふ。なんて仰言つた、けれど、もう同化する物が無いんです。私と同化して呉れる物は、一ツもなくなつて了ひました。天と地との間に眞の眞の孤りボッチになつて泣くにも、笑ふにも。あゝこの暗い心を思つて呉れる人は無論無く息の無い物だつて、私の病を知りつゝ傍に寄つて來ては呉れませんでせうに。

流石に、貴女はドクトルだけに私と北村さんと、御自分とを比べて三人の中で、一番長生するのは花さんだと仰言つた。苦しみつゝも此世に長く留るのは花さんだつて、今更らながら脊髓病なんて、おまけに他の病も併發しては生きて居たつて死んだも同然。否々死よりも、以上に、暗い心は抱いて居るでせうと存じます。

先づ横濱を出ます時の心持ちから：：皆さんが如何だつたかとか何とか御尋ね下さるんですけれど、自身は、左程に感じませんでした。丁度二十四日の夜でした一月の。御存知の田中の伯母が横濱に手紙を寄來しまして、それも氣むづかしい高梨の大先生に宛てゝ直ぐ東京まで歸つて呉れろつて、後は誰れか附けてやるからと云ふ烈しい手紙、何ぼ高梨先生だつて、斯う云はれちやたまりませんよ。私は其夜皆様が手傳つて下さつて大急ぎで荷物を作りました。雪子さん、妙子さん達は兩方から取りすがつて泣いて下さつたの。けれど

私は別に悲しいとも思ひませんでした。別れに望んで、熱い涙を出す。そんなやさしい心はもう何處へか飛んで了つて、如何して居たらいゝんだか少く狼狽へた位でした。あゝ此連中の中によく私の心を知つて下さる貴女の涙が混つて居たなら、私はどんなに慰められたでせう。でも自分ながら不思議でした、だつてあんな強い妙さんが、私のために、泣いて呉れるなんて

私はまだ人から其れ丈け憫れまれる事が出來るんでせうか。大切な人の涙をまだ一滴でも、貰ふ事が出來たかと思つたら有難く無い事もなかつたんです。

斯うなつた上は早く一刻も早く誰れも見えない所に放られる方が反つて苦痛から遠ざかつて心も落付くだらうと、海を渡つた彼方の岸に、一刻も早く着き度い

者と思ひました。其夜皆さんは送別會だとか云ふて讃美歌を歌つたり、祈りをして下さつたりして慰めて下さつた。只管船路の安全ならん事又如何なる時にも、神と離るゝ事のないやうにと、神に祈つて下さつた。私は只ぼんやりと、夢から夢を辿るやうな思ひに其夜も貴女を送つて行つた夜と同じ様に胸が痛かつたので深い思に沈んで闇黒な未來を思ひ巡らして居たんです。三原の山から、立ちのぼる世を呪ふ恐ろしい烟に、私の心は攝はれて居たんです。やがて聲を合せて、



海山へだてゝ身は離るとも
心と祈は常に行き通い・・・・

と最後の送別の歌いよく これで皆さんとも別れるんだなと、我に返つた様に驚かされた。而して無意識に口が開て「皆様どうも長長お世話様になりました。此後も御見捨てなく願ます」二年間共に學び、共に戯れたなつかしい友の前に是丈けの言葉は投げ出された。此後も御見捨てなくなんて、何處から出たんだらうか。友の前に、やつぱりうらぶれ果てゝ居りながら、まだも

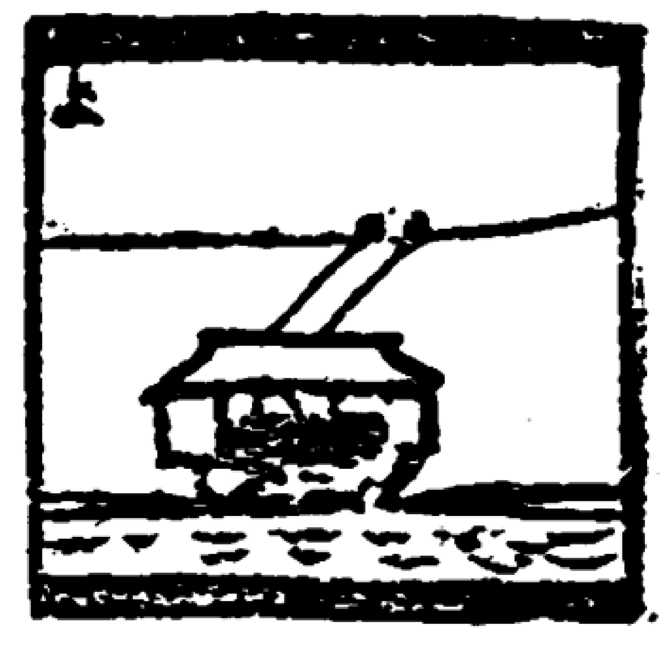
虚飾の言葉を用ひたんだ。

自分ながらわからないんです、桃代さん。苦しい一夜を過し翌朝は早く東京に參りました。田川さんは、わざ〳〵東京まで送つて下さつたんです。切角新橋まで來て下さつたので是非糀町までと、お引き止め申したんです。けれど無事に一人で歸れる事と看破された田川さんは家の者に逢つて下さらなかつた。

伯母の家に這入つた時、何だか居ても立つても居られなく悲しかつたのです。私は此世に於ては二度自分を酷い目に會はせてくれた人にもう返報が出來ない、果敢ない自分と思つた時驀地に心の底から死の影を望んだ。さし迫つた最後の夜と思偲んで人知れぬ涙にむせんだ。これでもまだ時としては「汝の敵を愛せよ」なんて云ふ昔の寢言を繰返してはやつぱり、餘義ないんだ、と一人で叫喚んでは自分の心を慰めて居たんです。其日の夕暮、都を離れる事になつたのです。靈岸島を離れる時一人の書生が花子樣御身を御大切に：：つて。それでも云つて呉れたんです。私も「伯母樣によろしく」、つて云ふ本意ない言葉も洩れたんです。ああ桃代さん、私は遠い朝鮮の事が：：しか〳〵思はれましたの。父はよもや娘がかうした哀れな姿になつて都を落ちて行かうとは思はないでせうに。私の實母だつて昔は：：二十年の昔は父とは相當に睦じかつた仲だつたでせうに、其中に出來た子供を今更忘れて居る。そんな事は無い。斷じて無い。私は其夜殊更に、父樣父樣！と、呼んで見た。遠い朝鮮の地に華やかな生活をいとなむ父が戀しかつた。桃代さん。其夜の月は細かつたの。ほつかりと、大空にかゝつた、細い三日の月は落ちて行く私の暗い心にほのかな光を、そゝいで呉れました。

父の愛はこの光位はかすかに遠いながらも此身に及んで居る事を深く思はされました。船の一夜も明け。翌朝は靜かな大島の濱村に着きました。濱邊には預けらるべき家の妻女が出向へて呉れて勞れた私を助け、程近き家に連れて行つて呉れてやさしく取り扱かつて呉れました。島の牛乳も呑ませられました。玉子も特別に此家に飼はれて居る鷄の產んだのを食べさせて呉れます。私は肉體の勞れが安まると又貴女がよく仰言つた人前の假面を裝ほふて眞面目な顏をして居ります

桃代さん、花はこの靜かな島で、月の良い晩などは恍惚と、島の舟唄を夢のやうに聞いて、居る事もありますが——此の暗い心はいつ離れるでせう。



帝劇の一夜

松野みどり女

今は○月○日の午前です。私は何よりも先に御二人樣に筆を取りませう。

私は昨夜帝國劇場へ參りました。御兄樣のやうな筆があれば目に見るやうに御知らせが出來るのですが、私には何と書いて宜いのか分りません。唯々綺麗でした。立派でした。流石は日本唯一の劇場です。見る物の凡て——場面の構造と云ひ舞臺の背景、電氣の應用までが——とても他に眞似る者の無いのが此處の價値だと思ひました。

斷はつて置きますが昨夜は銀行の頭取の招待で行員全部が行つたのです。一等席の半ばほどは△△銀行の者ばかりでした。

一人娘を人形のやうに着飾らせるのを無上の快樂とする母と京橋に住んで居る金持の從姉とによつて念入に作り上げられた私、お召しの二枚重がしつとりと體になずみ、縮緬の長襦袢が歩くたびに脚に纒れるよろこびよ！羽織裏の緋羽二重がキュッ〳〵と鳴つて、肩に掛けた裏葉色の薄絹がふんはりと襟元へ沁み入る何とも云へぬ心よさ！

私は洋々とした春のやうな心持で、紫紺地の洋裝に白いエプロンを掛けた案内の女に導かれつゝ、銀行の○○課長さんと共に、靜かに、多年思ひあこがれた愛と美の聖殿に這入つて行きました。場内の裝飾のまばゆさよ！場中の視線は一齊に自分に集まつたやうで、顏がほてつて面が上げられませんでした。

私の椅子は、舞臺から眞正面で、一等席の一番後の最も眼に立つ處にありました。

私の席の廻りは、若い、銀行では最もハイカラな人人許りでした。直き隣の方は脊の高い髮を額に波打たせた人、其次ぎに荒いオリーブの縞の背廣を召した方、其の次ぎは細かい柄の大島紬の羽織と着物と揃に着流した人です、其の先きには白ッぽい大柄の背廣に赤海老色のネクタイの際立つて目に付く方でした。ほんとに、思つても見て下さい、七十人の行員のうちで、たゞ一人の異性です。萬綠叢中紅一點と云ふやうに、私は流石に顏を紅に染めました。

幕が開いて第一番に感じたのは女優が少さ過ぎて舞臺との釣合が取れぬ事でした、まるで人形が踊つて居るやうです。日本の女が斯かる大きな舞臺に上るには思想を高めるよりも技藝を磨くよりも先づ體格から直してかゝらねば駄目と思ひました。然し帝劇の着附の色の配合の殊によいのには感服いたしました。一番目の『鹽原高尾』の時、僞似狂女のお花の着附は、淡紅色の半襟をはだけ氣味にして、腰帶から下も淡紅色、それ殆んど桃色に近い色の裾廻しを返したさまの、其華さ、うつりのよいこと！野暮くさいと云つて嫌ひだつた桃色が急に好きになりました。狂女の氣附は、よく桃色を用ひるやうですが、桃色は狂つて見えるのでせうか。

狂言は松助と幸四郎が助けるので多少感激を與へますが、惡人が悔悟しての自刃も、家の爲めに身を賣るお秋とめしいの母との別れも私には差して悲しくは思はれませんでした。

「他の女の人は皆んな泣いて居ますが、あなたには泣けませんか」と隣席の人にさゝやかれて今更あたりの人のすゝりなきに面映くなりました。唯、家の悲境に身を賣るかなしみを、かぎりなく親しかりし友に語らんにも友が放心ゆゑ聞き分け得ぬものと思ひて泣くお秋の心と、友の悲境と友の深切を知らぬ振りせねばならぬお花の心とは、二人とも自分と同じ位の年頃の故か沁み〴〵と同情されました。一番目が濟むと、東洋軒出張の大廣間で晩餐の饗應にあづかりました。

幾列もならべられた丸卓子は白布に被はれて其何れにも、中央に一鉢づゝの西洋草花が置かれてありました。のうせんはれん、ベコニア、美女櫻、アネモネなどが冬の寒さも知らぬ顏に、とり〴〵の色艶を誇つて居ました。

若い男の人達が皆席に着かれてから、一番あとになつて私は〇〇課長さんの後ろについて食堂に這入りました。

華麗の極みよ。贅澤の極至よ。快よい吸物の匂ひが室に滿ちた。所々にある植木の影から白いカラーや赤いネクタイがチラ〳〵見えて、歡聲歡語が湧くやうに聞えます。

椅子に歸ると二番目の悲劇『日の出』が始りました。これはイプセン劇の『人形の家』のやうなもので、根引された新聞社長の後妻になつた藝者が、先妻の妹の菊子に妬み卑しめられ、煩悶の極に自覺すると云ふ筋

です。村田かく子の後妻はよい出來と思ひました。前身が藝者なるが故に散々人人に疑ひ卑められはては自覺して「あたしは藝者だつたのね……あゝ此のさめたてゝろ、何と云つたらよいのでしやう?……丁度、あの廣い／＼海に出る日の出を見るやうだわ……」と云つた時、私も何かなしに分明つたやうな氣がして天井に描かれた天女の舞に眺め入りました。



三番目は歌劇『熊野』です。緋の袴を穿いた柴田環女史の熊野、清水金太郎と云ふ人の烏帽子姿の宗盛、聲は日本が稀れに產出する美しい聲、曲はユンケル氏苦心の曲。

歌劇が濟むと、またクイツクラチンで御茶が出ました。人人は歌劇の失敗などについて、喧しく論じて居られました。

私は若い支配人たちと二階三階を見物しながら散歩しました。

花瓦斯の光りの美はしさよ。

人々はバーや珈琲店に寄つて飮んで居られます。私は無邪氣な(?)揶揄の言葉を此の夜ばかりは羞かしく聞きま

した。

私も色々とすゝめられましたが、何も飲みませんでした。他の令孃方や貴婦人達は浮いたやうな調子で男の方と巫山戯ながら召し上つて居られました。歡樂の世界よ！

あゝ巴里の街に、二十を過ぎた處女が居るでせうか。若い男と、若い女の人息れに、香水と麝香の匂ひとがてぐらかつた一種の雰圍氣の中を縫つて私は風通りの宜い露臺に出ました。空には、雲が切れて星が出て居ました。見下ろせば、今し方まで降つて居た雨に濡れた電車道の敷石は電燈の光りでキラ／＼きらめいて居ります、闇をすかすと千代田の城がかすかに見えました。

チヤラン／＼と鈴が鳴る。あはてゝ席に歸ると、四番目が始まつて居ました。沙翁ものゝ『陽氣な女房』と云ふ喜劇。舞臺に活氣があつて女優劇としては大出來でしたが、洋裝での上方言葉は全るで木に竹を接いだやうで、調和がよくないと思ひました。

さて大切は『梅松竹』と云ふ所作事でした。目の醒めるやうな美麗な舞臺がダークチエンジで次の舞臺に移る。燦たる電燈が一齊に消え、無數の聽衆は廣大な場中の暗澹に包まれて寂となる。と、十人も十五人も躍つて居た役者が其のまゝ、ズーッと高い／＼天井へ吊り上げられて仕舞ふ。やがてパッと電燈がつくと、ちやんと別の舞臺面になつて居るのです。見物は其都度拍手して喝采しました。

竹の巻では、洋畫の笹藪を背景にして一樣に、赤い紐の菅笠を被つたふくら雀の服裝した女優が二十一人二列に並び六人の出語りの淨瑠璃につれて、揃つて躍りました。

何と云ふ綺麗な華やかな眺めであろう。

三千の佳麗を一室に集めた思ひがしました。

ハネは十一時近く、車寄せには人力車や馬車や自動車などが市のやうに込み會つて居ました。

一時晴れた空は、また烈しく降り出して霙になりました。私は今宵の幹事の一人と〇〇課長さんとに電車まで送つて頂きました。停留場は黒山の人で、漸く來た一臺の電車に、必死の力を出して、人を押し分けて乘り込みました。あゝ此のどさくさがいかに私の花やかな空想をもみくちやにしたことでしやう。

神田橋で乘り換へを待つ間に蛇の目が雪で眞白になりました。

私は家にかへつてから戀人に別れるやうな心持で、コートやお召や縮緬の長襦袢などは母に脱がせて戴きました。それでも、あの甘い匂ひの鼻を打つお白粉だけは、今朝まで落さずに置きました。私は谷崎さんの『秘密』を思ひ出して女に生れた幸福を深く〳〵神に感謝しました。

あゝ思へば何日まで無邪氣で居られる私でしやう。『日の出劇』の美はしい娘雪子よりも二つ姉の二十一です。霑める眸のともすれば地に親しみ勝ちの今日此の頃、いつまで無邪氣で居られるでしやう。

此の妙齡の私が多くの男の中に唯一人這入つて日々勤めをして居るのですもの、さぞかし皆樣は色々の眼で私を見て御出になる事でしやう、けれども私は臆病です。多くの若い男が私に投げる視線の數だけ、私も矢張り、そつと投げ返して居たかも知れません。が、たゞ物議を憚かる嬌羞の念が、私を極端に臆病にしていつも思ひ切つた事が出來ないのかも知れません。無邪氣を裝つても二十一ですもの！。オリーブ色の背廣の人、大島紬を着た人、××さん、△△さん、其他の多くの人達と、神よ、私は友人であり得る事を感謝します。

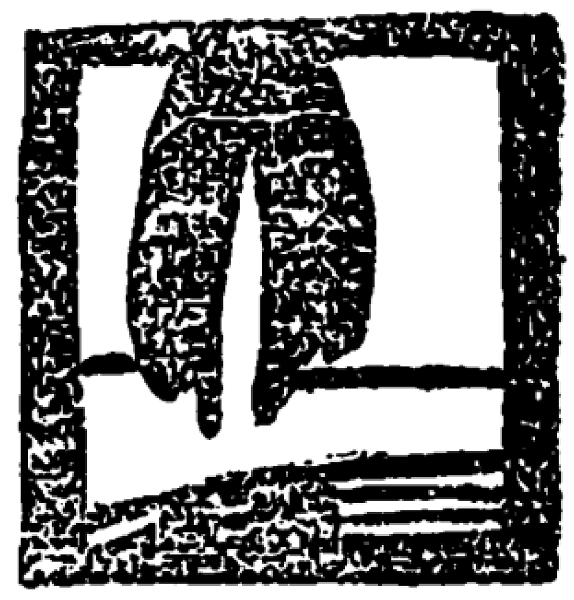
編輯通信

本號は『大阪東京優劣論』と『食味の感想』と二小說の爲め、豫定の紙數を大いに超過し、掲載すべき筈の左の記事は凡て次號に廻すことゝなれり寄稿諸氏及び讀者の諒察を仰ぐ

――記者――

◉若き婦人(女學生)に與ふ……菊池幽芳
◉くま大……………横瀨夜雨
◉原町の家…………江村胡夷
◉黒ダリヤ…………北原白秋
◉日記………………磯萍水
◉牡丹………………水野葉舟
◉西鶴の作と女性……外島浪之介
◉桂公爵夫人の平生……福原鶴子
◉女優の情操…………森律子
◉人間の體內に生きてゐる蟲……澤田順次郎
◉愛憎………………小笠原貞子
◉破談………………佐藤萬壽子

其他誌友諸君の文章、和歌等



黒き扉

村山咲子

『尼におなり……ねえお前は尼になつてくれないか、尼に――尼におなり！』

靜な聲と眞面目な顔に私もつひ沈んだ調子で、

『あなたはそう有仰る權利を持ちますか、そうお云ひなさる權利があるんですか……』と迄云つて口をつぐんだ。

『無論さ、權利がなくて云ふものか、尼におなりだらうね？』

『權利をもつてさへ下されば……私に愧ない心を通してさへ下さるなら、誰が何といはうとなりませうなつてお心を休めませう……』

『本當、ほんたうかい……惜しいけれど仕方がない』

『何日ですの、それは……』

『別れるやうになつた時――それから』

人の言葉は靜に切れた。私も默つてうつむいてゐる顔を合す勇氣も言葉をつゞける元氣も、ふたりの心には無論なかつた。暗い正月はわれ等が間に再び流れ來たつて、一種の壓力を感ずると共に、私は淋しい……けれども可愛らしいわが未來の幻影をも浮べてみた。

どうせ、どうせ生き甲斐もなき軀であるもの、死んだつていゝ、尼になつたつて死んだとて佛に捧ぐるは一つの道――死によつて逃れ得る苦痛ならば私は死にたいと思ふけれど、あまりに複雜な事件の中に活きゆく私は、生と死のけぢめさへも明かに知る事が出來ないのだ。けれど死んだつていゝ。私はわが身の存在を疑ひ、不徹底なるその心にもあきれるが、それはある一時に起る心で、幾回となく消えては起り、おこりては去る狂的であつた。

今、去年の悲劇を再び演ぜんとしつゝある。

私の軀はそれほど安くはなかつたのだ。なぜ人間は尊い貞操を生命と知るまい！思ふまい!! 私は貞操の尊さを證據立てたいと思ふけれど――。

孝に活きんが爲に愛する妻と別れて、愛なき結婚を敢へて再びする男の心は、すでに死せしといふ、ほろびしといふ。

貞操の尊さは男でも女でも同じ事だ。幼子の如くに聲立て泣く時にも、狂せんとして生の存在をわけかぬる時にも、走るがまゝに行くがまゝに終のさだめを流るゝ雲に任せし折りも、尙、私の心からは離れなかつた。

悲慘なる極度の涙に涙する優しかるべきわが性は、鬼の如き人々にさいなまれ、暗き心をも塞かれと、只人の懐を唯一の隠れ場と知つたけれど、夢さへも安らかには結ばれなかつた。

そのむかし、母が乳房に縋りし幼兒の圓かなる夢の遠く續きゆくものとは思はなかつたけれど、斯くまでに破れゆく心とは想像も及びがたかつた。

額にみだるゝ黒髪をかき上げられしとき、むせび泣く涙をぬぐはれしとき、わが醜の社會の風に觸れざりし昔の美しさを、なほ懷しみし弱きわが心よ！

私は私を捨てよと迫りて人を苦める彼人々を永劫に心から去ることが出來ぬ、私の心を固からしめた、萬人の心をも見出したのだ。

頽廢せしわが心よ！私はそれを悲しむけれど、再びかへさんとせばたゞれたる神經はいづたらに痛む。

私は何日か私のきずの痛き歴史を語りたく思ふ。師に友に多き誤解をとかうとは思はぬけれど、痛たましく破れし思ひを語りたい。世評にうたす最後の日のあると思ふも無いと考へるも、皆時々に脈の烈く血の湧き上る刹那の強い刺激であらう――。

泣いて暮すも笑ふて過すも一生の長さは同じである苦痛を忘れて宗教へと進める人は多いけれど、私の足はふみたる芝をふみなほす餘裕がなかつた。自分の心のみ美しいとは思はない、ある時々には愧かしさに人なき所へのがれたいとも思ふけれど、わが苦しみは常に新しき憤りと我まゝがつきまとうてゐる。私は自分に手もつけられなくなつて來ては、やるせなき聲を涙と共にあらはして、それで笑顔を見せてゐる。それがやつぱり私には苦しい――。

私の凡ては私共の前に起つた事件の爲に碎かれてしまつた。それでも尙、人形のやうな心になつてと、けなげな決心は持ちつゝも、悲憤の涙は止めどもなく落ちるのだもの――どうせ私は眞面目な生涯は送れない尼にならう…人もそれを望んでゐる…尼になつ

て思ふまゝ美しき心の中に活きてゆかう――
……あゝ慈愛に富める父様よ、母さまよ！ゆるして下さい、此頃の重が行爲を物足らぬと思し召せうともとがめないで下さいませ――私は再び去年の悲劇を演じようとする事情がゆるさないもの……
寂しい生涯とは思ふまい、尊いつとめに後の半生をゆだねよう。尊い女の道の證を立てたい。
闇をゆく子の慘な姿を見出したとき、青色の布で眼をかたくしばつて貰ひたいと泣いた。明い光をさけようとするから惡い、日の光に心をさらせと云はれたけれど、一度けおとされた斷崖のそこに、此世のひかりはさゝぬものを……雪のふる夜の明るい窓にそゝられるやうな胸をいだいても、なほ海のかなたの人々の顏が鮮かにうかんでは、わが惡運を作りくれたる人々よ、と冷笑が身邊に上る時、臆病な私の心は云はうやうなき大膽さを覺える。
さゝやかなる水の音にむしあつい午後ものぎよき旅に出初めての夏であつた。その時の私の心は固い決心と大なる悲憤に充ち〳〵て居り乍ら、尚やさしい笑顏は常に消さないほどであつた。
されどうまれつき臆病な子は、痛ましく破られし鬼の如き人の前には小さくなつて息づいてゐた。
周圍の慈愛を一身に集めてゐた身は終の床に横たはりて一人あるよりも怖しく悲しみを知りてふるへた。
『別れてくれる事は出來まいか……』
『けれど離縁してくれませんもの』私がふしめで云ふたとき、
『よし、私が離縁してやるから出て行つてくれ！』
私の頭には熱い血が狂ふた。
『あなたに離縁される必要がありません!!』
小さな胸は力強く張り充ちてゐた。
私は私を碎かうとする凡ての人々を冷視するを憚からぬ、冷笑するを恥ぢぬのだ。闇に走りゆく子の姿は慘であつても、かへり見れば我等が前にひらかれし事件にたづさはる人々のうち、私はわが行動を公明なる鏡に映して眺められるとき、自己の姿の尊さに尚ほゝゑみは禁じ得なかつた。
あゝされど過去より來る烙印は、わが生命のほろぶる日にも、尚新しきがまゝに鮮に見ゆるがつらかつた。
わが安住の天地よ、いづこ！
詩を思はぬ日、暗い窓の下に坐つて、A.I.M A と書

いた巻煙草の空がらをあけたりたてたりして、長い沈默は續いたが、レッテルの西洋婦人の横顏に私の唇はふれてゐた。何者かにをびえたやうに眼を蔽ふやうにした時私は呼吸が苦しうなつた——。若い女は過去の記憶の黒い扉をあけようとしたもの。

廣い世の中には親に離婚された人もあらう、夫に離緣された人もあらう、周圍の人々の爲のもあらう、又



自ら求めて出る人も、皆それ〲の理由のもとに、胸のふくらみと、強い悲みを知らしむる。世に結婚てふ名のある限り呪ひの聲のつひに絶ゆる時はあるまい。私は人妻といふ優しかるべき名を得てより苦しみと悲しみの中に漂ひ夢にも安息の場所は得られなかつた。私の不幸は結婚によつて生れ、辛き苦痛は人妻となつて覺えた。厭ふべきもの呪ふべきもの唯一

私は結婚だといふを憚からぬ。私は普通はづれた強い歎きを與へられたもの——痛手の苦しさには氣も狂せんとする……

老いたる人々と年若き男女等が心の混濁の渦卷きであつた。私も若い女ではあるけれど、なぜ今の女は貞操の二字を生命と思はない？昔の女のやうな美しい心をなぜ持たぬのだらう。私の痛手も悲痛もみんなこれ等をわきまへぬ賤しい心の人々が構成したものであつた。

靜寂なる情緒と放縱なるおもひにあるにも尙凡ての事を忘却することが出來なかつた。強い悲しみは涙多い時、それからそれへと止め度なく走つてゆく……たれか知る！たれかしる？わが悲しみを……されど私は知つて貰らうとは思はないけれど、口惜しいかなしみは涙の中に交じつて熱狂せる血をいたづらに湧かしめては、おさへがたなく苦しめる。

苦しい歎きをおぼゆるとき、鐵橋を渡る汽車のひゞきを聞く度に、私は天靑き土佐を偲ぶ。波荒き土佐の海邊に生ひ立ちて切角大きうなりし女の子の聖かりし心は暗やみに奪はれた。

* * * *

編輯通信

本號特別募集記事の入賞等級は左の通り定む

▲一等、銀色の魔が誘ひに來る…毒だみ

▲二等、暮ゆく空……かすみ子

▲三等、自殺と結婚と……小宅てふ子

▲三等、黒き扉……村山咲子

▲四等、死んでも放さぬ拜領の名劍……川上葉子

▲四等、新しき出發點……山の女

▲四等、明るい印象……磯村春子

▲四等、月下に惱める產婦を救ふ…白妙女

▲五等、▲大島の渚より、靜香▲帝劇の一夜、松野みどり▲世間話、磐田順子▲春宵怨、曉子▲奇遇、しらなみ子▲親展　野の人▲婚約日記、渡邊涙子▲おみくじ　秋子

●●短文の入賞者は平塚白百合、千鶴子其他『花ふゞき』に全部收めたり。

●●●●櫻の名所　入賞者は作者の名と共に一々記事の終りの方に附記し置きたる通り。



自殺と結婚と

小宅てう子

蚊帳ごしの行燈がほのかな光線をあたりに滲ませて天井裏に丸いかげをつくつてゐる。私はそれを見詰めるともなく、ゆるく團扇の手を動かしながら夫のそばに語り疲れた口をつぐんだ。蒸暑い夜である。街の轟きとでもいふのであろう。郡部に接した山の手の端れの町の、暮れては殊に靜かな夜の空をふるはして、幾百萬の物音から成る一團の音響が、暑さになえた全身の神經に鈍く感じられる。その漠然とした音響の中から、一本の管を通して吹き出された樣に、突然するどい赤兒の泣聲が沈默を破つた。

愕然として我に返つた私は、殆ど戰慄へるばかりのさむさを心に感じるのであつた。この日頃私の心に暗い陰影をつくつて、寂しく、淚つぽく弱りはてた胸を、絶えず掩ふてまつはりくる或るものゝかげ――夫の病症の重體であつたゝめ、辛うじて押し殺してゐることの出來たそれが、今このしづかな夜の寂寞を亂す赤兒の泣聲につれて蘇へらうとしたのである。私は誰かの胸にすがつて同感を求めずには居られなくなつた。

「貴夫、もうお眠つたのですか」

「うむ、何だ」

「ねえ、貴夫は何ともお思ひになつたとはありませんか、私は世の中に赤ん坊の叫び聲ほど、皮肉な調子を帶びて聞こえるものはないと思ひますよ。あの聲をききますと、痛いだらうの、お腹が空いてるのだらうのと惻隱る餘裕なんかありませんわ……何だか私達を早くこの世から逐ひ出さうとして、後から來るものが威嚇する聲の樣に思ひなされて、淋しい、うら悲しい感じがして來ますねえ」

かう言つた私は、自分で自分の言葉に引入れられる樣に、淚が滲み出さうな氣分になつた。夫は默つて天井を見つめてゐる。赤兒の聲は、絶ゆるかとすれば切れ殘る一本の絹絲をたぐる樣に、細々とつゞいては又

激しくなる。それが凱歌を奏してゐる樣にも聞きなされてくるのだ。堪らず耳を掩ふて突伏して了ふと、俄かに胎内の兒がゆるやかな運動をはじめるのであつたそして闇の中から湧いて來て、掩ふてもなほ耳をはなれぬ彼の兒の聲と調子を合せて、躍りつゝあるかの樣にも思はれるのだ。赤兒等の歌ふ聲は實に皮肉を極めてゐる。

――古きものよ、病みたる人よ、おんみは新しく生るゝ我等の爲めに、席をあけて逝かねばならぬといふ意味の樣だ。

私は狂ほしく立上りさま、己れを、女を、かくまでも慘ましく苦しめるもゝの本體を捉へ得と思爲するかの樣に、いそがしく帶に手をかけて解きはなつた。ふと、傍を見ると、夫は大きく見ひらいて此方を見てゐたが、私の醜くゝふくらんだ腹部に眼を移すと、怯えた樣に枕を返して向ふへむいて了つた。やる瀬なさのつかまりどころもなく、私はたゞ力なく坐つて了つたが、きと顏を上げて

「貴夫、貴夫、どう遊ばしたの」

と言つた。聲は尖つてつッ走る樣に出た。

「うむ、どうもしはせんよ」

「ぢや一寸此方むいて御覽遊ばせ」

「うむ、うむ……」

迷惑さうに額を深く埋めて了ふ人の心を、すべての責任から逃れ去らうとする卑怯者！　とのみ一途に思ひ癖めた私は、初めて男に對する怒りが心頭に燃えた。射も通れと見据ゑた眼からは霙の樣に涙が走る。いつそ此の醜い部分を割裂いて、流るゝ血汐と共に中にうごめく肉塊を掴み出し、あの弱々しい神經をもつ人の胸へ叩きつけたら……。復讐めいた言葉を胸にくりかへした。心平らかな折は、この樣な人を父と呼ばすることの、たゞ慘ましく哀しくのみ思はれて來たそれも忘れて、ひたすらに呪ふ樣な事のみ考へつゞけてゐた。疲勞と共に涙もつきた頃は、絶望から來る樣な冷やかな笑みが唇をふるはせてゐるのでつた。

いつの間に寢入つたか、眼をあけてみると、夜半に出たらしい月の影うすれて、窓は若々しい朝の光りが代らうとしてゐる。重い瞼を押す樣に緋の括りした枕にうつ伏すと、涙がほろりとこぼれた。

病人は安らかに寢入つて居る。燈火を吹き消すと俄かに闇がまぎれ込む樣に室の中を暗くした。開けられた窓からは曉の爽かな空氣が水の樣に流れ入つて、

スーと蚊帳の裾をなでた餘勢が、いたましく肉落ちた人の、ホヤ〳〵と生えのびたあご鬚をゆるがして翫んでゐる。私の濁つた頭腦もや丶健かになつた。もはや昨夜の事はけろりと忘れた樣に、今日の仕事の始めを考へるのであつたが、折々自分を嘲ける樣な微笑が唇をかすめて消えた。(夏の日記より)

出產の苦さを言ひながら女は年々に子の數を加へ、柳眉を逆立て丶良人の不都合をならすノラさんの渇仰



者にして、未だ一人の屈辱の前に憤死した噂をきかぬと或人は笑つてゐた。げに人の心に忘る丶といふ一種の作用がないならば、蹉跎たる行路によく步みを續け得る人の幾人かあろう。女が男と一所に生きてゆかれるのも、一面には時とともなふ忘却の賜に外ならぬらしく思はれる。

結婚は夢の美しいもの、夫は妻に甘きがよく、綾羅錦繡は我が誇りを充たす唯一の材料と思ひきめて、そ

を得たよろこびに今日を遂ひ、明日を迎ふる事の他には何の思ふこともなき人々を除くならば、女の生涯は大抵苦笑の連續であらう。嫁いで產んで死んでゆく、平々凡々の事實を平々凡々に解釋することが出來ないで、胸にあまる疑問を包みながら默々として引摺らるるがまゝに良人の後からついて行く。矢張り苦笑の外はないらしい。

斯は言ふものゝ、私は單に人妻といふ名に對して、屈辱の最大なるものとは思ひたくない。少くも、病殘の身を生れた家に飼殺しと言はるゝ恥しさを忍ぶよりは、遙かに嬉しいものと思つてゐる。與ふる者は與へらるる者より幸ひである。私のために母が作つた溫かき褥も、美しき心から出る周圍の人の慰めの言葉も、すべて憫みよりせらるゝ我は弱者ぞと思ふ時、堪へがたき汚辱を感じずには居られなかつた。烈々たる天日の下に、確りと地を踏みしめて步み得る者は最も幸福であらう。病氣はすべての幸福を私の手から奪ひ去らうとしたのである。他人の厄介にならねば一日の生存をも續けることの出來ぬ殘骸をもて餘しながら、なほ私は與へる者の幸ひを想ふて止む時がなかつた。

自殺と結婚とを同列に見る——私も人妻を呪ふ一人であつた。世界人の半を充たせる女の中から、御身ただ一人を選ぶと言ふ男の言葉には惑はされなかつた。たとへその刹那の心に僞りなくとも、何を證に永久のまことを誓はうとは爲したまふぞ。私は自ら行く處へ行かねばならぬと思つたのだ。

私は何處かへ行かねばならなかつた。母のふところは餘りに溫かすぎて、我まゝな私の心にはかへつてこそばゆかつた。冷たき隣人の批評眼と共に、澱んだ四圍の空氣は衰へた神經のすみ〴〵まで苛立たしめて、行き處のない私を、つひに死をなつかしむまでに致らしめた。けれども死は最終である。刄に血塗る死の代りに、私はこの天地にたゞ一人自分を知つてくれる人の爲めに、殘るいのちを捧げようと思ひ決した。靜かなこれまでの生涯を破り、人妻の名を自ら冠らすべく母に語つてうなづいて貰つた時は、悲しいよろこびのために私の胸はふるへてゐた。

一個と一個、病める二つの魂の相あふ日を、慘痛な事實をよろこびとして祝つてくれた友に謝する。祝はれた兩個は、相かへりみてすゝり泣く樣に笑つた。

憫れまるゝと同時に憫れむことの出來る位置に置かれて、私は初めて與へる人の幸ひを味ひた。（某日）

世間話

譽田順子

いつのまにか眩い光が少しばかり開けた障子の隙間から、檐に近く枝を伸ばした松の葉のその一針一針も數へられる程、明るうをとなしくすぐ膝の前の疊に、かげて落してゆたかに慄へてゐた。張り替へてまもない障子の塗骨の棧がハッキリ快く浮き上つてゐる。私は手を伸べて障子を開けてしまつた。ひろ〴〵とした好い氣持になつて、濕り臭いむすぼれてゐた官能の一つ〳〵いそ〳〵と活氣づいてほぐれてゆく樣に思ふ。美しい光が白い小石に反射して狹い庭の影はハッキリしてゐる。軟かに芽ぐんだ、ばらの芽の紅色のしんから滲み出た色づいた風がどてからともなく流れてくる澁い茶かすの匂と散り殘りの梅の香とを溶かして、ひそやかに擴げる。嘴の黄な小鳥が淡みどりの蕗の薹をつひばんでゐたが、ふとやめて物怖ぢした樣に小い目をきよろつかせながら小ざかしうきやしやな紅い足をふるふて椿の小枝に飛んだ。淺黄色の和毛のふくらみに、紅い花は動く度に、黄な花粉をつける。

向ふの山の竹籔の笹が、搖ぐ度に、銀線のエエテルめつきしたやうにチカ〳〵光つてゐる。町の方からは、一體に騷々しい響が、押しよせる物の樣に傳つてくる。此暖いのに毛絲の首卷をして、手袋をした、年增小僧が、門を見上げて、帳を繰つてゐたが、そのまゝ飛ぶ樣に行き過ぎてしまつた。田舍は暮である。

私は、ぼんやり野の末をまるく包んで、淡い黄金色に煙ぶつた山脈を眺めてゐたが、ふと、塗の剝げた机に頰杖をついて、大きい手の爪先が草で青く染まつてゐる黒つぽい、いゝ、まくり絆纏の自分の姿が、餘り明るい光を浴すぎてゐるのに氣がついて、「まあ贅澤な――。」とをかしく思つた。かうしてゐるのは餘り無益だ、と氣がついたのである。(ふつくりした眞晝)

もう晝の支度はできてしまつたのに、まだ話に夢中になつてゐる。寺の間を借りて古物商をやつてゐるお兼婆さんと、小間物賣りの小母さんと、「ひようたん」とあだ名を頂いてゐるぶら〳〵して渡つてゐる西隣の小父さんと、氣持の好い日向に吸ひこまれて、もうかれこれ四時間程話しつゞけてゐる。

また煙はもや〳〵と、煤けきつた天窓の邊で迷ふて

ゐた。天窓からは青ずんだ空がみえる、其處からは日の光が、まつすぐに茶の間に落ちて、飯櫃の金箍や、陶物に反射して、よく拭き研いた板の間はパッと明く物の影が、うす闇くうつつて光つてゐる。日光の道筋には、紫がゝつた煙の柱が渦を捲いてゐた。

私は、聞くともなしに、話聲を追ふてゐた。

「ほんたうに、今は、百姓の世の中ぢや、奢りたい、ばあ、奢つて、何處も彼家も、小金の溜つた樣な處は普請をしますてことのうし。」お兼婆さんが云ふ。「けんど、お前さん、二十年前を思ふてみりや百姓は可愛想なものぢやつた。米は、たつた四錢で、それでも稅は同じいし、あの頃は月給取りの世の中でございましたのうし、時々娘と話して笑ひますが、牛肉は一貫が四十錢で、五圓も出したら縮緬のボタ〳〵するのがありましたのうし、まあ、まあ、何ぼ云ふても今の樣が續きもしますまいよ。」と母は云ふ。

「それに昔は、子供が少なかつたきに何を云ふても行りようでございましたせよ、今こんな事云ふたら、大事ぢやが、昔は出來た子を皆飼ふ家やでございませぜだつたきにのうし、中通りから下の家ぢや。」小父さんが云ふた。

「ほんたうよ、今は大抵五六人の子の無い處は少いがそれを人並の者に、仕立てようつたら、大抵の家督は潰しますのうし。」と小間物屋の小母さんが云ふ。「阿呆らしい、お前さん、守屋を御らんなされ、三人の息子を大學校までやつて、あんな大けな家督も何も臺なしにして仕舞うた。それで使ふたばあでも取返しやえゝが半分も三ヶ一もなか〳〵。自分の身引きがやう〳〵ぢやそうだ、此間も私の知人の息子が、歸省つた云ふきに悅に行たら、親父が「どうして〳〵、十六年も七年も遊ばしてやつた毒が體中廻つて人樣の前へも出どころぢやでございません、」と云ひよりましたがのうし、ハヽヽヽヽ。」

「それでございますきに、のうし、もう、これから先は、年が老て子供にかゝらうと思ふたら、頰冠りでございますのうし、子供の云ふ事でもやたら信用しよつたら馬鹿をみる。」

「ハヽヽ、ほんたうぢやや、これから、私も息子に嫁を取つたら、「お前らあ、夫婦なら好いが、父母になつたら大變だぞ」、と訓へてやりませう、ハヽヽヽヽ」。

生活難なる哉

*　*　*　*



春宵怨

暁子

旅と旅との君やわれ
醉ふて袂の歌草を
若き命も過ぎぬ間に
誰が身にもてる寶ぞや
君が眼になみだあり
堅く結べるその口に
光りもあらぬ春の日の
悲しき味の世の智惠に
心の春の燭火に
咲くまを待たで花散らば

君と我とのなかなれば
醒めての君に見せばやな
樂しき春は若いやすし
君くれなゐの顔ばせは
君が眉には憂愁あり
それ聲もなきなげきあり
獨り淋しきもの狂ひ
若いにけらしな旅人よ
若き命を照しみよ
哀しからずや君が身は

紅く熱した唇にかう歌つて、恍惚と見張つた瞳を、櫻の梢に移しました。まつ白い、湯氣を透して見たランプの灯のやうな、ぼうつと霞むだ今宵の月。唯。二三輪わずかなほゝ笑みをみせたあとは、未だきつかりとした花びらの合せ目を、和らかい風にとけ合つた月光のうちにほの白く浮かせた、またとない艶な夜の姿や。あれあの高い梢のさきに、たつた一輪大きく開いた櫻花の誇らしげな。少女は、誇らしげなその花に、かるい喜びを見とめて、何時迄も〳〵。いつまでもと一つの花を仰ぎ見た。人は云ふ。華やいだ春の夢のやうな喜びの奥には、無聲の悲哀がひそんでゐると。悲しみ!。哀愁!?。白つちやらけた、病人の所有のやうな灰色の空氣の中に生れたその言葉は、彩色のないライフをもつ人や、どんよりと濁つた天地にふさはしい言葉ですわ。若い、と云ふブライトに、高鳴る血汐のひゞきをきいて、すべての華やかな憧憬に活き得る幸の子は、解し得ぬ悲しみの味を、強いて知らうともせず、たゞ現在の滿足にほゝ笑むで、ふつくらと柔らかいとき色の胸に、水色の淋しらみをにじませまいと、絶えず愛の美水をそゝいで下さる母様の袖かげにかくれて、未だ社會と云ふものを、眞面に見たてともありませぬ。あゝそれを、罪はたれ?ひと度ぬれ

し袖の涙！。我が事ならねど……ならねども…。淡碧色の厚い表紙に K. Tamura. と、記されたての詩集。紫の袂をそへて、すうつとかき上げようとしたとき、つるりと辷べつて足元に落ちた詩集の、はらりと半分でろからひらいた所に、手近かな櫻の若葉を栞して、そのまゝお返ししたいと思ひました。詩集の主は秀樹樣雲鮮やかな夕べなど、詩集もつては、田代ちやん、うたはないかつて、縁からよく上つて被來しやいましたつけ、秀樹樣はお隣家の兄樣。天にも地にも一人子の御兩親の手のうちの寶玉。それこそ風でも召そうものなら、おふたり共枕元につきッきりで、秀、一寸脈を見せな。秀、舌を出してごらん……。今年二十三の御男子樣。なみはづれて背の高い坊ちやんも、愛にくらむだ父母樣のお目には、二尺五寸の赤坊にしか見えないんですわねえ。お女中さんがそう云つてましたわ「高商からお歸りの時分には、お菓子かなにか机の上にのせて、未だか〳〵とお待ち遊ばす。おゝ歸つたかへ、お腹が空いたろ。それお八つを。お前が好きだから……。つて、それはもう十かそこらの坊ちやんのやうですよ。日曜なんざ、秀樣より奥樣の方がお樂しみなんで！。秀樣がそれは又、お優しいですよ」つてね。

ほんたうに秀樣は、おやさしい。

物怯ぢない、高らかなお聲でお笑ひ遊したその頃の兄樣。甘つたれたり、からかはれたり、庭續きになつてる兩家の垣根に、大分大きな穴をあけて、そこから行き來してましたの。あら、私のいたづらぢやない。秀樣が大底なすつて、姉樣と私は、まあお手傳ひしたばかりですわ。——數學の出來る奴は、どつか變つてるし、文學やる人はどこかしらから沈んでるやうだねえつて、バンカラで名高い芝の從兄が、生れて初めて感心したやうに首かしげて云ひましたつけが、ほんたうなら秀樣もたしかにそうですわ。否、それもずつと昔からではないの。たつた半年ばかり前からの事。筆おとりなすつたのも、彼の事から……。想はしげにうなだれがちなのも彼件あつてから……。

さつき、活動寫眞のお話のでた時でした。「——田代ちやんは喜劇が好き？僕は大嫌ひだ。馬鹿々々しいぢやないか。五尺大の男がそろつてゝ、子供だましみたいなひようげたまねばかりして……」。ぢや、どんなのがお好き？と聞くと、そう僕は……と、眼をふせて、——「かうした先天的の性質なのか。或ひは、とこかに淋しみの秘むだ境遇に支配されたのか、やつぱり悲

劇に趣味をもつね。つまり僕みたいな、荒みきつた心のものには、悲劇の方がふさはしいんだ。ハムレットの……何、まだ見ないの、そうか、それを演る時にはね。ピアノをひくんだ。そりやあすてきにいい、いゝんだけれど、僕、それを聞くとすぐ悲しくなつてね。なぜつて。だつてたまらなくなるんだもの。それがだ、久らくきかなかつたが、つひ此間○○館で演つてたんだ。で、這入つて見たんだけど、もう何でもなかつたよ。音色だつて、以前に變らない、淋しい、心にしみ入るやうなんだけど、胸が妙にかうかたあくなつちやつてね、涙のかはりに、ともすると冷たい笑ひが浮むんだもの。僕も、女々しくなくなつた。比較的此頃は、總てに對して冷淡になりましたよ。涙なんて、女のものだものねえ・・・・・秀様、秀様。あなたはその冷たい心を抱いて、お喜び遊すの？。涙のかれた、血の色の變つた、氷のやうな御心に、少してもブライトをおもち遊すの？」そ



うした冷やかなお心と、光りの沈むだみ瞳とに、姉様の現在を見すゑて、靜かに冷笑遊ばすんでせう。私は何も知つてるけれど。父様や母様も、姉様だつて御存じなかつたんですわ。……それ程に……なら、秀様も、あんまりお心弱い。現はれぬ悲劇のヒロイン、私の知つてる甘い涙は、たつたこれ一つなんですの。

　ネルを袷にぬぎかへて、心も靜まる初秋のころ、姉様は増田様と約成つて、結納とかの夕べでした。

　相手を母様のお室にとられて、所在なさに、庭の芝生を踏んで、詩うたつてましたのを、突然、肩に手をかけて、「田代さんは、アワビの片思ひつて、知つてるかい」。ふり仰ぐ秀様は、いつにない御酒氣を帶びて、お眼がすわつて、居りましてよ。びつくりして逃ようとする手をしつかりつかむで、「何故逃げる。田代ちやん、貴女まで僕を嫌ふの。嫌ふなら嫌つてもいゝ。も、もう逢はないんだから……。一寸、一時其處に居給へ。」力をこめて引きすゑられて、小鳩のやうに居ずくんだまゝ、しのび音に泣き出したのを。秀様、ハッとしてすりよつて、「あ、御免。田代ちやん、僕、醉つてたものだから。誰れにも默つてゝ、ね。許して……、さ、何んだそんな所に坐つて、着物がよごれるぢやあないか。」汚れたつていゝ、かまやしないわ。怒つといて……。どうか遊ばしたの？涙の眼にじいつと見上げると「僕が馬鹿なんだから……。誰れにも云はないで。ね、田代ちやん。姉さんは増田さんに嫁くんだらう!?。…………もう二人ならむだ、琴の調べも聞かれないねえ……。」うつむいた睫毛に涙がつたふ。兄様。……と膝においた手をしつかり握つて、「あゝ田代ちやんに返すものがあつた。」手の先きが懐にひそむと、はらりと散つた破れ寫眞、まあいつの間に？。かすかに暖みの殘つた繪面の人は、無殘や眞二つに引きさかれて……「いつか、かりた雜誌の間にはさんだつたんだ。それも秘密に、しといてくれ給へ。人にきかれたつて恥づかしい……」…私は手にとつた寫眞を、さいてくそして又、泣きました。それ程悲しい故もなく、意味もなく、只止めどなく、流れる涙に、泣いて、泣いて、泣き疲れて、ぼうつとなつた頭をもたげた時、思はぬ聲がひゞきました。お孃様？。お孃様つて？……。

　ぼんやりと、目におしあてた袂すべらして見れば、あら、まあ民の肥つた手が、亂れ散つた寫眞の切目〳〵を、叮嚀につぎ合せて、見て、オホヽと笑ふ。いやな人、あつちにお出で。くるりと後ろむけた手をとつて

無理やりに笑ひ作らつれてゆかれた。あのう奥樣……。息をはずました民やの注進によつて、――小孃樣は、お姉樣のお嫁入れを、お淋しがつたり、お羨やみ遊ばしたり、これまあてんなに罪もないお寫眞破いて、一人で泣いてゐらつしやいました。お可愛相に……。何がかあいさうなんですか。知りもしないくせに。それでも秀樣は見つからなかつたのね。よかつた、と思ふと胸が輕くなつて、結局、家中の笑ひ種のうちに、葬られてしまいましたが……。



この事あつて一と月は夢の間。

知るや、知らずや己が身を父と母とにまかせて、何一つ云ひ得ぬ心弱き姉の、現在は不幸ではありませんけれど……。秀樣がおかあいさうですわ。ぱつたりとおみ足が止つて、好きな、それは大お好きな、一日に聞かないことのなかつた琵琶うたさへ、靜かな風もつたへてきませぬ。――あれやこれやに、ひまどつて、もう星が出てましたわ。あの夜。御婚禮の夜は、

五時ごろ、おかねさんから、お床上に被在やると聞いた秀樣、長く續いた金紋の俥を、垣根ごしにじつと見送つて、涙ぐんでいらしつたのを、私は知つてた。庭に下りて、暗くなつた例の穴をもぐつて、呉竹のそばをそつとかけぬけて、後ろから、兄さまつ……とすがりつくと、秀樣一尺もとび上つて、「田代ちやんは人が惡い、あゝ……。」つて、まあ息がはずんでらつしやるわ。「いつかのお返しよ。」ニッコリする眼に涙がたまる。さとられまいと、ふし目になつて、まさぐる袂にハンケチがあつた。「――田代ちやんともよく遊んだけれど、もう姉樣は他家の人よ。性の遣ふ……。秀樣お惡いつて云ふぢやアないの？お大切に、よろしくつてね。お目にもかゝれないから……。いゝの？田代ちやん……。」じつとして默つてたら、姉さま何故か泣いてお仕まひなすつた。その涙。姉樣の涙のしみてんだこのハンケチ!!。秀樣に、お言傳けもまだしやしない。云はなくつちやア……云はなくつちやア。……「淋しくなるねえ。え、三人兄妹みにいにしてたんだから。これからは僕も淋しい、あの穴も、もう三人押しつこして通る日もなくなつた。ねえ。星があんなに出た。よ田代ちやん。田代ちやんの耳には、もう姉さんの俥の響がきこえないかい？今ごろは……ねえ。田代ちやん今ごろは……。」

「秀樣。私歸りますわ。だまつて來たんだから……。」

「あゝ」……。……その日、その夜から今日までもう半年の、月日はすぎたのに、秀樣、數へる程しか私宅のしき居をおまたぎなさらぬ。時折、父樣ともお話遊ばすけれど、重くるしい、父樣のお聲にまじつた、はしやいだ高笑ひが、私には空々しうひゞく。

今宵の月は十三夜!!。例の穴は、草や、枝やに埋れつゝ、今では犬も通れなくなつた。

垣根を透して、秀樣のお部屋の灯がみえる。秀樣。姉さま。あゝ、あのお部屋の、ともし火の下に、姉樣がならむでゐらつしやるのだつたら……。

引けばやなぎはのびぬべし
ふれなばはなはひらくべし
ともし火見ゆる木の間より
うたもきこえずこゑもせず
たゞしづかなるはるの夜の
地はあたゝかにゆめみるを
ふみくだかれしはなさうび
ひとはなみだのおほきかな

婚約日記

渡邊浪子

此二三日はどう云ふものか仕事が手につかない、そしてシッカリ落付てゐられない。結婚はかうも人の心を動かすものかしら。

昨夜も種々な空想が胸に浮んで、一時二時を打つてやつと就眠いた、其故か今朝は少し頭が重い、農學士との結婚談いよ〳〵成立しさうだ、月下氷人の高井さん性急な人だから、ホー早朝から御來訪、私はすぐそこにいたんだけども奥へかけ込んで、松に離室へ案内させる、そんな時になると私は氣が弱い、氣の弱い女ですもの、それでも話が氣になるので、母屋の隅で立聽してゐる、マア氣の早いこと、寫眞など借りて被來つて、何んでも、先方ではわざ〳〵寫眞を取つたさうな御名前は中野達也とか……。

「お娘樣のも御持合ので宜しう御座いますから、是非拜借して參りませう」

さあ大變、母樣が寫眞取りに被來るかも知れない、こんな所を見付かつたら氣まりが惡い。

ぬき足さし足息をころして自分の間へ歸つて、そしらぬ顔で御針を始めてゐる、果して被來つた。

さあ、どちらのを上げたらよからう、紀元節の日寫つたのは大變よく出來てゐる、けれども手許には一枚しかない、從兄の茂さんと寫眞交換しませうつて自分から云ひ出して…茂さんの寫眞は一昨日私の手許に屆いたけども、ハラの蟲が知つて居たものか、私のはまだ上げなかつたのだ、是非あげなければ濟まないのだけども、罪が深い、私は約束を破つて先方へあげた又茂さんに、だから女はヴアニチーのばけ物よ、など云はれても仕方がない、高井さんは目的物を持つたのでサッサと御歸りになる。

「姉さん離室で一寸御出でつて」

美枝ちやんが云ふ、そして時々私の顔を見ては莞爾莞爾してゐる、こんな時にはおこり付けてやりたいけれど、いくら平氣を装ふても包みきれないもの、仕方がないわ。

御母さんは傍にあつた寫眞を取つて「高井さんが持つて被來たのだがネ」つて私の前へお置きなさる、母

樣は氣をきかして、茶道具持つて御出なさつたからこの間にと早速とりあげて見た、そう／＼學校にゐた時工兵大隊へ見にいつた時聯隊長の鼻髭がよかつたもんだから山本さんが、あんな髭の事をカイゼル式よつて云ふと金子さんがはッ、カイドル式ねつて、大笑ひしましたが、カイゼル式が本當のかカイドル式が本當のかよくしらないけれど、夫なども、あら夫などゝ云ひ出して未だ定まりもしないのに、でも心の內では旣う定つた氣でゐるもの……

鼻下に立派な八字を蓄へて、キット結んだ犯し難い口元、人を引付けるやうな眼付、私は二三度頰ずりして床の間へ上げて置く。

よく兵隊さんが進軍ラッパなど吹いてゐるのを見て田中さんが、私軍人の子になりたいわなんて、子にではなくて奧樣になりたいと云ふのだらう、などゝひやかしてやりたかつた、其時分は私なども理想の夫は軍人よ、などゝ思つて居つたけれど……。

恁うして寫眞を見ると、矢張り風采の上つてるのが良い、勿論容貌などよりも、人格性質がもつと／＼大切だけれど……私などまだ／＼花にあこがれて飛ぶ蝶を羨んでるベビーだもんだから、表面にばかり重きをおいて。

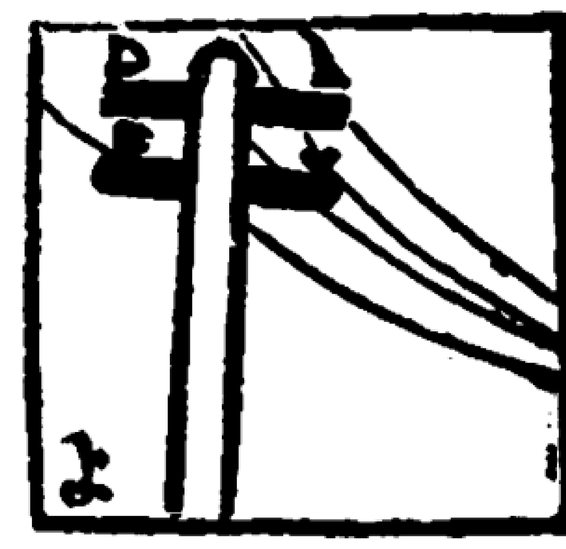
不圖校友會の歸途新道で三年前御別れしたきりの、森常子さんに計らず御目に懸つて、あんまり變つたお姿にびつくりした、同じクラスで朝夕騷ぎ廻つて居た頃は、蠑螺の壺燒屋でしてね、其れ程美しいとも思はなかつたが、見れば艶な丸髷に結つて、鐵葡萄地の御召に華美な鹽瀨の御帶を恰好よく結んで、一寸包をお持ち替へなさる時、右の中指のリングと左の藥指のダイヤモンドがきらりと光る、ほんとに女でも見惚れるやうな若奧樣になられた。

私も最う少し經つて結婚する、而して平和の神のふところに理想の新ホームを作る、夫は渡米して何とか云ふ學位を得て歸朝る。

其時は出京して二人で寫眞に寫る、私だつて容貌など常子さんに負ないつもりホヽヽ、これや一寸己惚れ〇〇の令夫人などゝ濟まし込んで、春の朝に夏の夕、自動車に馬車に俥と都大路の風をきつて廻る。

あゝ如何に前途に光明が輝いてゐるだらう。

こんな榮華の夢に憧がれて居る時代が人生の春、私の春である、まして箸の轉だのも、可笑と云ふ花十八の今日此頃は、彼や是やと少しの事もはゝ笑まれて…



親展

野の人

八重樣何卒聞いて頂戴な。

何卒私の心を察してね。

私ねあの御美しい御目を、ソツトそらして、あの御優しい花の樣な御口元に、冷笑の浮ぶ事を思つては、幾度筆をおいたでせう。

嗚呼今は、冷笑も、輕侮も何かは、只此悲痛な心から、少しでも逃れたいのですもの、御優しい貴女の御口にのぼる冷笑も甘んじて受けます。

天にも地にも私の心を、一番よく知つて下さる貴女に私が此を御知らせする事は、どんなにつらひか御わかり遊ばすでせう。

私は思あまつて筆とりました、何もかも打あけますから聞いて頂戴よ。

八重樣、私ね、恥かしい事ですけれども、今恨は涙と化して渦巻いて私におし寄て來ます、嫉妬の焔は此身を燒き盡さうとして居ます。

貴女にかくした事だけは許して頂戴よ、嗚呼私恥かしいのよ、實は戀人があつたの、何卒私をおてらないで頂戴よ、貴女はほんたうに私を御惡しみ遊ずでせうよくもあの誓に背いて、今迄自分を欺いて居たと御立腹遊ばしませうね、八重樣私何度此事を貴女に打あけ樣と思つたでせう、けれども私は貴女のあの氣高い、御美しい御顏を拜見すると、何時も〱止めましたのよなぜか私打あけますのがつらかつたのよ。

實は今日久子樣がいらしつたのよ、久振だつたので色々御話が出ましたの、すると端なくも御噂が菊枝樣の御上になりました時にね、あゝ八重樣察して頂戴、此言葉を聞く迄の私は、實に〱幸福な子でしたのに、

「菊枝樣は當節大浮れよ、」

「まあどう遊ばしたの」

「河村樣と仰る早稻田の方と、大變なのですつて、野球の選手よ、」

「まあさう、御美しいからね」「此方はどんな方？」

「何でも隨分御氣の多い方ですつて、外にも澤山御あり遊ばすのですつて、」

「まあさう」

八重樣、御わかり遊ばすでせう、此を聞いて居る私

の心をね、何氣ない風に粧て居ても內心、不安の念は私の總身の血を…、何も御存知無い久子樣は無心に仰つたのですけれども、聞いてる私の胸には、どんなにどんなに響たでせう、只此一言で美しい希望も、快樂も、理想も、抱負も一時に消えて仕舞ましたの、殘るものは、悲哀、苦痛、悔恨、慚愧。

まだ久子樣が御歸りになつてから二時間位しかたちませんのですけれども、二時間は私にとつては、餘りに長う御座いました、餘りにつらい時間でした。

八重樣私は感情の子でせう、何日も〳〵自分の心に仕舞て置く事の出來ない性でせう、何しても顏に表ずのでせう、其が今日許りは人に悟られまいと思つて、どれだけ苦心して外面の平氣を粧ふたでせう、自己を僞る程心苦しい事はありません、胸に餘る悲しい遣瀨ない思と、胸にあふれて、ふれなばこぼれんとする此果敢ない寂しい思を包んで、この長い〳〵二時間を過した私は……。

夕方散り行く山茶花を見つめたまゝ、私は泣きましたの心ゆくまで、淚のある限り、そして自分を慰めましたの、けれどもこの淚は、情なき君を恨んで泣いた淚ではありませんでしたの、只取り殘された自分と云ふ、可愛想な者のためにそゝいだ美しい淚でしたの、八重樣、もしも之が私以上の人なら、私は何とも申しませんわ、然れどもまさか〳〵私あんな人と同視されては……。

何如にしても私の心は鎭まりません。

何如にしても私の心は安まりません。

忘れ樣とすれば惡い人の面影がまざ〳〵目に浮びます、あせればあせる程、情ない人の聲は耳にさゝやかれます、私は欺かれて居ましたのよ、けれども八重樣別れるには餘りに悲しう御座います、此儘續けるのには餘りにつらふ御座います。

淺間しい我心！　見下げ果た我心！

決斷力の鈍きものよと、御さげすみ遊ばしませうねあゝ私はつらい、貴女にあふのが恥かしい、私はどの顏さげて貴女に御目にかゝれませう、あゝせめて一日なりとも人無き森にでも……。

私はかうやつて一刻も早く、床に行く時間の來るのを待て居ます、あの暗黑の中で、あの冷いベットで私は情なき君を思つて淚しませう、私は欺かれて居ましたのね、あゝ賴かひなき人よ、僞りの人、世の人達は皆かうしたものでせうか、八重樣、私は誠の人、眞實り

ある人が欲しいのです、嗚呼私は今夜と云ふ今夜、初て去た人の眞實を知りました、賤の苧だまきくり返し昔を今になすよしもがなですけれども、私は去た戀人がなつかしいのです、眞實のあつた戀人が戀しいのです、私もう一人淋しく去つた人の歸るのを待ちませう

あゝこんな端書でしたわ、八重樣こんな事までかきました、どうぞおこらないできいてゝ頂戴よ。

「麗樣、思ふ所あつて都を後にします、何時迄もく御健在なれ」と云ふ一片の端書を紀念として、木枯吹き荒ぶ物悲しい夕暮、悄然として漂泊の旅についた後そよとの音づれをも得なかつた私は、彼樣な夜は物凄く狂ふ木枯の音を聞きつゝ、きつと〳〵思出してあてなき旅にさまよふ人を戀して、人知れず涙したのでした。



嗚呼あの夜、別れの前夜、

「私はあんな侮辱したプレセントも、貴方からと思つて受取たではありませんか。」

と泣き崩れたあの人の耳にさゝやいた紀念のブローチ

もこゝにある。

「プレセントもある程度迄は失禮ですよ」と私の言つた答に

「でも此許りは紀念と思つて」と涙ぐまれて遂々氣の弱い私は、受取た指輪もまたあの手箱の奥深く秘めてある、あゝ此がこんな悲しい思出にならうとは、あれから三年は慌しう過ぎました、けれども去た人は……未だに何の音ずれも……。

名も知れぬ驛の假の宿りの一夜、ほの暗い灯燈の影で旅の憂寢の夢を、そもどんなに結んだでせう。見る影もなく寂れた港の一夜、わびしい汽笛の聲を耳にしつゝ結んだ夢はそもどの邊をさまよふたでせう流るゝ雲や、空飛ぶ鳥の行方を眺めつゝ、どんなに都を戀しく思つたでせう。

八重樣これを書いてる麗の目には、涙が宿つて居りますよ、去た昔の戀人の上にそゝいでる清い涙ですよ、紅の涙ですよ、今いづこの果にか起ふしゝて居るあの私の昔の戀人の胸は騷いでは居ないでせうかね。

一度醉た初戀の芳烈な甘さに燃ゆる二人は、花鳥の歡樂の枝に咲いたり囀つたりして來るべき苦き運命をもかへり見ず、只管華かな夢見つゝ暮らしたのもほんの束の間、二人はいつまでも〳〵芳烈な色と匂との中に自分達の全てを没して居る事は出來ませんでしたの二人は無慘にも離されました。

別れた當時こそ、明け暮悶に捉はれつゝ、日を夜を泣きに泣きました、然し去るものは日にうとしとやらの、たとへに洩れずあの人の事は私の頭から一枚一枚はがす樣に消えて仕舞ました、嗚呼其後の私は思出すさへ恥かしいのです、筆にするのは猶更。

男は私を自分の物と思つて眺める事の出來ないのを悲しんで、人の物となるのを見る苦痛から逃れたい許りに自ら求めて私からさけて、名も知らぬ所にさすらつて居るのではありませんか。

女の私は、優しかるべき女の私は、これ程思つてくれる人の眞情をも解しないで自分の快樂にのみ耽つて居たのです、私はもうかけませんわ、この先を、あたまが亂れて、氣も崩れて、八重樣こゝで許して頂戴、これからの私は暗い〳〵淵にと入つて行くのでせう。

八重樣、どうか〳〵貴女の御胸一ッにね、そして許してやると仰つて頂戴な、同情は決して〳〵望みません、只少しでも許して下されば私は滿足します、ね、八重樣許して頂戴な。

おみくじ

秋子

○

淺草に行つた歸りに、ふとおみくじを引いて見ようと思つて觀音樣の段を上つた。

左手の薄暗い口へいつて、おみくじをどうぞといふと年の若い僧が細長い箱を振つて、中から一本の竹の棒を出した、八十六番と高くよぶと奧の方にゐた老僧がいくつも〳〵重なつた抽出の一つから一枚の紙を出して渡してくれた。

私はそれを受取るのが何だか自分の運命の豫言でも受ける樣な氣がして、すぐに手が出せなかつた。受取つてからすぐ見ようとしたが多勢の人に見られる恥しさに小さく折つて帶の間に入れた。

歸りの電車はすいてゐた。

私はさつきのおみくじを出して丁寧によみ出した、上に大きく八十六番大吉とあつて、終りの方にひらがなで小さく、願ひ事叶ふべし、病人本復すべし、失せ物出づるべしとあつた。初めの走馬似……と書いてある處をよみ出した時一つの顔がのぞき込んだので、私はあはてゝしまつた。

家へ歸つて着物を着替へる時には忘れてしまつた。夜寢る前になつて、おみくじの事を想出して方々尋ねたが、とう〳〵しれなかつた。

私の頭には八十六番大吉、願ひ事叶ふべしといふのがはつきりと殘つてゐる。

願ひ事叶ふべし、お前はそれでお前の願ひ事が叶ふと思ふのかと問ふ時、いゝえと否定はするが、自分の願のいく分はとげられるやうな心地がして、まだはつきりと頭の中に殘つてゐる。

○

古い手文庫を掃除したら、さあちやんの寫眞が出た鈴を張つた樣な眼を見はつて一輪のはなを見つめてゐるのだ。今迄忘れてゐた當時の有樣が浮かんでくる。小夜ちやんは眼のハッキリとした、本當に子供らしい可愛い人だつた。私は多勢のデヤレストのうち小夜さんが一番好きだつた。美しい花や可愛いカードを贈られるとその一つはきつと小夜ちやんに分けた。

小夜さんも私を慕つた。それは私ばかりではないみんなさうみとめてゐた。私はさあちやんに對しても多勢のデヤレストを持つことが恥しかつた。それは小夜ちやんに多情だと思はれるのがいやであつたから。

リボンもお揃にした、袴も、着物も、二人は影のやうであつた。私のある處にはきつと小夜ちやんがあり小夜ちやんのある處にはきつと私があつた。

二人はいつも離れなかつた。白萩のこぼれる花園のさまよひに小夜ちやんが金鈴の樣な聲をあげて高音をうたふ時私はいつも低音を合せた。たのしい思出――けれどもこの樂しみがいつ迄續いたか――。

その日は雪の降つた日であつた。多勢の友達はおひる休みに、眞赤に燃えたつストーブの周圍に集まつていろ／＼の話をはじめた。私は一人一番すみに腰かけて明後日ある文藝會の英詩を口誦んでゐた。さあちやん、罪だわねえといふ聲に、はつとして耳をすますと、明後日の文藝會に小夜ちやんが私を出しぬいて一つ上級のAさんと行くといふ話であつた。

私はいく度も自分の耳をうたがつた。小夜ちやんに限つてそんな事、たしかに行かないとあの口からいつたもの、と思ひ返したが不安でならなかつた。

文藝會の日に私の胸は破れた、來ないといつた小夜ちやんは來てゐた、しかもAさんと手をたずさへて。

私の胸の痛手は思ふよりは深かつた。小夜ちやんの手紙はそれから何度も來たが私は僞られたる事を想ふてあけても覗なかつた。

そのうちにいつか手紙も來なくなつて私は小夜ちやんと一言もまぢへずに卒業した。小夜ちやんも一年後に卒業した。その後どうしたか別に尋ねもしないが人のうわさではお母樣になつたとやら。

私は小夜ちやんにうけた痛手は深かつたが、あの可愛らしい眼はどうしても忘れられぬ。

可愛い眼をしたお母さん、私は寫眞を見たらもう一度小夜ちやんに逢つて見たくなつた。

○

私は愛の計算をする算盤は持つてゐない。

私は私の思ふまゝの道を行きたい、眞情の前に一直線にわきめもふらず――。

人は馬鹿だといふかもしらぬ、片意地だといふかもしらぬ、それでも私は人の言ふことばかりきけない。

明るい印象

磯村春子

濃緑の陰、ぴら／＼と閃めく葉、赤煉瓦の史料編纂所の横手の丘の、丈高い常磐樹の梢に、ふんはりと、雪白の雲がかゝつて、氷の如な、永劫の吐息が、いつの間にか、若さにおでる胸を浸して、どこからともなく、ひとやへ！　墓へ！……といふ、冷酷な聲が聞える。視野に滿つ建造物の赤の微笑、其を抱いた空の、青い冷笑！　暗い地下室の薄明ののぞみ――。

漂泊の美さを歌ひし我聲は、もう、かれてしまつたものを……。

夢の葉散れる黒褐色の並木と、塀際に、もや／＼と、緑抱立てし名しらぬ木の陰を、此方へ、白いボアーの女が、靴音かろく歩を運んでくる。美しい瞳！

ちら！と、電氣の如く閃く、表情の美よ！

角帽の人達が行く――中折がゆく――。

醫科事務室の低い白堊の傍の坂を下りかゝると、蒼ぶくれの四十格好の神さんが、赤坊を、ねんねこで負ふて、大きな淺黄色の包をかゝへて、さも大儀想に、昇つてくる。あゝ、蟲けらの樣な、かひなき生のあはれさ！　私は、彼女の皮膚のたるんだ紫の頬を、ぶつ！と針で、つゝついてやりたかつた。怒られてもいゝ！　憎まれてもいゝ、せめて、上向いて歩け！とでも叱呼して遣り度かつた。女の一員として。

下りるまゝに廣けゆく景色の面白さ、坂を向へに、掲示板の裏の右手よりの工場風の家の前に黒松が茂つて、小屋でもつぶした跡らしく、板切など殘り、潰された土の肌に霜柱輝き、ごろ／＼、不用物あつかひに、ころがされぱなしの石の冷たい、死の沈默……。

其等をかこんだ柵に、つかまるやうにして、顔の長い鼠服の看護婦が、しとやかに此方へくる。……學生が來る……、ベロシヤッポの商人がくる――左手の一廓をなした、ふしんばの内から、黒い頭が走り出ると見る内、ふいと目の前を通つて、すうつと彼方の原の方へ――私も其のあとについて、堤下の柵に添ふて歩き出した。クリームと、オレンジのショールをした女學生が、親しさうに話しつゞくる。

ブロックがゆく、背廣がくる。田舍の爺さんらしい

ものがゆく――神さんがゆく、空を刺した枯木立と常磐樹の暗綠の陰影の烟つて彼方へ――其なかを、ちらちらと、看護婦が、徃來してゐる。

琥珀色の枯草堤には、日が一ぱいに當つて、ぶる〳〵と、露骨な櫻の枝が、黑く顫へ、日の微笑に和いだ土には、青々した「春」が、芽ぐんでゐる。すぐ其處の暗綠の陰の深い常磐木の丘には、某工學士の、軍服の銅像が見える。ひろ〴〵とした原に出ると、丘の上を、彼方の赤煉瓦の建造物の方から、コックらしい白服の青年が氣取つた體付で歩いてくる――。

枯草の、乾びし空想、新草の青き熱…。

ひろ〴〵した原の上に、ばら〳〵かゝつた雪に、白くかゞいた日の光！若き自然のみづ〳〵しいよろこびの歌――。

はれ〴〵した原の胸に對ひたる、碧玻璃の空のおほらかさ！塵埃に汚れし街のどよめきの、微かに〳〵よろめき乍ら這つてくる其のみぢめさをも知らぬげに――黝みがかつた白茶色の大きな雲、薄絹の重なりを見せた白い雲、薄樺のうるほひもつ消炭色の雲などの、あちこちに、何心なく遊んでゐる雲のうらやましさ、永久に…動くともなく…消ゆるともなく…動かぬともなく…消えぬともなく…。

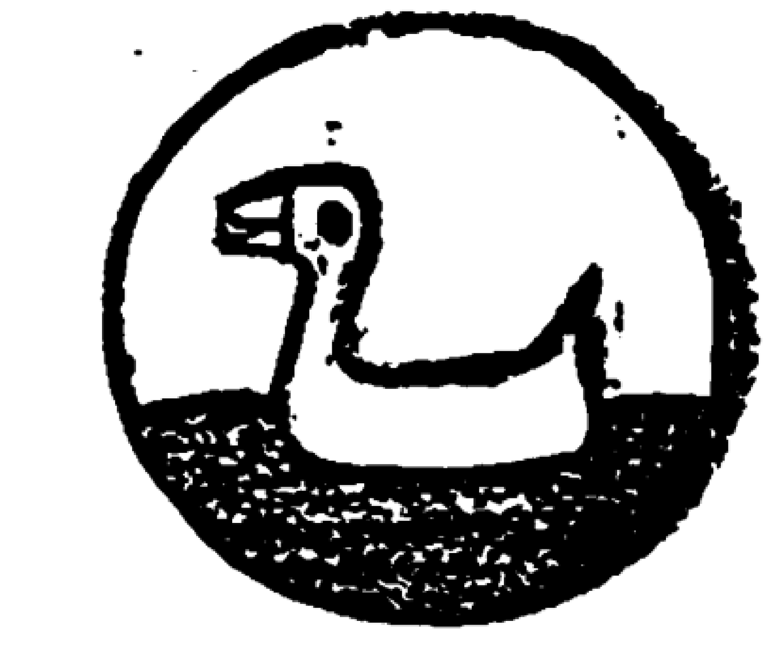
原續りし黑い柵の外の重疊連續した綠に浮彫した白堊や、瓦屋根等の建造物の少さな、てせついた姿の聡かしさ。左手の丘の上の黑松こしに、會計局のお宮のやうな家が見える。てゝの敷地は、舊、加賀樣のお邸跡だといふ。

何百年と經つたらうと思はれる名もしらぬ大木が、其處にも此處にも濃い綠の陰を造つて、紫の長い袖や、うちかけや、美少年の愛らしい目や、雅かな琴の音やロマンチックな戀の涙の溶け込んでゐるやうな、神祕な、青暗い色深き池に伸びた、長い傾斜に、現代的の色彩のハッキリとした熊笹が生え茂つて、つひ其處の碑を圍む、大珊瑚樹で、チッ〳〵と小鳥の聲がする。眞紅のつぼみ！　あちこちの椿の大木に、小さなハートをつゝんだつぼみが！キラ〳〵と、日光は、銀の線條をなして、我が上にふりかゝる――。

朝である！我等が朝である！

見よ！　我瞳にも、土にも、石にも、樹にも、池に浮ぶ木の葉にまでも、キラ〳〵と、まばゆく生命の光は、輝いてゐるではありませぬか。

＊　　＊　　＊　　＊



銀色の魔が誘ひに來る

毒だみ

花曇か、空はどんより雲が落ち合ふてやるせなげにほつと息を吐いてる樣な陰氣な午後、のたりのたりとうち寄せる濤聲を聞きながら覺束ない筆を取つた、さして生きがひもない淺間しい自己の哀史をさらにことごとしく書きたてる迄もないけれど、只私は書きたいのだ。私の過去は暗かつた、現在も暗い、明日といふ未來にもうすら明りさへない、あゝ私は暗から生れたのだ、社會から日陰者として冷酷にあつかはれる女を母とした、ヴヰナスの神樣は蒼波漫々たる海上の泡から生れさせ給ふたさうな、私は父の若き日の歡樂の酒杯の中からと云ひたい、媚を賣るつらさに泣いた涙と酒に淫して狂した血潮とが、この私を形づくつた、私は生れながらにして呪はれて居る。

鐵柵嚴めしい病院の牢屋——そこが私の故鄕だ——から思ひ出すと目に見えぬ魔の縛が、この力ない指にまつはつて來る樣だ。十七十八十九、野末の草にすら王冠として花を與へらるゝ青春の時期を私は暗い暗い死の國、社會のどんぞこの病院の一室で狂つて居たのだ。毎日何處からか薄ら明りがさして來た、ある一種いひがたい壓迫を胸に感ずるほどになつた時、私は自分の淺間しい姿を初めて知つた、黑髮は肩までに切られて蓬と亂れ、細い指には獸の樣な爪が延び、着物は海松そのまゝにやぶれて、ほころびて、…………これが私の姿なのか、何か知らず口惜しさが一ぱいになつた「私はこれぢやありませんの、私は違ひます、誰が誰が私の物を皆盜んで行つた」から私は確かに叫んだと覺えて居る「大人しくしてゐらつしやい、いゝ着物を持つて來て上げますから」と白衣の人は、やさしく慰めて呉れてやがて紫の長い袖をきせて呉れた。

「私はどうしてこんな處にかうして居ますの、出して

「下さいよ」毎日鐵柵にずがつて、あしづりして私は叫び暮した、幾日かの後、疲れて、疲れて叫ぶ力も、泣く力もなくなつた時、初めて蹌踉として引き出されて、前よりは少し廣い、高い窓のあけてある、うす黄色の壁の室に入れられた、そこは輕症病者の室なのだ、その中益々周圍が明瞭に分解つて來た、岩倉の狂女戀せよ郭公、蕪村の句集でかつてよんだ事のあるこゝは京の愛宕郡岩倉村の精神病院、かつては灰色の高い壁を眞晝間通るのさへ不安な思に驅られたその病院の一室にあはれ込めらるゝ身となろうとは。

晝夜ひききり無しに隣室より響き來る叫び聲、泣く聲さらぬだに昂じた神經は、鋸で引かれる苦しさ、一刻片時も病院に居るのが厭になつた、かうなれば世心づいて故郷戀し家戀し、父も繼母も弟も妹も、あゝ幻に夢にしも。

○

阿爺樣だよ、氣がついたか。

はいとばかり、父の太い膝に身をなげてひたなきに泣き伏した、その刹那は、悲しさも恥しさもなつかしさ喜ばしさも何もない、止度もなく熱涙が湧いて來る

よし、よし氣を鎭めてな、さあ行かう、な、淺子、ドクトルや白衣の人に送られてお靜にの聲の內に、長い間を囚はれて亡魔の境から人間界をさして——幌深い人力車にまだとぢこめられて居たものゝ、さすが浮世の春風は頬の邊に快く吹いた、人目をさけて翌る日五條の停車場から成るたけこまぬ客車に乘り込んだ。

復活!? 一度地の底にこめられたものが幾年かの後蘇へつたら、きつとこんな氣がするだらう、たゞ手の遣り場も踏む足の工合もわからない、やつと伴の男の援けでをづく\/刻んで行く、ふわ\/と身體全體がもち上つた樣で人の話し聲も物の音も、二三間地の底から叫んで居るかの樣だ、結局停車場の騷々しさも感じない泣きたいでもなく、悲しいでもなく、さりとてうれしいのでもなく、茫然として幾驛かをすぎた。

さあ此處だよと父と男とに援けられて、下車りた場所は暗かつた。

體のいゝお荷物の樣に、昨夜は運ばれて、寢かされたのはぼんやり覺えて居る、目映いお太陽樣が障子に一ぱいさして居たのに驚き易い神經はぞつとした、間もなく父樣が這入つてゐらしつた、「どうだ疲れたらうな、ゆつくり寢てお出で、此家はお前の家だよ」

「父樣、繼母樣は？お花ちやんは？太郎ちやんは？」

―はつはつ遇ひたいのかい、遇ひたいなら此の次連れて來るよ、なお前の先によく海水に來た一色の別莊だよ、もう少ししたら本宅へお歸り、はゝゝ、淺子はいゝ娘だからな」。

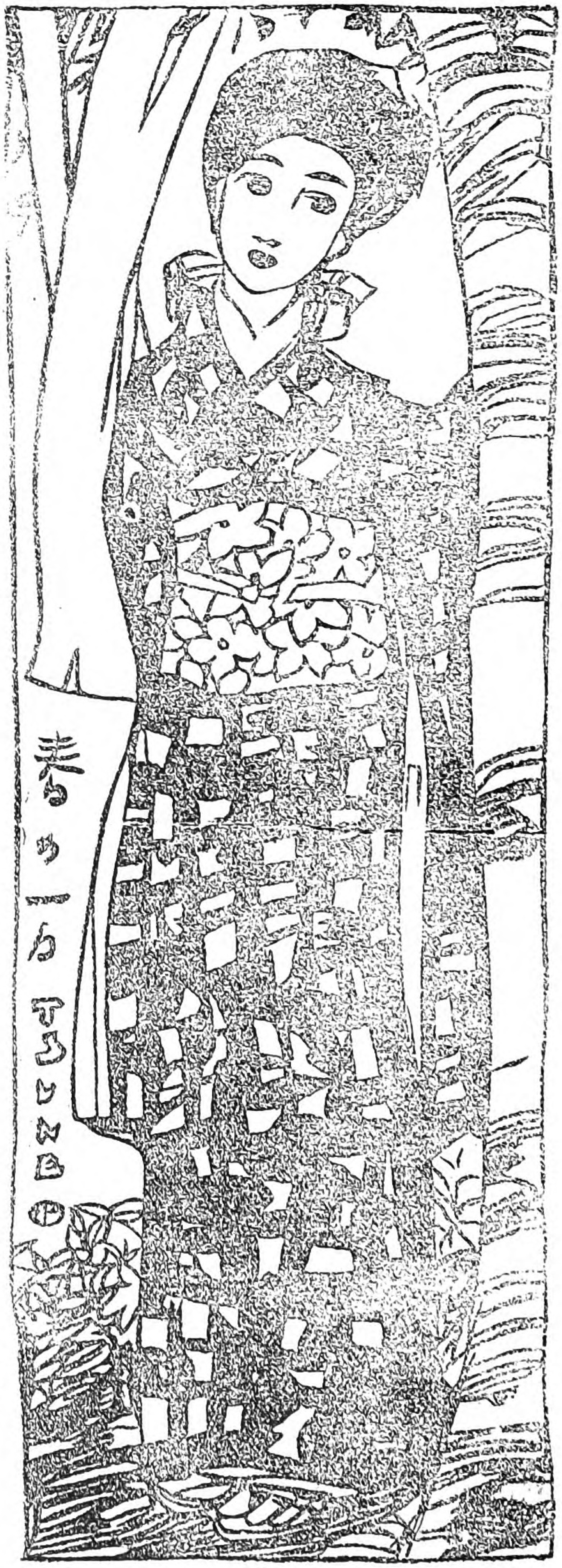
その午後父は本邸に歸つた、淋しい家に空しく響く松韻濤聲、私の爲めにつけられた爺媼のひからびた咳たまさか憂々といかめしい音は父の乞によりてか、警戒に來る駐在所の巡査の劍の響。

驗粗に疲れた旅人が夕の宿泊の冷い床に、やつと眠に就いた時、晝の苦しみまたく惡夢となつて襲ふ―

―うら若い血潮は涸れ、骨はけづられ、蒸々として蟲のやうに横はる臥床にも襲ふ惡夢。

叫けばむとしても聲が出ず、萬斤の鐵は胸におかかると思ふ刹那、そゝり立つ絶壁から怒濤あらぶる千仞の底へ――さめて見れば枕はしとゞぬれて居る。夜となく晝となく、こんな事にあけくれして灰色の月日はすぎた。

月に一度、二月に二度、父が尋ねて來て呉れるばか



り、父の顔見る毎に戀しさ増す繼母も弟も花子も、絶えておとづれさへして呉れぬ、幼きより暖い手で抱かれた事のない私でも、淋しい、淋しい。

繼母は清く正しい人とは思つてたが、冷さがこんなだとは——あゝなさぬ仲。

○

春は來た、ものゝなべてが蘇る春は來た、肩までだつた黑髪もとり上ぐるほどにのびたし、細つた身體にも肉が浮いて來た、寢臺を海見ゆる緣側に出させて溫い四月の日光をくまなく浴びながら、オゾン氣多い春風にふわりと輕う乘つた心持。

目路の限りを見わたすと、群青の凪いだ海を白帆がすべつて行く、紺碧の空には玲瓏たる富士の高嶺、あるかなきかのけむり立つ伊豆の大島も髣髴としてさすがに珍らしく私の胸も明るくなつた。

○

淺子さん！あさ子！！淺子さん!!!

あの聲、あの聲、久しくきかざりしあの聲、寄せては、返す海の面をさも面白さうに、銀色の輝く衣翩翩と。

あれ長い指して、蒼い笑ひして、招く。招く。魔の電氣にかけられた私は、づる〱とひきよせられる、悲しい、苦しい、でも走る。走る。海の面さして。銀の魔はさしまねく、さしまねいでは海へすら〱走つて行く、力のかぎり、走つても走つても、銀の魔は私をさしまねく。

○

もがけばきりゝと身は痛む、手もしびれた、聲も立たぬ、眼をひらいてよく見ると、私は幾重にも幾重にも繩で卷かれて病室の柱に固く縛められ脣さへも固く聲出さぬ樣に蔽はれてあつた。

海ではない魔も居ない。

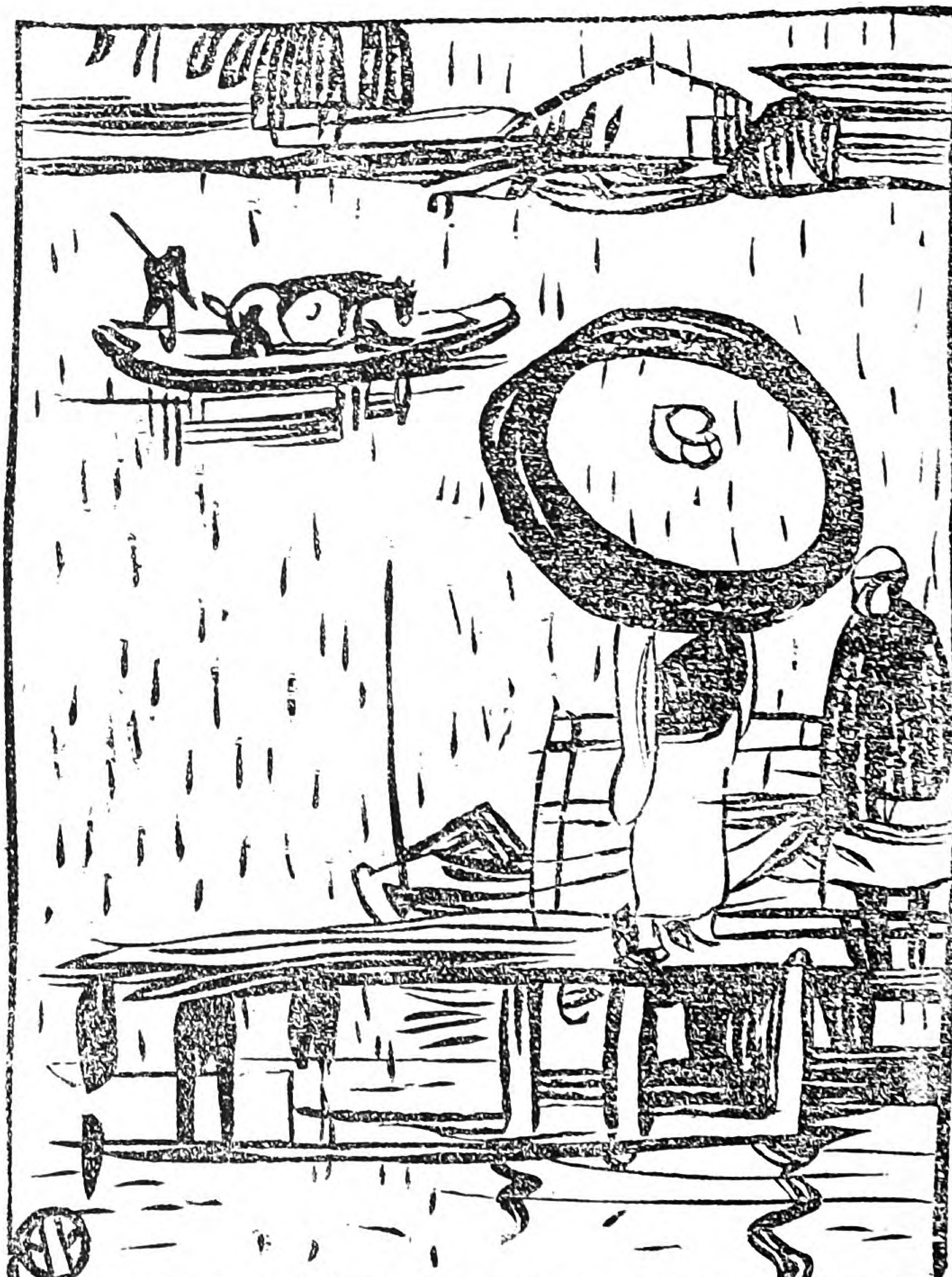
おいとしや、おいとしや、このか弱いお身體をなんてむでたらしい、巡査さんなんて情けしらずで御座います、御病氣のお方をまあ、こんなに縛るなんて、痛みませうねえ、さあお臥床みなさりませ、嫗がもんでさし上げます、ひどいお亂暴なさるぢやなし、暫くお氣をつけさへすればいゝものを。

涙こぼして嫗は縛をほどいて呉れた。

海へ海へと狂ひし力のまつしぐらに走り行くをとめかねた巡査は、私を罪人と同じ樣いましめたのだらう、その後、別莊の戶といふ戶は晝もさゝれて重い錠がか

けられた、ことに私の病室の殊々しさ、粥運んで來る婆やは重苦しい音をガチリと云はせて出這入りする、私は罪人ぢやない罪はない、あゝ銀の魔がからして居ても誘ひに來る、聲がする、誰かあの魔を拂つて吳れれば、――あゝ私は罪人なのか。

今日は珍らしく婆やが病室の障子をあけ放つた。砂地に小松をあしらつた平庭は何の變りもないが、竹の眞垣よわく〳〵しかつた庭のまはりは頑丈な板塀が不愛想に出來上つて居た。



いよ〳〵私は囚はれの身か。走れといはれてもこの敗殘の身體、弱い足で走られようぞ、たゞ魔がさそふ時々魔がさそふものを。

曇つた日、月のない夜、雨の日、一體氣象がじめじめした日は私の心も妙に落ち着く。

眞黑なカーテンが風もないのに、疊まれたりのびたり騷つくるのが、一つそあつい光澤ある織物だけに氣味が惡い――丁度私の過去の思ひ出もそれと同じ氣味惡さだ、心が落ち着くと

過去が思はれる、私は狂熱の子であつた、生れながらにして狂熱の子であつた、然し境遇から、奔放なる可き情操は、冷いきびしい自制力のもとにしかと押へつけられて居た、あゝ私にも戀はあつた、たしかに戀に似たものはあつた、しかも自分よりも年上の友である
あの時分は全く彼の女のため私の何事もたのしかつたすべてを捧げてうれしかつた彼女と同じ道を行き、同じ學校に學ぶその人の影にいつも形の如くつきまとふた、然し彼女は私のこの狂熱を知らふ筈がない、知らせたい、そうして一所に死にたい――きびしい反省の念は刻々に湧く、傍ら、炎々と狂熱は猶更もえ上る。
怱焉として苦悶する眼前にあらはれたのは銀衣の魔。魔にさそはれて、否ひきつけられて、町行き野ゆきしたのは、うろ覺えに殘つて居る。
その後は無我夢中、氣がついたのは病院の牢屋だつた、この別莊にうつつてから、やう〳〵人心がつき始めたこのごろ、また魔が誘ふ、晴れた日の海の上、風のふく午後からなどは、きつと聲がする。
私は魔にまねかれて死にたい。
銀の衣着る魔女、蒼いすごい笑を持つ魔。暗から暗へ生きながらかうして葬られるよりも、魔が戀しい。

新刊紹介

○少女模範文集　濱口白羊編

凡ての少女雜誌の中で、尤も好い投書が澤山に載ると云ふ評判のある『少女』の投書の中より、優れた作を拔き出し、別に『少女世界』からも優れた作を拔いて一冊としたものだ、人數に於ては隨分多い、又文章も氣を附けて精選してあるから、少しもむだがない、どれを見てもそれ〴〵一個の光彩を持てゐる、此書は少女の文章を喜んで讀むものには、何より好い賜ものであらう（定價金三十五錢、神田南乘物町誠文館發兌）

○露西亞印象記　中澤臨川譯

世界で有名な評論家務に文學の評論では何人も其權威を認めてゐるブランデス氏の原著を、臨川氏の譯したものだ、臨川氏の名は文壇に博く行きわたつて居ないかも知れぬが、一派の人は其辭筆に敬意を拂つて居る吾人も亦氏の確實にして且潤ひのある譯筆には遠き以前から服してゐる露西亞と云ふやうな思想の方面から見て非常に興味のある國の――民情生活、などを知らうとするには斯ういふ書物が極めて必要でもあり、また面白くもあらうと思ふ、函入美本（定價金八十五錢、神田表神保町中興館書店發兌）

○黄昏に　土岐哀果作

歌集である、作者哀果氏は新進歌人の一人で、和歌の製作には毎も新しい試みをしようとしてゐる、「宵森に大火事ありぬうれしくもわが古手紙灰になりぬらむ」「十月の一日の心おだやかにとやをつくりて暮らしけるかなの」やうな尋常の言葉を歌にすることがうまいのだ、三十一文字を聊か破格に出たり、歌を書く文字の排置に苦心したり、其處にも作者の爲さうと思ふことが見えてゐる（定價金五十錢、京橋畔東雲堂發兌」

○死の方へ　田山花袋著

春陽堂の現代文藝叢書の第八編だ、此叢書は意外に評判が好い、舊い袖珍の叢書ばかり出る時に、新しい代表作を出すからだらう、死の方へ、げんげ、幼きもの、三篇が收めてある、「死の方へ」は花袋氏昨年の作中でも傑出したものであらう（定價金二十五錢、日本橋春陽堂發兌）



月下に悩める産婦を救ふ

白妙女

先生の御宅を出たのが九時であつた、場末の街は九時と言つても、極めて人どほりが稀で、淺草通りの電車のきしる音のみ淋しくきこえる。千代さんと大通りで別れたので私は話し相手を失つた、食ひ入るやうな寒さの身にしむのを、あごをショールに深くうづめて小刻みにかけ出した、さつと吹きまくる一陣の夜風に追はれて逃げるやうに横町に曲がつた、ふと石塀に寄そつた處に人の呻吟聲が聞える、女らしい、貴女どうかなさいましたかと、恐る恐る婦人のそばに近寄つた熱したからだ、其あを白い顔に束髪の亂れ毛がかゝつて苦しむ婦人を冷やかな月が凄く照らして居る。頬肉をそぐやうな寒風を、わづかに我が家の軒下によけてしかもたゞならぬ病に苦しむ此の婦人を私は見すてして通るに忍びなかつた。しつかりなさいませ、此ういふ言葉を私は幾度か繰り返して、此れ以上の言葉は出なかつた、ふと私は見知らぬ人何處の婦人か知れぬものをと思ひ惑ふたけれど、今の場合ともかくも私の家にまでと、拒む婦人の手をか弱い私の肩にかけさせた時人の心をそゝるやうな足音がして、黒い人影が月明りに此方を向いてぴつたりと留まつた。清さんか今時分何しとる、と太い聲に我が名を呼ばれて見上ぐると松田巡査。今此の婦人がと、言ひかけてためらつた、巡査はうなづいて、死人の如くあをざめた顔をのぞき込むやうにして、火のやうにほてる婦人の身體に手をあてた。更に私に向つて産婦かとさゝやかれた。私の胸は早鐘をつくやう、母のお産の時ですら此んなに不安な心ではなかつたに、我が身のことでもあるやうに、さわぐはしたなさと思つても見た、ふたゝび婦人を助け起す勇氣もなく、其のまゝ家に走つた、母と共に外に出た時、物を押し出す如きうめき聲と同時に、

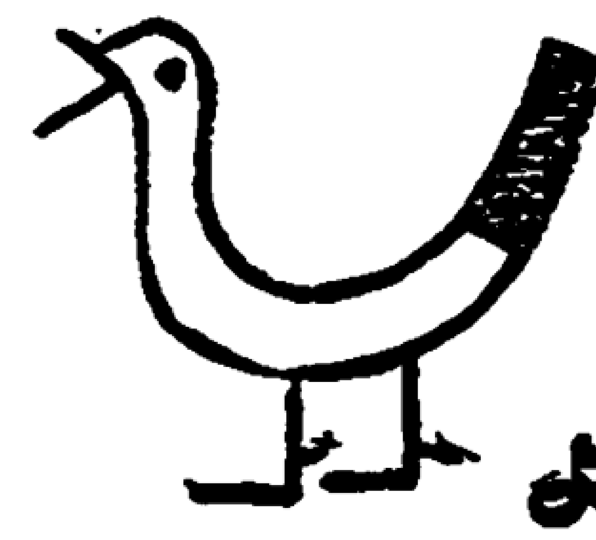
あか子の產聲が聞えた、あゝ、きつと生れたんですよ、お母さんどうしませう、私が言ふを、まあ靜かに淸さん家に行つて何でもよいから早くぼろを早く、と仰有つたまゝ母は驅け出した。今は何も想像する處ではない、ぼろを一抱へして母のそばに置いた時は、もう婦人のうめき聲もせず、冷たき地にうつむいて居た、靜かに靜かにと私は幾度か母に注意された、程なく產婆の手も待たず母は生れた子を無言のまゝ私に差し示した、小さな黑いものがぼろに包まつて動いて居た。婦人はどうしたろう、今は私の手をつけべき時ではなかつた、不安と恐怖にをそはれた私は、唯茫然として見つめる計りであつた。氷の如き月は、しばし沈默の三人を靜かに見下して居る。婦人は、母は、私は、皆別別の想ひに默して居たであろう。私は婦人の心が知り度い、母さん家内に入れて上げてはと、思はず言つた私も其う思ふのだけれど、と母も同じ情緒であつた、此の時、刻み足に下駄の音がして松田さんはひとりの產婆をつれて來た。やがて三人で何やら相談した結果では御前の部屋をと母は言つて、人々にたすけられて私の部屋に苦しさうに、濟みませんと、一言して橫たはる婦人の顏は美しかつた。初めて濟みませんと言つた言葉、やさしいなつかしみのある言葉であつた、其の形姿さへも決していやしくはなかつた、生れた子供には、かね子の古ぼけためりんすの綿入二枚着せて、そつと抱き上げた時、ふたゝび母の子を抱きしめる如く、去年母の產當時が思ひ出された。母と私と產婆が松田巡查の照す電燈に汚れた土をかき取り、なみのはなをふりまいて四隣を淸めた、いや御苦勞でした只今電話で知らせがありましたが、身元確實の婦人で、其の夫が見えるさうですから、御めいわくですがしばらく御世話に成りますと云つて產婆と共に松田巡查は去つた。父はお目出度いのだからと言つて婦人をいろいろ慰めて居た。入れかはつて私が枕元に尋ねた時、婦人はたしかに泣いてたらしかつた、ふと驚いた樣子で私を見た、失禮でございますが貴女樣『女子文壇』の愛讀者で居らつしやいますかと言つた。此の意外な言葉には少なからず驚いた『女子文壇』の愛讀者、今、此んな言葉をきかうとは思はなかつた。實は先き程御机の上の『女子文壇』拜見致しまして思はず胸ををどらしました、私も四年程以前から友として愛讀して居りましたものですから。まあ左樣でございますか、其れは不思議な御緣で、いつそう御なつかしさの思ひが致

します。夢のやうでございますね、しかし貴女御苦しくはございませんか。と私は起き直つて語る婦人をきづかつた。一方ならぬ御世話様に成りまして御禮の申上げやうもございません、いづれ夫の參りませば、と何故か後は忍び音に泣くのであつた。寒氣にこほるやうな夜も、此の部屋ばかりはあたゝかい空氣が漂つて床の間の挿し花の梅が何とも言へぬ香をはなつて居る何んて好い匂ひだらうと私はひとりチヤームされてしまつた、冬の夜はたゞいたづらに更けて行く計り、私は産婦の夫の來るのを待つやうに言付けられた、母や父の寝んだ後、つひに産婦の身の悲哀なる物語に袖をぬらしつゝ夜を更した。我が身の罪とは申しながら一とせ前までは嬢様よ姫様よと、多くの召し使ひにかしづかれた身が、懐かしい父君や優しい母君を親とさへ呼ばれぬ今の境遇、昔かたぎの父君に勘當同様にされた私は、我が身の罪とあきらめては居りますが、罪もない此の子が可愛想でなりません、生れた子供に罪はないのでございませうに、せめて邸にでも居りまして生れたなら愛の子として皆に愛され、いつくしまれました者を、私の罪の子として生れたのは不幸でございました。實は今日は嫁いだ從妹が荒川河畔の別邸に病むと聞いたものですから、見舞がてら恥かしき身も忘れて參りましたのも、ふたつには戀しい母君や、父君又邸の様子も知り度さの想ひでございました、幾度か世にすね多くの人にあざけられても情けある親にそむ



いて來た私、順境に育つた身も一度戀の甘きに醉つて、荒んだ心の女となつた身は、末のかくではございますが、處もあらうに犬にもひとしき他家樣の軒下で出產するとは情けなうございます。父君の御怒りもとけぬうちに、再び名譽を汚し家名にきずつけた申し譯なさ、私は邸を出ますする時、身二つになるまでは身體を大切にして無理をせぬやう、不自由の物があつたら父君にないしよで言ふてよこせ、又出產があつたらば何より先きにそつと知らせてよ、と母はさすがに女心の情けあつき御言葉、なれども私にはどうして此の有樣が便り出來ませう。貴女私のつまらぬ身の上談し何卒御ひとりの御胸に御秘め遊して下さいませ、御兩親樣にも御洩らし下さいますな。しばし魂を吸はれし如く、默然として此の小說以上の悲哀な物語りをきいてゐた私は、熱い淚がぽたくと火の中に落ちた。同じ順境に御育ち遊しても、戀の弱點にとらはれた人の胸にはかうした冷靜な感情の湧くものが、戀のためには家もすて親もすてゝ自ら荒んだ半世を送りし人よ、かうした戀は永久に醒めぬものか、否へ此の人は今すでに醒めかけて居るのだ、美しきまぼろしの影追ふて泣く人よ、と私はつくぐ此の美しき婦人を見まもつた。時計は、チーンと細長い餘韻を引いて十二時半を報らせた。やがてゴム輪の敷石を走らする音がして、ぴつたりと留まつた。どうぞ御上り遊してと私は奥に道びいた、彼の男は頭髮を綺麗に分けた八字ひげの一目見るからに此れが產婦の夫、美術家、パンのために意味なき繪をかくときいた若人か、おゝ貴郎申譯けがございません、常のたしなみもなく此んな有樣を御目にかけて、と今まで張りつめて居た心が一時にゆるみし如く、よゝと泣き伏した。道代さん何しろ無事でよかつた、實は僕ね今日午後から、〇〇に出品する畫に就いて、××の家まで行つたものだから、今歸つて下女から知らせを聞いて驚いてすぐ車で驅けつけたわけだ、子供も無事でよかつた、あまり心配せんやうにと慰めて、私に向つて何やら言はうとする刹那、父と母は寢まきの上に羽織を着たまゝ入つて來た。そして、日數のきまつて居るのだから、ゑんりよなく、ひだつまで居るがよいでせう、父母は言葉をそろへて言つた、別に深く御世話も出來ませんが、娘が居りますから、此んな家でもよろしかつたらと、母は殊更言葉をそへた。

私も何となく留めたいやうに思つた。



奇遇

しらなみ子

それは、私が上海に居た時の話である。

恰度去年の今頃、春雨のふつた日の夕方だつた、ボーツと空が明るくなつて來て、あまり嬉しかつたので緣側の飛石を渡つて、庭に下りて鉢植のスミレをいぢつて居ると、一羽の奇麗な、蝶々が來て手の先きに止まりかけて、アッ！と喜ぶ聲にびつくりして逃げてしまつた、それを追ふて、夢中になつて庭中を走りまはつて居ると、後ろの方で、クス〳〵ッと忍び笑ひの聲がした、ふと振り向いて見ると、親友のかず子さん！

「まあびつくりしてよ」とうらめしさうに云へば、ニッコリ笑つて下向いてだまつて居らつしやる。

「雨がやんだのねえ、わたしあまりうれしくつて、此處まで出ましたの、公園にでも行きませうか」

「わたし實は、お誘ひに來たの、大部花が奇麗に咲いて居るさうですから」といつに變らぬ無邪氣な人と、感心し乍ら連れ立つて宅を出た、丁度公園の門を這入らうとする時、吉田さんに出逢つた。吉田さんは兄樣と極く親しいお友達なので、私も少しは馴れて居る。

「お散歩ですか」「はい」「お兄樣はお宅ですか」

「いゝえ只今出掛けたやうでございましたが」

「あゝさうですか、僕少しお話があるのですけれど、それぢや今夜でも伺ひませう、どうぞよろしく云つて置いて下さい」

「はいかしこまりました」

「此頃お忙しいさうでございますつてねえ」

「忙しいの何のぢやない、一寸も暇がなくつて困つちまうのです、いや失敬」

さつさと靴音高く行き過ぎておしまひになつた。

私等が、話して居る間にかず子さんは、一間ばかり先きに行つて、さまりわるさうに立つてゐらつしやる

「どうもお待たせしまして失禮」つて云ふと、少し頭を上げて、私の顏をじつと見て、又うつむいて默つて動きもなさらない、「まあ何考へてゐらつしやるの、さあ行きませう」と輕く肩をたゝくと、ホーッと小さい溜息をついて、さて、急に氣をとり直したやうに「オホ……ッ」となげるやうな笑ひをして、靜かに

足を運び初めた、ベンチにも腰をかけた、花の前にもしやがみ込んで、音樂堂のぐるりも一まはりした。
　そして公園内を話し乍ら徘徊うた、その中途でかず子さんはふと立ち止まつて、何か思ひ出したやうに、「あのねえなみ子さん！」とじつと私の顔をのぞき込む」「なあに？」つて問ひ返へすと、
「あのねえ、……わたしねえ、……さつきね、……」
とさも云ひにくさうに、又しても考へ込んで居らつしやる、「さつきどうしたの？」「さつきのねえ、あの人はだあれ？」ときく、「あゝさつき來る時に逢つた人なの？」此度はこちらから、穴のあく程のぞき込むと僅かに目で「さう」と答へる、「あれは○○會社の人でね兄さんのお友達なの」「さう、何て云ふ人なの」
「吉田さんて云ふ方よ、あの方がどうかして？」
「いゝえどうもしないけれど、どうもしないのに何故？」
「何故つて訊いて見たかつたのよ」
と何氣なく口には云つても何か氣にかゝることでも有るらしい、大仕事でもした後のやうに、がつかりした如な風が見えた。しかし内氣なかず子さんにはありさうなことと、男の名前なんかきいて恥かしかつたのだと思つて別段氣にもとめなかつた、それから二三日たつて或日かず子さんが來て、庭で遊んで居ると、表の鈴がなつたので、急いで出て見たら、吉田さんだつたかず子さんは、私の後ろについていらしつて、その人と見るや、すぐにかくれておしまひになつた。
　吉田さんは見とがめて「あれは誰れですか、先日の人ぢやないですか」とお訊きになる「はいさうです」と云ふと「誰れですか」と尋ねらるゝまゝうるさい人だと思ひ乍ら「かず子さんと云つて私のお友達です、おとなしい方です、あなたを恥かしがつておにげになつたんですよ」と半ば辯解的に云ふ、吉田さんはじつと首をかしげて「かず子さん、かず子さん、あゝあの清水かず子さんぢやないですか」とおつしやる、私はびつくりして、えゝ？あなたどうして知つて入らつしやるの、此頃こそいらしつたばかりですのに」
「いや少しわけがあつて知つて居ます、あは……」
と高く笑つて「さうだ、確かにさうだ、似て居ると思つた」、とつぶやいておらつしやる。
　お二階に御案内申上げて、さて裏に行つて見ると、かず子さんは、相も變らず、庭にしやがみ込んで、草花をいぢり乍ら、考へ込んでおらつしやる、私の足音

がすると急に立ちあがつて「今日はもう失禮しますわ何だか氣分がわるくて」と、成程お顔の色もわるい、其日は其まゝお歸りになつた。

其後二三度吉田さんとかず子さんと逢はれる機會があつた、どちらからもきまりわるさう、殊にかず子さんはいつも顔を眞赤にしてにげるやうになさる。

それから一月たち二月たち、夏も末つ方になつた。

或日私はかず子さんのお宅に行つた。

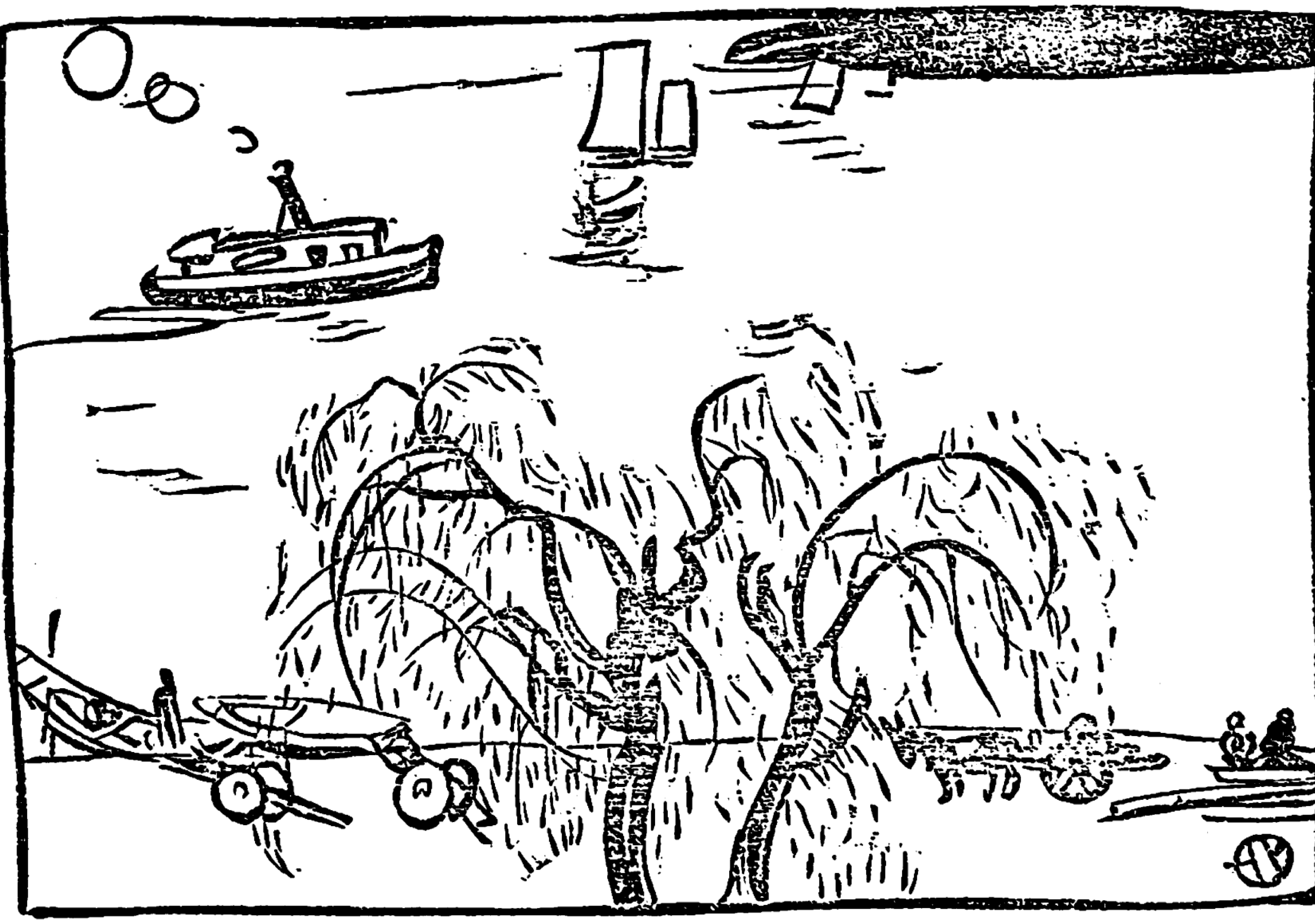
「かず子さあん」と表からどなつて這入つたが、何時



も「はーい」と飛んでいらつしやるのに、今日は何故か出て入らつしやらない、「小母さんかず子さんは？」ときくと、「まあ／＼なみ子さんようこそ、かず子は今日頭痛がするとか云つて休んで居ます、どうも時候の合はないせいか始終氣分がわるい／＼つてほんとに毎日の半病人ですてまつてしまひます、どうか奥へ行つて彼女を笑はせてやつて下さいよ」と心配さうにおつしやる、「それはお氣の毒です」も口のうちかず子さんの室に行つて見ると、成程やすんでおらつしやる。

「御病氣ですつて？いかゞ？」
「今日はねえほんとに頭がわれさうだつたの、氷でひやして貰つて、今大分良いの、少し眠つてましたの一眠つて居たのか泣いて居たのか、眼ぶたがいかにも赤くなつて、こまつてゐらつしやる。
私は病人のそばだと遠慮して、平常の半分もしやべらずに、小一時間も、おとなしく枕元に坐つて居た、かず子さんは、時々太い溜息を吐いたり　手拭で顏を押へたりなさる、私はあまり見兼ねたので「あなた何泣いてゐらつしやるの、何か考へてゐらつしやるならお話なさつてもいゝでせう、他人ぢやあるまいし、私におかくしなさらないでお話して頂戴よ」つて云ふと此度は聲を出して、シク〳〵とお泣きになる、私は、ハッと胸にこたへて「まあどうなさつたの、私の云ふのが、お氣に入らなかつて？私もう歸りませうか」つと立ちかけると、私の袖に取りすがつて「あら許るして頂戴よ、さうぢやないの、私もう〳〵決心しましたの、あたなに何も彼も白狀しますわ」とおつしやつてふところから一つ、寫眞をお出しになつた、まあ驚くまいことか、こんなおとなしい人が、男の寫眞を、しかもあの吉田さんの、私はたゞあつけにとられて、何とも口のきゝやうがない、かず子さんは靜かに口をひらいて殘らず白狀なさつた。
それは、かず子さんは、此二三年前に或雜誌に始終投書なさつてゐらしつた、そして或時お寫眞を出して交際をお求めになつた、其時多くの方から手紙や葉書の來た中で、特に文字と文章がお氣に召したのが吉田さんで、半年ばかりも御交通をなさつたとか、初めは女とばかり思つてゐらしつたのに、自分は男だがしかし、是非とも交際をつゞけて吳れまいかとおよこしになつたかず子さんも未だ十七位なお年、別に考へもなく、折角お知り合ひになつたのだからと云ふので、御承諾なさつたとか、それからお互に心が分るにつれて、色々なことを云ふやうになり、遂にお寫眞までお送りになつた、かず子さんは、お寫眞を見て、夢のやうに迷つておしまひになる所を、お父樣に見つかつて、大變なお目玉をいたゞき、文通を絕たれたので、其後どうなつたか分らない、お目にかゝつたことさへ無いけれど、今まで忘れなかつたとのこと、「丁度、いつぞや、公園の手前でお目にかゝつたでせう、あまりお寫眞によく似てゐらつしやるので、お名前をきいたら同じですもののそれでも、もしやと思つて毎日々々考へて居たら、五

月の音樂の時にヴァイオリンを借りてひいたのが元でそれから後は又昔のやうに御交際してましたの、それは〱可愛がつて下さつて花を持つて來て下さつたりかみさしを買つて來て下さつたり、そして、どんな忙しい時でも、私の顏を見ずにお歸りになると云ふことゝはなかつたの、眞實こんな末たのもしい人はないと、ひとり樂しんで居ましたのは皆私のはかない夢でした此頃ちつともお顏をお見せにならぬのみか、時たま走りよつて物を云はうとすると、苦い顏しておにげになるのですもの、何故だろう何故だろうと不思議に思つて居ましたが、聞けば毎日



毎日さる藝者の所へお通ひになるのですつて、此間も細かい手紙を差し上たら、たつた二三行書いた此お手紙、その冷淡さ加減と云つたら私ねえなみ子さんお恥かしいけれど、實際口惜しくつて〱、せめて自分の夫なら、どんなにでも辛棒もしますし、人にも話すことが出來るけれど、誰にだつて話すことは出來ず、あゝ何故私はこんなに馬鹿でせうたつた一人の骨身の叔父の感情をそこねてまで、あの緣談をことはつて、女中の告げ口でそれと知つた義叔母からはにくまれ、書生たちにはからかはれて、しかも大事な本人はあんなですもの、今更どうしたら

いゝでせうねえなみ子さん。

語り終つて更に新らしい涙をお流しになる、そして其手紙さへお見せになつた。

私はつく〲考へた、人の心は外見では分らぬもの秘密……秘密……誰にもこんな秘密があるのか知ら？と思ふと、何だかこわいやうな氣がした。

しかしそれは一瞬間、この可愛らしい、おとなしいかず子さんのお顔を見ては、その胸の苦しみに對して少なくも同情せずには居られなかつた。

止むない事情のために、思ひなやめる友を殘して、私は日本へ歸つた、かず子さんは、やつぱりわびしい生活をつゞけて居らつしやるのであらうか。

いつぞや

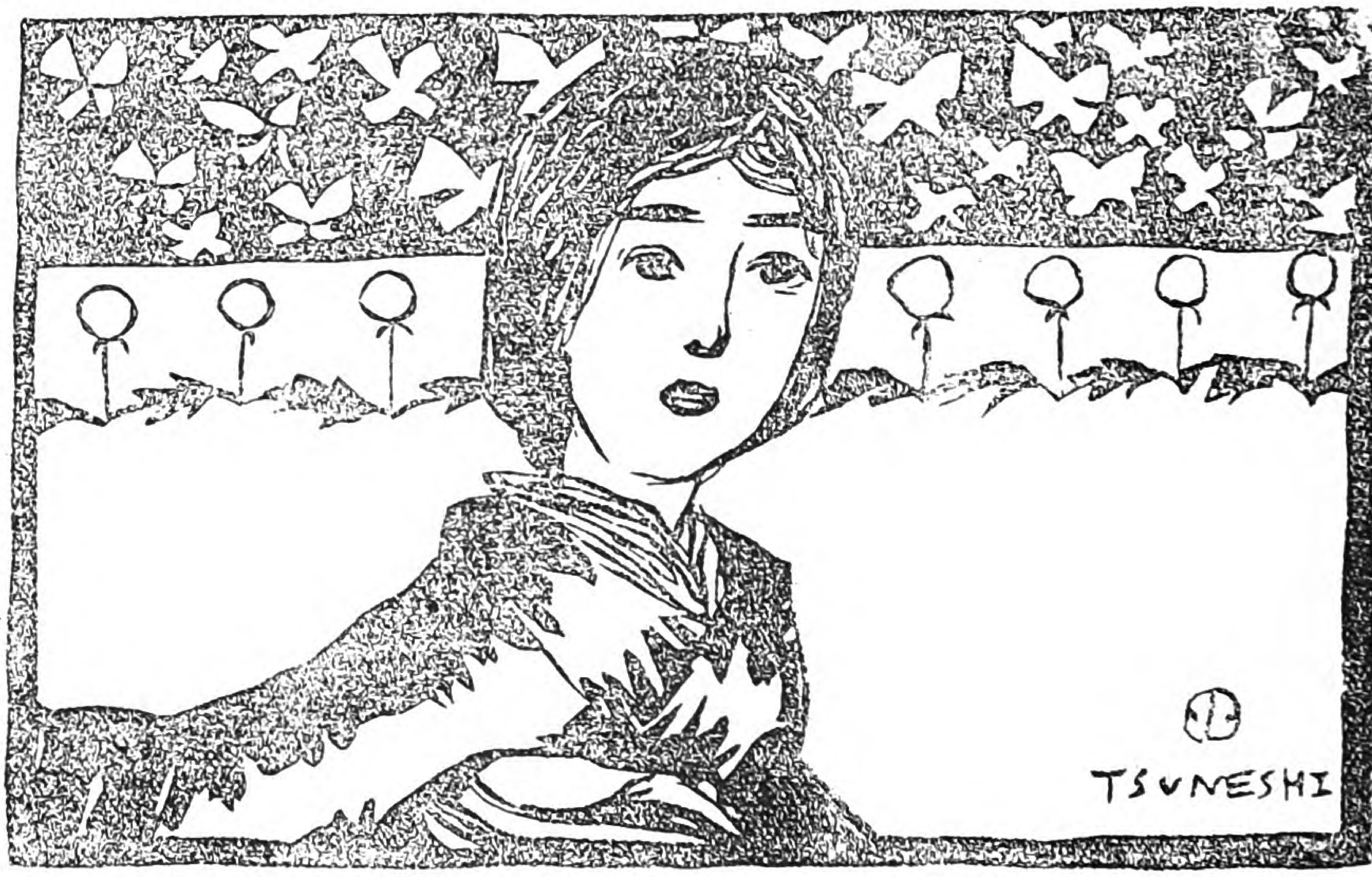
…………實に世の中は、思ふやうには行かぬのを理りと存じ諦め居り候へども、私如きも今後いかゞなり行くやと末おそろしく、今はなか〲に御許様の御羨ましく、過ぎし昔のいとどこひしく一日も心やすまることとは之れなく候……中略

何を思ひ何を悲しみて、かくは一日だに面白くもあらず、おかしくもあらず、たゞうつ〱として日をくらずらん此身の腑甲斐なさは、此身ならでは知る人もなきものを、此身もともに其何故なるかを知り申さず徒らに過去をこひ、未來を思ひては、朝夕涙のかはく暇も御座なく候、あまりに涙のとゞめ兼ね候はゞ、若しや病の兆にてはあらざるかと、心配り乍ら、醫師にも乞はで其まゝに人知れぬ袂もしぼり居り候、あゝうら若き女の身にて、いかなればかゝる當地へは來つらむ、旅の空にてうれしきものはたゞこれ人の情ぞと、思ひつめしは、浮き世を知らぬをとめ氣の、げにあやまりにて候ひし、旅の枕のしめり勝ちなる、人の心のおそろしさ、身にしみ〲とおぼえ候てより、惜しくもあらぬ身一つを……云々……

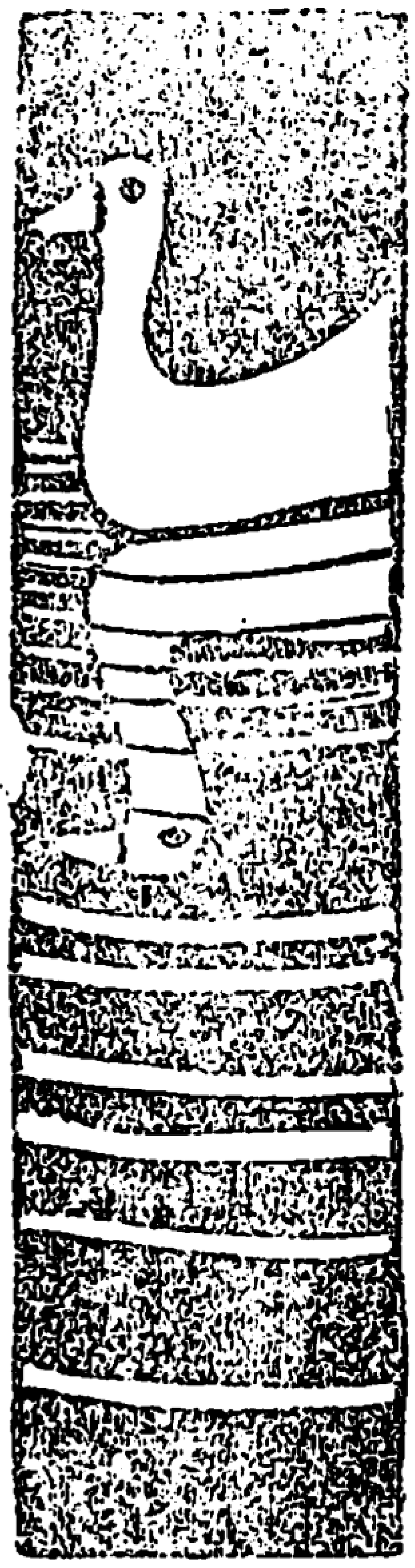
と云ふやうな長いお手紙をいたゞいたきり何のおたよりも無い。

春色

日ながうして蝶のくたぶれつ　碧梧桐
島原やかんざし沈む春の水　把栗
ハンケチに見ぬ戀つくる菫かな　飄子
日一日同じ所に畑打す　子規
春風や土手八丁の小室節　臨風
春風の奈良の旅籠屋三輪の茶屋　其村
小式部の衣紋くづすや春の風　古白
白き蝶黄なる蝶に言て曰く妻にせん　修竹
永き日の函根越したる女かな　盈水



誌友欄



小說

○お濱

水野葉舟選

信濃　前島優梨子

お濱はまた何時の間にか鹽藏の二階へ上つた。そして横町の狭い通りに向いた、小さな窓の鐵格子につかまつて、ジロ〳〵と落着きのない眼をして、人通りの少ない夕暮の街を見下して居た。

「ヤア富屋のお濱さんがまた居るよ」と斜向ふの物置らしいザラ〳〵した砂壁に寄りかゝつて、寒さうに懐手をして何か、喋舌つて居た二人の子守女の小さい方のがぐいと見上げて口早に云つた。

「あれ眞實だ、お濱さん！」と片方の元氣の好さゝうな嫌に眼の大きなのもすぐ其方を見上げて大きな聲で云つた。そしてすぐ、

「ナアお濱さん、御亭主の傍が戀しいかえ、あゝ戀しいだらうともナア」とからかふ樣に馴れた口調で云ひだした。

其聲を聞きつけたお濱は急にシク〳〵泣き出した。

「逢ひたいかえ！逢はせて上げるから泣かずになア、奇麗にお化粧して待つてお居で」と今度は小さい方のがさも馬鹿にした樣に、大きな口を開いて不揃ひな黄色い歯を惜しげもなく見せて斯う云つた。

お濱はすぐ泣のを止してニコ〳〵と寂しく笑つた。

「あア嬉しいともさ、嬉しいともさ」と二人は聲を揃へてはやし立てる樣に云つた。

お濱は何も云はないで只ニヤリ〳〵と嫌な笑ひ方をしながら眤と其下を見下して居た。

「お内儀さん、またお濱さんは鹽藏の二階へ上つて居なさりやす」と頓狂な聲で云ひつけて居る女中のおたけの聲が下から聞えると、お濱は急におびえた樣に小さくなつて窓の下へ蹲まつた。

「また子守子供に調戯れて居るのかえ！、構はずお置き、彼麼に皆に馬鹿にされてもお姑さんが默つて居なさるんだもの、眞實に恥しくて近所へ顔向けも出來やしない」と嫂のお幾はわざと大きな聲でつけ〳〵と角

のある云ひ方をした。

中庭の向ふの四疊半に夫を聞いて居た氣の小さな母のお常は、また何時もの樣に身體まで小さくなる樣な氣がして、息づかへさへそつとして居た。そしてまだ何か云はれはしないかと居堪らない程ハラ〳〵して居た。

お幾はそれきり何も云はないで、何か茶の間で手荒くガタピシやつて居た。

お常は小さくほつとして、そつと音のしない樣に庭に有つた緒のゆるい下駄を引掛けた。そして小急ぎに鹽藏へ引きつけられる樣に行つた。

一尺ばかり開いた厚い引き戸の間から、そつと身體を横にして入ると、冷えきつた濕つぽい樣に冷たい空氣がひやりとして、思はずお常はぞく〳〵つとした。

「お濱！」とまだ階子段を半分ばかり上りかゝつた處で、小さい聲で呼んで見た。

けれどお濱は返事をしなかつた。

「お濱や、なぜまた此處へ來るんだえ、あんなに始終云つて居るのに、眞實にお母さんが困るじやないかえ」とお常はさも持てあました樣に少し手強い樣に云つた。けれど薄暗い窓の下に冷たさうに素足のまゝしよんぼり蹲まつて居る悲慘な娘の姿を見ると、すぐもう目は潤んだ。

「さア下へお出で、よ！ほア行つてお呉れ、おゝてんなに冷たい身體をして、よくまア病まない事ナア」と張りつめて居た氣がゆるんだ樣に、終ひの言葉は小さく震へて居た。けれど涙は見せまい〳〵として、只きゆつと痛い程強く、お濱の冷たい兩方の手を握り締めた。

お濱は別に何にも感じないらしく、矢張ムツチリとして其處へ蹲まつたまゝ、溫順しく手を握られて居た。

「お濱、濟まないけれどお母さんはなア、早くお前に往生して貰ひたいよ、どうせ生甲斐もないんだから…………あゝ決してお母さんだつて殘つては居ないから…………」とお常は酷く思ひつめたらしく恁麼事を云つた、それでもお濱は默つて別に情なささうな顏もしなかつた。

「さア〳〵下へ行つておあたり、てんな寒い火の氣のない處に眞實にお前も……」とお常は氣を取り直したらしく、優しくお濱を引き立てた。

お濱は何を思つてかニヤリと氣味の惡い笑ひ方をして溫順しく母に手を捉られて鹽藏の二階を下りた。

小新らしい紅緒の草履と、踵の切れた藁草履とびつてに履いたお濱は、母屋から離れた陰氣な六疊の自分の部屋へ連れられて行つた。

「おゝまだお前お晝も食べないで、もうお夕飯だのに」と隅の方に片寄せられてある、山盛りにした御飯のお茶碗と、しなびた樣な香の物ばかりが寂しさうに載つて居る、剝げたお膳を見るとお常はまた新らしく胸が一杯になつた。

お濱は中へ入つても別に炬燵へあたるでもなく、冷えきつた御飯を食べ樣とするでもなく、只寂しさうにして障子の際に立つて居た。お常も泣きたい樣な氣持になつて默つて居た。

「什麼すれば好いんだか眞實に理由が解りやしない」と突然に元氣の好い姆の突慳貪な聲が中の間でした、お常はハッとして、思はずそつとお濱を見上げた。(天賞)

○妻

しづな

「今日は二十五日ですね。天神樣の日だ――あゝもうあと五日ですねえ！」とお組は自分の床を、たゝみながら、獨言の樣にかう云つた。

「うれしいかい！」國三は臭い床の中から手を伸ばして、長いきせるで、きざみをやつてゐた。

「うれしいんですよ！おいしい物をたべたり、芝居を見たりするお金を、ためておいて、歸鄕の旅費にしたい位ですわ――全く。」

「そんなかなあ……だが俺の生家が大阪にあつたら、いくら正月が休みだつて、二人で家を明けて、おまへの里へ行くなんて事が出來まいよ。」

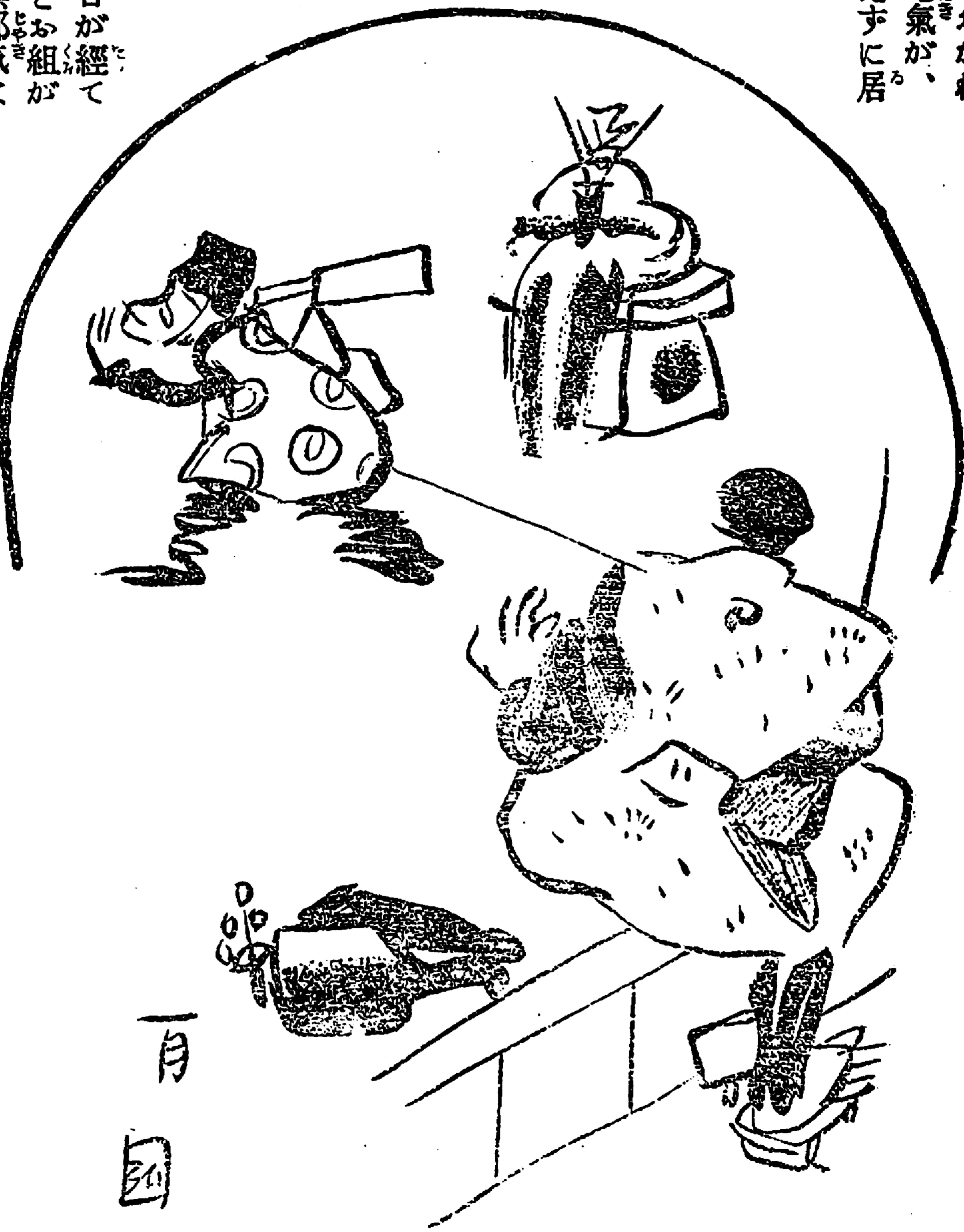
「そんな位なら、私はじめから、こんな大阪クンダリへ嫁いて來やしませんわ――。」

「御尤もですね。」國三は冗談らしい調子で云つた。

お組は寒む相に、それでもタスキをかけて釜の下を燃やした。初めの中は御飯が出來て了ふまで、心が落ちつかなくて、釜のまへを立たり坐つたりして、安心して外の用をする事さへ出來なかつた。それがおい〱慣れて來て、手まはしよく臺所がかたづいた。

國三も起きて床を仕舞ひ乍らも、下らない冗談を云つて、若い妻を、ハデに笑はせる。國三が井戸へ顏を洗ひに出る間に、お組はせまい室を、勢よくハタキの音をたてゝ掃除した。そして自分に、てさへる朝の茶鮮

臺が、そこへおかれる頃まで。電氣が、きいろく消えずに居る。食事をやり乍らもお組は歸郷の事のみ口に出る。國三の生家の妹弟には何々、店の若い者たちには何々とそんな土産物の相談なぞは、いつもお組からしかけた。
「あゝ早く日が經て了へ……」とお組が小供らしく無邪氣な



（天賞）猿曳　浮山　中村弘子

表情をして見せた。國三は笑つて
國三が出勤して了ふお組はよでれた膳を其まゝ新聞も見ずに、火鉢によりかかつて考へたい事を、いつ迄も考へて居た。里へ歸るのは、嫁いてからこれで二度目だ、はじめての里歸りの時は、母親が

自分の顔を見て、何も云はずに泪をためて居る時に、自分も胸が迫つて、泪ぐんで了つた事等が思ひ出せる。よく肥えた頭の丸い、優しい眼をして居る父親は、お組にとつて、一番思出の深い、なつかしい、そして大切な人だつた。お組の嫁く前の晩に、其父親の沈みきつた、顔に對してお組は、泪が流れた。

「どうして、おまへ……お父樣は、おまへの事と云ふと、全で氣狂ひだもの——おまへが嫁いて了つたら、お父樣は、元氣がなくなつて了ふかもしれない！おまへは本當にお父樣の事は忘れちやすまない！」母親はお組に向つてから云つた。それをきいて居てお組はやつぱり泪ぐんだ。お組を大阪へ嫁けるに就ても、兩親にとつては大英斷だつた。

「どうせ國三さんの生家がこちらにあるのですから、ゆく／＼はこちらへ常住なさる考へなんですからね長くて、三年、もしかすれば一年位でこちらへお移りになれるかもしれません——何しろお若い中に、少し遠方へお出でになつた方が德ですよ。」と世話する人が云つてくれた。「何だ大阪が遠方だなんて云ふと、笑われるぜ——」と小さい兄が云つた。お組の心も動いた。兩親もいよ／＼手放す事にきめた。

「あゝつまらないな、又一人とられて了ふのか——」とお組の父親は晩酌し乍ら、娘の顔を見て云つた。

「さうかつて家へおけず、いゝ緣はないかと苦勞をするし……」と母親も淋しい顔をした。

かうしてお組は國三に嫁いで來た。平沼を立つ時にはたよりない、心細さと、淋しい哀愁に、胸が迫つて居た。

「組ちやん、本當に病らはぬ樣に、一人で氣をつけないぢやいけないよ、それ丈けが皆心配なんだから——。」汽車の發車する間ぎはまで、母親はそれを繰り返した。

お組は大きい眼に泪をためて、それでも笑顔をして居た。

「では國三さん、どうぞよろしくお願ひ申ます——」それは父親の聲だつた。

「大丈夫、引うけましたよ、御安心下さい！」と國三は高い聲で云つた。汽車が動くと、お組は、もう良人一人が賴りと思はねばならなかつた。

お組は一人になるとよく、其時の事が考へられた。

「さうして、新らしい家を自分たちが持て、毎晩世帶道具を買ひ集めに歩いたり、毎日の樣に、實家へ便り

を書いた頃の氣分も忘られなかつた。大阪の言葉のおかしい事や、街幅のせまい事、橋の多い事、女の姿の粋でない事、家の建て方の違ふ事迄、こま〴〵と書いては送つた、お組の名宛で毎日、手紙が誰かしらよこしてくれた。表書き丈け父親の字でした、母親の長い手紙を初めて受取た時に、お組はよまぬ中に、泪がこぼれた、以前から手紙と云ふものを、つひぞ書いた事はなく、いつもお組が代筆してた、其母親が、これ丈けの手紙を書くのは、一通りの事ではないと思つた。

お父さんは、御丈夫なれど、おまへの事はうわさせぬ日はなく、何だか淋しいなと、いはれて、氣のせいか元氣も失せた樣に思はれ――」

こんな文句にお組の眼はうるんだ。

かうしてもう夢の樣に一月を送つた。おい〳〵手紙の數も減つた。可成慣れる迄は、下女のない、臺所働きは、お組にとつて骨がをれた。そして晩の惣菜を考へて、それをこさへる丈けでも、一仕事だつた。屹度毎日一度づゝ、門に鍵をかけて、街に買物に歩いた。そして魚やのまへに立ても、八百屋物を買て居ても、知つた顔に逢ふ氣づかひはいらなかつた。そして、八百屋物の風呂敷づつみを持たまゝ○○書店の前へはよく立た。自分の里の近所の××堂と云ふ、おなじみの書店へ、女學校を出てからも、よく遊びに行つて、好きな本を讀まして貰つたり、その伜に、小說の通がつて咄した蓮葉だつた娘の頃の自分を思ひ出せる。

お組は隣近所のお神さん達の、甲斐々々しい働きぶりを見ると、何となく自分の母親の事が思へた。

どこの家でもあゝして、家らしい、おちついた氣分で、やつて行く人ばかりの中に、自分の家は、何となく、未製品の樣に思へた。夕方等、何處の家でも、水を汲みに出たり、菜を洗つたり、さも忙し相にしてゐるのを、お組はぼんやり用がなかつた。それが何となく氣がもめた。歸鄉の日が近づくとお組は、街へ出ても自分の妹や、國三の姉の子等にやる何か安物はないかと、ハデながまぐち等、ガラスの外から、ねだん書をよんだりした。こんな氣持で、年の暮を送つて居た。近所ではもう、新らしい年を迎へる仕度に忙しかつた。それでもお組は餅丈けはつきたいと云つて、賃餅をたのんだ。せまい室へ、少しばかりむしろを敷いて、餅が並んだ。

いよ〳〵待ちわびた日が來た。

「あしたの今頃は、盛にお母さんと喋舌て居るんだね

……」國三は洋服を着て、柳行李に、細引をかけてゐた。

「さうですねえ——停車場へお母樣と、れいちやん位出て居るかしら？大晦日だから忙しいから何うだか！」

お組ははれ〴〵した眼をして居る。

「だけど、こんな髮に結て、愕ろくわね屹度……いやだな……」と、合せ鏡して、赤いきれした、丸髷を見て云つた。（地賞）

○疲れ

月草女

外にはしと〳〵と小雨が降つて居る。

操は小楊子を使ひながら、グッタリと疲れ切つた身體を柱に凭せて見るともなく、喰べ捨てた膳を運ぶ弟嫁の白い手を見て居た。

長い汽車の旅から雨にしよぼぬれた身體を、急いで此格子先に馳け込むと、彼の優しい手でコートを拔がして代りに自分の銘仙の羽織を引掛けて呉れた。それから知らぬ間に汚れた下駄や足袋なども仕末して終つた。

心憎い程氣轉の利いた嫁ではあるけれど、長火鉢の前に裕然とあぐらをかいた直吉の大人びた姿、ませた口の聞き樣を見れば、どうやら此女が後に居て弟の敎手にでもなつて居る樣で憎かつた。

恰好のいゝ丸髷、白い襟足、圓い瞳、此等が此只僅二人限りの姉弟の界を隔てゝ終ふ樣な氣がした。

殊に斯う仲の好い所などを見せ付けられると云ふのも、餘計獨棲の操の心を焦々させた。

「お前も世帶持らしく爲つたねえ」半ば嘲笑の氣味で云つたが直吉は存外眞面目なもので、

「そりや姉樣、私だつてもう六ですせ、何時迄腕白坊でも有りませんや」と云つて微笑んだが、

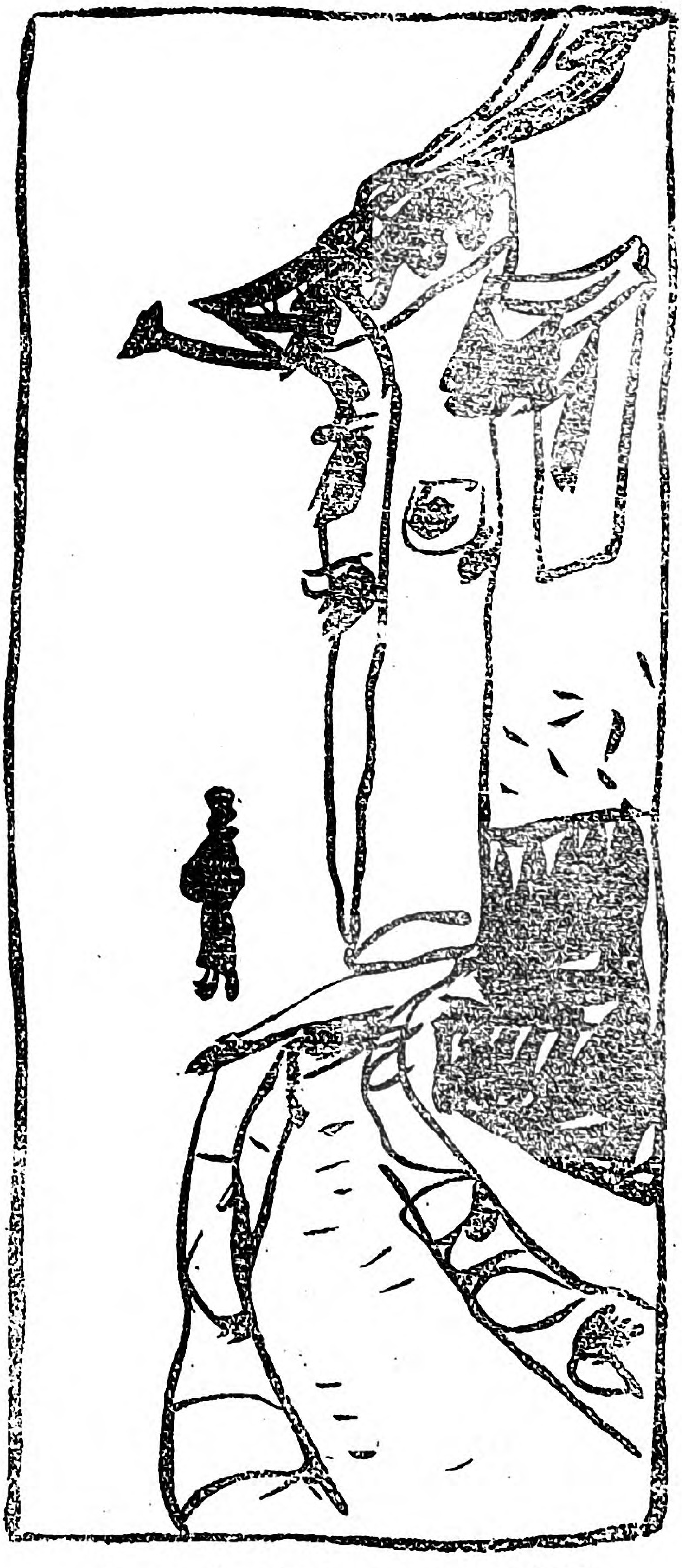
「姉さんも大抵になすつちやどうです、女等といふものは三十を過ぎちや御仕舞ですからねえ」這麼染々とした戒める樣の言葉は一層操の心持を焦立しくさせたので卒と返事もせずに默つてゐた。其面白からぬ面色を直吉は早くも見て取つて、氣を代へた樣に話を外らした。

「まあ何でもいゝ、明日あたり、雨が上つたら京極へでも御供しませうか、立派になりましたよ、十二社の方は一日位どうでも好いんです」機嫌を取る積りで云

つたが操の方ではたゞ、「左樣さねえ」と氣のない返事をしたので今は話の繼穗もなく夕刊を取あげた。雨はだん／＼降りまさつて行く、二人の間には妙に打解けられない樣な空氣が流れた。默り合て居る中に、柱時計の音のみが耳に響いて聞えて來る………。

とてろへ三味線を抱へたお小夜　入つた來た。

「何かやりまほか」無邪氣な調子で斯う云つて莞爾としたので直吉は調子づいて、



（地賞）スケッチ　小石川　安西よし子

「あゝ例の十八番でも御聞せ申すがいゝ、姉樣此奴の梅にも春と來たらねえ」

「あれ、貴方、いやだわ、お姉はん笑ひなはるに依つてそないな事おきなはれ」此媚かしい問答に操は尙々嫌な感じがした。何だか二人に馬鹿にされて居る樣な氣がして「あゝもう弟は自分の物ぢやないんだ、淋しくても矢張り一人がいゝ、明日にも歸京つて終はう」などゝ心の中で思つて居た。

お小夜は事もなげに操の方を見て笑ひながら三味線

を取あげた。白い腕、赤い手柄、古風な洋燈にチラチラと映つて美しさを增させた。

操は時々直吉とお小夜の面を見比べて淡い嫉妬を感じた。三つの弦は手器用に動かされて行く。

「春けしき、浮いて鷗の一い二う三い四う……」、から

よろづ吉原、山谷堀、たから船てぐ

……………初か一へー…………」のあたり烈しい浮いた調子までは、反抗心で打消されたけれども其内にだん／＼ゆるやかな、快よい三味の音は不思議に操の胸の塊りを融和して行つた。

旅の疲れと、先刻强ひられた牡丹正宗の酔とで、うつとりとした身内に油然と浸み込んで行く甘い懷しみに今迄の反抗心や不平はサラリと消えた。

「ほんに田舍のましぼたて、

橋場、今戸の朝けむり……」

お小夜が無心に例の張りのある透き通る樣な聲をはりあげた時。紅くなつた操の眼から涙がほろ／＼と零れた。（入賞）



○古道具や

信濃　優香子

俊次はヒダのくづれた袴をとつて二階の下り口で二ツ三ツバタ／＼拂ふとそのまゝ、ひもを結んで柱の釘へかけた。そして机の下から古い革の煙草入れを取るとトン／＼はしごを下りて下へ行つた。

硝子越しに店の見えるそての障子のきはで裁縫をして居たお内儀さんは老眼鏡の上からすかして、此方を見てニッコリ。

「お歸りなさい今日は大變お早いんですね。」と愛想よく云つた。

俊次も笑ひながらその側へ坐ると差からポンと煙管を出して甘味さうに煙草を吸ひはじめた。

「お小父さん、今日は何か珍らしい物を買つて來ましたか、」から云ひながらお内儀さんの顔をのぞき込んだが、すぐ店のすゐの中古机の上に時節はづれの氷屋のコップが十ばかり並べてある下に、古雜誌や手紙の反古が一束になつて居るのに目をやつた。

俊次はそつとその側へいざりよつて、すぐ大きな束になつて居る、古手紙を取つて少し重い樣なのを出し

ては、「どうです女にしては上手に書いて有りますね」といつて、裁縫をして居る小母さんの鼻の先へつきつけたり、面白い文章だといつては讀んで聞せて居た。
俊次はもう手にのこり少なになつた手紙の内から、

櫻舟兄へ　　　　高木々

と書いた長さうなのを取ると、丁寧にしわをのばした。が、始の方がむしり切つてあつたのでチエッと舌うちしたが好奇心にかゞやく眼に力を入れて讀みはじめた。

稍肥えたるかと思ふ、色は淺黒く髪は多く長き方にて黒し。
言語は明晰なれ共國なまりにして大阪風を交ふ。
容姿は小生の見にては中位か人によりて、異るべし。
性質、最も困難なる問題なり、女學校に於けるテニスのチャンたり、家庭にてはカルタのチャンにして夏は水泳のチャンなり伴人に近づき讃美歌を口にし、家居廊下等を高聲に手を振り足ぶみしてツロモンの一曲を奴鳴る。
小生に手紙を呉れるに常に英語を以てす、女學校卒業生としては上々なりと思ふ。
右の點よりすれば何人も無邪氣なりと見て差支へなかるべし。
姿はバンカラに近しと雖も行はハイカラに近しと云ふを得ん。
時々ムッとした時にジッと沈思す、然し個性が喜怒多しとは斷じ難し、なんとなれば小生の見たるは變動期に際したる頃なりければなり。
自ら自白す、或時は金に憧れたり或時は外交官に憧れたりと、然し前者は幼時なりと云へば知らず、後者は恐らく彼の女の眞の望みなりしならん。
快活なるは彼の女の家の通有性なるに似たり、余の見にして誤りなくんば彼の女の眞骨頭は快活なりと見ん、ヴァイオリンを弄するも一證と見る。
右を以つてすれば前段と對照して近代式女性の一斑を保有すと云ふべし。

俊次は一息にこゝまで讀むとつかれた目にそこの肘かけ窓から暮近い空を仰いだ。そして今迄自分の知つて居た女について、これに似た女性が有るかと思ふて一人々々知つて居るかぎりの女の名を呼んでは考へて見た。
が、またその後の文句に引ずられる樣にふりむいた

時、戸棚や本箱や古だんすが重ねて有つて光線のよく這入らない部屋は、もう薄暗くなつて居た。
お内儀さんは裁縫をきれいに裁板の上にのせて、夕飯の用意に臺所へ立つて居た。
針箱の上の老眼鏡が細くさし込む西日にキラリとつかれた俊次の目にふれた（入賞）

○そら似

富山　村山咲子

今日は不思議なおどろきに胸がつぶれました。然しその驚きも束の間で今は不思議の念のみとなりました。

今朝窓から首だけ出して白い雪のはてしもなく續いたさまに見惚れてゐましたの、頰を削りさられるやうな冷い空氣に、障子を締めようとしたら、向ふの二階にも同じ樣に硝子戸によつてこちらを見凝めてる男がありますの。それを見た時私の胸はふるひました。

それが、あの岩本に寸分違ひがありませんもの。背のあんなに小さい、眉だつて、いつも笑をたやさない眼など、どうしても岩本でした。髮の分け具合までおなじですもの、文字にあらはせばこそこんなに長いんですけど、見ると同時にそんなことは一緒に知りました。

私はびしやつと障子を締めて火鉢の側へ坐つたけれど、たゞ云ひやうもない思ひに胸がいつぱいになつてそして岩本の姿ばかりが浮いて出ましたの、母が階下から上つてきた時に氣づくと私は灰の上に岩本々々といふ字ばかり書いてゐました、母と向ひあはせになつた時には、火ばしの先はもう、何やらわからない、まるくばかり書いてゐて、そして止まつた所へぐいと火ばしをさして、そして母とさまぐ〳〵の談をしたのです。

今のことが氣になつて仕方なく、だまつて立ち上がると、硝子戸のうちらには、其人の顔がこちらを向いて見えてゐました。私は手拭をさげたまゝ平氣で階下へおりてゆきましたの。

中庭を隔てゝ向ふの離座敷の二階ですの、わづかに八九間をへだてゝ、しかも同じ宿にあの人と身をおくかと思ふ私のその心を知つて下さるのはあなたばかりです。

階下の廊下を通る時にもそつと見上げると、矢張未だそこに立つてこちらを見てゐるの。てつきり岩本、

岩本だわと思つて、通りがかりの女中をつかまへて一生懸命愧かしさをこらへて訊て見たら、やはり東京の學校へ行つてゐらつしやる方ですといふんですもの。仕方がない。もう岩本にしてしまつたの、名前まで訊ふことは私にはどうしても出來なかつた。きかなくたつて決つてると思つたですもの。

それから今、角の郵便箱まで行かふと思つて、片足足駄の歯を雪の中へ踏みおろした時、ざつく／＼雪をふんできて、私の前で立ち止つた男は、につこりして默禮しましたの。につこりしなくつても彼人はあんなに笑つてゐるんでせう。私はぎつくりとくぎづけにせられたやうにすくみました。岩本、岩本にそつくりですの、けれど、あゝけれど岩本ぢやありません、本當の岩本ぢやありません他人の空似つて此人でせうか――。

本當に瓜二つです。此人は角帽をかぶつた人ですもの。けれど姿から眉と眼は岩本そのまゝですの。どうしたものか非常に馴れ／＼しく口を利いてくれ



（入賞）よもぎつみ　陸前　黄川田かよ

ました。私は岩本ぢやなくてどれほど幸だつたでせう。けれどどれほど物たらなく感じたのでせう、知つて下さいますか――

　それから私は毎日窓へ首を出すのが樂です。岩本の姿を見るやうな氣がしてあの時分がなつかしうなりました。

　よく公園なんか歩き〳〵「雜誌のポンチ繪にでもありさうですね」と云つて冷かしては、いやがらせたもんでしたつけ……

　今母にたう〳〵云つてしまつたの。

「此向ふの二階にゐる書生さんは岩本そつくりですけれど、それが岩本ぢやなくつて、大學の帽子かぶつた人ですの、帽子を除つたところを見て御覽なさいな、岩本だと思へますわ」つて云つたら、

「さうかへ、可愛らしい方だつたがね……」とうつとりなつてゐて「見てみよう……お前のよくめかも知れない」つて云はれた時には、思はず頰がほてりましたの。

　何となしにうれしいやうな、なつかしいやうな、物足らぬような、こんがらかつた感じがしては、氣がおちつきませんの、此つぎの便には必つと面白いことが書けるんでせうから待つてゐらしつて下さいよ。

　どうしてもそわ〳〵して書けませんの。

　それからまだ忘れてゐました。彼人は靜岡の人で前澤勇治つて云ふさうです。

　どう考へても思つてみても不思議で仕方がありませんの。

○情死

廣島縣　葵の花

　驚愕より、失望、憂愁、離苦、からした想が跡から跡から泉の樣に湧いて來るのでお文は泪に濡れた兩袖を面にあて〻午後六時が打つてもまだ泣き止まなかつた「もう娘樣達の支度は出來た相だがのうふうや」。

　田舍に嫁いで居る大きい伯母はおろ〳〵聲で促す樣に然も優しく云つてお文の背中へ手をかけた。お文は何とも答へなかつた、「外は大變寒相だからふうちやんは娘樣達にお願ひして止しては如何や？」。

　這う云つて町に嫁いだ若い叔母は鼻をかんだ。

「イエ妾行きます！」、ときつぱり云つた積りであつたが夫れが又妙な調子はづれの疳高で自分の聲とも思は

れぬ凄怪しく響いた、千斤の鉛を括り付けて水底にしたゝしてあつた樣な重い頭を擡げると室と云ふ室には掃除したてのランプがかつきりと赤白い光りを隈なく投げかけて何時の間に寄つて來たか村の人々は裏座敷や臺所や流元迄三人五人寄つてたかつて何事か私語いて居るけれども高い聲一つ出す者もなくて家の內にも又ぐるりにも「死の影」が滿ち漂ふて居る。

　弟は死んだのだ芳雄は死んだのだ、たつた一昨日長兄と口論つて家を飛出し弟が何故死んだのであらう。然も情死などを、噓ではあるまいか噓ならいゝけど噓ではないのだ電報せたのは次兄現に見て來て語つたのは叔母今自分は夫れを迎へにゆく處ではないか二人の伯母に手傳はれて支度をしながらお文は絕えず這麼夢の樣なたわいゝ言の樣な儚ない想を繰り返し繰り返しして居た「支度がすんだらさ早く」伯母にせくり立てられてお文は表座敷へ出た、泣き腫れて重くなる迄ふくれ上つたまぶた、目は淚に霞んで頭が裂る程痛かつた、室室をへだての襖はまるで取り去られ新らしい青疊が全然敷かへられた三室も合せた廣間の眞中に大火鉢を持出して其處にも近處の人々が五六人寄つてたかつて平氣な面で煙草をくゆらして居た、正面の床の傍の佛壇のとびらは左右に開放かれて供げられたる蠟燭の灯がハタハタと忙し相に瞬く每にすう〳〵と立ち登る線香の煙が室內に流出で咽ぶ樣な其香につれて何とも云へぬ悲しみの深い淵に此家でと持ち行かれてあるかの樣な心元なさゝ悲哀の情が一時に込み上げて來たのでお文は又しても溢れ落つる淚を手巾に受けとめた。

「お文さん此處にありますよ……」、次の嫂の聲であつたお文は思ひ切つたらしく泪を嚙んで上り框を降りた其處には早二人の嫂が相談した樣に黑のコートにお高祖頭巾と云ふ出立で丸に四ッ目の定紋付いた深澤氏と姓もかつきり大い文字入りの提灯を仲——下女——に持たせて待つて居た、お文は無言の儘きちんと揃へてあつた牡丹色の鼻緒の下駄を突掛て出た。

「ぢや伯母樣、行つて歸ります」、二人の嫂は殆同音に云つた、「行つてお出、氣を付けて喃」、「ハイ後をよろしうお願申ます」、「アイヨふうちやん寒くはないか?」、夫れには誰も答へなかつた、外には分家した叔父が赤いほいゝづき提灯を小男に持たせて待つて居た、其夜は風の冷たい眞の暗黑で凍つた樣な星の瞳が黑雲の間々から二つ三つ覗いて居た、寒さに閉じられてやさらでも戸數のまれな此の里には火影一つも見えないで

闇をくゞる二つの提灯を默せる六つの黒影の混亂せる下駄の音響が小川の水瀬に相和して邊りの寂寞を破るのみ、小石を敷つめて堅くなつた田舍路に消え殘る幾筋もの轍の跡を行けども行けどもつきぬ曠野をさまよふ心地お文は夢中で俯向いたまゝ足を前へ前へと運ばせた、木々の梢を玩弄んだ木枯は不遠慮に人々の頬を刺し裾をまくつては行き過ぎ行き過ぎして居る。

「隨分寒い喃つ……河内邊迄は行く樣だろうよ」、先なる叔父はふり返つて云つた。

「其麼でもあんせうか叔父樣お風邪が入りはしますまいか？」、「何大丈夫だよ」、再び沈默にながくつゞく、父母なき家庭は氷よりも冷たく芳雄が燃えなんとする情緒は或暖き花に酔つて放縱なる生活を玆一年餘り續けて居た友より師より兄よりの縷々數千言の訓戒も熱に狂へる芳雄が心をあたゝむるには餘りに冷か者であつた、師は第二の手段として退校を宣言した社會はそが墮落を唄ひ嫂の瞳は益々鋭くひかつた。

死を聞いて流石に驚愕の眼をてそみはりつれ義理にも涙を見せぬ嫂がお文は一番憎くて堪らなかつた、あの美しい千代香の寫眞を取り出して兄弟爭を起さしたのも嫂であつた嫂に少しでも血の湧く思な人であつたら今日の樣な慘劇は仕出かすまいものをと情に激したお文は一途に這麼思に心を苦しめた、そして家庭と社會と學校とに死を迫られた芳雄への同情の反動はやがて手近な復讐として嫂を思ふ樣苦しめて遣りたい程にも思つた、夢路を辿る心地小さな峠を越え橋ある處へ出ると青白い瓦斯の光りが暗を破つて一直線に近付いて來る、「アッ戻つたぞ」と叔父は云つた、皆はゾッと急におぢけ付いた、お文にザンブと計り冷水を浴びせ掛けられた樣にブル〳〵と身を顫はせた、そして懷手をしたまゝ兩手を組合せて高潮胸をしつかと抱いて居た、火影は間近くなつた、次なる火光は點々として一つ一つ數を增して居る、廻り途を出て居るのであらう。

「叔父樣ですか？」、「オヽ良作……次兄の名……か」、「寒いのに御足勞でした」、と云つて自轉車からひらり身を躍らせた、「此の邊で待つて居ませう」、良作が云つた、足袋の看板の淋し相に掛つてゐる家、兼て知る駄菓子屋があつた。

漸々騷がしい人聲が近付いて、ヨイショヨイショと何んとも云へぬ物凄い掛聲が黒色の沈滯せる空氣を搖すぶつて切々身を刻むのみの音の樣に刻々肉迫して來

る、お文は何時の程よりか歔欷泣きを續けて居た。

「ふうちやんふうちやんしつかりしなさいしつかり……」

良作は優しく云つてお文の背中を撫でた。

「ヤア誰樣も御苦勞でありたお寒いのにどうも……」

叔父に續いて二人の娘も夫々あいさつをして居た。

「何うも早申上樣もござんせんで……御殘念でござんせう——」

「えゝ馬鹿な事をしましたて……」、白布を掩ふた釣臺は其處へすゑられて前後の舁人は玉なす汗を拭ふてゐる、お文はつとより添ふて白毛布に



戀しき故郷　福岡市　西川千代子

包れた芳雄の顔を覗く樣にして、「まあ芳さんお前はなせ……なぜ死んで呉れたのえゝ芳雄さんテ」、物狂はしき迄嗚咽歔欷てた。

人々は皆涙を呑んだ、嵐が誘ふたか白いものが提灯持つ手に散つて來た、良作は不覺に泣き入るお文をたすけ起してかゝへる樣にして其處を去つた。

「ぢやついでにもつとお願ひしませうか喃」、邦造——長兄の名——の聲であつた、ヘイ、ドッコイショ、竹の杖にすがつた舁人は身がる相に、ヨイショ、ヨイショ、と物凄い聲を人々の腦裡に深く印して、火光はぞろ〳〵と一團の潮

の様に後からおしよせてゆく、暗は默して何處迄も周圍をとりまいて居た。

○指

横濱市　山崎都鳥

半月餘も照り續いて乾ききつた道は、白い微細い埃が朦々と立ち昇つて、それが二月の透る如な太陽の光に明るく見える、その町を縦に貫いてある單線の電車路に添つてぐづ／＼と俥を走らせた。

○○橋を越すと電車の車庫が右手に幾棟も建て連ねてある、軌道が幾條も絲の解けかゝつた如に本道から岐れて車庫に流れ込む、此處ら邊へ來ると複線になつてる、その交叉點を曳いた時に、ゴム輪の車臺は多少動搖した、毛皮まがいの膝掛に深く腰を巻いて、むしや、くしやした危惧の念を包んだ照代は、外見は極く平氣に裝つて頤を深く胸に引いてゐたが、この時不思顔を上げて、前方をちよつと見やつた。想と想とが纏れて重つ苦しい胸の中が急に、氣が拔けたやうに呆然としてしまつた。

寒明けとは言ひながら眞つ天の日光が直射して、照代の頭はいとゞいら／＼する。

梶棒を握んだ車屋の吉つさんが、輕く足を擧げて飛ぶやうに驅ける、兩側の詰め切つた箱の如な家並や、電柱植木などが、パノラマを見る如に後へ／＼とずんずん巻き返すやうだ。

照代は又若旦那の事を考へ續けた、昨夜も昨夜とて、春本に呼ばれた時、「お前は泥水稼業ぢやあ無いか——そんな甘口なんか當になるものぢやあない——どんな誓でも立てる——嘘つけ——それみろ矢張俺をだましてゐるのぢやあないか」と、つけ／＼言つた言葉を一語／＼思ひ返して口惜しいやら、ぢれつたいやら、照代の胸に若々しい愚痴が込みあげて來る。

それから昨夜遲く歸つてから、そつと鏡臺から剃刀を出して、その紙の如に薄く碧く光つた刃を自分の左の小指へ當てゝすんでの事に切斷してしまはうとした事などが痛切に感じて來る。

なんの小指一本位——若旦那に當てつけても斷らなければ……と、心を鬼にしても、自分で自分の骨肉を剪り落す事はどうしても出來なかつた、「えゝ——腑甲斐無い」と罵つてみたが矢張駄目だつた。

てゝまで考慮が及んで不圖、小指に印した淺い刃の疵を怨めしさうに睨た、今更不安の念と、恐怖ろしさ

と、意氣地無さとが交々身に泌みて來る。
　俥は勢込んで繁華な街を横ぎつて、とある割合に狹い町に入つて、白木門の前で止つた。
「もう來たの――」と照代は今迄考へ續けて來たので非常に速く着いた如に思はれてつひ聲を立てた。
　照代は俥から降りて此の〇〇醫院の眞四角な御影の石疊を渡つた、硝子のドアを靜に押すと、直ぐとつゝきが受附である、軈て看護婦に案内されて、兩側は白堊の壁の、よく磨ぎきつて光澤のある廊下の床板をおろ〳〵して歩いた、そして先生と差し向ひになつた時には流石に暫くは口籠つて言ひ得なんだ。
「先生――あの妾ね、ちと都合があつて小指を剪りたいんですけれど、妾には恐ろしくて剪れないんですの、――ですから先生に剪つて頂かうと思つて來たんですが……」と不調な口振で一通り語つた、そして拜まん許りに先生に請願んだ。
　先生は默つて、始終眞面目に凝つと聽いてゐた、聞き終つて眼を瞑つた、これが先生の癖なのだ、須臾は兩人の間に沈默が續いた、何となく石炭酸臭い風が鼻をうつ、手術用のピカ〳〵光つた機具は少なからず照代の心に不安を與へた。
　それから先生は順々と、徒に身に傷ける事の不可の理由を照代に得心のゆくまで説いた、照代はきかぬ氣で、幾度も口を狹んだが、遂に説き負されて了つた、照代がしほ〳〵と門を出た時には、日が弱々しい色を染めてゐた。
　照代は歸途を俥の上で、自尊心を削がれたやうな心地がして、何時になく悲哀を味つた。
　そして家に歸り着いた頃には、自分で自分が自覺されない程、身も精神も疲れきつてゐた。

○かすかな物音　　ほゝづき

　間抜けて大きいそしてどてやら陰氣臭い笑聲が聞えずなつた時お雪の姿は薄暗い縁の片隅に在つた。街道の泥道を稀に人の通る靜かな晩である。障子越しの薄い燈火を背負つた彼女の上半身がボンヤリ向ふの葦垣にキザ〳〵に寫つてその中にはすぐ鼻先に突立つた西洋櫻のぬれた幹と前の店の小僧が疊に兩肘ついて何か讀んでゐる動かない丸い背とがあつた。それ等をじつと見つめて居る彼女の瞳は折々細くウットリと又物悲しさうに沈んで行つてあちこち逃げ迷つて居る樣な自

分を追つた。そして「昨日迄い私とは全然違つてゐる」と自分と云つた時何かなしに怖ろしくなつた足を動かすと澱んだ熟れた實の香と强烈な青葉の匂とがむせる樣に搖めいて足駄の齒がカチ〳〵と履脫臺の切石に鳴つた。やつと體を落付けると抑へ付けた苛々しい心が底の方で「いゝよ、これから私だつて氣難しい顏して家人を困してやるから」と叫んだ。そしてこんなにして居る所を誰かに見付け出されたい氣がした。が、座敷の方では相變らず樂しさうな妹弟等の聲が賑かに聞えるその中に突然大きな快活な男の笑聲が起ると今迄抑へ付けてた心の底の或る物が再ガバと跳返された樣に胸に上つて來た。

何となく待たれて夕暮末の妹を負つてボンヤリ家前に立て居た。「お雪さん」と突然耳元に雷が落ちた樣に大な聲がしてビックリ振向くとニコ〳〵笑つたの校印の帽の男の顏がすぐもう後に寄つて居た。「さうだつけ、私は耳が遠いのだつた」から思ひ出すと急に氣後がする「ひどく濟すねえ、〇〇伯母さんかと思つた」と足早に入つてしまう、と內では家人總出の歡迎の聲、ムラ〳〵と口惜しくなつて暫してからソツト入つて家人に見付からぬ樣に部屋――二階に――入ると先刻も出して見た男の手紙をもみ丸めて懷に入れるなり下りて來て何喰はぬ顏で男を饗す手傳ひなぞした。「Sさんの東京のお土產話を聞くのも三年目ねえ」なんて例の呑氣な調子で。

今其の悲憤が二倍にも三倍にもなつて潮の樣に寄せて來た、「何だつてあんな手紙なぞ書いて呉れたのだらう――氣まぐれだね、そんな玩弄物に私がなつてゐるかしらん」と言つても自分で自分が物足なかつた。只表面に並べられた文字を讀んだゞけ、そんな手紙はよくは意味もわからないし興味も湧かないから其儘茶化し半分に投げて置いた其當座の態度に反つて思ひさま見かへしてやりたかつた。「あの〇〇野でね蟋蟀捕つてやつた事覺えてゐるの」――一番最初の手紙の一節――と思はず誦んだ時古い美しい懷しい繪畫がパラリ目前に落ちて來た。

「十年經つか經たぬ中にどうしてからも性質が違つたもんだらう、一體私はいつから聞えない樣になつたかしら。知らないで居る間にズン〳〵人と別な世界に移されてゐたんだね」。「お雪何だつてこんな所に居るんだい、母さんはもう寢むからね」いつの間にか母親は後に立つてゐた。



自然（散文）　編輯局選

○日本アルプスの遠望

信濃　百瀬美水

寒い朝顔を洗ひに家の前の小川へ行くと、氷の下を水晶のやうな水が流れてゐる。早速手が出ない。はつと顔を上げる。と、むかうの方に日本アルプスの連山が見える。まだ夜は明けたばかりで、容易に日は出ないのが、はや峰には日光がさして、ぼんやりと、夢のやうに赤く見えてゐる。

小村を西に出抜けると、廣漠なる野である。此處へきてみると、目をさへぎるものは何もない。で、四方の山々が自由に眺められるのである。西北を見ると、雪におほはれた連山が、巍々と聳えてゐる、極めて靜かな朝で、風などは少しもないやうでも、日本アルプスの方へ向くと、ヒヤ〳〵としのぶやうな風が頬を刺す山麓は僅に藍色をなしてゐる。

西南に迫つてゐる木曾の谷から吹き下ろす山風は、雪か、霰を飛ばして恐ろしくあれる。が、日本アルプスからくる風は極めて靜で、しかも氷のやうに冷たい風である。

山が高い故か、日本アルプスの方面は、曇りがちである。少しでも曇つた日には、中腹から上は雲にかくれてゐる。晴れた日のひるすぎになると、あゐ色に霞んで見える。日光のかげんでか、遠い故か、暗いやうに思はれるのである。冬でさへかうであるから春になると、ひどく霞んでしまつて、空か、山か、わからない、ひとみをてらしてよくみつめると、霞の奥に夢のやうにかすかに連峰が透いて見えるのである。

連山中にひときは高く蝶ケ岳といふ山が聳えてゐる蝶々の羽を擴げたかのやうな形。土地の人々は「たねまきいんきよ」といつゐる。春晩くまで山は白いが、少しでも黒い山をあらはすと、その時は、豆を蒔く時節である（地賞）

馬鹿に大きな題をつけて、内容の貧弱なることを笑ふ勿れ、今の女の中で、これだけでも自然を觀るのに感興を持つてゐるのは末たのもしい方だ、此作者は自然を觀るのに特徴を持つてある、知識と感情を能く訓練してゆくと好い（評）

○朝と晝と

越後　あはゆき

若草の萠え出る頃になつたら、これでも芽をふくだらうかとうたがはれる、枯木の樣な柿の木や、網の目のやうに小枝の重なり合つた大欅や、風の吹く日は海の遠鳴りを思はせる松の木や、其他木といふ木、枝といふ枝に、ふはりと雪の積つたまゝ夜が明けることが此の頃度々あります。

私たちの起きるころは未だ内もうす暗い。

夏　眠足らずに只つかれて起きた朝も、戸を繰ると共に吹きくる青葉の風は私の身も心をもよみがへらせてくれましたが、冬の　雪のふり積んだ朝は死んだやうの靜けさ、私ををびへさせた惡夢は行場のない樣にそこらの暗がりに未だうづくまつてゐる樣におもはれる。空は薄墨色をして、雲の子一つ動かず只靜かです。

怒りに、悲しみに、憂へに、あらゆる情の極點に達しながら、なほだまつてゐる人の眼の如く、涙をたゝえてるやうにも、冷たい風が音もなく吹いてるやうにも又底におそろしいものが鋭く光つてるやうにも思はれます、そして白い枝と枝との間から僅かにみえてる空は殊更に黒く、そこにきら〳〵とかゞやく星でも光つてゐたらといつでもおもひます。

じつと立つてゐるとそれでもあたりが一刻々々一息一息明るくなつてくる、そして其の明るみは眞白いゆきの中から湧き出る樣におもはれます。

朝餉をすますころは、日は前の大欅をはなれて、赤々と輝やいて居ります、其のまはりはたゞれたやうのくれなゐに、遠のくに從つて薄紅にもゝ色にぼかした樣にうすらひで、東半天は美しういろどられて居る。

あゝ其の時、其の美しい色彩の光りをまともに浴び、コバルト色の空を背景にして夢の樣に立てる西方の白い林のうつくしさ、……まあとおもつたきり啞者の樣にだまつて見入つてるのが常でございます。

けれど其の繪のやうなうつくしさ靜けさは一時間とつゞきません、やがて白い花の散つてゆく樣に、夢のくづれて消えてゆく樣にはかなくも散りはじめます。

お晝ごろは日の光りと雪と相映じ只あかるく只まぶしく、外では目をあいてることも出來ないほどです、手をかざしてふり仰ぐと、今朝雪をいたゞいてた梢にはすきとほる玉のしづくが列をなして光つて居るのをみます、どこからともなくかげろふが立つ。

久しぶりで表へ出て小さな橋を渡つた時雪の下でチロチロと水の流れる音をきゝました、あゝ春が來たと私はなんとも云へぬ心になつてなほも耳をすませました。（人賞）

あなたは正直に書く代り、機轉がない、才走る方でなく、才を重んずる方だから好い傾向は好い傾向だが、もう少し愛嬌があつたら何んなに人を引きつけるだらうと惜まれるのです、併し此作は今迄の多くの作よりも優れてゐます、絶えずお作りなさるのが何より宜いことです（評）



春の旅　本所　若穗園なか子

○藥師御堂

諏訪白き花

勾配の急な石段に差掛つた、瞬間、私の胸は異樣に騷いだ。他人が見たら、屹度、あの若い女が……と、冷笑するだらうと思ふと、最う私は悲しくなつて出來るだけ急いで、相應に高い其の石段を、誰も見ない內に、とあせつて、登り盡した。

全身の血潮が逆流するのではないかと思ふ程、心臟の皷動が、無茶苦茶に騷しい。打慄ふ兩手で熟と抑へて、白い息を忙しなく吐くのが、堪

なく苦しい。よろめきながら漸うのことで、其處の倉庫の敷石に腰をを卸した。こんなに弱くなつたのかと思ふと、つひ涙が零れる。

陰鬱たる境内の冷い空氣が、ゆるやかに動搖すると二抱三抱もあるらしい四圍の老杉が、微妙な私語をする‥‥自然に凄寂の感じが湧くと共に、言ひ知れぬ崇高の氣が全身に逼るのを覺える。あの幾百本もの大幹には、「呪ひ」の釘が打たれてある‥‥‥‥‥‥‥‥‥今更のやうに噂が思ひ出されて、恐しく身内が慄ふと――刹那、「私も若しか呪れて居はすまいか」新に、こんな氣味惡い疑問が、淡く私の胸を包んだ。私は眞近かの、根方の洞穴になつた、大幹を、幾度も見下したがそれらしい跡も見當らなかつた。もつと、そこらのも探して見たかつたが、誰かゞ見て居るやうで、良心が咎めて、もうそんなことは出來なかつた。私はかうまで迷心深い――罪深い女に成つたのだ誰か私を呪うだらう‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥呪う者は決して無い筈だ。

蒼白い私の頬には、病者の太息のやうに、活氣のない冬の日光が、時々思ひ餘つたといふ風に、梢の間を洩れて射し込む。濕つぽい地上にも暗い影が映る。

暫くすると、私は蝕むだ御堂の前に額づいて居た。噫、私は矢張これ程の苦悶を忍んでも――それでも生きて居たいのだ。茫然として見上る堂の格子戸には、女の髪束がいくつも〳〵並んで風に吹かれて居る。あはれ何れも泣ける女の魂の犧牲だ。私のやうに丈なす黒髪のもある‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。

さうだ、私もこの黒髪を捧げようか?!。

けれど、けれど、私はそれまでにしても、生きて苦しみたいだらうか?!　噫‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。

私は、はふり落つる涙を拭ふ勇氣がなかつた。

私の境遇は遂に私を、斯うした體も心も共に弱い子にして了つた。弱い子でありながら、私は他人から弱者とみられたくない――信心は弱者の杖のやうに思はれてならない。

私は遁るやうにして、石段をかけ下りた。（入賞）

興奮性を持つたものはじつと靜かに自然を見てあることなどは出來ない。石段を上るには血を湧かせ、下るにも胸を轟かすのは眞實であらう（評）

○明るい空

山の女

晝間は人が居るか居ないかわからないやうな淋しい家々で焚く火が、あぶなくはないかと思ふほど燃え上

るのも見える溪間を、いつか煙と見さかひの無いうす青い夕靄が靜かに漂ひはじめた。

ゴーンと一つだしぬけに撞かれた時、自分は丁度そのお寺の前を通りかゝつた。束髮の似合ふ年增の梵妻が、撞木の紐を輕く持つたまゝ、前の餘韻の遠く消え去るのを待つてゐる。寺に不相應な大きな鐘が心持ち搖れてゐるのを見ながら、枯芝の土手に挾まつた幅の狹い石段の前を通り過ぎた時、二つ目を又ゴーンと浴びせられた。少しよろ〳〵したと思つたがそれは心持ちだけでやつぱりあたりまへに歩いてゐた。

だん〳〵間を短く撞きつゞける。ゴーンと鳴るかと思ふとカンカン冴えた鉦の音が響く。あゝ川向ふのあの寺でもたゝきはじめたのかと思ふと少し賑やかなやうな氣もしたがすぐまた夕暮の淋しさに身をしめられて、冷たい山の空氣を吸ひながら自分の村へ引かれて行く心はいよ〳〵忙しい。あまり暮れはてぬうちに歸りたい。早くあの赤い火の透いてゐる我家の障子が見たい。

まだ空は明るいけれど七日頃の月が一分毎に銀の薄を重ねて行く。



朝晴　宇都宮　松井緑子

もう何の音も聞えぬ。
落葉しつくした雜木の枝が蔭のやうに細くきれいに入り交つた間から明るい空がどこまでもつゞいてゐる。

空は明るいが何處となく暗い影がある（評）

○旅の夜

紀伊　夕　涙

そは〳〵しい心持で夕食をすますと、支拂してすぐ宿屋を出た。地上には宵月あはく、外氣に、ぶる〳〵全身が顫へる。

街はゞはせまいが、建て並んだ店舗の軒燈は、はなやかにかゞやいて左右に往通ふ人々も繁くて寒夜ながら宵町は、にぎやかだ。

自分は此町を横へ折れて反對に煤ぶつた、赤ぐろい障子の並ぶ横町を濱邊へたどつて行く。

此邊には人影もない。後から追ふて吹く風の寒さ小さいショールより防寒具を持たぬ身には痛いほどこたへる。今から出かけた處が汽船の來る迄はまだ〳〵時間が有るのだから同じ待つなら宿で待合せばよいのだが旅なれぬ自分には宿屋は、いゝ感じをあたへない、何だか冷淡な、ものにとりかこまれて居る樣でいひ樣のない不快を覺える。もう家を出てから五日、自分にとつて初めての旅、初めて變つた夜具で夜を過して來た旅のさびしさといふより責任をおびた心は、心配の仕通しだつた。

恥かしいが宿屋には一度の經驗もない自分は寒い夕暮を三四軒の宿屋を覗き乍らうろついた心細さといつたらそれこそ泣き度い樣だつた。

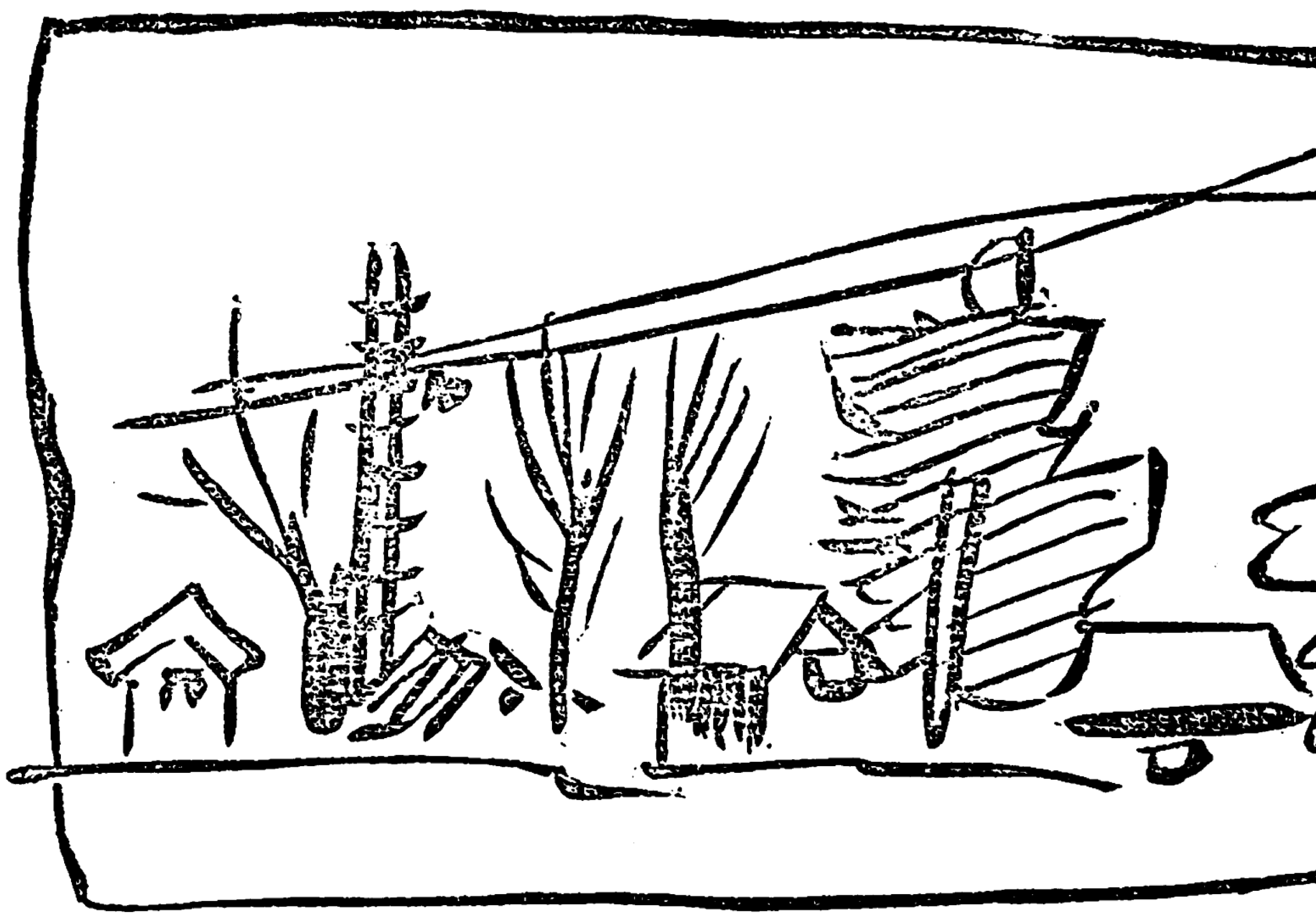
あゝ放浪の旅に去るといふ人は何んな氣持なのか自分は意氣地なくも五六日の旅にかつて味つた事の無い淋しさと苦しさが身に沁入つた。

我の心を休めるだけの、あたゝかさを得る處は兩親と我家の外にないのを知る、我家は我身を置くには安らかな城である。

幾曲りかの途はつきて濱へ出た、鋭どい月は地上の萬物を鮮やかに照して居る。小さい港内と濱へ並べた多數の漁舟は夜目にもむさくるしさを覺えさす。灯の明るい扱店のせまい入口に立ふさがつた、人々の後をするりと、ぬけて待合室へ通つたが、まだ時間が早き故か待合ふ人は一人もない。待合室とは名ばかり、荷物を積上げた庭つゞきに、小さい座敷があるばかりで室らしいかこひもなければ燈火の用意もない、僅か

に事務室の餘光を受けるばかり、座敷の眞中に置かれた途方もない大きな火ばちには、ホタル火の樣な火がチヨンビりのぞいて居る、さりとは此寒夜にあまりな殺風景、それでも外よりはあたゝかい。

　腰をおろすと初めて心が落ついた。事務室は今忙しい眞最中、入口に立つて居る人々は皆魚の商人らしい、それ〴〵積出す荷物の木札を書く人もあれば、送り狀をしたゝめるもあり、掛合をやつてゐるのもある、皆な自分の爲す事に夢中に成つてゐる、色の黑い男が「オイ利一郎さ、今夜は荷物がこんでも積んでくらつせいよ、此間の樣に殘されたりなんどしては商にも何にもなりやせんから」プン、プン



村落　群馬縣　新井つま子

小言をいひ乍ら賴んでゐる利一郎と呼れた若い事務員はフツ〳〵笑ひ乍ら受けて居る、是等の人は入りかはり立かはりあと〳〵とやつて來る、事務をとつて居るのは外に十五六の小僧と二人きりで中々忙しさうだがそれもしばし時が經るにつれて誰も來なく成つた急にヒツソリとなると今奥の柱時計のきざみが耳につく見上ると八時五分前、まだ船の來る迄は二時間餘あるふと思ひ出して、かべに張つてある船賃表を見る。「此港から古座港まで幾時間かゝりますか」と尋ねると約三時間半ですといふ前後の時間を思ひ合せてほゞ着の時間をはかり乍ら手荷

物をそろへて用意して置く。事務室では計算が始まつた「今夜も荷物が多いなあ又殘すやつが出て來るが仕方がない」とひとり言してゐる、無邪氣な顏して小僧は足ぶみ仕乍ら口笛吹き出した。

自分等と同じ船に乘る二三の客が時間をきゝに來たがおそいのを惱かめると又歸つて行つた、待合室には自分一人、最後に女客の二人連れがきた、先刻から來る人もく男ばかりなので少々心細く思ふやさき、何となく嬉しく思ふたが、二人は待合室へは來ずにかべにもたれたまゝ低聲に話合つてゐる。

「あたいもう歸り度い」しづんだ聲で「あんた歸つたら何々さんによろしういふて、おくんなよ」相手はうなづいて居る、其言語やそぶりで一見して醜業婦なることがしれる、話の模樣では乘るのが一人で、一人は見送りらしい、二人とも二十二三歳の年格好、いてふ返しで非翠色の玉かんざしもふさはしい、何もしめやかに話合つてゐる。

自分は奇を好む眼で彼等を見まもりつゝ耳かたむけた。

女には一寸珍しい材料なので、面白く讀まれた文章の書きかたも癖がなくてよい(評)

雨の夜

城南の里　鈴枝

照り續きし後の雨の心地好さ——。

晴天が幾日續いたつていつも何とも思ひやしないんだけれど、今度許りは什麽に此の雨が戀しかつたんだか。母樣の御風邪は少とも快くないし私も咽喉が痛くてこれ斯麽に聲が錆びてるんだもの始め廂のトタンにザザと音のした時は、急に心が明るくしめつけられてた咽喉がスツと開いた樣な氣がして、思はず深くく呼吸した。そして母樣と——本當に好いお濕りですねえ——と云ひはしなかつたけれど、顏を見合せたゞけでもうそれが通じて微笑むだ。

チリくくと金環を投げる樣な音がして、軒の玉水が筧を傳はつて行く、何て云ふ懷しい音なんでせう。

嬉しさに雨戶を繰ると、青白い瓦斯の光が帶の樣に流れ出て、濡色美しい飛石の上に南天の淡い影を落す、南天は活々とふるへて、靜にふり注ぐ銀線と何か囁き合つてるかの樣、水晶とまがふ白露は、其の眞紅な實から葉末から、煌き乍らすべつては、乾びた土へ沁み込むでゆく。あの斯麽晩からやがて萠え出る若草は芽含み初めるんぢやないかしら?。

何處からか微妙な音が雨の音としつくり合つて、此の魂を遠い夢の國へでも引き入れる樣に漂つて來る。

地の底からでも湧いた樣なあの音? オルガンかしら?? 私の胸の扉は柔かく刺戟されて、幼かりし日母の温い手にそつと抱かれては、繪物語など聞いた時の有樣や、それからそれと切りもなく思出の絲が續く、ふと自分も何か彈いて見たいと云ふ氣が起つたけれど、直後から矢張斯、ちつと聞いてる方が好ささうだと思つたから止した。今夜はたゞ何となく昔なつかしい、人戀しい夜だ。——雨は靜にふり續く——。

好い感情を持つてる女だ(評)

○梅咲く日

前橋　みづ枝

梅の花咲く二月の空、コバルトの雲が徐く〳〵南へ流れるのもなつかしい。

やがてはわらびの穂先が天をついて、可愛ゆい雲雀の歌も、あの雲の裡から聞えやう。

靜に〳〵耳をすまして居ると、歩一歩、我世に近く春の女神が優しい其の裳さばきも、ひゞく樣に思はれる……

蕗の薹の青い頭が一日見ぬまにむつくり起きて、白く乾らびた土も黒いうるほひを帶びて來た。すゞなすゞしろ霜に伏す、……おもちやの樣な裏の畑にも、かうして春は、幾度めぐつてくることだろう。おみおつけのみを取りに、小笊抱へてそこに立つた儘、しばらく摘む事は忘れて居ました。

日に照らされた片頬ばかり、カツとする程暖くつて、片頬はガラスの樣に冷い、少し疲れたからだを縁側に上て、五六枚干してあるうちの、一番よくふくらんだ座蒲團の上にのれば、あゝ眼が自然に閉ぢられる、

「どうかしたの？そんな蒲團の上へすましこんで……」つうちやんが眼を大きくして、さくら色の顔を出す。

「いゝえ……これを二人で洗ひませう」。

「井戸端がいゝの、川がいゝの？」「川の水は冷いでせう。井戸端へ行きませう」スル〳〵と落すはねつるべ、ターン……と底の底まで傳はる樣な、重苦しい音は、きくたびに何となく、悲しみを感じます。

小桶に溢れる透明の水に、青いお菜がくつきりうつつて、ザブ〳〵やる二人の手は紅く丸く美しい。

あゝ何故か、今日から初まると云ふ、榛名湖上のスケートが思はれてなりません。

おちつき拂つてる態度が、物足りぬといへば物足りぬが、文章に申分はない(評)

○宮樣の池

京都　山茶花

伏見に入つて御香の宮の大鳥居を潜ると、淋しい町の空地に所々大根を高く塀の樣に乾して有るのを見る。廣々と荒れた原の中に、扇を上に展げた伏見戰爭の東軍戰死者の碑が建つて居る。自分は其の町を過つて淀川に出た。觀月橋から下流を見ると、青々とした急流に、水底・砂を上げる船が幾つか、漂うて居る。中書島には水車も見える。伏見の町端れの悲しげに淋しい家は、猶暫時道に添ふて續いて居る。それ等はひつそりと潜りを締めて物の音もない。たま〳〵外に居る子供等は、茶碗に土を盛つて遊び、老人は日當りで大根を切つて居る。四方土で塗り廻した家が未練らしく絶えては續く。やう〳〵これ等の人家を離れると、宮樣の池は際涯も無く廣く目の前に現れた。枯れた葦の多い汀には、稻も作るであらう刈跡も見え家も有る。水の中の蓮は葉も莖も枯れ、吹く風の吹くがまゝに任せて、夏の日の面影はしのび難い。魚捕る爲の刺し木は其所此所水の中に簾を引き廻されて有る。水草であらう、冬の柔い日光を受けて、遠く花蘇芳の色が棚引いて見える。其の水平上に、一葉の船は舳先を上げて竿さゝれて居る。池を中斷する街道の、行ても〳〵はてしの無いのを振り返つて後の山より見廻すと、桃山稻荷山東山比叡山は、或は明るく或は暗く重り合つて、嶮しく聳えた宇治の山脈に續き、其の脈は延いて廻つて、愛宕山と成り男山と成り、天王山と成り、池を廻つて高く低く圓く鋭く重り綴いて居る。山の麓の小高い所には、伏見小幡宇治の町々が、さながら筆の先に畫き出された一幅の繪の樣に見える。此の大ぞやかな自然の前に立つと、何となく力に壓されて、我も無く世も無く、日頃一室の中に閉ぢ籠つて思ひ詰めた生涯の願も打ち消されんとし、我知らず心はそれに戰ふのを感じ、我が所信の弱いのを知り、我が力の乏しいのを覺え、泣くに泣かれず笑ふに笑ひ得ぬ思は、重ね〳〵腦に滋えるのを悟つた。行ても〳〵果しの無い道に立ち傘を杖にし、さ

て前後に池を控えて、風は空に鳴る、冬枯れの木の下にうら悲しげに立つ一群の家を望んだ。

烈しくなく、されぱと云つて生ぬるくもなく、女性相當の力が籠めてある（評）

○停車場まで

米澤　あはゆき

湘南の地に往く妹を停車場まで、送るために。

途中や乘替をおもんぱかつて、品川まで送つてゆく父は少し支度が遲れたのでしぶかにいつてゐようと、私と妹と從妹と小さい弟に妹で、先に家を出だした。

丁度七時半であつた。何處までも白い雪の上に微暗く闇が、かゝつて寒氣の凝つたかと思ふ紺靑の大空深く星はちらばつてゐた。

ともすると、ころびさうに、すべる固く氷つた白い雪道を、スリツパのやうな淺い護靴はズーツ〳〵と上を擦つてゆくのであつた。

私は箱橇に手荷物を載せて押していつた。肩懸をきてお高祖頭巾を被つてゐるけれど、包まれぬ目、鼻がスワ〳〵寒くてならなかつた。

妹は從妹と並んで、何か話しながら先にたつていつた。私は後から追ひつく〳〵と云つた父のそれらしい影は見えないかと、幾度かふり返り振返りしていつた。

停車場までは一里もあるので、左に曲り右に折れ通りゆく街々の灯のなつかしさ、電燈のうす靑き光りを吸へる雪の色は冷いものとも思はれぬ。とんからとんからと慣れた機拍子のひゞく明るい窓に、梭とる手振りのおもしろく映つてゐる、ところもあつた。

電燈がすつと點れまで點いた店ばかりな街は道幅廣く雪は踏まれて橇の跡がつる〳〵光つてゐた。この街を按摩の笛の音がさびしさうに流れてゐた。

妹ははじめて離れる故鄕の終りの夜の街に、胸が迫らなかつたらうかこの夜、雪の白い國をたつて、明日は暖い逗子の海を見、憧れてゐた浪の音を聞くを得ように、私は何時この山國を出られるといふこともない。

別れてしまへばいつ再逢はれるといふこともない。恐らく少女としての妹を見るのは、今日が最期であらう。

私は妹を旅へ送る小さき歡びと、誇りのみちてゐた胸に新らしく別離の淡き哀しみをおぼえつゝ妹のうしろ姿をしみ〴〵と見詰めていつた。

停車場前の〇〇旅館の屋根を斜めに不圖見上げた大空に大きい星が一つ、靑い光りの瞬きはげしく、落ちてきさうにもきらめいてゐた。下りが着がう〳〵と汽車の音や。汽笛の音がすぐ其處に聞えてきた。いたのであつた。

いつもの生氣がない（評）

○椎茸作り

山口縣　椰良美那子

麗らかな彌生の空を生暖かい南風、――潤みを以つた白い雲を氣遣ひ乍ら叔父はほゞらかついで出て行つた、甲掛脚絆かい〴〵しい、從姉の後をついて、自分も山へ行く事にした。

山と云つても三町ばかりしかない爪先上りを、色々話し乍ら、時々出てる石ころを山育ちのお貞さんは、ヒョイト器容な足どりで飛び越えて行く、それが何となく面白かつた。雜木林のジネ〳〵した道を通りぬけると、アッと不思議いた、白いきらめき、其處には小さい沼があつた、椎茸作る場所は、つひ此の向ひ側たと指さす方に叔父さんの白い頰かむりがちらりと見えた。

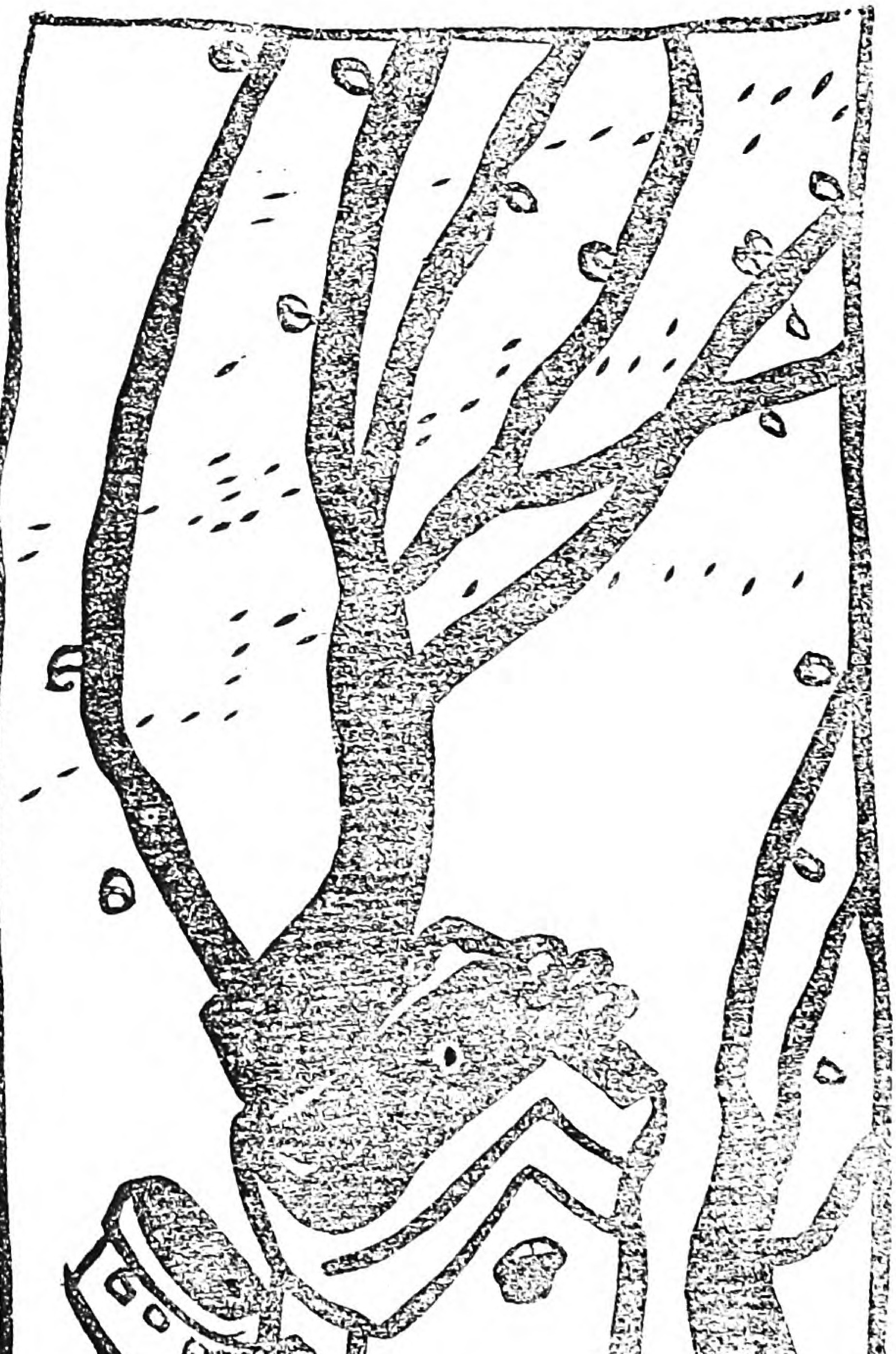
霞のまつはる裾をからげて、沼の堤を廻はればは何百本となく、四尺位に伐つた雜木がずらりと丁寧に立て並らべられ、それにはこちや〳〵と大きいのや小さいのやが、木の周圍稍朽ちた皮の上に生えて居る。

此處は西北に沼をひかへた一寸廣い平地であるが、東から南へかけて

は。百尺の断崖に枝差し延ばした松柿なので、日光は白雲に一寸しか當らぬうそ寒さ、ジツと耳を澄せば地の底の底のかすかな〱水の囁、泣くが如く叫ぶが如く、あたりの空氣はしつとりと重々しく、土の香落葉の臭ひ一種の山の臭ひが甚く鼻を突く。

椎茸の大きくつてコマの様なのや小さくむつちりと乳房の様なの皆それぐ頭に黄な粉見たいなものを被つて抱き合ひ縮り合つて居る、——親しの茸よ——、叔父さんはもうはゝらに一ぱい取つて居なさる、お貞さんも自分に持て來た籠にせつせと大きいの計り取り始めた美イさん手傳つてよ、と催がされてあれかこれかと手まどひながら、大きいのが五六本も重なり合つたのをそつと恐る〱引張つて見た、とがつくりはなれて其の下から見にくい雑木が顯はれる。

折角受けた生の短期を思へば痛ましい、十本二十本と自分が大分上手になつた頃はお貞さんの籠も一ぱいになりかけてる。ホ、ホケキヨーと突然雑鶯のおぼつかなげにあらと見廻はしたけれどそれらしい影も見ない、苔滑らかなる沼は靜寂として波さわがす人もなく木の間がくれの青い雲—薄い既僅かを劃れる小天地に頌ふ小鳥。音律よ瑠玉ならば温めて袖に秘めたいと、をとめの胸は熱かつた、日足は大分廻つたらしい、木の葉木の枝をすかしてやはらかい光線は、地の若草にかすかな〱束髮と銀杏返しの影をゑがく。



門　小石川　安西よし子

「又午後から來るとしような」どうだ美イさんやなかく大したもんだらう」と、叔父さんは今を盛りと出ならぶ茸を嬉しさうに見返りながら、沼の堤をほゝら荷いで山を出て行かれる、お貞さんも其の後から重さうに顋すぼめて家に急ぐ。

此の椎茸が干乾して仲買人の手に入る時、新らしい帯や着物を抱いてお貞さんは其の勞を忘れるのである。

一寸珍しい（評）

○南國の冬晴

長崎　愛花

冬の日には稀らしい好天氣、あまり暖いので、裁縫の手を止めて、東窓の障子を明けたら、きらく光る朝の太陽が、ぱつと射し込んで、まぶしい程明るい室を照す、側に居た妹が「姉さんまぱゆい」と叫ぶ。今迄西向の家に住んで、入日ばかりを拜んだ身には、朝の太陽は、なつかしいものであつた。

大空は美しき薄紫に晴れて、所々に白いちぎれ雲がたゞよふ。向ふに見ゆる小高い山々は、太陽の光ですつきりと山の姿が美しい。窓から左手をのぞけば、商品陳列所の宏壯なる建築が靜かに立ちならんで――其後には、公園の森の木立が悲しい冬枯の姿を現はして――格子戸のならんだ、狹くて短い町は、靜かで人道さへない、我からすねて常にさびしい暗い方ばかり、かどり行く私の性には、こんな所がふさはしいのだ。眞向ひの空家の前では、宿のおばさんが日光を脊に浴びながら、洗濯に餘念ない暖かさうだ。

今しがた髮を洗つた妹が、窓に近い物干臺に上つて、さらくと髮をとかし始めた、ぬれた髮に太陽が照して、妹の赤い髮がきらく光る。太陽はだいぶ高く上つたらしい。私は又靜かに針の手を運ばせてゐる。今日の暖かさは、丁度花咲く春の、やよいの頃のやうだ（むつきの或る日）

○みどりの色

熊本　しらはぎ

朽葉色淋しい野も、痛ましい落葉の林も、琥珀色の柔かい日光に抱かれて、微かに微かに復活の歡びにふるふてゐる日である。暖かい日光を浴びながら、雁回の麓の小野を一人歩いた。

打ち見やる釋迦院の連山は藍にかすんで、その麓より次第こ黒ずんで森の點々したのや、淡いみどりを帶びた田の間を縫ふて、帶の樣な濱戸川が白く輝いてゐる。その川を隔てゝ北方の、古城跡なる城の鼻の古雅なる松の枝ぶりも、かゞやかしい日光に榮えて今日はことに美くしい。

その邊りよりうちつゞく三里の曠野、幼かりし日後の山に登りては、あれは何所、彼方は何處と一つ一つに果てしもなく乳母を煩はせし白壁の幾つ、今も昔のまゝにチラくと懷かしうかゞやいてゐる。

あゝ晴やかに懷かしう何となう望ある如き二月の日よ、暗く寂しい我心にさへ足踏みゆたかに躍るものもあるやうに思はるゝ。

オゝ風が戰ぐ、和かい風が、……足もと近い畑の麥が音もなく私語いてゐる。春を待つ歡喜のそれか、やかで來む甘い菜の花の香に醉ひし胡蝶の舞ひ立たむ日、汝はその若々しい綠の色に野を彩なさんの願ひか、麥よ、みどり鮮かに生ひ立て……

我立てるほとりの、花の霞につゝまれん四旬の後、あゝものみなよ華やかなれ……熱い面を上ぐる時どこからか鍬鶯のサ、鳴きが聞えた。

▲散文の中に『自然』の方へ投稿する文章にはなるべく題の前へ『自然』の文字を書き入れて下さい、作者が其つもりになつて下さると、見る方でも判然と區別がついてよろしい、『人事』も其通り。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　山口縣　椰良美那子

風吹きて若草山のはてもなくをのゝく中に物思ひする

◎（地賞）　武藏　倭子

琅玕の扉ひらきてその夢の浮橋わたる少女とおもふ

○（人賞）　伊豆　柳町美惠

けものらが食みあましたる餌食よりなほあさましく捨てられしかな

佳作

○　大阪市　小泉貞子

山ざくら咲きみだれたる美しさ涙しらざるわが戀に似る

○　渡島　美津子

やるせなき胸を抱きて大神にぬかづきてあり初戀のとき

○　豐後　花守倭文子

わかき日のなげきは深し戀すれば仇の如くもそしらるる故

○　伯耆　新田文子

底蒼き海のあなたに眞紅の沒日見るごと君を見たりき

○　岡山縣　入江曉花

山燒くる日の夕がたに髪みだしさまよふわれと戀語る君

○　出雲　三吉よしみ

止めどなくこぼれ油のひろごりてゆくがやうなる心のいたで

○　牛込　渡邊しのぶ子

細雨の降る冬の日にこの心なぐさめんとて見つる文かな

○　下關市　青山美子

春の雪解けるはかなさいつの日か空に迷ひし魂きゆるごと

○　北海道　蒲原てる子

笑むこともはた泣くこともあらざればいとあまりなる安けさにうむ

○　京都市　中野ふみ子

たそがれや淋しき人を染めて行くうす鼠色濃ねずみ色
○　富山　村山咲子

わが戀は灯ともしごろの室の中かべにも似たり暗くさびしき
○　渡島　田山清子

戀といふくれなゐの玉手にとりて吾も愛づべき日となりにけり
○　仙臺市　赤間くに子

黄なる花赤き花など咲ける野に吾れは目を閉ぢ物を思ひぬ
○　伊豆　渡邊やす子

少女子はたゞ何となく涙しぬきらめく星の飛ぶを見る夜に
○　群馬縣　新井つま子

大いなる足なげいだし食事せる土方衆よ！悲しみ來る
○　三重縣　平田露子

くれなゐの天鵞絨はりしわが手函はたとざしぬ春の夕ぐれ
○　大阪　梅本龍子

若草の萠ゆる野に寢て秋落し髪生るなど思ふひと時
○　廣島市　古田よし子

琵琶法師平語をかたるごとくにもさびしくいみじ木蓮の花
○　下關市　日下水子

濁り江に貝をついばむむらがらすむらがりて啼く聲の淋しさ
○　靜岡縣　中村みどり

春暮るゝなべての物にいみじくも驚き易き我をつくりて
○　鹿兒島　松崎しま子

てよりもて犬などつくりありし日の懷しき日の縁の日のかげ
○　金澤市　森きよ子

ほろ／＼と泥人形のくづれゆくおもひでもうし戀の裏切り
○　岩手　清子

なつかしき君がみ名呼ぶ時ばかりひなげしの如美しき魂
○

部　女

雲のゐる深山がくれに世を避けむあまり戀はるゝ身の苦しさに
○　仙臺市　武村とも子

春雨のけぶれる町の赤き灯や丁字の匂ひかぐてゝちするる

○ 小原芳香

幸の海に漕ぎ出む大船ようとましき陸遠く離れよ

○ 大阪府 うきぐさ

白珠の皿に雪盛りそとおきし君が朝睡の枕上かな

○ 岡山市 桂木淑女

はら〳〵と落葉戸を打つ秋の頃うせ給ひたる母のこひしき

○ 京都市 みどり

そのむかしわが少女の日小さなる胸に染みたる海のにほひよ

○ 福山 君惠

その戀のやぶれたるをばのこりなくかたる少女のあさましきかな

○ 青森 長尾貴與子

胸もえて戀する人やわれすてし身やすてられし若き日のゆめ

○ 山形縣 伊藤智惠子

物たらぬ心地よ夢に讀む文字の消え行くに似る悲しきことよ

○ 奈良縣 花崎官子

夜にある小さき火をばながめつゝかへりし君に思ひふけりぬ

○ 山尾路 長澤美也子

砂さびてしろがねつくる一もとの山の上なる山櫻哉

○ 周防 重原美女子

枕邊の水藥瓶に淡き灯のうつれる夜半の一人ねの床

○ 熊本 しらはぎ

ものかげにのろ〳〵火たく甲斐なさを自ら恨め弱きふたりよ

○ 本島 とよみ子

しら梅や春に入る陽のあか〳〵と土ににじめば悲しかりけり

○ 岡山市 俊子

秋來れば軒端近く栗の實の落ち來る家に住まほしけれ

○ 近江 鈴蘭

漸う〳〵に地に春の色動き來ぬ若草まぢり何やらの咲く

○ 清水雨水

君まちて門邊にひとりたゝずめば心ぼそくも春の雨ふる

○ 熊本縣 西野銀杏

朱欒の皮をすてある木の下のうす暗がりに春の雨ふる

○ 山城 木の花

わがこひを解かぬ君まて紫の菫をつみぬあすをたのまん

○ 伊勢 水谷きし子

白き花一つ咲くなる野に立ちて蝶の行へを見守れるわれ

○ 伊勢 花翠子

少女子は只何となき嬉しさに心わななく日の重なりぬ

○ 豐後 吉田夕草子

夜は更けぬ外の面の月の淋しさに心吸はれて黒髮は泣く

○ 淡島 岸浦露華

年毎に悲しきことの數のそふ女となりぬあはれみたまへ

○ 美作 紫蘭

柔かき紅絹にさしたる銀色の針のなげきに春はすぎゆく

○ 京都 はつ枝

夜となれば舟も小島もそが宿に歸る心のなつかしきかな

○ 金澤市 廣澤愛子

はの白き丁字の花をながめつゝ湯氣の内なる湯にひたり居ぬ

○ 金澤 しほくみ

雨の夜は柳の下に傘さしてまつもよろしくまたるゝもまし

○ 新潟 よね子

京の春さまで心の殘らねど面影に見む軒の紅梅

○ 長野縣 みどり

いつの日かあつき御手にふれてより寂しさを知る子とはなりぬる

○ 横濱 綠子

わが腕に戀の焔を隠すゆゑ頬のうつくしく赤ばみぬらむ　宮城　沼倉多

○

指ふせてまひるの鐘かぞへけりやみてわがあるしとねの中に　相模　中村貞子

○

夜がくれに柑子花咲く野家に君と語れる故郷の夢　茨城　田村紫色女

○

暖かき南の島に歌ふなる君を思ひて泣くはたが子ぞ　前橋　みづ枝

○

夕暮は灰色の雲低うたれ我白き額にくちづけをする　静岡縣　上原しげる

○

おん情ずぎて執ねき物ねたみする君故に死なんとぞする　金澤市　舟木久子

○

春の夜や羽織をたゝむ姉君のみ手のはこびのつゝましき哉　深川　櫻本蝶子

○

星一つ大空高くきらめきて枯れし野原に木がらしの吹く　埼玉縣　大郷米子

○

戀しみを玻璃に入るれば人らわがかもしれしやうに白眼して見る　岩手　露草

○

春雨はさくらをぬらし土をぬらし冷たきわれに涙きて來ぬ　岡山市　富山千登勢

○

しろき頬を長き黒髪もてとわれ鄙ふりに見ゆ鄙に住むゆゑ　千葉　伴東さく子

○

美くしき胡蝶の舞へる春の野に天津少女の琴をきかまし　秋田　ゆきよ

○

わが心五色の絲に絡まれて悶えを知りし春のさびしさ　静岡市　筑紫饒子

○

人の家人の母など云ふことの親しみもなき名なりけらしな　越後　清子

○

花咲く日二年前の紫のリボンをかざしわりなくもゑむ　足利　飯塚米子

○

焼きてよとのたまひつれとやかんにはあまりにをしき文なりしかな

○

ほろくとこぼるゝ花に涙散るおくれて君を偲ふ夕暮　備前　幽吹

○

夢に逢ひ夢に語りし君を思ひ涙こぼしぬ春のあかつき　土佐　はぎ子

○

淡雪にみちでさくらの花ぞちる小町の如き少女の方に　日本橋　小林政子

○

青空を見つめて有れば君の顔ほのかにも見え涙流るゝ　本所　若穂園なか

○

寂しかる人妻となり母となりかくてはつべき若きいのちか　會津　桑原仙子

○

いと古き歌澁の齒のなまめきし江戸繪はりたる母の手箱よ　大阪　うその花

○

此胸の赤き焔の消ゆるすべ授くる人を神をもとむれ　信濃　長谷川未女子

○

戀と云ふ尊き玉の拔け去らばうつろとならむうつそみのわれ　大阪　杉山かし

○

窓にきて手飼の鳩のしのびなくわが病める日の春のさびしさ　神戸市　綠髮

○

妹の手箱の上のお白粉のあき罎にある南天の實よ　京都　うら野

○

君おきて離れ小島へ流されて行くならなくに涙こぼるゝ　東京　蔦の葉

○

外海は荒ると入江に船入るゝ船子の叫び哀しきかな　下關市　濃生子

○

夕ぐれの風がさそひし花びらの髮にかゝるがうれしきものか　郡山　あき子

○

少女子の身にしむ香あり夕月の影にのあさき紅梅の園　熊本市　河野錦子

○

黄昏を梅咲く庭にたゝずみて君が調ぶる六段を聞く　京都　松本つる子

○

富山　村山映子

はじめての雪を見し朝美しき夢のやうなる心地せしかな
○　岡山縣　赤木あさし
此思ひ十日あまりもつゞきなば我は死ぬべしいかになさまし
○　信濃　工藤きよ子
菜の花のつゞく彼方に白馬山ありて蝶とぶ春の野遠かな
○　佐渡　わくら葉子
夜となれば潮の香りのなつかしや浪の音とほくゆめさそひ來て
○　深川　矢澤菜子
まばたける夕の星のさゝやきはわがなつかしき歌とこそおもへ
○　大阪市　木野晴代
温室の中に匂へる花のごと柔き心につゝまれて生く
○　福岡市　市川久子
八重櫻花より花にしづくして朝うつくしき春雨の宿
○　金澤市　歌の宵女
うら悲し風なき夕べハラ〳〵と涙の如く窓に花散る
○　茨城縣　中島九二子
若菜摘む子に路問へば青柳しづに枝ふる門ををしへぬ
○　薩摩　工藤いずみ
漸〳〵に鏡に對ふこと減りぬ母となりにしやつればかりに
○　備中　小山見春子
さざなみも飛沫もたてず我戀をしづかにはこび君にしらせん
○　宮城縣　高橋輝美
寸程の柔き若草そとふめばいとほのかにも春は匂ひぬ
○　神田　石田美子
汲わくわりなき心萬葉の歌口誦む春の宵かな
○　信濃　千曲野露子
夜となれば姫とやなるむ白椿美男とおもふ木蓮の花
○　信濃　藤澤里子
戀もなき今を痛しと思ふ身に潮さびしく鳴りよる日かな
○　滋賀縣　つぎ子
過ぎし世の戀しきあまりおく月の冷たき石に頰をふれて見し
○　山口　花の字
梅ちる日われさびしさにたゝずめばみそらに黃なる夕雲のわく
○　宮城縣　武者伊楚子
菜の花の莖のほそきを妹が髮にむすぶとかたはらにこし
○　上毛　阿久津小胸
悲しみて外にいづれば落椿涙の中に道赤く見ゆ
○　和泉　光子
いたつきの辛さもしばし忘れけりわが教へ子の寄せし文見て
○　群馬　かすみ
梅かをる窓に語りしかの君は何處の里にますや春風
○　宮城縣　長谷川紫葉
わが若き心の奧にひそみゐる戀にかも似てすみれ花咲く
○　大阪　橋本みつ子
天王寺の古き大木にお百度とうつ子にほそき雨のふるかな
○　金澤市　松居露子
はるの野に若菜摘みつゝ歌ふ子の袖よりあけに霞引くかな
○　金澤市　絲子
霰降る夜はいと寒し春立たば梅のかをりもきかましものを
○　信濃　酒井治子
さら〳〵と絲をみだして風わたる柳のもとに水汲む少女
○　京都　大井順子
落日は白粉やけの鼻のひくき女の頰を黃にてらしつ
○　城南　小島鈴枝
春の夜や美しき子のうたゝねのゆめをさまして落つる揷櫛
○　南千住　白妙女
歌ひ女のあせたる衣の桃色とわがこの頃の戀と似る哉
○　德島縣　行雲
音もせで降る春雨を眺めては君を思ひぬ幻に見て
○　千葉縣　櫻井田鶴
うすやみのひとやにうめく心地して病めばものうしうぐひすなども
○　高知市　北村美佐夫

なほ病める若き女の首筋の白きにも似て梨の花散る
○　横濱市　磯野松子

灯ともして君と入りぬる温室の花のかをりもなまめかしけれ
○　北海道　今村りせ

すかしてもなほ泣きやまぬ幼兒と共に泣き居る我若さかな
○　福岡縣　長谷川梅子

數千の電線のまとにたつ如く心をどりて初戀をする
○　王子町　大浪露香

吹雪ずる花片を身に浴びながら靜かに君を夕忍びぬ
○　美作　橋本紫

春雨に紫の傘かたむけてふりかへり見る山櫻かな
○　京橋　詩美都蟲暉

墓木の固く凍りてとらはれし紅羽の蝶のよきむくろある
○　龍山　なゝし草

いつしかと待ちし心もあだなりき日毎にかはるものなり心
○　長岡市　佐久目雪子

雪風に焰の胸を打たせつゝ星のゆくへを君かとぞ見る
○　横須賀市　三輪ふさ子

夕さればのがれ來てまた泣くわれを見ても默せる海はつれなし
○　京都　壽賀子

ましろなる少女の心一點の紅に染まりぬ君と逢ひ見て
○　出雲　とよ子

たゞ二人思ふ心を美くしき玉とおもひてあかずしも見む
○　島根縣　多美子

文がらにつと火をつけぬとろ〳〵と燃え上りたるあとの悲しさ
○　秋田縣　千代子

求めんとすれば河原の小石さへ好しと思ふは戱あらぬかも
○　越中　森の花

うしろより肩を叩きし小男の瞳さびしや星のやうにて
○　富山縣　宮崎政子

唯一人この山奥に住める日に小鳥の歌に神のおもはる
○　徳島縣　蔦紅

女にはいとよしと見るほゝ笑みもあたはぬまでに心ずさみぬ
○　若狹　長谷川英

まじまじと戀しき人の横顏を見つめてあれば涙ぐまるゝ
○　清國　幽子

見るも夢さむるも夢と想ひつゝ忍びては泣く人妻ゆゑに
○　群馬縣　松風子

十の指折りて思ひぬ其のかみの戀なき心靜けき心
○　京都　森本俊子

川添の鐵管の口蒸氣する温泉町の雪の曙
○　岡山市　桃の村女

くろ髮の千筋を吹きし春風は山にひろごり山櫻散る
○　神戸市　足立春子

音もなく散る紅椿あはれにも病む子の吐きし血にも似るかな
○　えで子

いくつかの玉章やきて春風に髮をみだしてはかなむわれを
○　伊豆　柳町美惠

何の戀別れ果つればつね人のすなる笑顏もそむけ給ふや
○　本郷　安達美枝

來む日をば柱暦に繰りてみるあはれはかなき身となりしかな
○　秋田縣　小島健子

玉手箱あけて口惜しく思はずや老ゆるも早し戀をとぐれば
○　美作　小賀君惠

雪間より早やほころびし梅の花初日の照りて香の勝るかな
○　仙臺市　武山柰子

亡き君の植ゑし白梅庭にさき痩せたる月に冷えし香を吐く
○　錦鶴雪子

たそがれにポプラの陰に身をよせて物思ひやるわれの二十二
○　若狹　城子

紅入の友染しみぬこの少女師てふ名をもて老ひ行くらんか
○　仙臺市　姫野ゆり子

わが戀はかの久松の戀のごとあはれ見すなといのらく神に
○　京都　君子

ひたぶるに君をうらみし若き日の思ひ出を追ふ夜は淋しき
○　近江　弓張月

春の風紫にほふ雲間より汲くむ翁の腰簑にふく
○　佃　野の百合

朝なく＼山の井に來る尼君の今日よりめでん白梅の花
○　しづ

咲きかねし小さき胸の赤き花おんくちづけにひらき初めてき
○　山口縣　いさを

羨む目そしる目皆目あまたある中に微笑むわれは美くし
○　紀伊　宇多すが

やみの夜に花明りする木を見れば又新らしき悲みの湧く
○　秋田　愛子

山ね吹く嵐の音に針の指あはれゆるみぬ想ひある人
○　紀伊　夕浪

しゆのくしのさゝれてやさし少女子はゆめまろやかに人想ふらん
○　越路　曉香

ゆめならで君戀ふる事告げ得ざる此の淋しさを誰れにかたらん
○　羽後　三浦ふみえ

紫にあけゆく春の大海にわが身投げすて人魚とならむ
○　下總　多田はま

姉君がうす化粧せるえりもとに蝶たはむれてさくら花さく
○　越後　翡翠子

赤や黄やはた紫のちぎれ雲それにも似たるわが思ひかな
○　大阪市　野村たまき

相がさやふりそで二つ友禪の紅ぬらし春の雨ふる
○　越後　瀨里田靜江

夜毎夜毎梅咲く園に下り來て花の香に醉ふ小さき星よ
○　大阪　村田擴子

うす暗き窓よりみゆる笹の葉の殘れる雪のうすあかりかな

○　晨　千

あたゝかき吐息おほひに顏などのふるれば又も戀心わく
○　備前　小川大民子

色々の花咲き纔き蝶まひてのどかなる哉春の野のさま
○　仙臺市　野田幸美

黒き雲出でてかくしぬ春の月もの思ふわがむねのごとくに
○　愛知縣　瀧本逸子

コバルトの空に眞白う月出でぬ我見ぬ君の瞳の如く
○　岡山縣　赤木あさし

うつし世と離れて深き山に入り心ゆくまで泣かましものを
○　茨城　根本隆子

ともすれば死なんといのる子となりぬあらしの如くすさびたる我
○　三河　清瀨子

泣き泣きて泣き明せども我が願つひに叶はず今日も暮れゆく
○　美作　橋本紫

かけろふの中に群がる子供等の聲きく春のうれしきかなや
○　宇都宮　宇佐美園子

白牡丹おん足音に露垂りぬおゝむは君をまちよろこべど
○　兵庫　橫田喜惠

雪の道夢見心地に橋越えて母のみ墓にぬかづくわれは
○　沼津　山縣梅園

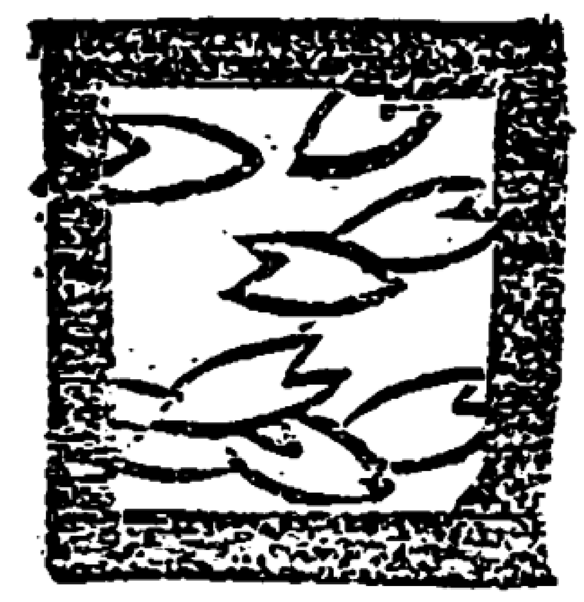
夏去れば秋來るものと知りながら今年はわれの心淋しき
○　茨城　根本隆子

あくどくも眼みはりてその人は君とわれとをたえずみまもる
○　奈良縣　みさを

春風の小草の園に立つ時はわかれし君も戀しかりけり
○　栃木縣　望月マートル子

このごろは眠さむる時とぬるまへにもの思ふこと慣ひとなりぬ
○　兵庫縣　大槻宮香

東風にふく吹く曉にゆく舟の白き帆てらす月靑白し



詩

河井酔茗選

○動物園にて

東京　れい子

動物園の枯草を、
しづかに踏めば悲しかり。
けもの丶檻のブリキ屋根に、
二月の午前の太陽は、ほの暖かく微
動しぬ。
うづくまれるラクダのせなは、
必要もなく大きやかに——
鐵柵の銹のにほひを
吸ひつくした紅き椿が
ボトリ〱と落ちかゝる、
——沙漠のはての日沒の眞紅なおも
ひでよ、——
——うづくまれる檻のラクダの悲し
み。——
枯草をまろび出たる、
青い草の實をなげあたふれば、
他邦の鳥は異樣な瞳つきして、
こともなく、つゐばみ去りぬ。
黑紫色の羽毛をふるはして、
さけびなく鋭き聲は、
しづかな午前の空氣を徹して、
枯柴を、踏み行く人の、
ほのじろき悲しみを…さ…そ…ふ。
（天賞）

動物園は詩材として優れてゐるだけに、平凡に歌はれたら殆んどものにならなかつたらうさすがは麗子の君此觀察ありてこそ動物園でも好かつたわけになる（評）

○一夜

富山　村山咲子

雪降る夜なり、
ひとり居る室のさびしさ、
われに悲しみのつきまつはるがゆゑ
に——。
硝子戸の顫ひにつれて
ひゞき來るハーモニカ
眞白なる庭の木の間の明るみを通り
越して、
悲しき歌曲はそこより聞ゆ。
知らず〱誘はれゆくわが心に、
忘れ得ぬ彼記憶の繪織物はくりひろ
げられ、
堪へがたき悲しみは再び生る——。
かなしき歌曲の懷かしさよ。
音もなく降り積む雪に、凡てのもの
包まれてゆく淋しき夜——。（地賞）

純なる感情を持つてゐる人だ、努力すれば追々好い詩が出來なければならぬ（評）

○春のまひる

京都　ほづ枝

とろけし春の日は
薄絹の蝶の羽衣と若草に沁み
果物の懐しい香に漂よふ。

小鳥は歌ひ疲れ、森も
川も默す
春の眞晝、
鐵道線路の輝きは、
言ひがたき
疲れと鋭どさ・・・・。

静な、静な
薄紫の空一片の雲は白
銀色にフワリ〳〵と少女子の幽な呼吸して何處となしに流れ行く。(入賞)

大阪 小さき泉



町娘 山口縣 宮原よし子

平凡は平凡だが暖い心持のある作だ(評)

○落日

薄れ行く寂しき影よ・・・・
あゝ、海の彼方の、紅き花咲く國に
逝かむとして
野に、山に、
丘に、
草も木も俯首
れて・・・・
今日の離別の
悲しさに、
ましろい花は
すゝりなく。
紅に――黄に
――樺いろに
――
華やかに彩ら
れたる、夕陽
は美くし・・・・
けれど・・・・
赫々と沈みゆく落日、
紅きが中の淡き寂しみ――、
そをいつしかに、涙して見る處女と

なりし
我瞳には、復の日を約して別れ行く
君の、悲しくも儚き後姿に似たる
心地せられて――、
まつげうるますわが前に、
若い女の唄ひ疲れた獨唱の、
ゆるやかにしづみゆく如、・・・・
徐々と、美くしく、
はた、寂しくも沈み行く落日よ。

好いところも見出しにくい、わるいところも見出しにくいが、この作者の現在としては精一ぱいかも知れぬ(評)

○夜の苦み

信濃　利惠子

生ま溫い空氣がのろ〳〵と室一ぱい
にはひ廻つてゐる。
黒くすゝけた天井から低くつるされ
たランプの物憂げな光り、
微かな動きにつれて室の中を大きく
搖れて・・・・

壁にはられた明眸の少女は、浮き上
り又沈む。
深い冥想よりさめた神經の疲れヒス
テリカルに顫ふ唇――、
ジーット灯かげを熟視する青い瞳―
し、
何物か求めようとあせる心の影・・・
なやましげに沈むで行く夜の黒い空
氣が重く〳〵頭を壓する樣で・・・・苦
しい・・・・。

能くこれだけ囚はれずに歌ひました(評)

○彌生の歎

神戸市　足立　春子

柔らかき草の芽は
たのしげの瞳をみはれり
暖かき春の光線ふりしきて
櫻の花仄白う
綠の山にかゝるとき
常には寄らざりし圓窓に
心たゆげによりかゝれば
ふと幼き折をおもひ出て・・・・・・
知らず知らず涙は流る――
日の出て沈むまで
慈愛の母を知らぬ子は
子守の背にくゝられて
淋しい歌のみきゝてありぬ
ねんねんねんよ・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
ねん〳〵〳〵よ・・
振搖られ、ゆすぶられて
何處とも知らぬ野の中に
泣き疲れた女の子の腦には
物憂げなとぎれ〳〵の
歌の記憶は深かりき
あゝ幾巡り幾巡り
春は再び來たれども
とぎれ〳〵の哀音は・・・
歌の記憶は・・淋しい胸に打顫ふ

此感情は誰にでもあるだらう、下手な表はし

方ではないが、表はれてゐるものは平凡だと云はれても仕方がない、それから少しよけいなことが交つてゐる、感情をうたふ場合には、もつと力を集中しないといけない(評)

○春の鳥

福知山　美子

うすくかすめる眞晝の丘に、
赤い鳥が鳴きに來る、
若い女の息を吸ふて、
夢の樣な甘さと、なつかしさを、
歌ひに、赤い鳥が來る。

淡き寂しみの眞晝の丘に、
青い鳥がなきに來る、
灰色の女を夢みて、
戀の淋しさと遣瀨ない心を、
歌ひつくしに、
青い鳥が鳴きに來る、

靜かな〱丘の上を、
女と云ふ女の心を歌ひに、
青い鳥や赤い鳥が。

働きのある才だ(評)

○春の夕

N子

柔かに暮れて行く新綠の野邊よ
月の出の前の暫しの安息に
チラ〱……と輝き初めた星の囁き
が
靜かに、靜かに森の胸の
上を流れて行く

鮮かなる月光は葉裏に縺れ
森にさゞめく風の歌いとかすかなり
あゝわれかゝる折には
心のみ内に殘りて
まろび出て追憶の譜ぞ顫ひ慄きて
限りなき哀愁に獨り泣るゝ

あ、どこかで鳥が鳴いてる
絕え〲に……
病後の私の胸をそゝつて
悲しさうに又鳥が鳴く
あゝ今にも切れさうに鳥が……
凍つた壁、緒の切れた古いビオロン
その暗い影?

詩を作る氣分は確に持つてゐる(評)

○野を行く女

豐後　吉田夕草子

獸の樣な兩つの眸は
たえず何者かを見出さうと
凄く大きく四邊に輝き……
柳の樣に亂れて銀杏返しの
眞赤い根掛に……うすら寒い風はあそぶ――か
はたれの野を
南へ南へと行く――若い女――
……………
何に驚いたのか
ハタと足を止めて
恨めし氣に鳥のゆくへを見送り……
力なくおとした眼には
暗い涙のやるせなさ
……血の氣ない色の面は
今墓場からぬけ出たばかりの
幽靈の樣に!
失意の心鮮やかに……
……………
……………
歩調もしどろに又南へと
……蕭蕭の野を行く女……

何うも眞實がなくて困りますね、一體何を歌つてゐるのか分らぬ、感情なら感情でよい、もつと理解された感情でなけりやものにならぬ幽靈が失意したのも困るが、それが鮮かだと云ふのだから並大抵の困りかたでない(評)

○煙草の感觸

信濃　藤澤里子

煙草と、銀のにほひに、
ふとをのゝける、小さきこゝろ

ふうと吐く、青き煙は、
萬年青の紅き實をめぐり、
ガラスをもるゝ淡き日に、
水仙の花は息づけり、

黑塗の、机におち——、
褐色の、煙草の粉に、
白灰の、まぢり落ちたるあわれさ、

見やる目に、はかなくもうつる、
琴の黃色のその絃よ、
かすかにも哀音に、いづこよりか響き來るらし、
限なく青き、きさらぎの空。

題は好いが作に煙草の感覺が出てゐるとも思はれぬ(評)

○さゝやき

翡翠子

私は砂山を走つて下りた
（こゝがお前の住家なんだよ）と
波のわらひと
波に照つた月光が歌へるやうにさゝやく
つめたい波の肌よ
さびしい波の吐息よ
磯の一つ家で破三味線の音がする
まぼろしのおもひで——まぼろしの糸——
死んだ母の吐息に似てゐるやうな音よ
（お前もお出でよお前もお出でよ）と
波がまた歌へるやうに招くやうにさゝやく
私はわずれ心地で砂上を走つた。

こしらへものと云ふことが分りすぎていけない(評)

○しびれ

長野縣　金井まちよ

伯母ちやん御乳一杯頂戴と 美和ちやんが私の胸に手をあてた
せつな、しびれた樣にけれどあたゝかい、
あまいひゞきが全身に傳つた、
私はたれか見てゐやしまいかと見廻した、

向ふの廊下に丸髷のあねが
うつむいて赤いものをぬうて居る
私はあわてゝ美和ちやんを手からはなして
またしびれのやまない體を運せた、
小座敷へあたゝかい。

官能の鋭き人か(評)

○カーテンの悲しみ

大阪　杉山花枝

そは如月、寒き黃昏なりき、
白金巾フワ〱した、カーテンのやはらかさにさまよひ出る、我が病む魂を、
危くもつゝみて居ぬ。
夢ならで我が左手の拇は足らざりき。
ドクトルの手に輝くメスと、ほとばしる紅き血の印象のみ、……あざやかに。
胸にくりかへされては、おとゝ日も今日も暮れぬ。
暗き病室の冷たいベツトの上に、
僞りならぬ夢に泣く夜……。
ヒヤシンスの淡ら寒き笑ひをあぢはひぬ。

靜におちついた態度は好いが、只これだけでは新派の月並たるに過ぎぬ(評)

○灰ふる國

美水

木曾の山の頂に殘れる、淡き淡き片割月よ。
今し、一羽の黑い鳥が橫ぎつて、青い空へ消えた。
太陽は、雪の世界を强く照らす。
鳥のむれがおりてゐた。黑く點々としてゐる。
村より村へ、人が歩いてゐる。
白雪に火山の灰がかゝつてゐる。
西北より、微かにただよひくる 硫黃のにほひー。

昨夜ふつた柔かい灰に、美しい雪はよごれてしまつた。
赤黑き雲のたちこむる燒岳の方よりかすかにも
ただよひくる硫黃のにほひ――。
あなたはやつぱり散文の方が宜しい（評）

○夜の曲

奈良縣　花崎　宮子

公園の一角を
散りぼう花壇の匂ひの上を、
ベンチに歌へる醉どれの頭を、
冷たい夜の霧は
重々しく覆うて行く。

彼方の黑い塔の尖から、
くづ折れた柳の並木から、
啼嘘りないちやくる噴水の側から、
煙のやうな
幻のやうな
明るく暗い日影がとく。

憂愁と心痛と、
貧しさと、
さびしい冬の歩みを
早くも運んで來る霧……
青く注ぐ瓦斯の
熱のいきれの
絕えだえに
昏睡しをはるまで、
街の夜を
行き交ふ
霧の舞の群

少し詩を讀んでるものなら此位な作はらくに出來る筈だ（評）



別れ　大阪　森草

○乳の香

横須賀　三輪ふさ子

そこここなく
ほの青い春のかをりに胸の迫り來る
野をさまよへば
甘き
疲れ覺えて乳が張る

あゝこの乳がこんなに張り切る
ぢつと目を瞑じて蒲公英の若やいだつよい香に接吻けると
あらく……
『義坊が來た――』
ね母あさんなんだよ、
母あさんは義坊を待つてよ、ほらく
こんなに眞白いむかふのお山の上を走つてゐる樣な甘い乳がこんなに張つてる――
サ、花は母あさんが採つて上げるから
こんなに張つてゐる乳をお上り、
だけど、――だけど
春の匂ひに乳が張る、あゝ痛いほど乳が張る。

乳が張るといふのは女らしくて好い詩材だが、殆んど詩と散文との區別が分つてゐない、尤も大半は削除したので、此處には詩らしい形になつたけれど（評）

○小鳥

近江　井上千代

若々しい而して自由な空氣の漲つてゐる
森林の蔭に、小鳥の群が
いかにも愉楽に堪へきれぬ如に、
囀つてゐる。
目瞑つて其の奏づる聲を聽く――
と我が心の奥底では
暗い〳〵冷い影が
譬へば底なし沼に足掻き疲れて
今に最う沈みゆきさう……。
でも小鳥の群れは鳴き止まない。
眼をひらくと
森林には皐月の日ざし
晴ればれしいのに
熱い涙が故しらず頰を流れる。

○白蠟

本所　かすみ

何ものもなき
眞の闇
手探りに
マッチを取りぬ。

パッ！、とさす
灯のひともと
白蠟の
弱々し氣なる
しんに移して。
赫々と燃え始めし
白蠟の火焰
北風に消さるゝを恐れ
片手に支ふれば……

知らぬ間に
手燭の蠟は溶け
かなしくも
涙しぬ。

○都の夜

本郷　安達美枝

夜は沈む。
兩側の煉瓦の家は、
重く濕れる哀愁ににごりて
三丁ばかりもつゞける末は
うなだれたるアカシヤと
そぼ降る町の雨に戰けり。

最終の電車の走れる早さ。
燈火慕ふて飛交ふ小禽
あはれ、その鳥よ、
あはれ、汝が配偶を見失ふ勿れ。
――目の前を黑き暴風のとぶ如く
電車は走せて、またゝく間、
夜は沈む。

○二月の風よ

京都市　中野ふみ子

二月の風よ。
われ、いま汝れと逢ひぬるごと　のうれしきかな。
しろき汀のほとり、赤き月の路上
山城の野を、行けど、行けど、

すさみたる胸には、おもひ出もあらなく、
廣き自然はたゞ、佗しく濡れて映れり。

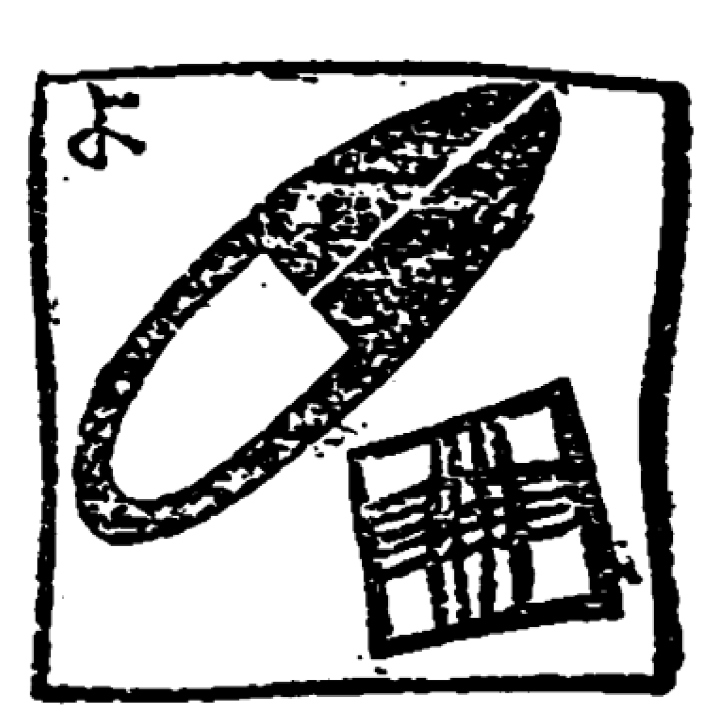
二月の風よ、霧ふる北國をいでこし
放漂の袂に縋りて泣くよ。

寐るまへ

女よ、女よ、いかに執念き汝が瞳なる。
トンネルの汽車の暗き室に、ふと放つ、
マッチに浮ぶ、いろ〳〵の瞳と、
あゝ、鋭き、鋭き、

奇しき力よ、瞳より、
胸にはうつる紅の、
炎ぞはらばふ。

温き空氣に、おとろへ行く。
感覺のにおく…………。



卯の花くだち

法師

▲正月十三日（富山村山咲子）千葉にゐる頃は一刻も早く富山へ行きたいと思つた、來てみればやはり悲みは心を領してゐる、一人の人の爲に潔く犠牲となつて、生きてゐるのだ。倭文の小田卷繰返すは自由だが、書いてもく〳〵それが何の事ともわからないので馬鹿々々しくなる。夫の爲に一身を擧げて榮辱兩ながら白眼に附するとなら女らしい女としてたたへもすべけれど苟も個性を口にする程ならばノラの事位は考へねばならぬ。私は誤解してをるかも知れぬ、もしこの苦言が中つてゐるとすれば、あなたはあなたの名譽にかけて僞らざる告白を公にせねばならないんだ如何。

▲幕間（下關青山よし子）疲れた三味線の音、ものうい皷膜、たゞれた空氣、例によつてあちこちから新しい官能的文字を拾ひ集めて、「メリンスの下の眞紅な血が大きく鳴りつゝ顫へるそつと袂の中からKさんの寫眞を出してみる」竊く切れ芝居見に行くのにKさんの寫眞を袂に忍ばした女である。そしてそれをとり出してじつと見つめた氣ちがひだ、舞臺の役者は好男子だつたのだらう。

▲寂しき想出（宮城夕の海）「臺所が痛めば座敷に居ろ座敷が痛んだら廣間に居ろ其内哲夫が來て、西洋造を建てる」とよく伯父の言つた其哲夫さんは姉との許嫁の約を破つて、他家の聟になつた。明治も十七八年の頃つくつた小說といふ傾きあり、事實ではあらうけれど、材料の選擇方を知らないからだ。

▲大阪の傳法屋で福助が箏を彈いてゐた。十何年かたつて新富座に其治兵衛を見た『劇場の一時間』野の人）折角の材がアツケなく取扱つてある。

▲杯（長野ゆかり）父君の誕生日に金泥で秋草を描いた朱の杯に對し亡き母君をしのべる作、すぐれた出來なれど、去年の今夜やはり父君の誕生に、この杯を倉から持つていらしつたといふ母君は、世を去つてすでに一年とある。去年の誕生日と今年の誕生日との間に三百六十五以上の日が無ければ、この數は割切れません。

▲逝ける君（薔薇女）いかで涙のかきくらされでやはといつたやうな『女庭訓』時代のやまとことばづくめである。對句もあり聯句もあり、非常によく齊つた作。

▲最後の日（東京野の人）親が許さぬからと男に告別した夜のことである、小說にしても貧弱な內容だ男の意氣地もなく聲を立てゝ泣いてるのを見て、初めはなぐりもかねまじく憤りながら、しまひには永久あはれないだのこれが最後だのなどゝ泣いて、キスされさうになつて、驚いてうながし立てゝ別れた。筆蹟の美事なのを見るともつといゝのが出來さうに思へてならぬ。

▲不具の弟（京都壽賀子）低腦の弟を哀れめる文、われは矢を負へる鳥なり、豈鼓聲を聞くに忍びんや。

▲節分詣（出雲三吉よしみ）コートを着て草鞋を穿いて大社へ詣でたこと、仕度が珍らしいだけ。

▲なみだ（大阪小さき泉）意味無し。

▲福壽草賣（岩代光子）雪の中をかひぐ〳〵しく町へ出た、（福壽草は十一時迄）「に賣切た」福壽草をやきいもとしても通るし雛としても融通が利く、それだけ本物らしく無い。殊に十七や八の妹が雪の中を商に出たのに、兄貴は、一日爐に當つてゐるのがケシカラヌそれとも兄貴は腰拔か。

▲凡ての美しい女と戀をして、匂ひを異にするあらゆる神秘にふれてみたい、凡ての女の閉したる戶を叩き廻つて、日每に變る新らしい光景に、念々の驚嘆をつないでみたい、大理石のやうに靑白く、吸ひつくやうに滑らかな女の手も、紅玉のやうにほの紅く、包むやうに溫かな女の手も、またく〳〵私を滿足せしめるには不足である」恐ろしい文だが作者の名を逸す。

▲結髮（茨城翠松子）髮（陸前黃川田かよ）はつ島田はおのろけにアテ

られる之れと同じ數ほどに多くあてに來るのでよわり切る、翠松さんのは褒をいふとゆふ領分がよくあらはれてゐる傑作だけれど。

▲藤棚（靜岡中村みどり）八十日間の教員生活、今學校を辭せんとして藤棚の下に愛らしき子等を集むれば、春の風長き房に搖ぐ。これきり。

▲夢を封じて（福井明星）亡き弟を活動へ連れて行つた歸りに堀端で惡者に掴まつて何度も何度も堀の中へたゝきこまれる、やつと救ひ上げて手を取つてビツショリ沾れてゐる弟を連れて逃出さうとしてさめた、母さま弟はもしや地獄へ落てゐるのではありますまいか」乾き切つてゐること例によつて例の如し。小學校の先生なんかやるもんでは無い、自分は人の儀表だといふ腹が一杯なので、冷たくすまし返るのを專とした爲めに、アマミも無ければカラミも無い、つまり中毒してゐるのだ。

▲元日の日に、、清いうるはしい、愛の花を、たくさん心にかざして眠りに就いた。すると毎日〳〵奇麗な蝶々が幾つとなく飛んで來て私の蜜を吸はうとする。私は構はず蜜を吸はせて居た。どの蝶々にも同じやうに吸はせようと力めて居た。が其中でたつた一疋、朝から晩まで、寸暇も私の傍を離れずに、しきりに甘いより多くの蜜を得ようとつめて居る白いのがあつた。私は望むがまゝに、あたへてこばみもしなかつた。そして半月ばかりたつた。

或日私はふと目をさまして見ると、相變らず白い蝶々が一疋しきりに蜜を吸つて居た、それが見る〳〵うちに蜘蛛となつて、私の胸に巣をかけ初めた。私の胸はえは一つぱいで覆はれてしまつた。私はびつくりしてあつ！と叫んで其の巣をかき除けようとした。けれどもだめであつた、右からはらへば左から張りたから拂へば右から張り兩手で拂へば眞中からはる、はらつても〳〵えばはとれず、もがいても〳〵其効能はない、しかもにくらしい蜘蛛は依然として動かない、私の體はだん〳〵だん〳〵暗い〳〵谷の底に落ちてしまつた。最早どうすることも出來ない。泣いて泣いて泣きくらして。悔悟の涙をしぼつて書いた私の日記を姉樣に見つかつて、私はやつと助け上げられた」まづいシムボルである、書いた人はしらなみ子。

▲二つ年上の從姉のお嫁入の時九棹の持物やと近所近邊まで噂さでありました。お祖母樣に連れられてお嫁樣の衣裳を見に行きました。スーツとゆかしい香がして嬉し想な從姉の手に次々の簞笥がひき出されました。赤、白、黑、桃色、緋、金銀、それらの光りが皎々と私の眼に入りました。きり羨ましい心は露ほども起りませんでした。見てぼたんやばらの花を連想させる樣な女にはなりたくない。青葉かげに小暗き奥山の一つ湖を思ふ樣なそれは私の理想。少女十七の理想は青と黑との生活でありました。けれどもお笑ひ下さいませ。私は矢張り普通の少女に違ひありませんでした。其年のそよ〳〵と音する風に新みどりの香なつかしき頃青き少女の心はおそろしくふるへました。强かれ。强かれ。痛きまで鞭打つもおとろへたる我が眼は友人の紅の刺戟に勝つ事は出來ませんでした。小鳥の如くに、それは青と赤との戰ひに疲れ果ては時の聲でありました。

小鳥の如くに……日々の此思ひは安らかに私の心に少しづゝの紅をなげてくれます。紫になり赤になる私の心……。私は幸福でせうか。」幸福かも知れません。

▲二つの靈（大分みね子）故有りて家を去りし母と五年ぶりに湯の宿に落ち合うて今さらに泣く〳〵といふ筋、やたらに「！？、」を使ふて、强いやうに、强いやうにと努めてゐる、負けじ魂の眉も目も淸い、きく〳〵した風手をおもはせるが、處女の義なるをとめを乙女と書いたのはどういふわけだかわからぬ。乙女が何であることを知らぬ程の君でもあるまいに。

△主として「人事」を私が見、「自然」を醉茗が選ぶのであるから、おしなべて言ふ譯にはいかないが、此頃投書の粒の揃うて來たのは誰の目にも分つてゐる。一二度臨時增刊で當選してもつと大家になり濟した連中に比ぶれば、一生懸命なだけに生氣が有る。尤キザな新らしがく屋もあれば、見え透くうそを平氣で書くのも無いではない。かう書きかけると、また醉茗が袖を引張て、お孃さん達は君甘い物が好きなんだよと言ふたらう。

斷つておくが、私は今一生懸命と書いた。醉茗はまた候親切氣を出して一生となはすだらうが、賴むから朱を入れることは見合せてくれ。昔は先生だから謹で斧正を乞うたが、今はさう負けては居れぬ、年は君の方が上だし、私はまだムスコだが、君はもうオトウサンだ、乃公の方がえらいんだよとのぼつてるわけではない。



入事（散文）

編輯局選

○帶

山形ほゝづき

チンチン、時計の音も爽々しい晴れた午前の十時、お掃除した後の家の中は何も彼も靜かに光つて居る、緣先にフッサリ垂れた西洋櫻の枝には溢れる程つけた實がルビーの樣に熟れて其の甘い匂と青葉越しの明るい光線とが心地よい重さで私の體を包んでゐる。絎けかゝつた計りの洗ひ洒しの紅入友禪が白いエプロンから黒い緣の敷板に溢れて、洗濯ソーダで赤白くうるけた太つた指の間に大絎針が忙しさうに布を潜つては表れ〳〵地味な光をチラッカセながら跳つてゐる。スーと拔くと赤い絹糸が布を摺れ通る微かな面白い愉快な響!!●古風な懷しいこの布の模樣は私の目前に或る樂しい繪畫を開く。私の心はそれを緩り樂しまうとしてゐるけれども私の習慣で—母に躾られた—針がそれは忙しく早く仕上げてしまはうと急いでゐる。

……手休みの鈴が鳴る、狹い出口からワーッと一摑み散けた中から小さいお煙草盆がチョコ〳〵走り出すそして古い吉野櫻の下の割薪の荒垣に兩手かけ小さい頭を無邪氣に向うへ突出す。鼻の先に裁縫室の壁が突出て居てその向うのお庭に女學校の方達がダンスをしてゐるのがチラ〳〵見え隱れする。毎日かうして小さい胸が同じ數程浪立つ頃には定つて懷しい人が見える、可なり面積の廣い白い顏、濃い眉と瞳、結びの緩い紅い唇、それよりも懷しいのは輪の大きい傾いた銀杏返しと此處らには見なれない—大きく結んだ帶の優しい花模樣。いつも木綿縞の半巾帶を高い帶上げでてこら風に結んだ色の淺黒い齒の白い人と何か密々語りながら一間程向うをズーと壁を廻つてどこかへ行く。時には足の早い二人鬼に追はれて笑ひながら裾を抑へて髮をクラ〳〵させて走つて行く事もある、その時も矢張この黒い人と手を繫いで。或日珍らしく、二人はすぐ向うの櫻の根元にかゞんで居た。ふと此方向いた懷しい人の顏は堪へきれないといふ風に眞紅になつて笑つて居る—例の愼しげに—。懷から丁寧に疊んだ眞白な鼻紙を出して向うに向いて頰を拭いた。と、白い齒を出して覗いて居た黒い人が突然後に廻して置いた手

を出すなり一方の顔をなでる、見るとこつち向いた白い頰に痛々しい紫痣が、紙を持つたまゝ又一しきり笑ひ合ふ。二人共濃い前髪の左方にも奇麗に熟れた櫻ン坊の一房を挿して居た――。何處の人か、何といふ人か、私は少しも知らない。つひぞ聲は聞かなかつたが彼の白い人はキットモヤ〳〵した聲で優しい旅言葉を使つて居たにちがひない――。

女學校を中に向うの垣根―やつぱり薪の荒造りの―の外は男子部の庭だつた。其頃良人も時々私のやうにして垣につかまつては「飛女郎はねめろ」と惡口を云つたものだが其の人の事は知らなかつたと仰る。が、横濱か神戸か、そうした大きな都會の小奇麗な家に今日のやうに靜かな眞晝美しい孃さん相手に良人―會社員か何か―の留守を守つてでも居るやうで……。こんな譯から大事に藏つておいた私のこの半衿すら今常掛の襷に變る所だもの、あの懷しい帶はもう孃さんの寢卷の紐にでもなつてゐるかもしれない。あゝ、何だか伸りした。學校の唱歌が緩く聞える。兒等を庭に送り出して面白さうに出口に立つていらつしやる良人の平和な顔が見えるやうだ。（地賞）

先んからこの人の文章には注目してゐたが、屬望空しからずこれも亦水際立つた作である。個性が出ない〳〵と言つたが、旦那様があつて見ると無理が無いのだつた。

○いらん

備中ゆみ

一つ上の從兄はわたくしを『きかん』と呼びました私は『いらん』と從兄を呼びました。負けないつもりで――。

かうして二人は、羞恥も隔たりもなく極々平和に、向ひ合せの菓子屋と格子戸との家に生ひたちました。

從兄の家は軒の低い寺院のやうにいらかが上からずつと筋めだつて長く並んで居るのです。

雪の朝、二人は茶の間の炬燵に腹這ひになつて、從兄の家の屋根に積つた雪の光りが玻璃障子を透して明るくさしこむ白壁を見ながら、雪やこんこ霰やこんこ、奥のばゞさん……を唄つたのをよく覺えてゐます。八ッか九ッまでは大聲に「いらん」や「きかん」を誰はばからず怒鳴つてゐました。それに親や近所の人はこれを一つの名物のやうに大笑ひをしてきいて呉れてたのです。其頃二人は同級で尋校の東の教室に男女生でいつちやませに教りました。

二人一時に先生に名をさゝれて算術の式を書きに教壇に立つとき、此度男の子はとつと笑ひました。

「男と女子とめようと、うちのうらの鯉たれがつゝ

た。いらんときかんがついた』かうして幾度も泣きました。そして二人はきかんといらんをせいぐ言はないやうにしました。

たまに格子の外でチョークでかいて「國とり」をして遊んでても、級のものが通るといらんは決まつたやうに眞赤になつてこそ〳〵と歸つたのです。

新聞紙にどつさり書いて父に點をつけてもろふ事もいつかやんでしまひました――もつともいらんのうちと父母との仲に不和が生じたのもありましたが――

うちの風呂に一緒に這入つて、舟ようこんでろせいなど言つて洗面器を持ちてんで、かちやん〳〵さわいだのも、遠い〳〵夢にあつた事を被ひの上からすかして見る樣な心地がしたのでした。

そのうちいらんは中學に這入りました。私も女學校入つて二人は五十里はなれた異つた天地に、別々な生活をつゞけて、ただ〳〵ひた忘れになつたのでした。



窓より　深川　矢澤榮子

或日ふつと幼い記憶をよびおこしましたの、――それは教室の窓から港へ〳〵と這入つて來る船がはつきり見えるよく晴れた暖い日でした。地理の時間でしたイラン地方を教つたその瞬間のひらめきだつたのです――「いらん」といふ名がたまらなく懷かしくなり

ました。たゞ一つの懐しい思出――「いらん」私はかう小さく呼んでみたのでした――。（入賞）

きかんチャンは利かん坊のことでせう、いらんのイハレはわからぬ地理の時間にイラン地方を敎つて從兄を思ひ出したなどはむごいコヂツケですね。

○るすゐ

津山葉蘭

氣まぐれて一寸結んで見た新蝶が、シックリと心地よく出來た。

照つたかと思へばまた影る、冬のよわ〳〵しい光が濃い綠の中に、ボッチリと七八つの子供のつぶらな目を思はせる花をつけた水仙を、透く樣に照して居る。テカ〳〵光る萬年青の葉がくれのまろい果、はては南天の紅い玉等が、冬枯の庭を漸くいろどつて、はりつめた心に痛々しい程冬の氣を吸つて居る。皆出てしまつて、一人とりのこされた詫しさに、日あたりのいゝ緣側に鏡臺を持ちだして、永らく見なかつた鏡に向つて見た。キラリ冷い面にうつし出された面は、四五日の病の痕をあり〳〵と見せて、ほうけた樣に影うすくあはれであつた。開かれつゝある眉のあたりの閃きはうれしかつたけれど、一週間まへのそのときと、あゝ化粧の美！それは永久に女の生命であろう。

如何してもお若い方はネ、お手間がいりますから、まあ、あちらで暇まつて居て下さいまし」と云ひ捨てゝ人はいつた。われ一人守つた時間が馬鹿らしくて、二時間も待たされるのにうんざりしてしまつた、紅白の水引で飾られた若松、床の何やら分らぬ文字の軸や、疊の目までかぞへあぐんだ身はふつと立つて心地よい初釜の湯ぎれをあとにして水屋に込つた、そこの柱にかけられた鏡にうつゝた白い顔を、おそる〳〵見つめた、たまにする夜の化粧でさへ面はづかしい氣のする自分が、人のまへに出るべく思ひきり白くぬつたこの日。けれどもやはり平常より美しかつた、青い面はあとかたもなくかくされて、ほんのりさした櫻色うつりのよい紅い襟や、しんなり重く肩にかゝつた藍地のかつた衣服に、つく〴〵化粧の神秘な働きをかんじた、その香にとかされる樣にひたつたとき云ひしらぬ笑は上つたけれど、かうした今はつひ不覺の涙も落ちた、いやだ〳〵と云ひつゝも世の波におされて、いつかはおそ生れの女として三つの杯も持させられよう。

一本の元結が見つかつたので、閑にまかせて結つたともない新蝶に結んだ、有合せの丈長をかけて一寸合せ鏡をして見る、油のないサラリとした毛が反つて嬉しかつた、油をてつてりとつけて引つめた頭に大きな桃割れをのせて赤い花簪や、丈長をつけて貰つて嬉しさに頭ばかりふつたのは、十ばかりの鎭守の祭りの日と覺えて居る。なつかしさにじつと見つめて居るとか

はり易い冬の日のいつか灰色の空から牡丹雪がしとしととおちて居た、逆上せた面にふつと冷かにかかる結立ての蝶々にも、ギラ〳〵光る鏡面に次々と夢の様に消えてゆく様々の形をした美しい六ひらの雪が……、まぼろしのやうな美しい雪が……いつまでも〳〵見つめて居た。



花咲く里　横濱　石氏あや子

（入賞）お上手なれど、化粧の美は女の永久の美！といふが受取れぬ、お婆さんになつてからも永久がられてお化粧されてはハタが助からない（評）

○路傍の思ひ出

長岡　秋月すゞ子

向ひの叔母樣お茶呑にお出で、鬼がこわくて行かれません、鬼にかくれて一寸お出で、と可愛い兒の男女の子が入り交つて交る〳〵つばくらめの口みたいなくちして思ひ〳〵の聲音で樂しさうに、歌つてる、思ひ思ひに、兩側の雁木の柱につかまつてやつてるので有る、鬼らしいのが一人、表の眞中に彼方の雁木見、此方の雁木見して、誰かの向雁木へ走つて行くのを、つかまへようとて凝つと見廻はしてる。

長閑な春風に櫻花は咲いてる、人の心も云ひ得ぬ歡樂に醉ふ今日此頃、あどけなき兒らも天然の春の歡樂に醉はされて、路傍にての鬼ごつこ、あゝ其心中ぞ推量せらる。

幼かりし日の思出多き路傍の遊戯、私もこのあどけなき兒らの如く、前のとうさまや裏の坊ちやまや、男女の別なく、手を引き合つては、こゝはどこの細みちぢやなんて、春の日と云ひ、秋の日と云ひ、あそんだものである。

過去の日は現代の如くに房々のお下げも結ばなかつた、リボンと云ふものも見なかつた、大模樣のメレンスの着物もきて居らなかつた、三尺なんてものもはやらなかつた、姉樣や母樣のおゆづりものゝくゝしのてがらを頭かゆげに結びたり、絹縞の細い帶をはさみ結びにしたり、絹縞の糸の拔けた如な袖無を上へ着てすましてた事は深く胸に止まつてる。

時代は遷へど服はちがへど。

此兒らの何氣なく手をたづさへて樂しむ日も……、あゝ最う五六年も經てば男子はいやよ、女子なんか駄目だ、なんてたがひに途中に出合つても昔遊びし事を胸に浮べつゝ、きまりわるげにしらぬ顔する樣に成るのだかと思ふと、いつまでも此幼時代にあらしたい。

今や櫻の眞盛り、固い蕾もなければ散り來る瓣もない。長閑な春風は此無邪氣な兒らのリボンに、輕く吹き渡つてる。

雁木はガンギとよむのでせうけれど、どういふ場所で遊んでるのかわかりません。人家の軒の下か、川の土手下か。それからモ少し字をきれいに書いて下さい、でないと此次から落第させる。

○憧がれの瞳

會津　利喜子

花やかにさゞめき合ふ、席をそつと拔けて、縁に出た、冷たい風が上氣した頰に心地ようあたる。二階より見下す夜の巷は、いつの間にか薄い靄に包まれて了つて　向ひの二階の屋根が、かすかに、浮いてゐる樣夢みる女の瞳の樣な灯がほんのりと……。凍つた街路

を絶間なく往來する人の下駄の音が心の底まで響く。變つた讀手の聲にハッとして明るい室をみやると、いろ〳〵の頭の影が絶えず動く。障子がスーと開いて、輕い足音が近づいて來る、と、從妹の妙子の顏が見えた、『暑くつて』と私の傍へ倚つた、『止したの？』美くしい横顏を視ながら問ふと、『敵はないのよ』と、片頰を抑へて莞爾りした。一さかり騷ぐと復讀手が變つた、折々哄と笑ふ聲に交つて妹の優しい聲も聞える。からした花やかな聲をきいて、妙さんは去らない、私も欄干をはなれようとしない。從妹は何處ともなくみてゐる、桃割れにさした眞紅の花も、長いまつげも見えないけれど、これを白日にみたら、電燈の下でみたら、と思ふ、夢二さんの繪の樣な、ロマンチックではないけれど、可愛いゆ瞳と、無邪氣な風姿とが、何となく與平さんの畫を想はせる、妙さんの指がかろく欄を叩いてゐると思ふと、好きなあの、『あだなる幸の……』がかすかにもれてくるので、私は沈んだしづんだ心になつてきいてゐると、從兄の聲に、どんなに驚いたらう、靜かな心を破られて了つて、『入りませうね』と顏を覗くと、凝とどつかをみてゐる、何を想つて何をみてゐるのでせう。微溫かい空氣の充ちてゐる室に入つて、妙さんと對つて與へられた席に坐つた。從妹はかるたを並べ終へると、私をみて莞爾りした、右の袂を膝に置いて、遠い影でも追ふやうに瞳をこらして。

斯多々毗尾多毋戸飛珂連豆汲杼呂岐奴歌留多登流手乃奈可邇摩志理川。突戸伊札憖潸古毗之目古曾曾々我留流阿摩理邇阿可伎灯仁毛阿流可名。

○電話番號

堺市　高橋岸子

今日は、無茶苦茶に寒い、パッと、ストーブへ石炭を入れる、パアーと火氣が上る。

お父さんが一寸會社へと、出て行かれてから小一時間、兄さんは、例の寢坊、姉さんは、Hさんのお家へ、妹等は學校、皆が居らないとあれをして、これをしてと、計畫はして居ても、さて、皆が出て行くと、少し物を書きかけると、お客樣はんとうに、留守番程安い商賣はありやしない。

先きから新聞も讀みあいた。日頃見た事もない、辯護士案内た、なんてなとこへも目を通した。女子文壇や、女學世界、少女も、とうの昔に讀で、文壇の創作や、散文は、大抵暗誦して居る。

「今日は」どんがらい聲を出して四十五六の人が來た。「旦那ゐるケ」、こんな物のいひ樣をする人は、和歌山の人に違ひない。「ハア、一寸出ましたんです」「フン、そうケ」「和歌山行のコークスあるケ」……あいにく皆、留守で……と、いはふとしたが、「ハー一寸たづねて見ますわ」と、いふより早く、電話室へ…………

出ると、寒い……「あノー今、一寸ないそうです」「アッ、そうケ」——一寸、思案顔——「和歌山、——煉瓦、如何です」煉瓦ケ、煉瓦も、え〻けど一ぺん歸つて、相談して見るヨ」「ハーどうぞ」歸つた、ホ〻、煉瓦どうですたなんて、我れながらおかしい。

チ、チリン、おや、電話、一人でも居れば側に居ても出やしないが、留守たとしかたがない、向ふから掛て來た時は、胸がドキ〳〵してくる「ハアモシ〳〵……ア、違ひます、……チッン〳〵」こつちへくる、チリン、又、「ハアモシ〳〵……違ひます、……チリン〳〵」チリン、又、なつた此度は出ない、四百十八番といつたわ、何處か知ら、……御苦勞にも、電話

帳を出して見る、……一つ一つ頭を通す、ない、又繰り返す、……あつた、……川向ひの樂器店だ、……ホッとした何だか嬉しい。

煉瓦をふれ賣りに來たにはおどろいた。これは醉茗さんの評を俟つに限る。

○隨分な人

小石川　彌二子

御免ッと玄關で大きな聲、私はハイッとまるで反射的に返事をした、障子をあけると繁さんが、お友だちと二人立てゐる「まだきませんか？」「何が？あまり大きな聲でおどろいちやつた」おあがりなさいなといつたら、あがつてもいゝのだつて、いつもだまつて、知らぬ間にあがッてくるくせに……お夕飯の用意をしてゐた母が、手をふきながら、出てきた「何だね、ふたりはまるでけんかだよ」繁さんはチョト會釋して「まだきませんか」「ア、どうしたんだらう」「何なの母さん」「はあちやんの知つた事かい」「だってまだあるでせう？」「ところが財襲甚だ心細いぞ……」「ナーンだ書留だわ、」「ウッフン」之れはこの人特長の笑ひ方吉川さんは笑ひながらひとりお茶をのんでゐる、茶だんすからみかんをお出しといつて、雨戸をしめに立つ、母樣は臺所へ……

きてみるとふたりはたもとから大粒のそら豆を出して炭とりにあつた灰ふるひでいりながらたべてゐる。

「どうしたの、ときいたら宿の臺所にあつたからだまつてもらつてきたのさ」ですつてだまつてもらつてきたは振てると吉川さんは笑つた松井君こないんだよきつと」「いらうか？」と繁さんがいふ「どこへ行くの」「久しぶりに江戸川亭へさ」「あらつ琵琶ね、……お金もないくせに」「おこられるんだいっ」とまるではたきつけるやうに隨分なんだ、おすきですかつて吉川さんが云ふから、はあ、といつたら「君はあちやんはショッチウ樂堂へ行くんだよ」隨分だ、私お友だちと一二度いつたぎりだのに、と玄關で「御免なさいー」ハーイと靜に返事をする「村田君きてますか」「オーイまつてた」「おばさんさやうならお願ひしますよ」「ヰゝようござんす」三人はドヤ〳〵外へ出た茶の間へくるとみかんは一ツもない、そのくせ皮も、おぼんの上に豆の皮が一パイ、どうりで繁さんの袖がふくらんでた。

私はつく〴〵隨分な人だと思つた。

「おやはあちやんは只見せる積りで柑子を出したのかい、一つも殘さないからつて、隨分だわもよく出來た」隨分な評だね

○同窓會後親友の許に

愛知　濱の女

懷しい〳〵幸子樣。

御別れしてもう三年、寢ても起きても離れた事のなかつた二人には、あまりに長い月日では御座いませんか。

兼ねて申上げました同窓會も、私共には今年が初めてのせいか、クラスメートは大半をしめて居りました。

會場の南側にぞろつと並んだ我組の人々を見るに付け、どうして〳〵遠く離れた貴女を思はずに居られませう、いづれも同じ友と友との肩すり寄せて、椅子も崩れん風情なのに、此方は會長の話も耳に入らぬといふ見えで、額集めての内輪話。そして嬉しさうに小供時代に歸られた皆樣を見た私は、氣も心も東遙かにあなたの方へ飛びました。

あゝ二年前—四年生にならうとする瀨戸際、如月寒い朝の停車場でのお別れの時、何故貴女にすがり付いて止めなかつたでせう、そして二人が共に卒業したならば、今更かゝる恨はお座いますまいのに、乙女十七の春は長閑にまだ筒袖の私たちにはアレーヂのどれ程重大なものやら知らず、唯譯もなく二人一緒に嫁ぐやうにきめつ、話しつ喜んで居ましたのね。

貴女が可愛いゝ奥樣となられるのが、如何にも私の誇の如く嬉しくてなりませんでした、塀の處でよく語りましたね、一生二人は離れますまいと。

あゝ短い一生よ、何處に行くにも二人連仲のよい事は校中知らぬ者もなく、同じ枝に鳴きかはす小鳥のやうに嬉しかつた三年は、遠い過去となりました。

貴女もお變り遊ばしたでせう?同級の方で奥樣の方もあれば六七年も前に出た八が、また文金島田のうい／＼しいお姿なのもお見受致しました。二級前のSさんね、お美しくて少女のやうでも早三つの赤ちやんがありますの、甥さんかと思ひましたら役員選擧最中、雪の肌割つてお乳含ませてゐらつしやるのですもの、皆驚いて仕舞ひました、私達の知らぬ以前の出の方など、大きい孃ちやん連れて……

……馴れるに早いお子樣達は、手を取り合つて會場を走り出しました。

シヤアトル歸りの××樣の孃ちやんが眞面目な決議中ママちやんの先生!!と呼びましたのでドツと一撃に吹き出し、それこそ面白い餘興で御座いました。

いよ／＼樂しい賑やかな集も終つた時、白梅の薫る會場で別のダンス致しました、丸髷優しいマダムの君も、島田桃割のおとなしやかな孃樣も凡そ八十名ピアノに合せて踊るうち、何時しか心は無邪氣な子供に歸りました。

あゝ此時長かれと祈るかひなく、いつしか電氣燈の花が咲いて惜しい別を告げる、懷しき廊下戀しき教室、君と並びし机の邊を幾度も歩いても／＼物言はなかつた悲しさよ。其日その時御許樣は何遊ばされてか昔の町昔の家の間をぽとり／＼御うわさしつゝ歸り路に就きました。お二人とも御體をお大切に遊ばしませ。

かしこ。

「えゝ、ありがたうよ。ヤドにもお手紙を見せたら、お前とおさつを半分づつ喰べた、はあちやんだけに笑つてるの、にくいでせう」。また同窓會かと思つた、女の世界も狹いものだと氣の毒になる（評）



看板見る人（淺草公園）　ぬい

○與へられた若き寂寥

豊後　夕草子

「七回忌の時にはもうお元さんも、お婿さんと一所に參る樣にならねば

ね、そして揃つた美くしいふたりの姿を母樣にお目に懸けねば……」と、ホロリとされた。月日は早いものです、それから三年經つた、あか〳〵とゆる火鉢に手をかざして居ると、今朝は不思議に、明瞭記憶をひく、思ひではそれからそれと倘つゞく、足袋が綻り汚れたので嫂に、はき代へを出して貰つた。それにには少し許り「つぎ」が當つて居る。母の側に持つて行つて「此樣なつぎなんて當つてる足袋ははかない、人に笑はれる」と駄々をこねた。「誰が何と言つて笑ふものか、かへつて人はお前をほめるよ、あんな家の方だつてと……」やつれた面に亂れかゝる黑髮をかき上げながら優しく言つたが、私は其の言葉を聞かず、新らしい足袋を出して貰つてはいて居ると母は如何にも嬉し相に、私の足やら顏やらをさわつて見ては「まあ此の體格つたらよく此樣に丈夫になられたね……」と淋しく笑つて目を反らした。

二三日後の朝、母はつひに、歸らぬ旅の人となつた。末つ子の私がどんなに氣になつたであらう。いまはの際にも只「元が〳〵」と私の事ばかり言ふのを、枕邊に侍つた多數の人々は、皆口を揃へて「お元さんはきつと〳〵立派にお育て申します。何も御心配なさらずに……」と同じ事のみ幾度か繰り返したか？

花は幾度か散り、月は幾度かかけて、六年と言ふ月日は闘守なく過ぎ悲哀の内に私は十九といふ年の、初春を迎へた。櫻は微笑み、大地は自然に時めき、母居ませしそのかみに比べて、より以上私は幸福な、何不自由ない身となつたけれど？其の後の私の心はガラリと變つてしまつた、自分ながら、餘りに急に一變した自己の態度を疑ふ位に!!!

何に向つても只、「淋しい悲しい」と言ふ私を、あらゆる友は「貴族の樣な御身分で……」とすぐに打ち消してしまふ、けれど隱々一口に言へない悲哀の黑影がある。寂寥しい私の胸には、たえず強く大きくはゞたきする無形の暗示がある、誰が何と言つても私は淋しい性の子である、悲しい性の子である。富貴は私に微塵の幸福も與へぬ、無論何等の慰安も與へぬ。かつては花に笑ひ、月に憧れ美を誇りし私も、今は單に現實を叫んだ其の折々の詩、歌に滿身の萌ゆる情緒をぴつたりとひたして、止めどない事を想ひ想ふて、若き心を、心の心から憧憬れさせるそれをして、唯一の快樂しみとして居る私も、慘めな運命の手に愚弄さるゝ一人である。――人は之れを若き煩悶と言ふであらう。けれど私は比類ない美くしい清い若き寂寥としてゐる――やがては春百花も咲かう、鳥も歌はう、若き女等は、夢の樣な現實の戀の化身となつて、青春を誇り、自由の天地にあこがるゝであらうに?!!!

華族のひい樣でいらつしやいますのですか。七回忌には婿君と揃うて來るのだよと言はれてから、それから三年たつた。來年は七回忌だとあるのは、御免なさい、四回忌をお間違ひ遊ばしたのでせう

○節分の思ひ出

大阪　毒草

三年もたつ。私がまたやはらかいそ〻て美くしい心を持つて居た、十五の秋、指輪の、喰入る程きつくした友との握手の印象をのみ殘して東都を去つてから。

早いものだ、つい此間のやうに思つて居るのに……

大阪の人は薄情だ、言葉が、氣に入らぬ等、いつも東の友に云ひおくつて居た私が、今、大阪の習慣……年こしの日に、變な髮に結つて、神詣をすると云ふことを實行するやうになつた。

去る者は日にうとしとやら、云ふことを、自ら實行し得る程の私では無いが、親友……姉妹とまで誓つた、友との手紙の往復もだん〳〵うとくなつて來た。

そして「郷に入らば郷に從へ」と云ふ言葉を、あれ程きらつて居た私が、自ら進んでこんな、日本髮を結ふやうになつた。私の意志が弱いのか、自分で自分の心がわからなくなつて來た。

此日往來を行くと、白髮の女が、赤いきれ等つけた、桃割や鹿の子をまいたおかしな髮に結つて、居る又若い子が、丸まげに結つて居るのを見る。

私はもう馬鹿らしくなつて來た、私も、何故、結ひなれた、下髮を、こんな油の光つた、日本髮に、結つたのだらう。いやだ、いやだ、もうこわさう、そうして元の下髮にして、東都に歸り度くなつた、

もう三年、思へば思ふ程早い。

私がかうして、ずん〳〵年を取つて、行つたる、はなやかなるべき、少女時代も、さぞはかないであらう。

生れて、こゝに十七年、執着するやうな、美くしい思ひ出も、なつかしい過去も持たぬ。

私はどうしても現在の境遇に甘んじては居られぬ、やゝ心から、はなれかけた、東を、再び、なつかしい人の旅立の後姿を、ひきとめるやうな瞳をして、眺めて居る。

「生れてこゝに十七年……」オツト少々お待ち下さいまし、十五から三年たてばお十八でせう、變な髪に結つたとあるから大方片外しか大一番の丸髷でせうけれどそれは本當だとしてもいゝ、十七年だけはお取消遊ばせ（評）

○黄色い鳥

信濃　世良田優子

何時來るのだらう……丁度戀人が戀人を待つ樣に私は胸毛の黄色い鳥の來て庭の老杉に巣を作るのを待ちこがれた幾つも〳〵尖い劍を並べた樣な軒の氷柱がとけ始めて日の光が黄色味を帶びて温く肌にしみる樣になると何處からともなくこの鳥が來る毎年々々もうかうなると信濃はしめたもの、白粉が氷つたり水油がしみ付いたり毛の先からガリ〳〵氷が下る樣な嫌な事がなくなるのだ眞實に高原の冬美も何も有りやしない綿入の三枚も重ねるので身體がふくらみかへつてどうしたつてナヨ〳〵した曲線美なんかどこにも見出しがたいもう心の底まで氷りついた樣に沈滞しきつてゐる。そつと輕く兩手を胸にくんで見るとトキトキトキとかすかにこれでも紅の血が流れてゐるのかとうたがはれる位、この胸この身體どうしたつて黄色い鳥が來る樣にならなければ再び紅の血の通ひ路もない――あゝ胸毛の黄色い鳥よ早く來よ、そして此胸に生命を與へよと幾度日に呼んだであらうもう來る時分とどんなに私は待ちこがれたであらう、それが今朝白い床の上に見果てぬ夢のあと追ふて冷たい乳房の上に手をくんでもう起き上る勇氣も無かつた時――突然ピーピーピーと懷かしい聲がする、おゝ來たのか鳥よ、私はお前をどんなに待つたか知れない――とパツトはね起きた時胸の血潮もトキトキトキと大きく高鳴りして廻り始めた樣な氣がした、來た來た可愛ゆいのが幾つも〳〵ピーピー枝から枝へと鳴き交してゐる、お前は春のお使だらうお前が來たのでやつとこれから信濃は春の生命によみがへるのだよ、いきなり頬や指先を痛くする樣な冷たい風は柔かい肌ざはりになつて私の胸も解け始めるのだよ――すると綠の野が續いて紅や紫や黄やなどの花の小道が自然と出來て砂の樣な霙が南へ南へとゆるやかに流れるのだよ――すると京の處女が針もつ手に未だ見



春の花　上毛　冷花子

ぬ信濃の春を夢むのだよ──お前はよく忘れないで來てくれたね──そして私の淋しい暗い心をお前は春に返しておくれ──時々やる瀬ない思ひにどうしてよいかわからない時優さんと肩に手をかけて問ふてくれる友がほしかつた──一處に泣いてくれる友がほしかつた──けれどもうそんな友も今はほしくないよお前が歸つて來てくれたから──それで私の心は充實されたのだもの、周圍をはゞかつてそのかいま見て愛してくれる樣ななまぬるい友の愛よりもお前の方がどの位、なつかしいか戀しいか知れないよ──私は今日からお前と一處に春の歌を歌ふ人となろうよ、あゝ胸毛の黃色い鳥よ私はお前を戀してやまないよ──

信濃には才人多し、これまた其一。小才を弄し小成と安んずるの人ならずんば幸なり（評）

○黑髮の歎

近江瑠璃香

毬子は藤鼠紋羽二重の衣、立春とは云へ未だうら寒い木枯しの、餘波緩う流る・廣緣に延べて、胡羅蔔の樣な手にせつ〳〵と篦附けしてる。六坪の庭の片隅に南天の葉サヤ〳〵靡いて、手水鉢の水影ゆら〳〵ゆらと……。

「私、嫌だわ一寸動いても緋絹がヘラ〳〵煽るんだもの」

「えゝ、緋絹は厭ね裾風にさへフハつくんだもの」

「況んや、誰やらの奈良風に於てをや」

「アツハ、、、」「オホ、、、」

丈成す黑髮兩手に繰擧り乍ら、私も毬子の滑稽さに思はずホ、、と打ち笑めば鏡の眸にも見えて……。

惜むらくは胡蝶の白羽に似たる其の頰の櫻の花瓣に優る多きを──などと黑髮は怪しきや、眉にも髮にも波打ちて。

頓て毬子は衣紫メリンスに包んで部室に這入つて來る。六疊の居間には机二脚と長火鉢と、重ね簞笥の前にはお炬燵を置いて、父樣は一心に新聞を讀んで居らつしやる。

這麼狹い場へ來なくたつて、座間は幾等もあるものをやつぱし賑やかなのが好いかして、毬子は狹い〳〵と愚痴し乍ら、ブツクやペーパーの散ばつた中に挾く、國語の下讀に餘念も無い。

二度計りサラ〳〵と櫛を梳いて、合せ鏡して髻御させは「困つたものだ」と云はぬばかり、母樣はお火鉢の上に互み交りに手を翳し乍ら。

「お前もう少し蕭洒結へないのかえ、これぢや結つたのか結はないのか一寸も判らないぢやないかね」「だつて性來の縮毛なんですもの、それに一寸彈力なんて無いんですし」泣きさうな顏して云へば、もう少し氣を附けて

「そんなことあるもんかね、寢像が惡いからだよ、枕しなくちや」亦しても母樣のお小言が始まる。

あゝ情ない、漆黑ならばかしが何になろう。

鉄脱枕は盜人の番ですつて被仰るＲ子さんさへ、毬子さへ、毛は少々赤いけれど艷ものり彈力もあれば、一度梳いても奇麗に揃ふ、器用不器用はあらうけれど思へば口惜しく妬ましい。

世の女の慣として鴉の濡羽の黑髮を、誇らぬ乙女はあるべきか。

「とかく女は髮型つて、私も同じ女だものうまく結ひ度のは山々だけれど、綿の樣なフニヤ〳〵した毛は、少し周圍を出し過せば直ぐ樣子振る女の腰にも似て……。

一寸でもよく見せて遣りたい母樣のお情の程、決して疎には思ひませぬ。けれどけれど……見る眼懸しきルイザ巻、偖はローマとやらんも、一絲亂れぬ姿こそ今は仇なれや。

「私は母樣似だから爲樣がないわ」わるいことゝは識りながら、投げ出す樣に云ひ切つて、せめてもの心遣りとする自分の心が可愛さう。飾る一簪、ピンクの薹は誰がため？

黝々油沁んだ櫛のそれ〴〵を綺麗に拭いて、拔毛も集めた後を丁寧に掃いておく。

母樣が毬子の春着縫つてらしやるみ前に、私もちよつぽり座つて例の代物掻い撫げる。

えゝ何んてゝすか？天保時．のかと思はれる母樣の小紋縮緬ですのよ笑はないで下さいまし……。

どうせお前に持たせると徴くちやにするからですつてホ、、、。

乙女の胸をそゝるてふ歡樂の潜みの樣に柔かな、そして斜めな小春の光線は、頓て來ん日の若葉のひらめきを、四本五本立てる庭木の梢に與へて、古い綠の色素を誘つて其の葉の一つ〳〵、枝の節々をもかつきりと東面の障子に限取つて。

溫かい常世の春!!それはいとも永くあるものを、近頃の私の胸には絶えず何物かを誘ふ不安さの、あくせくとして或る影を得んとして居る。

それが何物の影なのか、自分にもよくは判らないけれど……。

思ふ樣にも針は進まないのに、日足の早いこと〳〵。障子の影は段々南に手を伸して、あれあの納屋の雀さへ……パンを求めん相談か、二疋ながらふくよかな小首を傾げてる──其の姿さへ……。

四邊寂としてもの思ふによき日曜の一時!!!。

パンを求めん相談かぢやない。お揃へなのが羨しいわとあるべき所なり（評）

評論

○漫言

編輯局選

宮城縣　ふく子

▲小説をよめば多情多恨になる、墮落するとて手にするをだに父兄に禁じれてあるから甚麽名高い小説でも見た事はないと、いさゝか誇れる面持でさる人は語つた。幼より父兄なく女親の一手にある程度まで放任に育てられた私の、無論よみ物などに何等の牽制も受けないから小説であれ何であれ自由に見た、中には齒の浮く樣な戀愛ものもあつた、嘔吐を催ほする樣なものもあつた、けれど別に悪い影響も及ぼさない、却つて之によつて幾多の敎訓を得た樣に思ふ。

一體小説を恐れる人の心持がわからない、世人やゝもすると類少ない人事件を小説的と云ふ、昔の小説なら知らないこと、暗黒方面にしろ、光明方面にしろ今時の小説はこの社會の實際をかくのだ、小説を恐れる位では社會にも安閑として居る事は出來ないではあるまいか、小説を恐れる父兄はよろしく子女弟妹を箱へなり籠になり入れて、座敷の隅なり山の奥なり避難させるがよろしからうと思ふ。ついでに申しますがしまつて置くものには兎角蟲がつき易い相です。敢て强者ぶる譯ではないが小説などにチヤームされて墮落する者は弱者だ、此の人はよし小説をよまなくとも社會の影響で墮落するだらうと思ふ。

▲私は前に小説であれ何んであれ自由に讀んだと云ふた、かう云うと何んとなく物を澤山よんだ樣に聞こえるが、どうせ田舍者の事だから大いして讀んだ譯ではない、この僅によんだ小説の中で何が一番感が深いかと云ふと德富氏の「思ひ出の記」である。其の事柄、一字一句趣味津々としてつきない。それから荷風氏の「冷笑」と、短篇ものではあるが獨歩氏の「惡魔」等である。嫌なのは木下尙江氏の「良人の自白」や菊地幽芳氏の「己が罪」だ。本誌新年號の中村春雨氏の同窓會を皆樣は何んと御覽になつたか、失禮だけれど私は彼麽馬鹿らしいものを近頃見た事がないと云ひたい、婦人を虚榮、色慾の奴隷と看做したものではあるまいか。

大家の作大家の作とて必ずしも隨喜の涙をこぼすに足らない大家悉く傑作許りするものではない、却つていまだ名の高くない新進作家がうまいもの許り書く、本誌の佐藤ます子さんや加藤ふで子さん、其れから前島ゆり子さん等はさうである、ます子さんの一月號の

「意外」などは實に立派なものだ、下町式のあでやかなそして滑稽とさびしみと含まつて居る、再讀猶あかない。白鳥氏の「平和」をよんで現代の小説が多くての樣な具合に書かれてあるを嬉しく思ふた、何時迄も色情専門の小説を歡迎する時代ではない。

◬人、よく新聞小説などと云ふ風に新聞小説を輕んずる、何故此麼事を云ふだらう、單行小説にしろ、雜誌小説にしろ、小説は小説でないかと思ふて居た、ところが輕んぜられる理由は大にある、と云ふのは新聞小説となると其の作者が眞面目にならないではあるまいか。昨年中報知新聞に「松風村雨」と云ふのが出てあつた、作中に中島と云ふ人物があつたが何時の間にか中島が久保田と變つて了つた、今國民新聞に「花地獄」と云ふのがあるが其の中の松永が松波と化し淺子と云ふのが濟子等とある。一體讀者が忘れぬ中に本家本元たる作者が忘れるとは怪しい。原稿料の手前もつと眞面目になつて頂き度い、新聞小説なんか等と輕んぜられるのは作者として恥ではあるまいか。

◬小女雜誌—と云ふたとて一概には語られないけれど—其の誌友倶樂部を見るとおかしくなる。何處の何子ちやまどうか交際して頂戴なネーだの何子姉ちやまどうか交際して頂戴なネーだの何子姉ちやま御變りなくつて等と無暗にちやまが用ゐられて居る。よくあんな甘たるい事が云ひ得るものだと思ふ。

◬本誌の誌友くらぶが近頃大相よくなつた、二三年前迄に隨分噴飯に堪へない樣な事があつた交際を求めるに親愛なる諸兄姉だの、男子の方でもよくつてよ、厭はないわと仰有る二十一世紀とやらの姫君もあれば秀才の方でなければ交はらぬと云ふ未來の良妻賢母もあつた。月のよい夜に尋ね給ひてよと申さるゝ風流の君や、亡妹の遺物なる白粉や香水を送るから手紙を貰ひたいと云ふ情緒纒綿たる殿方もあつた樣に思ふ。失言多謝（地黄）

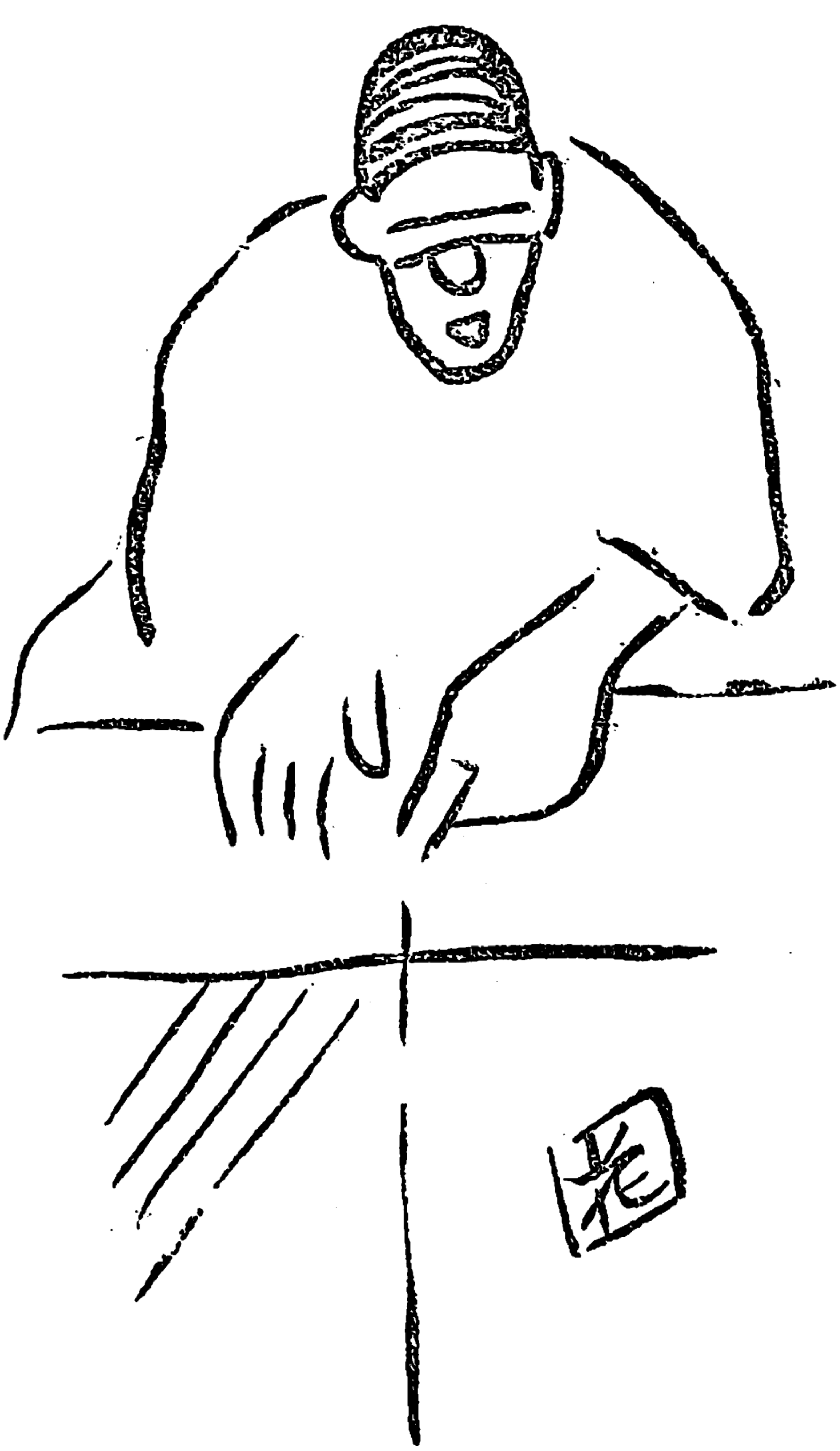
當つた言も、當らぬ言も、あるが、これだけどしく言つてのけたのは男氣がある、他の諸嬢も大いに振ひ給へ（評）

◎獨身生活

福井北明星

尋常科の女生に、皆さん大人になつたら如何な人になりたいですかと或日書かせて見ましたら、五十の内半分は美しい嫁樣になりたいと書いてありました。高等科の女生に書かせて見た時も裁縫や何か上手にやれる樣になつて嫁入しますと書いてありました、して見ると女子と生れて、一度は是非人妻と呼ばるゝの資格を得る事は小學生の頭から持つてゐるのです。それ彼等の中、中等教育の道へ踏み入り、さあ女學校へでも入學したものなら如何でせう、あなた一生の目的は…私

獨身…私も獨身…私もよ、こんな聲のみが半數だらうと思ひます。私達も左樣だつたのです、よく覺えてゐます、偶に一人も家庭へ入りたい樣な顏付をしてゐると、忽其の人に打つてかゝつて冷笑します。後者を冷笑すべきでせうか、前者を冷笑すべきでせうか、日本は上古より女子は妻となる本分があるのです、唯の一冊も獨身生活を尊ぶ書を書いた學者はありません、もしそんな事を書いた學者があるとすればそんな人は學者でも無學者です、から申しますとなんだ生意氣な女だと仰いませう、又大人物の女もあらうと仰いませう下田歌子樣があるのを知らないのだと仰しやるお方もありませう。及ばぬながら日本の獨身生活でえらい歌子樣をも存て居ります、だけど斯る人は例外であります歌子樣は何か一つの堅固な意志を持つてゐらつしやるのです現在表はれてゐるじやありませんか國家の爲に大いに盡力してゐられます歌子樣等の御仕事はお一人でなければうまくやれないのです、妻となれば家政をとらねばなりませんから、社界の事業をおてされません、私は去年まで獨身の熱病者でしたの、今年になつて全快致しました、どんな藥でだか自分も合點がゆかないのですが、唯むやみに人間學の書を讀むでゐたのです、諸孃樣何卒不本分な獨身生活を唱へられぬ樣に



水邊　下總　花岡千代子

願ひます、獨身生活を成さる人々は配偶者が有ては成就できぬといふ事業の人です、唯何でもない者にはてんな生活は必ずできません、よくかんがへて御覧なさい、世間にも例があるじやありませんか、大家のお孃樣で前主義にて結果結婚時期も暮れ悲觀し、病氣になつて世を終つた人もあります、又俄に墮落の緒につながれた例もあります、目的無しの人が或る一人のすぐれた人を見て、前主義を唱へる人ならば未だ意志が薄弱なのです、斯る人の中に必ず大失敗が生れるのです、皆樣學ばれた智力を有益に應用して下さい、そして賢母良妻といふ四文字を心中に大書せられて、結婚時期に後れない樣に御注意をなさいませ。（入賞）

議論としては尤もですし、又斯うなくてはならないと思ひます、只それにしても自覺力の薄弱なのが心細い（評）

○地主と小作人

千葉　伊藤さく子

農業は人を健全强壯に導くもとひ、戸外に出でゝ活動し自然の美に接するから詩的でなる、農村は實に幸福であると思ひでありませう、生存競爭の烈しい都會の人には然う映ずるでありませうがさて中々そうで無い、地主は鬼に角、小作人側の有樣は實にみじめなものである、たとへば五人の家族にせよ、其家で十反歩小作して、得る處は僅である、農業は急いで出來る仕事でない、一粒の米を得んには苗代田に種子を下し、發芽を待つて、本田に植ゑ替るまでも、中々手間どれるのである。其上肥料をほどこし雜草を取り水を調べ、半ケ年の末に漸く刈り入れるのである。それより米となるまでの辛苦は一通ではない、かくて一反歩にて得る處の米は、地主に納め、殘る處は僅である、計算して見ると五人の家族にては哀れむべきではないか、一日僅八厘、あゝ哀れむべき小作人等よ幾多の辛苦の上成れる處は僅に八厘とは、それが豐年の年である、不作の時は得る處は無い、私は此れ等の事をひまに任せては計算し、小作人等が如何にしてか利益を得る法なきかと考へた。空想に過ぎないが全村あげて地主小作と云ふ事なく、地所なるものを等分にしたら、貧家は幸福となるであらうと思ふ事が時々ある。貧家は一生動が取れぬのである、いくら働いて得る處は僅であれば、昔より田地持はやつはりその通りである、哀れむべき小作人等よ、一日八錢の金を得んとて、雨にぬれ、日にさらされ、其辛苦いかばかりぞ。

次に農村の雇人等である、それこそ一日僅に五錢か最上にて七錢にて一ケ年主人の爲に身の自由を束縛されつゝ、命令通りに從ひて主人の爲に働く、主人は雇人をして已れが手足の如く追つかひ、氣に入らぬ時は頭上よりしかり飛ばす、それに服從する雇人等よ、八錢の金を得んとして、身の自由さへ束縛され、小天地にくらせる雇人等、衣食の道難さかな、曝に聞く都會にて女中など一ケ月得る處は二圓より三圓何がしと、給金は高價ならずや、地方にては女中など一ケ年僅に十五圓より二十圓止りなり、それを忠實につとめる女中は哀れだ。

口語やら文語やら、殆んど文の體を成して居ないが、評論文としては眼の着けどころが宜い（評）

▲諸孃よ、評論文を作りたまへ▼

◎文學、社會、婦人問題、家庭問題、何でもよろしい、諸孃の考へ相應の題を取つて來て、批評し論じて御らんなさい、女性だからとて評論が出來ないと云つては困ります、稽古の爲お作りなさい



短文

編輯局選

○窓によりて

長野縣　山越たかの子

人の心をそゝる様な生温い風に池の半ばを掩ひて咲き亂れる連翹の花が水面にこぼれて小さな波紋を描く、それがだん〳〵廣がつては消え廣がつては消えして、靜まらうとする水を何うしても靜まらせずに、絶えず動かしてる、私はふと〳〵弱い〳〵女の心、些の事にも動き易い女の心の情けなさを、しみ〴〵思つた。

花の精であらう、ひら〳〵と黄色な蝶が一ツ舞ひ出した、正午近き日光が虹の様に美くしく、織ひかけてある金絲銀絲の牡丹の花の上をこつて、疊を二三枚奥迄這つてゐる、白い雲が夢の様に南へ流れた。

○春の夜

長野縣　駒澤ひろ子

いつとなく雨の音がやんだ、私は、机にもたれて、二分心の赤い灯の下に、ノートへ日記をつけてゐた、紅い灯の光りが窓越に、ぼうつと庭へ流れてゐた。

櫻の花が一様に、寂しい光のある涙を落す音、そこを流れてゐる溺つた小川の何やら囁いては解け、囁いては解けする之れらの音に、ふと耳を傾けた、あゝ去年の今宵は、田町の姉さんと顔を寄せては人生を語り、又想ひに耽つたが ―今は唯一人ぼつち姉さんは、今頃あの少ゝ窶れた顔を俯向き加減にして太い息を吐き、私を思つて、美代さん（小姑）と向ひ逢つて針を運んでゐるであらう、かく姉さんが頭の中に描かれて、私の眼には、もう涙が一杯淀んでゐた、あゝ今宵の様な夜は、姉さんと語り續けて眠りたい――、花の涙を落す音が一層痛く胸にこたえて、ペンを持つた手は、わな〳〵顫えてゐた。

○あゝ美代ちやん

京都　ほづ枝

「姉さん死ぬと天の神様のお傍へ行けるつてね如何してあんな高い高い天へ行くの？」

「それは美しい神様がお迎ひに來られるの！而して美代ちやんの手を引いて連れて行つて下さるのよ」

「ソウー　だつて天はつまらないのね」

「どうして？」

「ホラ見て御覧！　あんな白い雲があるばつかりよ！チツとも面白かないわ、私死ぬの嫌！」

「アラ那様事ないのよ――美代ちやんの好きなリボンを差して美しい着物を着て、綺麗な女の神様と遊ぶの――美しい可愛ゆい花もたんと咲いてるわ」

「本當？行きたいわ、でもお安排が癒らなくちやあるは　私お人形を持つて行く事よ」――

櫻がハラ〳〵と散つて白い雲が靜に流れる夕暮！美代ちやんはお人形を確り抱いて睡る様に死んで仕舞つた。

○狂亂せる群集

越後　翡翠子

廣やかな道路の眞中には縁日のカンテラの明りがぼんやりと輝き、腐蝕せる瓦斯の香は群集の中を立ち迷ふ。並べ立てた植木棚の赤い花が一片はら〳〵と群集の力に吸ひ込まれた。

幾軒となく續いた格子戸の中には、華かに化粧をほどこした女がうねりゆく群集に向つて間斷なく叫んでゐる。――赤い女。桃色い女。紫の女。黒い女。――彼等の顔には一様の暗い影が漂ひ、瞼のあたり一様に悲痛の微笑が青く動いてゐる。赤錆びた刄を磨るやうな聲も狂亂せる群集には肉の叫喚と化し、強烈なる白粉の香は女に使徒と變り、腐つた瓦斯は益々群集を狂亂せしめる、虚偽の人生も茲に至つて祼體の否を語つてゐる。

かゝる群集の中を縫つて行く女よ。否よ。冷然として群集を馳せ拔け、嘲笑ひつゝ格子戸の中の女を打眺める。――おぼろ、おぼろなる八重櫻の香は、狂亂せる人々の息と共に暗い天地に立ち迷ふ。

○情死

南千住　白妙女

けたゝましい氣笛と共に凄い響きをたてゝ幾

つかの貨車の過ぎ去つた、後は又元の寂寞に返つた、情死だ男は學生らしいと義兄さんは食べさしの茶碗取り上げた、義姉さん見て來ませうと、私は或る一種の好奇心から妙に見たかつた、日暮里と書いた字が黑く死人の如くおぼろに浮んで居る白へ板の下にまろい棺が置かれてあつた、多くの人は皆去つた跡で、見苦しい死がいは見られなかつた、長く長く横たはつて居る軌道に若き人の燃るやうな、血が肉がと、想へば云ひ知れぬ恐怖が湧いて來た、やがて物足らぬ思殘して歩む時情死か、ちくしやうめ味なことをやつて居やがらあと、ふたりづれの職人が意味もなく冷笑して行き過ぎた、氷のやうな月に軌道が氣味惡い程光つて居るのが私の胸をそゝるやうに深い、いんしやうを殘した。

○春の日

長野縣　小林美喜代

若いく血潮の如な雨が、夜もすがら降り濺いで、裏の小川は赤く濁つて大分騷がしくなつて來た。

黃色な脚の鶺鴒が、赤い水のにじんだ川端に白い胸毛を膨らませて、枯れた草葉の底に靦かに春の女神が惑まれた、うす青い芽の二三點、ともするとそれを啄んだ。

汚れきつた垣根の雪は美しく洗はれて浩かへつた如に白く、やゝ甘い風が、青女の手で押し固められて鬼角鬱閉がちの人の心を解くやうにフハくと肌をふくもいとをかし！。妾はその白い雪を九谷燒の皿へ山の様に盛つて來て、窈

つとお砂糖をふりかけ・眠むさうに小說を讀んでおる兄さんに振舞ふと『好い春だなア』と矢張り心が解けたらしく……あゝこんな日蔭の臺は膨らみ、美しい鳥は新しい巣に白い玉子を幾つも幾つもお產するのぢやあないでしようか？！

○冷氣

里

遂にならなければ、とけないわがかみをにぎつて——素足で、つるくとした緣先へ——ひしくとおしよせる足の裏の冷氣は、わが五體の熱血をさまさずにはやまない力をもつておるひしくとおしよせる冷氣は——全身の氣孔をぶつくとあはだたせて背は氷の肌着をきたやうにひりくとうづく——そのあわ立つた手は紫色に、赤に——うつくしい血も、汚ない血も氷りついた樣に、紋型をつくつて——ときぐしもつた右の手はぶるくと、ふるへながら、氷ついた樣なかみの、表面をなでておる。つめたい髮乙でも血が通つてるのかしら、その長い髮つと一本ひいてみた、かぢけた指先で——チクリツと針でもさしたやうに、やつぱり通つておる——ふと——兩手を頭にのせた、全身の熱がみんな集つておるやうにあついと——それにくすぐ傳はつておるはずの此かみのつめたさ——ハツと驚愕の眼みはつたせつなのおそれ、まるで蛇のまきついたやうな——一塊のわが髮が、わが頸筋にまつはつておるつめたいかみが——

○この心

葉蘭

海も都も知りません、何時か我祖先が藻の樣にたどりついた、この寒い山の中の町に、あの追ひ立てる樣な息苦しい、どよめきの中に、物心ついてから、幾年か印象の深い年を送りましたが。あゝ血の多い身は何時か華かな都の空に、やる瀨ない憧憬を持ちました。けれどそれは許されない恰度あの美しい星を望む樣なものと知つてからは味ない灰色の邊の色調が、いらだつた身を靜かになだめる樣に瞳に流れ込めば、黃昏の喧しい響まで痛ましくそして懷しく破胡弓の戰慄に胸の扉に低音いて行きますけれど。あゝ……。松に渡された未だ青い物干竿に連つた銀玉がぽとりと落ちて、水溜りにずうくと紋を畫いて消えてゆく、燃える樣な眞紅な南天がほろりくと厚い涙をおとす晴間の紺青の空を見つめた時は、心の底にそゝる樣な涙がにじみ出てやつぱり淋しいく。

臆何時になつたら此心がとけるのでせう！。

○お君さん

橫濱　京子

お君さんが勤めに出る如になつてから、がらりと何もかも著しく變つた、髮の工合から、風姿の動作までが見違へる如になつた、每朝宅の前を通る時、きつと障子越ににつこりと輕く辭儀をして行つたものだ。

それが半月經ち、一月となるに連れて、此頃は宅の前を通る時も强ひて避ける如にこそくつと小走りしたり、時には わざと、外方を向いて知らん顏をして歩いて行くやうになつた、あ

る雨の日だつた、傘を忘れたとみえて、丁度舍の退刻頃を、俥に乘り沒して得意氣に走つていつた。其の中に何か故障か、落度があつたと見えて舍の方を退いてしまつた。
それからは餘り宅の前も通らない、そして幾分か昔のお君さんらしくなつた。

○草の芽

千駄ケ谷　清水幸榮

私は何思ふともなく物思ひに沈みながら獨りぶらぶらと川堤を歩いて來た。空は深々と碧み渡つて、何處かにくつきりした物影がひそんでゐる樣な氣がする堤には初春の柔い日光がしらぐ\と降り注ぐ。表面ばかりはほんのり薄白く乾いて、歩くと下駄の齒の跡には褐色の土の顯れる――其處に私は不圖小さい青い物を見出した。と又其の一二尺側にも同樣のものが見える。――草の芽だ。私は凝乎と屈んで見た。芽は柔い褐色の土を輕く押分けてぽつと覗いてゐる新らしい一種の光澤がある。私は指先でソツと撫でて見た。――そして、此小さい草の芽までも春を意識して、かすかな呼吸をつゞけてゐるのだなと思つた。

○濱より

愛知縣　大谷春江

第一信。借りた家が卽ち之です。之は別荘にと造られた建物ですから、私達には勿體ない程の洒落な物で、庭續きで渚に下る事が出來、汝はその垣根まで寄せるのです。松を吹く春の暖い濱風と、月と打ち寄する波の音とを枕に合はせる今宵の夢はどんなでせう。暖かからうと寒からうと、皆な君の事で御座いませう。

第二信。打ち寄する春の柔かい波が、つひ十日前に降つた細い雪の樣に碎けてゐる岩の上に蛤取の樣な姿は卽ち私です。夕日が今沈んだ計で、蛤を取つて歸る所で――今夜は蛤のお汁です、が君と一緒に食られないのが、何だか味無く思はれます。

第三信。朝渚の眞砂をサクく\と踏みつゝ新呼吸してゐた時、ツとSさんと出逢ひました。が亦しても話は君の事ばかり、是非とも來て下さいね　これは私達の家の垣根の櫻ですが、一片一片と早や散りますよ。



洗濯　大阪市　大關照葉

○濱にて

越後　瀬里田靜江

影を追ひ行くわが足許は、いつか又この濱に立つてゐる。白くかわいた砂の上に腰をおろして心ゆくばかり眺めると、夕日を洗ふ沖の浪の彼方に遠く、水平線のあたりに、佐渡の島山が紫の色して淡く見える。『彼の岸に誰れか立つて此柏崎の濱邊を想ふて居やしまいか……？』
ぢつと見つめてゐると、瞳がつかれてうつと

まする。夕日が海に沈んで、渚に打ち寄せる波は一度毎に暗くなつて來る。

渡の漁家には紅い灯が點いた。雁の、鳴くやうな艪の軋りは下浦へかへる漁船が……？私は夕闇におそはれて家に逃げ歸つた。

○春雨

牛込區　西村しのぶ

春の雨は、とろけるやうな春の甘い香と、悲哀とを纒綿の一絃々々に含ませて、デリケートな自然の音樂を唄つて居ります。

シトシトと、軒端に落つる雨の雫――それが、濤の中に散らばつた白い貝殻や、色の褪せた薄暗い瓦の壊れ等にあたつては、美しい水沫を散らしてゐます。

靜かに靜かに雨が降ります。

窓に凭つて、睡眠不足の頭を抱へ乍ら、ボンヤリと物を考へてゐますと、一種しめやかな春の哀愁と云つたやうなものが、痛切に頭に響きます。

夢をさゝやく雨の音――それは彼女の心を、美しいしめやかな、夢よりうつくしい幻の國に誘ふて行きました。

○夜　病葉

私等姉妹は、早く倦怠して了つて、潜かに室へ戻つて來た。二人とも申し合はせた如に無言の其の儘、つゝつと縁へ出て、輕い吐息をも洩うした。深くときめいた胸は、未だ異常に動悸してゐて、堪らなく何物かゞ懐かしい傍、云ひ知れぬうら悲しさがひしくと感じられる。

庭の噴水は高く〳〵一杯に迸ばしつてゐる。心地が好い。親しく眺める岸の櫻は、其の力餘つて返る水に、絶えず噴き戯はむれられて、なよ〳〵と悶へてゐる。

朗な夜だ……？　時折襲ふ微風に、花は和らかく揉み拂らはれて、ひら〳〵、又ほろ〳〵と、何處へか漂ひ散る。朗な夜だ……？　飛んで來るしぶきの冷さが、熱した唇に心地よく刻み掛かる。あゝ朗な夜だ。奥からは未だ三味が聞こえる。室の灯が帶に映ゆる。

○春の悲哀

山口縣　梛良美那子

ビユービユーと障子が鳴る――、

生温かい潤みを持つた南風と共にわき出づる雲、空は黒暗々と墨を流せしが如く、何物にかおさへ付けらるゝ様な、重苦しい此の胸、汗がにじむ、私は煤けた障子の傍で、薄衣越に見る様な鈍い光線を便りに、針の手を運んで居る。

ビユービユーと障子が鳴る聴叉、翔のはげ目の風を含んで、あの音、あの聲、泣くが加、叫ぶが如――何と云ふ悲しい音樂でせう。

「小野の小町と云ふ人は、ほんに氣猛の戀知らず」と願ひを帶びた何とも云へぬいゝ聲で、「數へて見れば九十九夜、來るは誰故小町姫、雪に埋れて死する共、」と歌つて居た母は何につまされてか、ほろ〳〵と、私は小兒心にも悲しくて、折角友仙着せた人形をなげ出して母様の膝に泣き伏した、十年昔の悲しき記憶母様はきた赤い手柄の丸まげだつた。向ふの竹籔がざわ〳〵となびく、と又一しきり悲傷の曲？　針はもうちつとも進まなくなつた。

○春來る日

伊豆　水の花

何の氣もなく、歩いて居た道。ふと石垣の根もとに、目のさめるやうな、生々した、青草の一かたまりを、見出した。ハツと思つた。やさしい軟かさうな、細い葉ふめば、直に破れて終はうけれど、生きよう〳〵とする、努力はあふれて見える。見て居るうちに、冷く氷つてしまつた様な、私の全身の血しほが、温湯を注がれたやうに、少しづゝ、とけ始めて來るやうな、妙な感じがする、恰度その霜柱が、朝日にあたつて、ミシリ〳〵と、くづれ始めるやうに……。

昔は、心なく見過して來た、一かたまりの草の葉に、春來る姿を見る。ほんとに、なんてあはれな自分だらう。やゝともすれば、熱しやすいあの頃の私を何物をも、冷に見流し得る様なものにして終つた、力も恐ろしいが、今日は、「春」と云ふもの、偉大な力と、しみ〴〵と、涙の出る程感じた。

○鮭

秋田縣　小島あるは

其の日の夕方私家で食べた鮭は男女の情死した死骸と一所に同じ網に入つたのだらうとい評判を聞いた時に母は毒なものでも食べた様に氣に懸けて、夜更けてから皆吐瀉いてしまつた。

けれども私は其處に氣分も惡くなかつた、其死骸の兩人を見たくて堪らなかつた、また一人で行つて見るのは淋しくも思つた、澤山の村人が死骸を取圍んで居る其の間から、そつと見たかつた。

死骸を見る爲めにお友達を誘ふことも云へなかつた。少しも、見ず知らずの人々であらうけれど、何となく私の心を引いて、花の一枝なりと手向け度くも思ひ、朝薄暗いときに起きて、遙か濱の方に向つて、知らぬ、兩人の爲めに祈つた。

○母の顏

信濃　長谷川未女子

亡くなつた當時私の胸に印象された母の顏は殆一つをも餘さぬ生前其儘の顏が明かに殘されて有た、そして夫は又母以外の人の誰からも見出す事の出來ぬ私の母丈が持てゐる顏で有た、常々からよく似て居ると思つて居た田舍の叔母ですらも其死從の母の顏とは似も付かぬ樣に見えて仕舞つた。

私は夫を知つた時何だか寂しい樣な併し又嬉しい樣な氣がした。

五年を經た私の母の印象の顏は多くの人に同化してゐる事を感じた、若かい或人の中にも亦年老いた或人の中にも母其時々の面影を何處かに偲ばせる樣に成つた私の母の顏いつかは全く凡ての人と同化した漠然とした顏となる時が來るだらう。

私の胸には云ひ知れぬ悲しさと寂しさが湧いて來た。



郊外　澁谷　眞木ふじん

○朝の海濱

堺市　高橋岸子

薄霧かゝる朝の海は、何と無く嬉しい。沖には白帆が霧の中に浮いて、出入の船が入交じる、——青黑い滿潮は浪おだやかに、鏡面すべる小舟に、芥淨風に、平和を破られて、小さく波紋を作つて居る。今先始つた魚市は、ヤイヤイワイワイ何を云つてるのか、澤山な聲で分らない、——黑衣の人波を作つてる。橋の方から來た人、片手を袖に、ブラブラ振て—— 後から斑犬がついて來る、——魚籠を石の上にドカリ、落して人波の中に消える、〆た、と許り犬は、籠に近づいて、右左とかぎまはる。濱邊から筒袖を着て、來た人、ボンヤリと懷手をして市を見てる男と、顏見合せて、何やらいつて、一寸頭を下げた、筒袖の人は、モミ手を仕ながら沖に眼を遣つた、男は、アー、と欠伸をして、背伸をした。

遠くの汽船は、夢の如く煙を吐いてる。

○月の梅

安房　吉田秋子

窓の外は竹のさゝ葉が、僅かに私語くばかりの靜寂である。

私は讀かけの書籍を閉ふて、裏庭へ下りるとうすら寒い夜氣が、ひやひやと柔かい肌に觸れる。

銀盃のやうに白く冴えた月が、半開の梅が枝

にさしかゝつてゐる。更に清い泉水の中に影を落して、葦は見べくもあらぬ景色である。
淡い床しい花のかんばせが、何處ともなく漂ふて、疲れた精神には、言ひ知れぬ快さを覺える。
しばしの間、大理石像のやうに冷たくなつて立つてゐたが、この頃久しく音づれを絶えてゐた、都の姉に消息を書くべく、二枝ちぎつて室に戻つた。

○畑に立ちて

岩代　多都子

梅が香を含んだ、なだらかな南風――鍬持つ手息めてはつれ毛かき上げれば、コバルトの空に、雪の冠眞深な、吾妻山は、峨々として、一幅の名畫を見るやうである。去年の春樂みにとて造つた此畑、コークス交りの赤土に裳裾からげて グラリ……グラリ、鍬に弄れる不馴れの吾が姿を笑ましげにみつめられた母は、既に、此世の人ならず……誰れにまみえようとて？淡雪ついて萠え出た、青芽の數々――私は、葉末の白露にさへ心置いて、サグリを入れた。新らしい、そして、濕めやかな土着た菜よ！早く花咲け！さや碗豆も、粒らかに實れ！
あゝ、思へば〳〵、其花を其實を、悲哀な鐘の音に傳へて、母に捧げねばならぬ私は――淋しい。

○花の姿

京橋　白蘭

はあさん御らんなさいお廊下にまでこんなに花が散つてまるで雪のやうね 姉樣はかういつて櫻貝に似た淡紅の花びらを紅い唇にあてた。
滴るやうな高髷根元に卷いた幅廣の銀丈長が又なく榮えて、濃い紫矢絣のお召ともすれば燃立つ樣な緋の振りが長いお袖から疊にこぼれる姉樣お髮がよく似合ひましてお美しい事蕉園樣のお畫そのまゝよ、あらいやなはあさん、につこりしながら、ぬけかゝる銀簪をぐつと挿された時、指輪の石がキラット光つた。

○祠の前

大分縣　美音子

少し離れて拜殿に腰掛けてる友の無言は續く足許に落ちてた黑い庇の影が大分廣くなつた。狹細い町を這はず空計り動いてる樣な、柔かい大きな風が時々思ひ出した樣に吹いて來る。僅の間の沈默と靜寂は、總べてを明して後の寂しさ！誇りなさ！（慰安を求めるためでなく只一寸の機みから……）を沁々と感じさせる。吁！何故話したろう？甚麽氣で話したろう？父てふ文字を知りて言葉を知らぬ不幸の二人！友は心から思つて呉れてる、私も兄弟以上に慕つてるが、合會ふて三年！未だ一度も涙見せた事もなければ沁みりとした話をした事もない、多くは自己を離れたもので、互に出來るだけ避けてた。訴へるに足らぬのではないが、唯何故か眞の我姿が知られたくなつた。吁けれども、自分から脱いだ衣！凝つと唇をかんだ。友よ友よ！何事も言はないで下さい。

○東京へ

小石川　秘筐子

ナア房、兎に角俺ア信治が處へ行く事にきめたゞから、……早い方がいゝ、明日の夜船で、なあ、心細かろうけれど一時よ、東京さいつて、いい奉公口でもあつたらすぐ呼ぶかんなあ。
元氣なくかういつた父の顏を見たお房は、たへられなくなつて、泣きふした。
私は―私はいゝけんど……夜船でなんか……もしもの事があると……お金がたりなけりやお神さむに話して、かりてもあげますから。
ナニ心配な事があるもんか、夜船は沈むと、定つた事もあんめえに。
お房は泣きやまない、母親が死んでまだ日も淺いに、若しまた氣の弱い父に、あやまちがあつてと思つて……

○夜半

濱松　時子

夜半すぎの、殊にはこのあたりの人通りは、絕え果てゝ天地は今や靜まりかへつて居る。其所此所に見える軒燈の、薄暗い光りの及ぶ所だけが、僅に物の黑白をわくるばかり、溝の流れる音さへ耳に立てきこえて來る。この暗い路をやゝ急いで、今しも笹卷鮨の角をまがろうとする途端に、突然人の姿が現はれて、近寄つて來た。駭然として足をとめると、其人影は頰冠をした丈の高い男で、すた〳〵と彼方へ、通りすぎて行くほつとして、其から一層足早に、吾家の前迄

來て、やゝ暫く、何をかきゝ出さうと足をとめたが、一家は悉くねたと見えて、咳の聲一つだに洩れて來ない、何所か遠い半鐘の音がきこえて來る。

○春の思ひ

名古屋　小川悅子

昨日今日庭の小町櫻は優ゆり微笑み初めた。一輪、二輪、小さい赤ン坊の唇にも似た愛らしい花片のしほらしさ……?淋しい磯の佗住居にも樂しい春は訪づれて來た。溫たかい日影の流れる南緣に櫛箱持ち出して亂れた髮をなで付ける。昨日結つた初丸髷の根が早や少し落ちかけて、淡紅色の鹿の子しぼりも淋しかつたあゝ十六の人妻は……鏡に寫れる淡きやつれよ!肩上げの無い淋しい肩のあたりを、そとなでゝ縫ひかけの羽織を手にした、船がは入つたのか、靜かな朝の氣を破つて汽笛がけたゝましゆう響いた。振り面白い松の木の間をもれて夢の樣に白帆が行く……、片袖を付け終つてそつと肩へかけて見た、派手なおぼろお召の長い袂……しみぐ紫紺の袴が戀しくなつた。「十六の君のマダムぶりさこそと思はれて」とA樣のお言葉なれど……私は何やら物足りなくつて!!! ふと見やる彼方にカモメが飛んだ。眞青の水の靜けさ……。



のれん　京都　江林心野

○春の日の午後

近江　井上千代

六時頃——森の中に入ると何かの花の香りが漂ふてゐた。——その時、妾は路を迷つて、鍬をかついで來た農家の男に路を尋ねた、その男は甚く丁寧に××へ出る路を敎へてくれた。……その男の瞳——妾はその男の瞳をどうしても忘れることが出來ない。今でも思ひ出すと目前にちらつくやうで……。

と妾は夢の樣なことを思ひながら、そして微笑んで、××町の方へ步いてゆく。

風は子供の寢息程もなく靜かで堤に一本の菜種の花が、棄てられた娘の樣に咲いてゐた。美しいと言ふよりは、いたはしいやうで。……

○溫泉場

美作　水田邦子

ポツ——と白い湯氣は上つて湯面はとぎ澄ま

したる鏡の如！中の眞白い砂が一入美しう、所所の小石さへ明瞭と知てある、そこからブツブツと涌き出てゐる。

早朝だけに入湯者が少い、先生と妾に下女、他に見知らぬ婆さんが一人。お脊流して貰ふ時の心地よさ。

○暖かい日に

德島縣　行雲

好いお天氣なので井戸端へ出て洗濯をしてるとポカ〳〵暖かい事まるで魂がぬけ出た樣ぼんやりして御飯たきやらお掃除やらにワサビ下しの樣にあれた手が機械的に働いてるのを見つめてはあゝ父上が此世にましますのだつたら今頃は私も民樣の樣に女學校へと思ふと胸が苦しく目は熱く……フト我に返つて洗物の手を急ぎ家に歸ると母樣はお火ばちに寄つてお手をもんでゐらつしやる一昨年來リユーマチスでなやんでゐられるので私の姿を御覽なすつて貞樣……貞樣にも色々すまないのねえ父樣が御壯健でゐらしつたら貞樣の好きな學校へも思ふ樣にねえそれを思ふとつてお顏をそむけてそつと……あゝ母上のみ優しいお言葉に接しては日頃のつかれもどこか行つて色の黑くなるのや手のあれるの位何……美しい女學生を羨んだ心が何だか罪深い樣な感がして又しても熱い淚が止め度なく流れるのである。

○淨瑠璃聞きし夜

名古屋　牛田富子

「十年に餘る宮仕へ」とやさしいあの顏によく似合ふ紫地にこぼれ梅の上下が左右へゆら〳〵、あの口元、慈悲深いやうなあの目、あゝよく似てる私が戸隙子につらまつてやう〳〵立ち始めた頃、信州の飯田とか云ふ小い町へ貰はれてゐつた復異いの義姉さんそつくりだ、をさない時別れた故かそんなに思はなかつた義姉が今急に戀しくなつかしく覺えられる「今こそお秋も氣樂に暮してるが信州へいつた當時はずゐぶん苦勞をしたよ」といつか義姉さんのお寫眞の來た時おつしやつた、御父樣の御言葉を思ひ出し、其頃の父や義姉の心が思はれて、もう淚で語つてゐる人の顏が幾つにも見える、頭を上げてるのが堪えられなくてうつむいてしまつた、チヨンと輕い拍子木の音に、ふと舞臺を見た時には、もう其人の姿は見えなかつた。

○寒夜

北の國　利喜子

ともすれば足駄が橫に辷つて、ころびさうになる、てら〳〵と凍つた街路を、妹と肩をすりよせて歩いた。おこそに頰を包んで、兩袖をしかつかりと胸に重ねてゐたけれど、八つ口のあたりから、足元から、ひし〳〵と寒さが押しよせてくる。雪は止んだのかと思つて、電燈の下でみると、やつぱり降つてゐる、散つてゝもくる樣に細かい雪がふわり〳〵と。雲の多い空には靑白い星がやゝ凝なさゝうに瞬いてゐる、電線は始終顫へてゐた、家へ歸つて、ドヽヽヽと溢れ出るお湯に全身をつかつた時、何といふ平和な心になつたらう、恍然りとなつて了つて、身動きもしないでこゝろゆくまでつかつてゐた。城の巨木のあたりで、梟が鳴きはじめた。

○兄樣

紫陽花

姉樣がお嫁に行つてから一ケ月程たつた。お母樣の御用事で姉樣の家へ伺ふと喫驚して了つた。姉樣は丸髷に結つてゐらつしやるんだもの。大變見かはしなすつたけれど、私は何となく嬉しくつてもじ〳〵と姉樣のお顏を眺めた。小さい丸髷のお姑樣と言ふ方も出て來た。

遊べつて勸められたけれど、恥かしかつたから歸らうとすると、お髯の美しい姉樣の婿樣が出ていらしつた。默つてお辭儀をすると、「綾子さん泊つていらつしやい。姉樣の宅で……」と笑ひながら仰しやつた。姉樣の婿樣だから兄樣だ。「兄樣！」と言つて見ようかと思つたが、何だか極が惡くて言へなかつたので止した。

○胸を抱きて

茨城　はてべ

昨夜はとう〳〵一睡もせず、淡き火影にやうやう求め得た××集を、たゞ無意識に耽讀した。

「――名に憬がれて、若きおん身を誤りたまふな」

御親切はありがたいけれど、誰か樣ちやあるまいしまたそんなに墮落しませんのよ。

かの時、友は豫期せぬ失望と、猜疑の眼をもつて私を見た。勝ち誇つた私は、密かに痛快と叫んで微笑んだ。

○野原

京都市　中村ふみ子

朝から降つてゐた春雨も、夕方になつて霽れた。私はふと駒下駄をはいて庭園に出ました。そして垣の連翹に凭れて夕べの野原を眺めました。

若々しい青草は柔かい緑を雨霽の空にほんのりと反射して、所々露が白う燦めて、森の輪廓も劃然と際だつて、只その蔭の薄暗いところには、濆然と霧が立迷つて居る。

黒い濕つた徑を荷車が音もなくすうと行きすぎた。

東寺の塔影が徑を横はつて草の上に長く映されてゐる。塔の尖は夕日に赤く〳〵光つて居る。

春の雲は目映しい程白く輝き乍ら、ふわ〳〵と軽るさうに、野原の上を走つてゐる。

○海

岡山市　桃の村女

大きな懐の様な灣に香爐に似た島が二つ浮んでゐる。砂ゴたひの濱には人の丈ほどの低い松が遠く這ふてゐる。芝生に打伏して心ゆくばかり眺めやると、大島の山の烟はほのかに風にあふられて北に靡いて消える。水天一髪の彼方に淡黒色に見えるのは四國路の山だ。あゝその岸にも誰か立つて此海を見て居やすまいか。白い帆が風ふくませていくつも〳〵浮んでゐる、ちつとも動かないやうに想はれる。じつと見詰めると瞼が疲れてうつとりする。午下りの陽が昼つて潮が函つたかと思ふと、汀の蟹の穴あたりから薄紫の霧が湧いてくる。若し蝶となつて其の中へ溶け込んだら何んな心地がするだらうかP櫓の音が近づくゝ藻の花の香りがする、波が起つて投げ捨てるやうに岸に寄せた……自分は迷想から覺めて切なる悲し味をおぼえた。

○繪師のゆくへ

東京　瑞野楊子

灰いろの雲の低く垂れた、寂しい冬の木立。冷い巣にこもる、小鳥の聲は衰へて、羽ばたきの音がするどい。

林の間の一すぢの道。果は、何處まで、緩いてゐるのだらうか、あの山の麓へまでも。裾野は一面に、菜の畑だときいてゐる。いつの冬だつたか、やはり今日のやうに、灰色の空氣のつめたい日、冬の林を寫すとて、一人の畫師は畫板を提げて、この道を奥へ〳〵と、辿つて行つたが其末に、菜の畑を見たであらうか。

今は、黒や、茶や、灰色などの、沈んだ色の繪の具を筆に、含ませれば、畫かれるやうな、寂しい冬のけしきである。

蝶はまだ、飛ばない●山の雪がうすくなつて、胡蝶のもつれとぶ日、其あとを追つて、霞の中の、廣い菜の花畑を見たい。

○幻の春

下關市　山本芳子

空が錦踊いろにすつきりと晴れて、紅梅が甘い匂ひをすいすいと流す頃になると、河岸の柳の黄ろい花が柔かい光線を孕んでたつぷりとふくれて來た。するとその中から蜜の様に甘い春風が生れる、明るい水の上をそよそよ泳いでゐる、そして暖いことつたら、柳の木に凝乎ともたれてゐる私の身體が、とろ〳〵と溶けてしまひ相だ、それに心までが春の情緒にしつとりと濡れて、何だかしみじみと思ひ出が湧く様に思はれた。四邊の靜けさに醉ふて凝乎と眼をつむつてゐると。

やがて網膜に歌麿の浮世繪でも張りつけられた様に、淡紅色の美しい幻がたくさん映つた。するとと身體に操られる様なたゆさが湧いて、若い男の前にはにかむ様な氣分になつた。美しい幻惑からさめてある悲哀に囚はれる。南國の少女の春はさみしいものではあるまいか。

○紅いつぼみ

信濃　百瀬流葉

裏の丸木橋を渡ると、左側に古いしだれ櫻の大木が有るのだ。春に成るとよく細かい雨が降りそゝいで、紅いつぼみの先から紅い雫が落ちる、あゝあの紅いつぼみ、血のにじみ出る様な色、私はあの色を見ると、無闇に二年前上京された幸さんがなつかしくてたまらないのです。

雨のふりでに名がたちそめて
　雨はやめども名はやまぬ
おもしろいぞや今咲く花は
　散のちりばは知らねども

各地誌友評論（六）

▲横濱（下）

一記者

◎横濱の人を語るに當つて、小說を書く人以外に逸すべからざる一人がある、小川せん子なり。

◎せん子の名は紙上に於て、然うけばくしくは現れなかつた、併し向日葵の名を以て、温雅純情なる詩を作つたのは既に四五年以前の事に屬する。

◎初めは詩を作り、後ち文に移つた、文は純抒情式、主觀的のもので、尤も女子文壇式を發揮したものであつた、『今の婦人』に出た『見るも夢、醒るも夢』は其文の情熟し、氣熱して、高潮に達したものであつた。

◎以來、昨年あたりから（『新文章』の『生の斷片』以後）せん子はふいに筆を執らなくなつた、彼の如く純なる情を持ち、戀を語るに美しき空想の翼がゆくがまゝに語つた人が、昨今路傍の人の如く、行つて顧みざるは何故か、彼女は結婚したのである。

◎結婚と共に、感情の覺めゆくは是非もなし、さりながら、感情の荒まざる限り、理智の訓練を經たる感情は、より高く、より熱したものでなければならぬ、單にせん子のみならず、結婚の洗禮を受けた後、昨の夢を抹殺すること、黒板の白墨を消すがごとくたわいなきは遺憾とする處である。

◎良妻となつても、賢母となつても、感情の美しきは人は、永遠に感情を傷けずに其暖かさと、淸らかさとを保つてゆくであらう。發表すると否とは其人の意志に存することで、吾人の忖度する限りではない。

◎只、妻となつて後、感情を發表するものは、妻の名に對し、實に對し、反感を抱くものゝみ徒に多くして保存されたる純なる情を語るものは殆ど稀だ、世間の實際は必ずしも然うであるまいが、去りゆく人を思ふと多少の感慨なきを得ない。

◎松井靜代は横濱の人と云へないかも知れない、初め東京に在り、後ち（昨年あたり）去つて横濱に赴いた月草と云ふ雅號がある。彼女も亦横濱に去つてから、作も多く、技倆も上つた。告白、感想の文も書くが主として小說に筆を染めてゐる。

◎昨年中に月草女の作（小説）は何程あつたか、調べてみよう。

島の女。　三田の姉。　最後の日。　不具。　葬式。　執着。

◎右の諸作は凡て昨年の下半季以後から今年にかけての活動であつて、最近の作としては、本號に『疲れ』が載つてゐる。

◎月草女は矢張松田姉妹の如く、男勝りのしつかりした氣象を持つてゐる、只松田姉妹に比して一層理路を辿ることが明晰なだけ、感情の方に於て、柔かさとまるみを缺いてゐる、神經の尖つたやうな處があつて、彼女の作品は、手ざはりが硬い。

◎さあれ月草女は、一つの個性を持つてゐる、一寸他の啄くを許さぬ充實した氣分が作の上に表はれてゐる心持の硬いのは時代の所爲であらう。

◎臼井冷花は純横濱の人らしいカラーを持つてゐる、『哀音の行方』外二三の散文があつた、甚だ筆ぶしやうな人と見えて、作はたえ〴〵であつた、野のものとも山のものとも分らぬ間に消滅してゆく一人であるかも知れぬ。

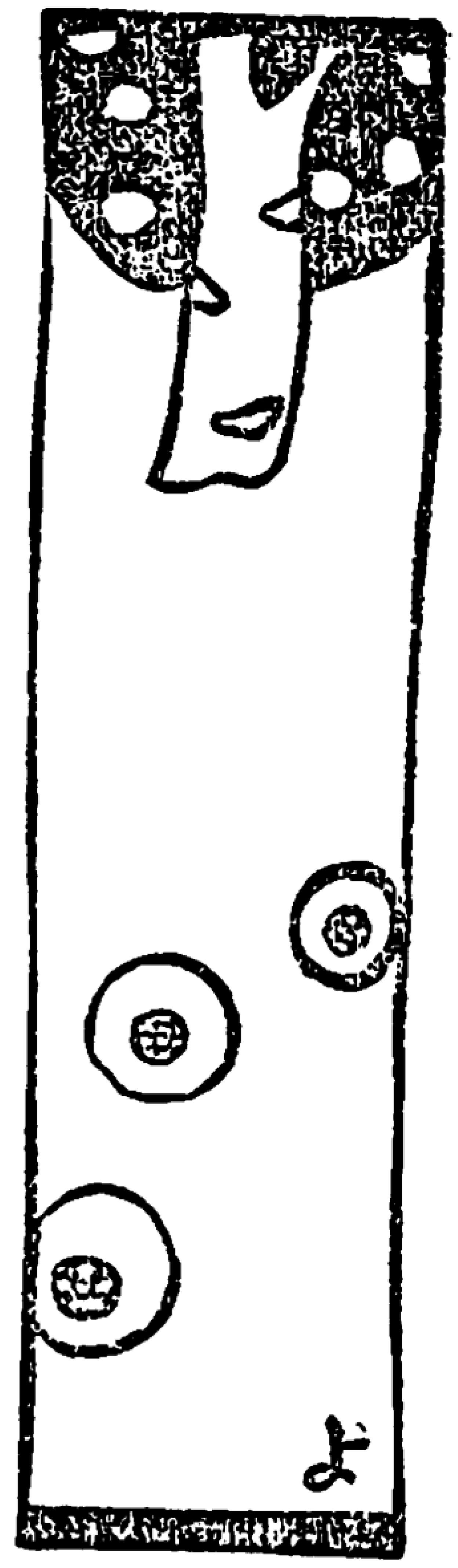
◎近頃小説欄に都鳥と云ふ雅號で、小説を書き出した人がある、昨年十二月號には『流産』と云ふのが地賞になつてゐる、紙上には出ないまでも、作は能く來る、此人は未だほんの來たばかりで、何とも判斷することは出來ない。

◎それから木村涙花子と云ふ人がある、しうん子とも云ふ、しうん子は、しゆん子の間違ひではなからうかと思つてゐたが、紫雲子と書くのらしい、紫雲子をしうん子と假名で書くなどは人困らせのお孃さんだ。相模金澤の人。

◎木村女は散文ばかり書く、能く增刊に出る、文章は可もなく、不可もなく、あつた事、思つた事をすらりと書くだけで、別に著しい色彩に富んでゐるでもないが、何となく溫和な風丰が思ひ浮ばれる人だ。

◎其外、横濱附近には猶ほ二三の隱れたる投稿家が居るけれど、今暫く評論を逸して置く。

◎兎に角、横濱と云ふ地が、個性のある人を二三ならず産出したのは面白い現象だ、或は今後それらの人々は横濱にゐないかも知れぬが、多少の感化は受けてゐるに相違ない、又作物の上にもそれが見えてゐる。吾人は東京の都會趣味と相俟つて、横濱の港の趣味が一つの對照だと思つてゐる、港の趣味！如何に自覺した現代の女にふさはしい趣味であらう？。



俳句

内藤鳴雪選

○(天賞)
苗代の一絲亂れぬ王土かな　秋田　みねよ

○(地賞)
かたくなのねぢけの首の雛かな　島根縣　多美子

○(人賞)
かりそめの病ひ癒えて針供養　秋田　ゆきよ

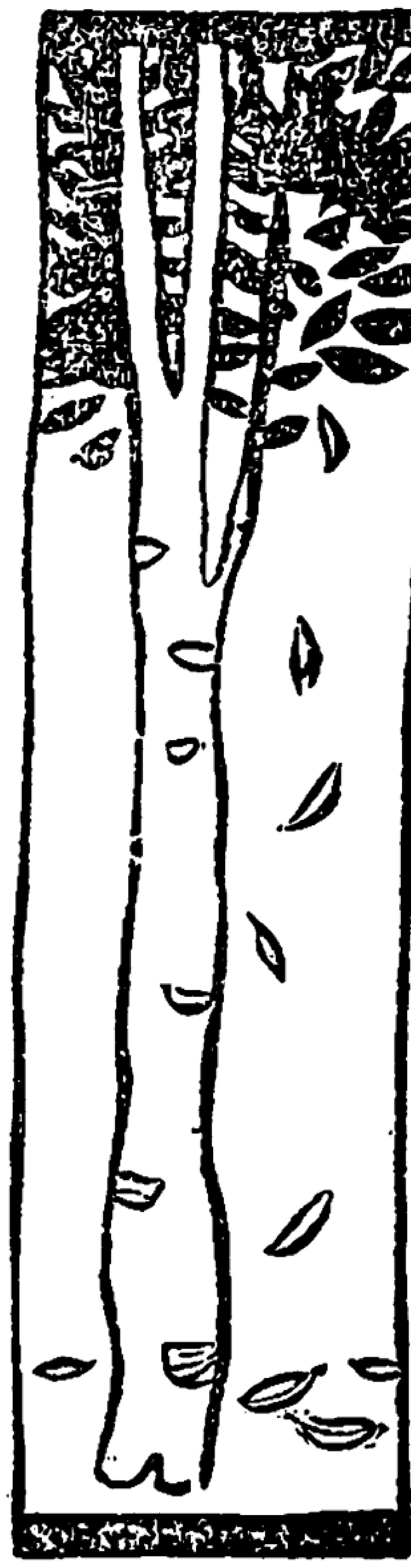
佳作

春雨や三千の美女皆眠る　越後　翡翠子
行く春を足の爪とる男かな　本郷　山村こと子
初櫻鎌倉武士の朝湯かな　宇都宮　桜井清子
神の灯に君と語るや春の暮　宇都宮　たま子
睦まじき梅と柳の灯かな　宮城縣　齋藤靜子
花實や戀ならなくに袖の露　福岡市　市川ひさ子
千羊を野邊に放つや春の草　宮城縣　高橋輝美
横顔の人美しや春の宵　滋賀縣　つぎ子

わが夫はりゝしき人よ梅の花　日本橋　小林政子
春雨に烏の歩む小屋根かな　宇陽　松井清子
祇王寺に尼と櫻を訪ひにけり　京都市　みどり
一ふさの實を重げなる梧桐かな　山形縣　智惠子
少女子やせり摘む岸の水鏡　羽前　長澤美や子
春日和火桶は灰となりにけり　伊勢　花堅子
京の橋京の水月の朧なり　靜岡縣　岩田このは
紅櫻の灯のさす雨の柳かな　靜岡縣　中村みどり
苫かけて動かぬ舟や春の雨　岡山市　宮山千登勢
相逢うて物言はぬ人や暮の春　羽後　しげよ
朧夜や花盜人の來さうなり　福岡市　筑紫饒子
夢さめて京人形の行方かな　下澁谷　倉増すゑ子
春草や日に喜こべる馬の顔　横須賀　三輪ふさ子
雲の峰小山の上に重りぬ　島根縣　とよ子
淡雪にうき我が戀を喞つかな　牛込區　西村しのぶ
野みち行く小馬の息や春寒き　北海道　今村りせ
いさゝ川蓮花の束の流れけり　王子町　大浪春子
ねて起て猫は戀しぬ春日和　信濃　工藤清子
焚火する土塀の陰や梅一枝　京都　君子
新らしき火の見櫓や冬の月　茨城縣　夢香
青柳やどこまでのぼる高瀨舟　岡山市　柿園百花
夢に見し人もなつかし暮の春　秋田　夢の人
離宮ある山をめぐるや春の水　秋田　三浦ふみえ
青麥に野寺の火の見遙かなり　大阪市　野村たき子
過ぎし日の都なつかし水仙花　越後　藪里田靜江

眠むさうに薺の花さく日和かな　備前　小川大局子
晴るゝ日や桃さく寺の開山忌　仙臺市　赤間くに子
温泉にちかき茶店の桃の一木哉　足利　飯塚米子
青ぬたや後の山を焼く曇り　横濱市　新井新緑
旅人に猿が投げたる椿かな　横濱市　三橋朱雀
小狐の遊ぶ菜の花月夜かな　下關市　日下とよ
梅白く詩聲明るき小雨かな　府下　横谷ゆき子
春の野やどちら向いても人遊ぶ　上毛　悲花子
枳殻に霰ちる夜や寒念佛　堺市　西村みち子
古猫の街を横切る朧かな　秋田縣　小島あるは
花ざくや尼皆若き嵯峨の寺　仙臺市　新木あさ子
若鮎や川邊の草も二寸　群馬縣　松居雪子
青柳のかげに洗ふや刺見皿　群馬縣　かをる女史
舟の醉柳の風にさましけり　上毛　冷花子
ひと村は似た家多し桃の花　上毛　荒井よし子
宣長は濡れておはしぬ花の雨　下關市　青山美子
いそ〳〵と岡越ゆけば夕霞　美作　橋本繁
もの思ふ我をのぞくよ窓の月　那須野　月井千代
紅梅やよき子の多き嵯峨の家　京都市　中野ふみ子
うつろ木に溜りし水も温みけり　奈良縣　奥内美代子
若芽乾す女美くし濱の春　京都　森本俊子
花の雲流れて遠し隅田川　岐阜縣　佐藤史子
若草や心床しき牧童　栃木縣　宇佐美園子
朝風呂の遊女に留ひぬ梨の花　三重縣　平田露子
春の夜の夢の名殘りや京三里　岡山市　立岡房子
夕映や花野の果ての富士白き　静岡縣　杉本ゆりか
ありし日の士俵めぐりて菫かな　山口縣　いさを

三つ葉つむ故郷の畑や蛙なく　紀伊　宇田すゞ
薄日照る障子に影す落椿　上毛　阿久津小胸子
暖かき春に戀あり朝ひばり　上毛　宮田くじ子
畑道に人のどよみや桃の花　大阪　橋本みつ子
病僧の日向に臥すや木蓮花　信濃　酒井治子
春雨をうらみ顔なる小猫かな　神戸　山村秀枝
鶯に雲林院の灯影かな　愛知縣　安藤溪泉
霞から佛も出たり京の市　愛知縣　大谷春江
芳しき草に集ひぬ歌の會　鹿兒島　松崎しま子
山鳥の聲もねむたし春の雨　千葉縣　松本ふさ
別れたる人戀ふる日や春の雨　渡島　岸浦露華
京の妓を里に見る夜や春の雨　小石川　みや子
椿一つ落ちて波紋の大いなる　熊本　白萩
ふと覺めて夢忘れけり梅かをる　宮城縣　纓子
美しき人はのめきぬ青簾　城南　小島鈴枝
塔見えて山は櫻の盛りかな　大阪　龍女
春の水野を平らかにめぐりけり　神田　蔦の葉
春の空淺間が岳のけぶりかな　長野　喜惠子
大江山岩屋の口や春の風　舞鶴　雪子
春風や衣桁をすべる女帶　東京　ゆめ女
山吹の未だなじまぬ隣かな　京都　みさこ
此の里は酒屋の多し桃の花　群馬縣　新井つま子
舟中の客皆仰ぐ山椿　横濱市　山崎美鳥
白酒や姉妹の多き草の家　下關市　山本芳子
鶯の厨に來啼く山家かな　宇都宮　松井清子
長安に佛迎へる日永かな　宇都宮　松井緑子



初作 編輯局選

○女子文壇の讀初め

那須野 月井千代

春とは名のみにて寒氣きびしき私の地方は、冬枯の淋しい野邊四方の山には殘雪がさむさうに見えますが、一人庭先の梅のみは春らしく笑をたゝえてをります。

今日は節分なので、午後より仕業を休んで、炬燵に這入つて、女子文壇をよんで居りました。私は女子文壇に接する度に思ひ出します、今から五年前、恰度私が十三歳の春、伯父樣が出京の折、私にと買つてきてくれました女子文壇と云ふ雜誌、それはくうつくしい雜誌、有益な事が澤山のせてあります。そして皆樣の御美しい御作を拜見する事の出來る、こんないゝ雜誌が外にありませうか、私の如き無學な者をも善道に誘導して下さる良師と、幼ない心にも深いく印象をあたへられました それが動機となつて、年に二三度は必ず文壇社の御手を煩はしますが、年一年と御隆盛に赴く女子文壇社、愛讀者の增加遊ばす事、實に驚くの外はありません 女子敎育の進歩する樣が皆樣の御作を拜見してもわかります。

が悲しいかな私の如き淺學な者には、皆樣方の御美しい御作も了解する丈の力が御座いません、其の度每に私は泣きます、自分の果敢ない境涯を顧みて、私とても血の湧きかへる若き女ですもの、皆樣のやうに美しい文も作つて見たう御座います、自分の思を書きたう御座います、けれども才なき學なき私にはどうして皆樣のやうに文章が綴れませう、五年間一日も忘るゝ事が出來ない女子文壇すら、每月あがなう事が出來ない貧家の少女ですもの、夜は五分しんのランプの許で繩をなつたり晝は炭俵（炭）一枚一錢三厘を十五枚位は作れます。かうして得た金は文壇を買ふ料と致します、すると友達などがそれ迄に丹精して取つた金、衣服でも買つたらと申しますが、私は思ひます、表面の美を飾つてなんとしませう、一時の虛榮です、それよりか永久絕えぬ心の美を養ひたいと思ひます。（地賞）

これこそ正直なほんたうの初作、これだけ筆が動けば外のことも書けませう（評）

○日曜日の午前

靜岡縣 杉本ゆりか

日曜日の午前九時——何と云ふ物靜かな日和でせう。空は水晶の樣に澄み渡つてそよとの風もない。

妹は何處かへ遊びに出たのだらう、家の中はヒツソリとして居る。

女子文壇を見て居た私はそれを持つて日當りのよい南側の緣に出た。最う兄さんは來て緣から足をぶら下げた儘、敷島をくゆらしながら新聞を見て居られる。

輪に吹いた煙は、ゆつたりと昇つて次第々々に消えた。何處からか水仙の香が漂つて來る。

ホカくと十歩の庭を照らして居る日光に、白く彩つた朝の霜がジリジリと解けて庭から水蒸氣が一面に湯氣の樣に昇る。

緣先にマリ（猫）が長く影をひいて寢て居る。時々耳が動く。

私は干してある蒲團に座つて文壇に目を落した。と、頁の上に小鳥の影が躍つた、膝に來た。マリの顏に來た。庭石に行つた。と、今度は明るい障子に轉々と映つた。

チキチン、チキチンと鳴く。羽ばたきもする、面白い。どこに居るのだらうと庭を見廻はす。分らない。チキチン、また鳴く。影と見くらべて見ると直ぐ眼の前の山茶花の梢に――。

嬉が醉つた樣にホンノリ赤い可愛らしい鳥だ。けれど名は知らない。小首を傾けてチキチン、チキチンと鳴く。

寢て居たマリが突然山茶花に飛び上つた、と思ふと小鳥の影は消えてホロ〳〵と赤い花が二ッ三ッ四ッこぼれた。

今まで新聞を見て居た兄さんが、驚いて庭の方を見たが其の儘默つて新聞に目を移した。と、門の方から可愛らしい聲で、出て來い來い池の鯉、そこの松藻の……と、自分の敎へた唱歌を歌ひつれて行くのが流れて來る。澄んで來る。

ポカ〳〵と溫かい蒲團の上に横になつて文壇を見る。眼がチラ〳〵する。寢む氣がさす、知らず知らず夢の國の人となつた。（人賞）

細かく書いてあるだけだ(評)

○粗朶火

磐城　河上靜子

育縞の袖無半纏を着に白髮のお婆さんは、後の煤けた棚から火吹竹を下して思ひきり頰を脹まして消えかゝつた粗朶を吹いた、一時にぱつと燃え上る、自在鈎の眞黑な鐵瓶からは白いふは〳〵した湯氣が時々上る爐の角の金網には堅さうな餠が狐色にこんがり燒けて居る。お婆さんは前掛を縫つてる銀杏返しの若い娘に「おつや今少し柴を折つて來な」といひつけてちよい〳〵器用な手付で餠を燒いてる。そして先の話を繰り返す「久松は何んでも楠樣のお胤で操丸樣といはつしやつたんだげな」と痛はしさう、蓑と笠とが懸けてある土間を後にして草鞋を造つて居た四十男は、側の脂臭い煙管に火をつけてチューと一吸吸ひながら「いたみいうた物たな昔は、お染も何でも身分の有る人の娘たつてなあ」と感慨に堪へぬ樣。外には靜かな春雨に落ちる椿の音も聞える。小さなランプの灯影で先の無い筆に墨をこて〳〵つけて、一字々々ためつすがめつ清書を書いて居た男の子は、川口精一と姓名を書いてほつと安心し：らしく筆を置いた。そして「何處の人よ學校に上つてるのかい」と頓狂な聲を出した。皆んなはどつと笑つた。お婆さんは急須に番茶を入れてグラグラ煮えきつたお湯を注いだ。番茶はサツト浮いて小さな泡は一つ一つ消える。さあお茶がはひつたよと茶汚で黑い茶碗を揃へた、緣の缺けた盆の上には堅い餠がいつぱい盛られた「どうしたかなお松は、精三は未だ眠らないかな」と一寸振り返る、娘は襖を半分程明けて「おつかさん精やは未だなの、お茶よ」と優しい聲。春雨に濕つた粗朶はともすればぶす〳〵燻るのでお婆さんは一心に吹きつける。お山の鐘は九つ打つた、春の夜は更け易い。

初作とも思はれないが――(評)

○淋しき夕

名古屋　匡子

寒い〳〵と思つてな大寒も小寒も過ぎて見れば早いもの、もうこれからは暖かくなるのだと思ふと何んだかうれしい、それに今日は珍らしい溫かい日だつた。未だ子供が表で賑かして居る。

妾は無意識に下駄をつツかけて、表へ出た、何を考へるともなくぶら〳〵と歩んで來て、ふと氣がつくともう四邊は人一人通らない、淋しいうすぐらい野邊に立つて居るのであつた。

だん〳〵夜のとばりはおろされて、今まで美しかつた、オレンヂ色の西の空も、ブラツクに變つて、星が二ツ三ツ少女の瞳のやうに輝き初めた。

ある一部分のみは、寂しさを感じたけれど、もつと〳〵遠くへ行きたい、もう少しと、又東の方へ歩いて行つた。

去年の夏頃は美代樣とお揃の、浴衣に羽二重の帶を結んで夕方になると此道を通つては涼みがてらに、參詣者の絕えた事のない、物部神社へ

お参りにいつたのに、あゝ懐かしい美代様はもう二百里もはなれた見知らぬ土地へ行つておしまひ遊ばした、今年の夏からは行く友もないとぼんやり考へて、つと頭を上げるともう目の前の雪月花で三味線の音や大きい笑ひ聲がどつと起る、半玉のかん走つた聲もまぢつて、えゝじれつたい妾はあの音が一番嫌ひ、馬鹿ばやしのやうなあの音!!

もう歸りませう空には星が一面にダイヤモンドでちりばめた黒い幕のやう妾は此頃一人きり、靜かな所を歩いて物を思ふのが何より好きになつた。

○入院の知らせ

長野縣　山の女

郵便との聲にあわてゝ立出で配達のさし出すをおそしと受取り何所からと見れば、營内の兄様よりの葉書である。しかも鉛筆のはしり書で、昨日の進級の知らせと共に其後も別にかはりはないとしてあつたが今日又つゞいて送られた。どんなことだらう。前の方など少しもかまはず、中ほどの二三行を、見たら、まあ。衛戍病院へ入院とある。あまり出しぬけだからもしやと思ひながら今度は始めからていねいに讀んで見たがやつぱり同じだ。もうかうなつてはじつとして居られずあわてゝ父上に知らせんと父上の居る小屋の方へかけて行つたが、大變道が惡るいほんとにじれつたい父上に見せると父上はじつと見て居られる。自分はまちきれて何も云へない父も未だ何んともいはない。只葉書を見つめておるばかりである。其中やつと口を開いて「兵隊とも云ふものがそうやんでばかり居たじやあだめだ」と云つた、自分はこんな言葉をくりかへして考へて見た。そして自分の一人むすこがきうくつな軍隊生活をして居てそして病氣ときくやさしき父上には思ひきつた言葉だと思つた、我父は心の中ではあゝかあいさうだ、さぞ困るだらうと思つても、口ではさう云ふ弱い事は云はない。この時自分は「でも兄様は行きたくつて行つたのぢやないしそして一體お弱いからね!」とわずかに云ふと父は「弱いものは兵隊にはとらぬぞ」と言葉少なくしかも鋭い御聲で、自分はつひだまつてしまつた。

○小豆島遍路日記の中より

岡山縣　蒲　壽香

鹿忍の海は紫に暮れて磯邊の砂のみ白く長く續いた。初々しい順禮姿の二人の小女が腰うちかけし岩の面には無數の貝殻がすがり付いて星のゆらぎにきらく\と輝いて居た。

遠くの宿で打ならす同行者のあはれな鉦の音を聞きながら、聲もなく俯向いた二人の頰にも、熱い〱涙が流れて居た。

あゝ牡丹花咲く四月二十八日!

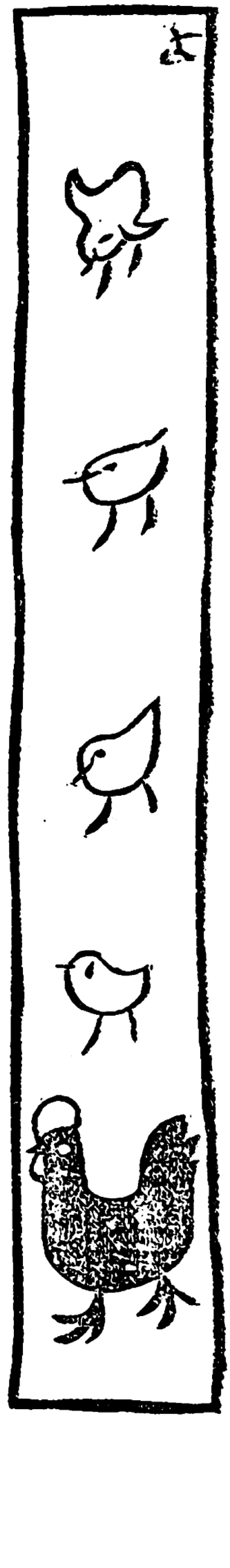
鹿忍の磯の岩の上に二人は實に漂泊の最初の佗しさに泣いたのだ。

夕霧に包まれた、はるか向ふの堤の上には宿なくさまよふ順禮の黒い影が動いて居た。

○若き尼

澁谷　小林しげ子

其寺!!それは古い〱尼寺でした。半ば傾きかけた軒、ひさし!!かべは落ち草は繁う何百年かを經た人も住まはぬお寺としか思はれません。其お寺にも春は參りました。赤白とり〲の桃の花は今を盛りと咲いて居ります。とある夕!!!その桃の木の下にしよんぼりと立つておる一人の若い尼がありました、年は二八か二九位。肩上深い白の着物に黒い袴!!顔こそ固めておるが色は白くて面長でした。その美しいまなざし引きしまつた口元高い鼻何處となく氣高くて美しい人でしたけれど!!其眼には曇りがあつて其口には憂ひを含んで居りました時々暮れ行く空を見上げては深い溜息をもらして居りますあゝ若い尼!!花も盛りの年頃をどんな事情があつたのかは知らないけれど尼にならずともすんだらうものを……きつと故里の情深い父母やなつかしい姉妹の事を思つておるのでせう?ふと思ひ出した樣に手をのばして低いところの桃の小枝を折りましたそして其花を頭にかざさうとしましたがはつと氣が付いて捨てゝ了ひました。



読友くらぶ

書籍交換

○　土佐土佐郡一宮　　番田順子

▲不用の書　「作文百科全書」（桂月著）「女子文壇」二月號、三月號）「娘時代」雲舟譯「彼處に行く」鷗外譯「根一幕物」「藤村詩集」「覺めたる歌」「キリスト抹殺論」（秋水著）

△入用の書　「進化と人生」「科學と人生」「哲學雜誌（二月號）」「文章世界」「青鞜」「中央公論」「白樺」（何れも三月號）「ニイチエ語錄」秋聲著「黴」白鳥「泥人形」

但し右、何れも貸借苦しからず、若し御申越中御返事致さざる時は謝絕の意に有之、乞ふ諒せられよ。

○　近江國水口町　　細野鈴蘭

△讀みたき物　岡崎櫻洲著「最近琵琶歌集紅梅の巻」御不用のお方樣私所持の書と御交換を願ひます若し御承知下さる方は御一報を願ひます

その節私所持の書名申上げます

○　山城つゞき郡宇治田原村奥山田　　八田文子

▲持つてゐる本　「寄生木」「一隅より」（晶子先生著）

△讀みたい本　「寒潮」「女夫波」「乳姉妹」お持ちのお方はどうぞお換へ下さいませ、ぜひお送り申上ます

○　靜岡縣小笠郡相草村棚草　　鷲山すが

△みだれ髪　其の他晶子樣の歌集、何でもよろしう御座います御持の方は十日ばかり御貸し下さいませんか、御禮と申してたいした事も出來ませんが絹しほり、御望によつては本誌の古いの（三十九年以來）を差上げます

○　新潟縣中魚沼郡水澤村字宮の下　　村山ぎん子

△誌友の諸姉樣妾も愛讀者の一人でございます本誌第五年、一號から七號まで持つて居りますから入用の御方は、御寫眞を送つて下されば送ります外に婦人雜誌が澤山ありますから、エハガキを送つて下されば御禮として進呈します。（留學上の戀愛觀）御入用の方は女子文壇第八年一號か二號（第七年）を送つて下されば進呈します

○　下野今市　　高村たき子

△誌上の皆々樣夢二畫集何の巻でも宜しう御座いますが少しの間貸して下さいませんか？お禮は必ず致しますから……

○　長野縣下伊那郡松尾村堀割齋藤方　　秋野ゆふかぜ

▲所持の物　文章世界、ザムボア

△求むる物　ハイカラな絲にてあみしシヲリ又葉舟さんの『響盡』御入用な方は一週間とか日を限つてシオリ御送り下すつた方に御貸しいたします

○　群馬縣多野郡鬼石町相生町一五六新井や方　　新井紫水

▲持つて居る書物　自然と人生・ポケット小說生か死か、ポケット我が散文詩、歌二冊

△入用の書物　詩歌の集めたるもの（新派のものにて）美文の資料交換のぞみの御方はハガキで

本所區林町三の六内藤方

なか子

○

▲私のところに「南方の花」「思ひ出」「夢二畫集」の内「花の巻」「冬の巻」あり他の文學書と交換なし被下たし。尚大下式水彩スケッチ箱上製のもの譲りたし

高知縣土佐郡鏡野

磬田美智子

○

▲不用の書「二人やんちやん」「女子文壇正月號」風琴楷梯

△入用の書「高等女學校入學豫備書」裁縫指南普通禮式また外に四十四年の少女全部不用になつて居ますから「女子英語會話」其他英語の參考（なるべく會話）の冊子お持ちの方は御交換下さいませ

在布哇尾亞府島カワイロア

引地しま子

○

△誌友の皆様方新聞の内何地の新聞でも宜しう御座いますが當地の布哇新報と御換讀下さる方は有りませんか殊に東京内の新聞か藝備新聞なら結構でございます所有の分水彩畫法。大弦小弦。三味線月琴等曲獨稽古、美文之資料。音樂師。本誌昨年四月よりの分と皆様の編物指南。普通文學講義録。枕草子文章世界。農業世界。普通禮式等と御交換下さい。猶レターー繪葉書で御交際を願ひます

福岡縣福岡市東中洲町古川内

青木みどり

○

△妾の許に「金色夜叉の歌」スバル、新小説、本誌の趣きもの、深山の美人、それから、漢和中辭林など所持して居ますが諸姉様の内で「不如歸」（夢二畫集「琵琶歌」「スヰートホーム」「吾輩は猫である」其の外の書籍御交換下さいませんかお隣みの御方は右記までハガキにてお願ひします

大阪市西區三條通四丁目五十一番地ノ二

鹽見愛子

○

▲不用の分「やどり木、孝女芳江、姿見かゞみ、女禮式畫報、手藝と編物、處世百話、こゝろの日誌、こゝろのひみつ、女學世界種々」

△入用の分「驚く手紙、ハーモニカ獨習、金色夜叉、本誌の新年號順境と逆境」其他何雜誌でもよろし右交換を願ひます

福島縣若松市川原町

武藤蓮子

○

△皆様のうちに本誌九月號お持ちの方が御座いますなら下名まで御貸し下さいませんかすぐ御返却いたしますから御願ひ申上げます

長野市長門町樋口樣方

小林たみ子

○

▲持つて居る書物「猛火」「寄生木」「天國」「イワンの馬鹿」「自然と人生」「座右の銘」「萬葉集」「古今集」「田舍源氏」昨年分女子文壇女學世界婦人畫報

△讀みたい書物「秘密日記」「虞美人草」「花守」「花守日記」「言海」「少女の戀」「藤村詩集」其他文學的の書物御持ちの方は御交換下されたく。御送本下さい候御方には美人風景の繪葉書二三枚を御禮致し候

○

攝津池田驛局區内丸橋阪上惣左衛門方

白芙蓉

▲持つて居る書物　夢二畫集、旅の巻、野に山に、春の巻、秋の巻、さくらさく國、少女の戀、金色夜叉（紅葉全集の六）やどり木、自然と人生、歌集、我思ひ、乳姉妹、近世少年録、此の一冊肉彈等

△求むる書物　歌集（何んでもよろしい）文學講義録、和歌辭典、短歌評釋　父の罪、スケッチ初歩、和歌入門、和歌講義録、土佐日記等右の私のもつて居る書物は全部不用ですから交換下さるかお譲り申します交換下さる方は書物希望書名を書いて送り下されば間違ひなくすぐ送りますお端書を以て照會下さるには及びません

攝津國川邊郡伊丹どんど

栗山藤三郎方　月沖りか子

○

▲只今私の手許にはスヰートホーム、ホーネムーン、春泥集、寄生木、夜雨集、二人やんちやん、歡等不用になつて居ますからお望の御方はお寫眞（プラチナに限る）をお惠み下さいませ、そして青鞜、スバルなんかは御一報下さらばすぐお送りいたします

岐阜縣加茂郡和知村大字野上

枋之木　青山照子

繪はがき

○

●●●●

▲繪はがき　私は田舍に淋しく只本誌を唯一の友として居る者で御座いますが何卒繪はがきの交換が大好きですからどうかどしく御送り下さい御返事はしますからどんな御方でもよういしいよ尚お思召が御座います御方様は御交際を願ひます

○

▲外國繪ハガキ　　妾は萬國郵便繪葉書交換會の一員です送料二錢御送り下さればどなたでもその手續き及び外國人宿所を御通知致しますヌ繪葉書やレターの交換をして頂戴

名古屋市西區鹽町通小舟町森田清七方　吉象春子

○

▲霞ケ浦湖畔より　　誌友の皆々樣不束ながら妾も本誌の愛讀者の一人なのよ、以後永久に御交際を願ひます誌友の姉樣方よ名所繪葉書ノ交換大好よ御返事は屹度差上てよ

常陸國新治郡下大津村　飯田精子

○

▲嗚呼お懐かしい　　姉さま方よ私とも交際して頂戴な私は繪葉書がたいそう好きなのです日本三公園の一つの後樂園の繪葉書や三月より東山公園で開かれて居ます兒童博覽會の繪葉書や色々持つて居ますから諸嬢のお國のお珍らしい繪葉書と交換して下さいなきこ〻とですよ

岡山市外備前長岡局區内圓山　平松榮

○

▲銅像繪ハガキ　　が御手元に御座いますれば交換を御願ひいたします

神戸市三宮町一丁目三四一ノ三石原方　増田春子

○

▲私は昨年　　の十月から愛讀者になりましたどうぞ誌友のお姉樣繪葉書の交換をお願ひします。御禮はきつと致します。

宇都宮市川向町五十一　青木ヨネ

○

▲繪はがきと雜誌　　誌友のみな樣讀みふるしの雜誌や名所繪はがき等お送り下さいませ御禮は必ずいたします

大阪市東區谷町四ノ一六石原樣方　中山嘉子

○

▲繪葉書　　誌友の諸姉樣何卒繪葉書の御交換をお願ひ申上ます

高知縣幡多郡宿毛町　野村喜久

交際

○

▲旅行會　　あゝたのしい春がまゐりました、京都野には菫咲き雲雀唄ふ春とはなりました、京都の皆樣、たのしい春に誌友會もよろしう御座いますが、私等はこの樂しい春に趣味ある旅行會がいたしたいと思ひます、皆樣若き日の春を自由にたのしう唄うではありませんか、京都の皆樣如何？比叡山、八瀨大原方面、宇治方面御賛成下さる御方は御葉書下さいませ眆日行先の御相談いたしませう、他にいゝところがあれば御知ら下さいませ、四月十日までに……男子の方は絕對に御斷り致します

京都三條麩屋町下ル經田樣内　佐々木野菊　三宅喜賀子

○

▲私も　　今度本誌の愛讀者となりました不束者ですが。以後お交り下さいませ。おひまの折にはお玉章おめぐみ下さいな

大阪市南區難波久保吉町千二百六十木村榮太郎方　高本千鶴子

○

▲俳歌　　名所繪ハガキに俳、歌（どちらでも）御認めの上一葉御惠送下さいませ。私は誓つて當地の名所エハガキに俳歌を認めて御送信を出します

愛知縣尾張國西春日井郡杉村字杉一一四　瀧本逸子

○

▲御自作　　何卒俳句や歌を愛さる、御方は自作のを御惠み下さい私も及ばずながら

備前長岡局區内宮山村圓山　小川大同子

○

▲親しき　　天下の御姉樣よ私は淋しき山里に語らう友もなく女子文壇を唯一の友として暮して居る者ですが哀れと御思召してあた〻かきレター編物など御惠み下さる方はありませんか

下野那須郡高林村　月井ちよ

○

▲群馬より　　誌友の諸姉君樣方へ私は春が來ても花が咲いても何んの樂しみもありません、只々皆樣の美しいお作を、田舎の淋しいライフの間々毎に拜讀するのが、一番樂しみなのよ、どうぞ不束者ですけれど、永久にレターの交換致して下さいな

群馬縣新田郡木崎町赤堀村　宮田くじ子

○

▲訃音　　一月號の交際部に本所柳島元町一九六海老原定殿方綠川やい子樣は去る一月七日に故郷福島縣下にて御死去なさいましたと御友人なる一條樣より御報せがありましたから御交り

神奈川縣　長谷川千代子

の諸嬢に御知らせ申上ます

○牛込區早稻田鶴卷町四五五
　榎本方　鈴木武子

▲朝鮮より歸りて　だいぶ暖かくなりました記者樣始め誌友の御姉上樣方にも別段御かはりも御座いませんか御伺い申上げます、私は兄と共に朝鮮へいつてをりました、それ故諸姉上樣方に御無沙汰致してをりました、惡しからず今後は皆樣のお寫眞及お手紙を下さいませな何卒御願ひ致します、どし〳〵御交換致しますから

○備前八濱町大字吉澤町
　女子文壇誌友會

▲再び誌友に就て　三月號にて新らしく聲を揭げたる四月初旬發行豫定の『誌友』は編輯に際して凶事に接したる所事あり目的の發行出來ず第一卷第一號『春の卷』は六月一日愈々發行せんとす乞ふ了承あれ

○仙臺市空堀町五井上方
　佐藤妙香

▲仙臺より　當地の誌友諸姉樣方お遊びにおいで下さいではみな樣御きげんよう

○岡山市石井中筋一五八
　片山光子

▲岡山より　私は去年八月より本誌の愛讀者となつた十七の少女でございます私には兄弟姉妹もない淋しい孤獨の身花咲く晨月見る夕共に語らふ者もなき身は如何に情有る君の玉章を喜びむかへるでせう

○島根縣那賀郡濱田町縣内
　都茂谷方　竹内桃園

▲濱田より　私は北海の風の吹きすさむ濱田に居るあはれな少女であります、あまねく本誌の愛讀者の方々と暖い繪葉書の交際を賴みます返暇は當地の海濱の景色を以て致します。特に夢二樣の繪のお好きの御方と深く御交際を望みます

○神戸市荒田町一丁目五六九ノ一〇九
　辻山花星

▲神戸より　又御情けある諸姉上樣初春の紀念として御美しいハイカラな繪葉書の交換も御願ひいたしますわ

○大阪市西區南堀江下通二丁目
　小林田鶴子

▲交換　諸姉樣の中で「ヴワイオリン」と下に記する書物とかへて下さる方は御座いませんかもし御志御座いましたら御一報下さいませ、（近年の尋常小學校本科正敎員養成書）、卽ち漢文、文典、修身（三、四）讀本（日本、萬國）地理（上、下）歷史（上、下）美術、博物（動物、植物、鑛物、理科、（物理、化學）敎育學、敎育史、敎授法、管理法、心理學等

○越後中蒲原郡小須戸局内大鹿關口淸二郞内
　敏

▲私はハーモニカと　懷中電燈を持つて居りますが紅葉全集二冊以上と御交換して下さる方は有りませんか若しありましたら何卷なるかを書いて御一報下さい但しハーモニカは上製なのです

○備後雙三郡三次町住吉町
　綾運[?]瑞代

▲御たまづさ　誌友の御姉君樣御望りは有りませんですかどうぞ情ある誌上の御姉君樣たちよこの哀れなる姿をふびんと思召して御見捨なく親しく末長く御玉章の交換を切に御願ひ致します

○北見郡斜里郡小淸水とくさ原
　大出悅子

▲下野今市町　の誌友の皆樣!!!私の古里は今市で御座いますよ、高村たき子樣や森雪子樣私なんだか御なつかしくてたまりません一度もお目にかゝつた事はありませんが、私も十年ばかり前は小倉町に居ましたのよ何卒御交り下さいませんか只今は北見の原に侘しく日を送り迎へて居ります御暇の節には御手紙なりと御送り下さいな必ず御返文はいたしますわさらば

○富山赤十字社支部病院寄宿内にて
　稻木寧

▲北越より　誌友のカイントなる諸姉樣よ北越の地に風雪を友としてピツタなる勤務の下に何の慰藉もない我々を思やり末長く御交際の程を御願ひ致しますキツトですよ

○新潟縣柏崎町海岸
　波瀨川浪子

▲越後　の誌友の皆樣へ、私は一月より本誌の愛讀者となりましたおなつかしき越後の誌友の皆樣方へ特に御交際をねがひます

○京都市夷川通り堀川東入
　大槻よしゑ

▲初めて　誌友の諸姉樣よ私此度始めて投書致しました誠に不束者ですが以後何卒御交際

を御願ひ申します

○金澤市廣坂通市原方　歌の宴

▲愛讀者●●●　の一人となりました以後お見捨なく親愛なる御交際ヶ願ひます

○栃木縣日光御幸町船越方　仙子

▲下野より●●●●　四月の努むべき時が來ましたね私は以前よりの本誌の愛讀者よ御交際を願ふは此度が始めてゞすの、文學に心を寄する我が親愛なる諸姉上樣御返事は必ず差し上げますから何卒レターや繪はがきの御交際を一時的でなく永久に御願ひいたします

○岡山市中出石町　桂木淑女

▲一少女●●●　なつかしき誌友の皆樣よ私は友もなく淋しく暮してゐます無學の一少女でございます何卒御交際下さいまし

○信濃東筑摩郡廣丘村　保科伊津子

▲寫眞●　外には、甘つたるい音をしのばせて雨が降つて居ります。窓を開けますと、御向の屋根も、杉の垣根も、白い小石の多い道も皆歃かくうるほされて居ります。まあなんてなつかしい日でしやう。何だか浮き浮きして來て、何か書けと强ひられる樣で御座います。レター、寫眞の交際をお願ひ致します

○東京府下澁谷町七十四　小林しげ子

▲下澁谷より●●●●　私も色々の少女雜誌に投書致してをりますが今年からは女子文壇にも投書致すやうになりました、どうぞ、皆樣宜しくそれから私は元麻布に八年程居りましたのどうぞ、麻布、三田邊の方々永久に御交り下さいませ

○群馬縣新田郡世良田村大字德川郷　渡邊歌子

▲私は昨年●●●●　の夏から本誌の愛讀者となりましたどうぞ御交際下さい

○靜岡縣磐田郡井通村氣子島　高須君子

▲女子文壇愛讀者●●●●●●　の諸姉上樣よ私も一月から愛讀者となりましたから不束者ながら御交際下さいませ私は一人ぼつちなのです東京の本郷に居りまして田舍へ歸りましたばかりなんですから淋しくて時々袖をしぼりますどうぞ姉樣がた妹と思つておまじはり下さいレターや雜誌が何よりの樂しみとしてゐますのよどうぞおめぐみ下さい

○大阪市北區此花町一ノ一三　宮下きみ子

▲浪華の一隅より●●●●●●　私は大阪の片すみに住む一少女ですが、一月號からの愛讀者です、御交際下さい、繪ハガキお手紙の交換もねがひます

○山口縣玖珂郡高森村上ノ町　宇野潔子

▲お友達の●●●　すゝめにより本誌の愛讀者となりました、永久にお交際下さい、繪ハガキ寫眞レターの御交換をねがひます、私の方からは繪ハガキを返禮いたします。

○秩父大宮町小林區官舍内　地迠桂の華

▲陽春四月●●●　枯草はよみがへり、柔い春風は心地よく野面を吹く頃となりました、私は此の頃茨城からこゝへ移つて參りました者で、まだお友達も御座いません、誌友の皆樣の内で大宮か其近くにおらつしやる方は御座いませんか、若しおありでしたら何卒宅へ御遊びにいらしつて下さいまし、大抵宅に居りますから、茨城埼玉の皆樣よ、お振り遊ばしませ

○茨城縣稻敷郡、阿見八郎内　宮本せい樣内　宮本やす子

▲母と二人●●●●　私は母上と二人で淋しく生活してゐるものです、皆樣お手紙やお寫眞の交換をおねがひ申ます、私を妹と思召してお交り下さい

○福岡市博多東中洲百七十番地古川内　市川久子

▲西海より●●●●　私も西海の愛讀者の一人でございます。ほんとに淋しく心細く日を送つて居ます愛讀者皆々樣不束者ではありますが何卒御見捨なく御交際の程お願ひ申します又書籍も色々持つて居ますから御交換も致しませう

雪の降つた日でした、廣重の描いた東海道五十三次の繪葉書を初め、高價の繪葉書を澤山小包で贈つて下さつたかたのお名が承はりたうございます。小濱の杉若里子さん南千住の吉田清子さんにもお禮を申さねばならないのたが、住所を仰しやつて下さらないから、御迷惑なんだらうとは思つてをりますけれど、熊野百景の繪葉書を賜はりし匿名の方にも厚くお禮を申ます。序のやうで濟みませぬ。

三月　虎壽

『雜報』

△三輪田高等女學校長三輪田まさ子女史、東京女學校長棚橋絢子女史の兩刀自は、「多年女子敎育に勳功ありた廉により、先月八日勳六等に叙し、寶冠章を授けられた。兩女史が今日までの苦心も其甲斐あり、誠に名譽のことである。

△評判の文藝委員會は前月三日に開かれたが、結果は坪内博士の功勞に對して紀念章と賞金を贈ることゝなつた。

△多年東京朝日新聞に論文を書いてゐた三山、池邊吉太郎氏は二月二十八日病死した、新聞界の爲には惜むべき人であつた。

△今年の冬は一回も雪が降らなかつた、彼岸前になつて却つて春寒料峭、十三日には雪が降つた山の手などは眞白に積つた。

△九日には有樂座で文士俳人の假粧會があつた

△同日世界有名の登山家ウエストン氏は日本アルプス登山の講演をした。

△與謝野寛氏は目下フランスに滯在中なるが、夫人晶子女史も愈よ今夏良人の後を慕ひて歐洲大陸に旅行することに決定した、夫人の洋行に就いては文學界は勿論一般の婦人界に於ても期待する處が多からうと思ふ。

△森川葵村氏の詩集『夜の葉』は五月初旬、東雲堂から出版されることになつた、詩壇の氣運動かんとする時、此好消息を欣ぶ。

△「フレエネ」と云ふさつぱりした文學雜誌が大阪から發行された。

△帝國劇場の女優達もよそめで見たほどらくではないと云ふ噂がある

△歐米の觀光團は年々浮山に來るやうになつた日本の爲には賀すべきことだ。

△雜誌『白樺』は、ロダンの彫刻三個をロダン氏から寄贈されたので展覽會を開いた

△信州の善光寺では、七年目の開帳が初まつたので、諸國の善男善女が集ると云ふ。

△地方の小都會にも追々電車が敷設せられるやうになつた。

△富士山の五合目まで電車で上れるやうに計畫してゐる人がある。

▲香りの會　「かをり」を研究する會が出來た主に香水のことを研究するのだが、單に香水を作ると云ふだけでない。廣くかをりと云ふものゝ趣味の方面と、實用の方面から研究するのださうだ。毎月「かをり」と云ふ雜誌を發行し、香合せの會を開き、展覽會を催ほすなどなか〳〵面白いことがある。會費は毎月金二十錢、何人でも入會を許す場所は下谷區清水町五番地香りの會。

▲女子美術の生徒聚集　本郷菊坂の女子美術學校は年々生徒の増加するばかりで、本年も亦多數の入學志願者があるさうだ、なほ入學志望者は此際申込めば萬事都合が好いとのこと。

▲習字速成學會の盛況　過去五年間に何十萬かの卒業生を出したといふ帝國習字速成學會では本年が創立滿五年に相當するので、種々の特典を設けて此際入會を許す由、入會希望者はハガキを以て本郷區大學正門前帝國習字速成學會に申込めば見本附きの會則を無代で送つてくれることになつてゐる。

新刊

○新譯源氏物語　與謝野晶子著

文學と云ふ事を知つてゐる程のもので、紫式部の源氏物語の名を知らないものはなからう、名は知つてゐても之を讀了したものは實に少い學校の敎科書や、國文の書物に其一部は抜いてあつても、源氏五十四巻の全部を讀了する機會は實に少い、元來は一篇の小說だから始から終まで讀みとほしてみなければ、眞に源氏物語を知つてゐるとは云へない。處が源氏の文章は和文中の和文で、文脈も、語法も、名詞も一つの格があつて、「餘程智識がなければ源氏を讀了する事は出來ない。そこで種々の註釋書や、譯文が出た、併し今までのものは或はくだ〳〵しく或は原作に拘泥しすぎて、らくに讀めるものがない。與謝野夫人の此著出でゝ初めて源氏物語をらくに知る機會が生じたのである。夫人は幼き日より平安朝の文學を好み、殊に源氏物語にも通曉してゐたから、暇々に之を現代語になだらかに、分り易く譯したのは讀書界の爲に感謝すべき事業である、今出版されたのは上巻だけで、桐壺から乙女の巻まで二十一巻を收めてある、一巻毎に中澤弘光氏の繪一背色木版刷を一枚挿入してある、此繪も亦文と共に光彩を放つもので、一部の源氏繪巻として見ても價値が充分にある、見返しの意匠も實に優美で、美を盡くして居る、女子の文學を愛好する者は、之を書架の重鎭としなければなるまい（特價金二圓五十錢、麴町平河町五金尾文淵堂發兌）

○若き女の手紙　澤口白羊著

若き女の手紙と云ふ書物の題は好い、內容は其題の如く新しい、何にせよ新しい婦人達が實際に作つたものばかりだから、眞の情味が籠つて如何にも人と人との心が通うてゐる。手紙と云つても實用的のものと、感情的のものとあつて實用的の手紙を集めたものなら世間に山ほど類書がある。若い女の感情を抒べた手紙と云ふと何うしても眞に其心持になつた人の書いたものでなければ生きて來ない、其意味に於て本書は生きた手紙を集めたものだ。而かもそれが新しいだけに一層當今の若き婦人達には適切なものであらう、夢二の釘裝も甚だ好い(淺草區下平右衛門町岡村書店發兌)

○櫻さく島　竹久夢二著

今まで多く出た夢二氏の畫集とは、まるで異つて面白いものだ。形は昔の人情本のやうで、青い表紙に絹絲とぢ、なかみは凡て日本紙刷、初めの爪彈は色の調子がなか〱うまく行つた、江戸式の浮世繪そつくりで、線が目新しいから新しさと、なつかしさの、不思議な情調が起つて來る、外に自分の好きなのは人買、雀の子、白い藥、街の五月、越後の山、夏のかはたれ、青い窓などだ、こんな書物が明治の時代に出來たかと思ふとうれしくも感じる(定價金四十五錢　麴町洛陽堂發兌)

○牧水歌話　若山牧水

若山牧水氏の和歌に就いての感想を集めたもので、和歌の評釋・歌集の批評、秀歌を思ふ心、感想の斷片などを一冊に收めてある。牧水氏の歌は近頃の新しい歌人仲間では非常に評判が好い、又實際氏の作歌は感服に價するものだ、兎に角一つの時代を持つてゐる歌人だ。で、何ういふ考へで氏は歌を作つてゐるかと云ふことは此一冊を讀めば能く分るのだ(定價金八十五錢、赤坂區田町七文華堂發兌)

○新書翰文　今井柏浦編

手紙の文章も、もはや文語體より口語體の方が一般に廣く行はれるやうになつた、其口語體の書翰文範として、極めて通俗な一般的なものは本書である、新しく出來たゞけに材料も、言葉の扱ひ方も、能く注意してある、實用の方面からも、趣味の方面からも、完全な書翰文集である、手紙の書き方の注意や、誤り易い文字の使い方なども添えてある、女子には殊に適切なやうに思はれる書物だ(定價金四十五錢、日本橋區本町博文館發兌)

○立春帖　多田親愛書

故多田親愛翁の書に堪能なるは世人の熟知してゐる處である、本書は翁の遺墨で、筆蹟溫雅高尚、習字の手本としては近來の良手本である、假名の如きも實に美事なれば女子習字の手本としても確に良好なものである。折手本(定價金七十五錢、牛込早稻田大學出版部發兌)

○最近の小說家　生田長江著

現代文藝叢書の第八篇には生田氏の小說家評論を載せてある、評論されたる作家は漱石、鷗外、花袋、藤村、鏡花、秋聲、青果の七氏で、小說壇に活動してゐる人々だ。生田氏の評論は、能く作者の人となりも、作物も、のみこんだ上で、其根柢のある智識で、作家を評論してゐるのだから、世の批評家なるものゝやうに、獨りよがりの評論とは違ひ、成程と合點の行く點が多い(定價金二十五錢日本橋區春陽堂發兌)

○帝室畫報　澤田撫松編

我が皇室皇族の御寫眞を謹載せしもので、從來此種の畫報類よりも一層完美したものだ。宮內省及び各宮家の檢閱を經たもので、以て此書の確實なことを知るに足る。記事の中には各宮家の系圖もある、寫眞版は凡てアート紙に鮮明に刷出してあるから眼のあたり高貴の芳姿に接するの思ひがある。表紙は金銀刷、永久に家寶とすべし(定價金五十錢、麴町區土手三番町帝國軍人敎育會發兌)

○女學唱歌集　天谷秀編

本書は高等女學校及家庭用の爲め趣味ある新選歌曲二十有餘を集め本邦婦人の性質に適するやう注意したるもので、今回文部省檢定濟となつた、音樂を好む婦人には良參考書であらう(定價金二十一錢、日本橋區本町金港堂發兌)

○青海波　與謝野晶子著

『春泥集』以後の與謝野夫人の和歌を集めたもので殆ど夫人の歌集は十冊の餘に上るであらう、夫人の歌が天下に獨歩するは今初まつたとでない、此集には多く近頃の生活を歌つてある、「わがたちゐ涙がちにてあるとも旅なる人の皆しれること」函入の美本、「おのれこそ旅だゝちすれ一人居る晝のはかなさ夜のあぢきなさ」など、ある(定價金一圓、本郷四丁目有明館發兌)

▲此他の新刊紹介は本欄の餘白にあり

四月

春來れり！、春來れり！、陽春四月、櫻の花は都會と云はず、地方と云はず、山であれ、野であれ到る處に咲き出で、空には陽炎燃え、霞立ち、地には草も木もあを〳〵と、天地は春に目覺むる時が來たのです。東京の櫻は直ちに上野向島を云ひますが、元來は全市何處へ行つても櫻がある、三日見ぬまに櫻かなで、朝のうちは蕾であつたものが、夕方には咲くといふ勢ひて櫻咲く頃の東京は刻々に色彩が美しくなつてゆく、それにつれて美しく飾つた人も出る、晝は晝の派手やかさ、夜は夜のうつくしさ、滿都花に醉ふかの觀がある。單り東京のみならず、京の嵐山、東山、大阪の櫻の宮 乃至何處其處の櫻と稱して、全國浦々に至るまで、春は花見心を誘はぬ地とてはない。外出をおつくうがる日本の婦人も、年々外出する人が多くなつて來た、春は外へ出てみた方が好い、心のためにも身體のためにも、外へ出てみることだ。新しい自然と、新しい人間に接して、何んなに感情が融和されるであらう。這ふ子も歩くやうになり、草も小さな蕾を持つ頃だ、歡樂の光は天地に溢れてゐるではないか。

大祭日	三日（神武天皇祭）			
日曜日	七日	十四日	二十一日	二十八日

▲注意 本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなば左の定價表を詳しく御覧下さい

○本誌投稿及懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲詩友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす 定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價　毎月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◉特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘
◉普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘
◉半年分（特別二冊 普通四冊）前金壹圓九錢　送料拾壹錢
◉壹年分（特別四冊 普通八冊）前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと 振替貯金に拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增しのこと 最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限 發行前月十五日

壹等割引	一頁貳拾五圓
貳等割引	一頁貳拾圓
參等割引	一頁拾五圓
半頁拾圓	（半頁廿四字三十二行）
一行四拾錢	（一行二十四字詰）

取扱所 博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂 其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年三月二十五日印刷納本
明治四十五年四月一日第八年第四號發行
本號特價金參拾錢

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京七貳九番

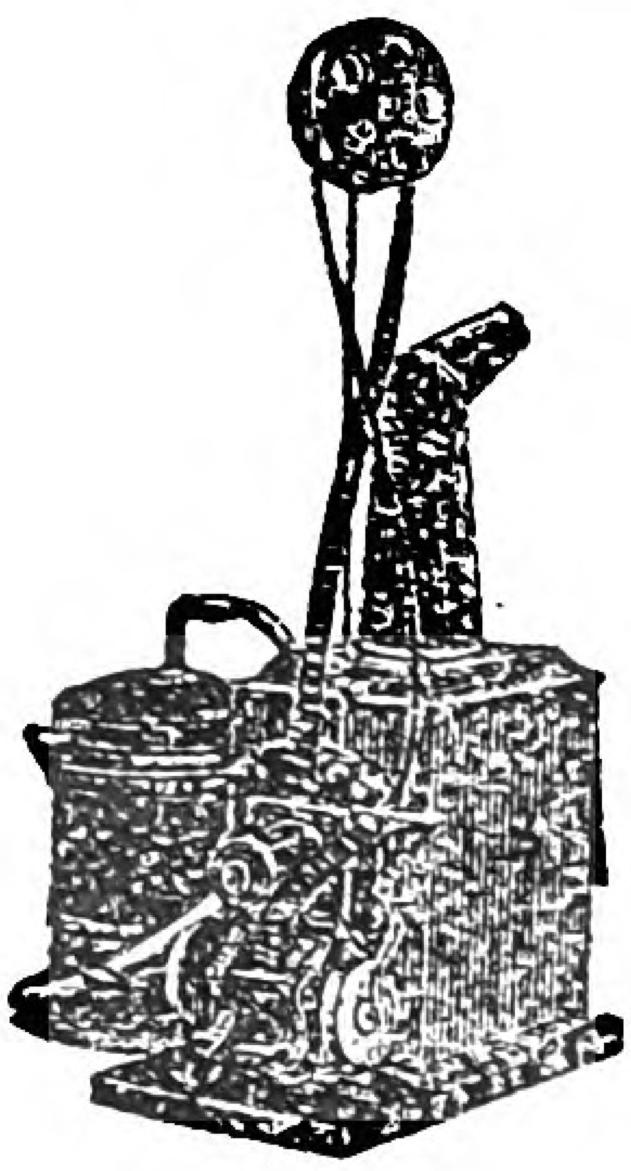
特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂 東海堂、良明堂、大阪盛文館外

博通社 博 特賣品

安心の出來る買物は博通社に限る!!

御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

◀家庭用活動寫眞機械▶



一、本器は玩具に非ず稍小形なれども舶來活動大寫眞器械に遜色なし

二、本器は映畫フヰルムを約三千六百倍の面積に擴大せられ然も撮影が尤明瞭也

三、本器は家庭又は地方會員組織をなす會合又は學生諸君等團欒的完全なる娛樂品として本器に勝るものなし

四、飛行機、蓄音器、活動寫眞機械の三流行兒中教育的娛樂品として家庭用活動寫眞機械尤も卓越す

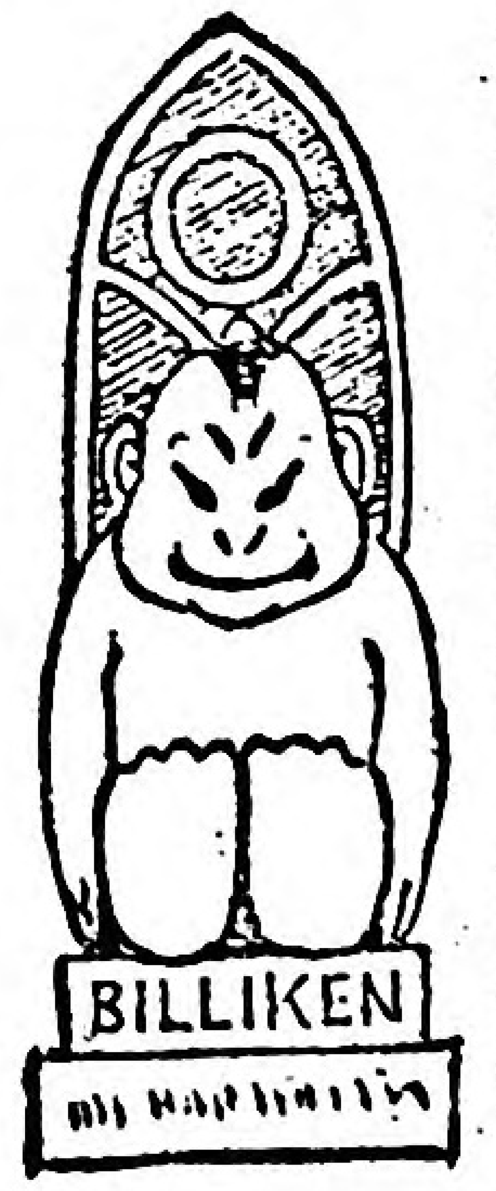
●**無代進呈** 活動寫眞器械說明書及フヰルム目錄希望者に

◉家庭用活動寫眞機械及びアセチリン瓦斯發生器フヰルム映畫二本付

一組 **特價拾七圓五拾錢**

◉映畫フヰルム長短に不拘 一尺ニ付 拾五錢替

●世界的福の神ビリッケン



世界的福神として珍重せられつゝあるビリッケン尊像の模造品今や雨後の筍の如けれども皆其神髓を缺けるが爲凡て玩具的となり一も完全するものなし、本像は最近の輪入にして米國の名工の手に成り石膏の如きアラバスター製にして技術の精巧なる到底模造の出來得べからざる優秀の珍像である

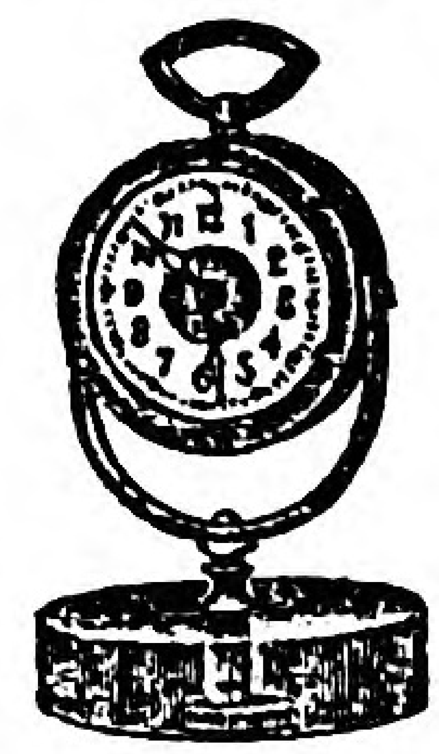
◉ビリッケン尊像アラバスター製 玉座共丈五寸五分

特價壹圓八拾五錢

荷造送料市內無料、內地十五錢、臺樺淸朝四十五錢

◀夜光置時計▶





歐米各國に於て盛んに流行しつゝある不思議の夜光時計は卽ち本品なり如何に暗夜と雖も燈火を要せず直ちに指針が何時を示し居るかを知る事を得る極めて不思議にして且つ實用的なる置時計であります

◉一號型夜光時計 **特價五圓五拾錢**

◉二號型夜光時計 **特價五圓貳拾錢**

▲荷造送料 內地十五錢 臺樺淸朝卅五錢

博文館代理部

博通社

東京日本橋區本町一丁目

振替口座東京五〇番
電話本局六百十四番

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）
第百十三號
四月特別號定價金參拾錢 郵税二錢五厘